

東関東自動車道(木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 11

—富津市高田遺跡・佐貫城跡・佐貫横穴群・根木田入口山脇砦跡—

平成 20年 3月

東日本高速道路株式会社
財団法人 千葉県教育振興財団

東関東自動車道(木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 11

— 富津市高田遺跡・佐貫城跡・佐貫横穴群・根木田入口山脇砦跡 —





佐貫城跡 屋敷跡出土貿易陶磁、瀬戸・美濃、肥前、備前

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第595集として、東日本高速道路株式会社の東関東自動車道(木更津・富津線)建設事業に伴って実施した富津市高田遺跡ほかの発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中世佐貫城をめぐる北条氏と里見氏の戦いにかかる陣跡や近世初めに佐貫城の一角に営まれた屋敷跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成20年3月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長 福島義弘

凡　例

- 本書は、東日本高速道路株式会社による東関東自動車道（木更津・富津線）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書（第11冊目）である。
- 本書に収録した遺跡は、次の通りである。

| 遺　跡　名 | 遺跡コード | 所在地 |
|-----------|---------------|--------------------|
| 高田遺跡 | 2 2 6 - 0 1 7 | 千葉県富津市佐貫字高田741-2ほか |
| 佐貫城跡 | 2 2 6 - 0 1 3 | 千葉県富津市龜沢字八幡下265ほか |
| 佐貫横穴群 | 2 2 6 - 0 1 4 | 千葉県富津市花香谷字山脇445ほか |
| 根木田入口山脇砦跡 | 2 2 6 - 0 1 2 | 千葉県富津市花香谷字山脇445ほか |

- 発掘調査から報告書作成に至る業務は、東日本高速道路株式会社の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 本書の執筆・編集は、上席研究員 小高春雄が担当した。
- 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、東日本高速道路株式会社、高梨 正、地元地権者ほかから御指導、御協力を得た。
- 本書で使用した地形図は次の通りである。

| | |
|--------------|--|
| 高田遺跡第1図 | 国土地理院1:25,000地形図「鹿野山」(NI-54-26-1-1)・「鬼沼山」(NI-54-26-1-2) 合成 平成13年発行 |
| 高田遺跡第2図 | 富津市1:2,500地形図 IV-ME 71-2 平成7年修正 |
| 佐貫城跡第1図 | 同 上 |
| 佐貫城跡第30図 | 富津市1:2,500地形図 IV-ME 71-1・71-2合成 平成7年修正 |
| 佐貫横穴群第1図 | 富津市1:2,500地形図 IV-ME 71-1~71-4合成 平成7年修正 |
| 根木田入口山脇砦跡第1図 | 同 上 |
- 周辺空中写真（図版1）は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 座標はすべて日本測地系にともづく平面直角座標であり、図面方位は座標北である。
- 遺物実測図断面の黒塗りは須恵器を表す。また（）付遺物の数値は推定値である。
- 陶磁器の時期区分の内、瀬戸・美濃は藤沢良祐氏、常滑は中野晴久氏の編年案に拠ったが、時期比定の責任は執筆者にあり、主に依拠した文献は第3章まとめに記した。
- 使用した記号、スクリントーンの説明は次の通りであり、凡例によらない場合は該当する挿図中に示した。

出土遺物

- | | | | | | |
|-----------|---------|---------|-------|------------------------|--------|
| ● 唐津 | ● 濱戸・美濃 | ● 常滑 | ● 志戸呂 | ● 備前 | ● 近世陶器 |
| ● カワラケ・内耳 | ● 貿易陶磁器 | ● 陶磁器以外 | ● 骨 | ● 織文土器・土師器 (高田遺跡のみ) | |

石積み土層断面



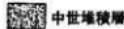
石積み



整地層(古)



整地層(新)



中世堆積層

本文目次

| | |
|--------------------------|----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査概要および調査組織等 | 1 |
| 1 調査概要 | 1 |
| 2 調査組織等 | 2 |
| 第3節 遺跡の位置と周辺の歴史的環境 | 3 |
| 第2章 高田遺跡 | 8 |
| 第1節 調査の概要 | 8 |
| 1 調査の方法 | 8 |
| 2 調査の経過 | 8 |
| 第2節 遺構と遺物 | 8 |
| 1 縄文時代 | 8 |
| (1) 包含層 | 8 |
| 2 古墳時代 | 14 |
| (1) 溝 | 14 |
| (2) 遺物包含層 | 14 |
| 3 中世・近世初頭 | 21 |
| (1) 区画溝 | 21 |
| (2) 区画内ピット列 | 24 |
| (3) 溝 | 25 |
| (4) 堪穴遺構 | 25 |
| (5) 土坑 | 27 |
| 4 時期不明の遺構 | 29 |
| (1) 溝 | 29 |
| (2) 土坑 | 29 |
| 5 遺構に伴わない遺物 | 30 |
| (1) 縄文時代 | 30 |
| (2) 中・近世 | 30 |
| 第3節 まとめ | 33 |
| 1 縄文時代中・後期の包含層について | 33 |
| 2 古墳時代後期の墓地に形成された包含層について | 33 |
| 3 中・近世の遺構について | 33 |
| 第3章 佐賀城跡 | 34 |
| 第1節 調査の概要 | 34 |
| 1 調査の方法 | 34 |

| | |
|---------------------|-----|
| 2 調査の経過 | 34 |
| 第2節 遺構と遺物 | 37 |
| 1 近世初頭 | 37 |
| (1) 屋敷跡 | 37 |
| (2) 南西丘陵中腹平場跡：平場7 | 51 |
| (3) 南西丘陵中腹平場跡：平場5 | 59 |
| (4) 南西丘陵中腹平場跡：平場4 | 62 |
| (5) 南西丘陵中腹平場跡：平場6 | 66 |
| (6) 南西丘陵中腹平場跡：平場8 | 66 |
| 2 その他 | 66 |
| (1) 星敷跡上段の平場：平場3A | 66 |
| (2) 平場3B西端横穴：3SX001 | 66 |
| (3) 北側丘陵南端平場：平場2 | 67 |
| 3 遺構に伴わない遺物 | 68 |
| (1) トレンチほか出土の遺物 | 68 |
| (2) 古代の遺物 | 69 |
| 第3節 まとめ | 72 |
| 第4章 佐貫横穴群 | 77 |
| 第1節 調査の概要 | 77 |
| 1 調査の方法 | 77 |
| 2 調査の経過 | 77 |
| 第2節 遺構と遺物 | 77 |
| 1 ST001 | 77 |
| 2 ST002 | 82 |
| 第3節 まとめ | 82 |
| 第5章 根木田入口山脇砦跡 | 83 |
| 第1節 調査の概要 | 83 |
| 1 調査の方法 | 83 |
| 2 調査の経過 | 83 |
| 第2節 遺構と遺物 | 86 |
| 1 北側山陵の遺構 | 86 |
| (1) 北物見台 | 86 |
| (2) 平場6 | 86 |
| (3) 平場6北東平坦面 | 96 |
| (4) 平場5 | 96 |
| (5) 平場8 | 100 |
| (6) 北東尾根平場 | 102 |

| | |
|----------------|-----|
| (7) 北側山陵大堀切 | 106 |
| (8) 堀切東側平場群 | 108 |
| (9) 堀切西側平場群 | 108 |
| (10) 平場A・B・C | 113 |
| 2 南側山陵の遺構 | 116 |
| (1) 南物見台 | 116 |
| (2) 物見台南平場 | 121 |
| (3) 平場9 | 121 |
| (4) 北側尾根平場 | 124 |
| 3 遺跡内表探・一括遺物 | 127 |
| (1) 中世の遺物 | 127 |
| (2) 弥生時代の遺物 | 127 |
| (3) 古墳時代の遺物 | 128 |
| 第3節 まとめ | 130 |
| 1 根木田入口山脇岩跡の構造 | 130 |
| 2 検出された特色ある遺構群 | 130 |
| 3 築城の背景 | 134 |
| 報告書抄録 | 卷末 |

挿図目次

| | | | | | |
|--------|----------------------------|----|--------|-----------------|----|
| <高田遺跡> | | | | | |
| 第1図 | 高田遺跡ほか3遺跡と周辺の遺跡 | 5 | 第14図 | 中・近世ピット列 | 24 |
| 第2図 | 高田遺跡と調査範囲(富津市地形図1:2,500) | 9 | 第15図 | 中・近世竪穴遺構 | 26 |
| 第3図 | 高田遺跡確認トレンチと遺物(土師器) 出土状況 | 10 | 第16図 | 中・近世土坑(1) | 27 |
| 第4図 | 高田遺跡遺構全体図 | 11 | 第17図 | 中・近世土坑(2) | 28 |
| 第5図 | 下層(縄文時代)調査範囲と 遺物出土状況 | 12 | 第18図 | 遺構に伴わない遺物 | 31 |
| 第6図 | 下層出土遺物 | 13 | <佐貫城跡> | | |
| 第7図 | SD006 | 15 | 第1図 | 佐貫城跡調査範囲 | |
| 第8図 | 古墳時代遺物包含層 | 16 | 第2図 | (富津市地形図1:2,500) | 35 |
| 第9図 | 古墳時代遺物包含層出土遺物(1) | 18 | 第3図 | 調査範囲と確認トレンチ配置状況 | 36 |
| 第10図 | 古墳時代遺物包含層出土遺物(2) | 19 | 第4図 | 星敷跡全体図 | 38 |
| 第11図 | 中・近世遺構全体図(時期不明含む) | 20 | 第5図 | 星敷跡土層断面図 | |
| 第12図 | 区画溝北東部遺物出土状況 | 22 | 第6図 | (ポイントは第2図参照) | 39 |
| 第13図 | 区画溝出土遺物 | 23 | 第7図 | 3SB001 | 40 |
| | | | 第8図 | 3SB002 | 41 |
| | | | 第9図 | 3SB003 | 43 |
| | | | 第10図 | 星敷跡北西ピット群 | 44 |

| | | | | | |
|-------------|-------------------------|----|------|------------------------------|-----|
| 第9図 | 3 SD001北部 | 45 | 第5図 | 平場6 | 89 |
| 第10図 | 3 SD001南西部 | 46 | 第6図 | SB002・SB003・SA004・SA007 | 90 |
| 第11図 | 3 SD002 | 47 | 第7図 | SB002・SB003断面 | 92 |
| 第12図 | 星敷跡出土遺物（1） | 48 | 第8図 | SA004・SA007断面 | 93 |
| 第13図 | 星敷跡出土遺物（2） | 49 | 第9図 | 平場6トレンチセクション・ 遺構断面図及び出土遺物 | 94 |
| 第14図 | 星敷跡出土遺物（3） | 50 | | | |
| 第15図 | 星敷跡出土遺物（4） | 52 | 第10図 | 平場6北東平坦面 | 95 |
| 第16図 | 星敷跡出土遺物（5） | 53 | 第11図 | 平場5（1） | 97 |
| 第17図 | 星敷跡遺物出土状況 | 54 | 第12図 | 平場5（2） | 99 |
| 第18図 | 平場5・平場6・平場7 | 55 | 第13図 | 平場8（1） | 101 |
| 第19図 | 7 SB001・7 SK001・7 SK002 | 57 | 第14図 | 平場8（2） | 102 |
| 第20図 | 平場7遺物出土状況ほか | 58 | 第15図 | 門跡（1） | 103 |
| 第21図 | 平場7～5間斜面石積み | 59 | 第16図 | 門跡（2） | 104 |
| 第22図 | 平場7出土遺物 | 60 | 第17図 | 北側山陵大堀切（1）と堀切東平場群 | 105 |
| 第23図 | 平場4・平場8 | 61 | 第18図 | 北側山陵大堀切（2） | 106 |
| 第24図 | 4 SX001 | 63 | 第19図 | 堀切東平場と石積み | 107 |
| 第25図 | 4 SX002・平場4出土遺物 | 64 | 第20図 | 平場1・2（1） | 110 |
| 第26図 | 3 SX001 | 65 | 第21図 | 平場1・2（2） | 111 |
| 第27図 | 3 SX001出土遺物 | 67 | 第22図 | 平場1・2（3） | 112 |
| 第28図 | トレンチ出土遺物・古代の遺物 | 68 | 第23図 | 平場1・2（4） | 113 |
| 第29図 | 遺構全体図 | 73 | 第24図 | 平場A・B・C（1） | 114 |
| 第30図 | 佐貫城跡縄張図 | 74 | 第25図 | 平場A・B・C（2） | 115 |
| 第31図 | 佐貫城跡陶磁器組成 | 75 | 第26図 | 平場A・B・C（3） | 116 |
| | | | 第27図 | 南物見台・物見台南平場（1） | 117 |
| <佐貫横穴群> | | | 第28図 | 南物見台・物見台南平場（2） | 118 |
| 第1図 | 佐貫城跡横穴群調査範囲 | | 第29図 | 南物見台・物見台南平場（3） | 120 |
| | (富津市地形図1:2,500) | 78 | 第30図 | 平場9（1） | 122 |
| 第2図 | 横穴の位置 | 79 | 第31図 | 平場9（2） | 123 |
| 第3図 | ST001 | 80 | 第32図 | 平場9（3）・SD002出土遺物 | 124 |
| 第4図 | ST002 | 81 | 第33図 | 北側尾根平場（1） | 125 |
| | | | 第34図 | 北側尾根平場（2） | 126 |
| <根木田入口山脇砦跡> | | | 第35図 | 遺構に伴わない遺物 | 127 |
| 第1図 | 根木田入口山脇砦跡調査範囲 | | 第36図 | 根木田入口山脇砦跡縄張図 | 131 |
| | (富津市地形図1:2,500) | 84 | 第37図 | 根木田入口山脇砦跡北側山陵遺構全体図 | 132 |
| 第2図 | 確認トレンチ配置図 | 85 | 第38図 | 根木田入口山脇砦跡陶磁器組成 | 135 |
| 第3図 | 北物見台 | 87 | | | |
| 第4図 | SK004・北物見台出土遺物 | 88 | | | |

表 目 次

| | | | |
|----------------------|-----|-----------------------------------|-----|
| 第1表 高田遺跡出土土器属性表 | 32 | 第5表 根木田入口山脇砕跡地区別・種類別・時期 別遺物出土数 | 129 |
| 第2表 佐貫城跡陶磁器ほか観察表 | 70 | | |
| 第3表 佐貫城跡出土鐵貨計測表 | 71 | 第6表 根木田入口山脇砕跡遺構一覧ほか | 129 |
| 第4表 根木田入口山脇砕跡出土鐵貨計測表 | 128 | | |

図版目次

| | |
|---------------------------------------|--|
| 巻頭図版 佐貫城跡 屋敷跡出土貿易陶磁、瀬戸、美濃、肥前、備前 | 図版26 佐貫城跡出土遺物（3） |
| 図版1 遺跡の位置（昭和42年撮影約1:7000） | 図版27 佐貫城跡出土遺物（4） |
| 図版2 高田遺跡調査前 | 図版28 佐貫城跡出土遺物（5） |
| 図版3 高田遺跡1～3トレンチ | 図版29 佐貫城跡出土遺物（6） |
| 図版4 高田遺跡下層遺物出土状況ほか | 図版30 佐貫城跡出土遺物（7） |
| 図版5 高田遺跡SD004・SD005・SD006 | 図版31 佐貫城跡出土遺物（8） |
| 図版6 高田遺跡SD001・SD002 | 図版32 佐貫横穴群ST001 |
| 図版7 高田遺跡SI001・SI002・ピット群 | 図版33 佐貫横穴群ST002 |
| 図版8 高田遺跡SK001・SK003・SK004・SK006・SK014 | 図版34 根木田入口山脇砕跡調査前全景・近景 |
| 図版9 高田遺跡SK005・SK007・SK023・SK030 | 図版35 根木田入口山脇砕跡北側山陵（1） |
| 図版10 高田遺跡出土遺物（1） | 図版36 根木田入口山脇砕跡北側山陵（2） |
| 図版11 高田遺跡出土遺物（2） | 図版37 根木田入口山脇砕跡北物見台・SB001・門跡（空撮） |
| 図版12 高田遺跡出土遺物（3） | 図版38 根木田入口山脇砕跡大堀切と大堀切東石積み（1） |
| 図版13 高田遺跡出土遺物（4） | 図版39 根木田入口山脇砕跡大堀切東石積み（2） |
| 図版14 高田遺跡出土遺物（5） | 図版40 根木田入口山脇砕跡大堀切東石積み（3）・平場1・平場2 |
| 図版15 佐貫城跡調査前全景 | 図版41 根木田入口山脇砕跡南物見台（1） |
| 図版16 佐貫城跡調査区全景 | 図版42 根木田入口山脇砕跡南物見台（2）・平場9 |
| 図版17 佐貫城跡平場3 | 図版43 根木田入口山脇砕跡南物見台（3）・北側尾根平場・平場A・平場B・平場C |
| 図版18 佐貫城跡3SD001 | 図版44 根木田入口山脇砕跡出土遺物（1） |
| 図版19 佐貫城跡平場7（1） | 図版45 根木田入口山脇砕跡出土遺物（2） |
| 図版20 佐貫城跡平場7（2） | 図版46 根木田入口山脇砕跡出土遺物（3） |
| 図版21 佐貫城跡平場5・平場6 | 図版47 根木田入口山脇砕跡出土遺物（4） |
| 図版22 佐貫城跡平場4 | 図版48 根木田入口山脇砕跡出土遺物（5） |
| 図版23 佐貫城跡平場8ほか | |
| 図版24 佐貫城跡出土遺物（1） | |
| 図版25 佐貫城跡出土遺物（2） | |

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東関東自動車道千葉富津線（路線名：館山自動車道）は、平成7年度に千葉市から木更津南インターチェンジまでの約35kmの区間が開通した。次いで、木更津南ジャンクションから君津市を経て富津竹岡インターチェンジに至る約21kmの区間が東関東自動車道（木更津～富津）として事業化され、平成19年7月に開通した。

建設用地内には多くの遺跡が所在しており、その取扱いについて千葉県教育委員会と日本道路公団とで協議が進められた結果、現状保存が困難な部分については発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

今回報告する高田遺跡ほか3遺跡は、平成13年度～16年度に渡って発掘調査を実施し、平成18年度から19年度に整理作業を行った。

なお、路線内の遺跡については既にすべての発掘調査が終了し（当財団実施）、整理作業も順調に進捗しております（今回の報告書は11冊目）、弥生時代から古墳時代にわたる大規模な集落・墓域の鹿島台遺跡を残して当事業に係わるすべての遺跡の報告を終了する。

第2節 調査概要および調査組織等

1 調査概要

木更津南ジャンクションから富津竹岡インターチェンジに至る区間のうち、調査対象となった遺跡は計29か所であり、当報告書では富津市亀沢から佐貫に至る高田遺跡ほか計4遺跡を報告する。

対象とする遺跡は中・近世城郭跡が2か所（佐貫城、根木田入口山脇砦）、包蔵地（高田遺跡）が1か所、横穴墓（佐貫横穴群）が1か所である。

高田遺跡は根木田入口山脇砦の北側に隣接する段丘面上に立地し、周囲より若干小高い平場部分約3,200m²が包蔵地となっており、平成15年度と平成16年度の2か年にわたり調査を行った。その結果、北側については、古墳時代後期の遺物を包含する川跡らしき構を確認したが、人為的な造構と認められないことから、確認調査のみで終了した。一方、南側については、平場全域にわたって古墳時代から中・近世の遺構・遺物が確認されたことから、その約2/3が本調査の対象となった。また、上層本調査終了後に縄文時代の遺構および包含層を確認する目的で下層確認調査を行ったが、縄文中・後期の土器片は出土したもの、該期の遺構と認め得るものは検出できず確認調査で終了した。

佐貫城は、中世佐貫城の南東部に当たる丘陵末端と山裾約4,000m²が対象となり、平成13年度と14年度の2回に分けて調査を行った。平成13年度は、佐貫城外郭丘陵裾に形成された近世初めの屋敷地ほかを、また、同14年度は一段高い丘陵先端部を調査し、裾部において整形面を検出した。

根木田入口山脇砦は佐貫城の南、約500mの丘陵部に位置する。城跡全体の面積は凡そ30,000m²であるが、このうち平場や堀切など城郭遺構に相当する部分約3,000m²を調査対象とした。ここも、佐貫城と同様、平成13年度と14年度の2か年にわたり調査を行った。平成13年度は山頂部及び堀切部分の調査を行い、大小の平場群と特徴的なピット列、門、堀切、堀、溝などを、同14年度は北側腰曲輪の調査を行い、整地面

2面をそれぞれ検出した。

佐貫横穴群は根木田入口山脇皆の所在する丘陵に営まれた横穴墓群である。南東崖面に開口する2基が確認され、いずれも事業地内に入ることから調査の対象となり、平成13年度に調査を完了した。なお、調査時に横穴とした1基については整理時に検討した結果、後世のカク乱の可能性が高く報告から除外した。

2 調査組織等

(1) 発掘調査

平成13年度

根木田入口山脇皆跡

| | |
|----|---|
| 期間 | 平成13年 6月 1日～平成14年 1月 31日 |
| 組織 | 調査部長 佐久間 豊 南部調査事務所長 高田 博 担当職員 上席研究員 渡辺昭宏 半澤幹雄 |
| 対象 | 確認調査 上層743m ² /24,600m ² 本調査 上層2,546m ² |

佐貫城跡

| | |
|----|--|
| 期間 | 平成13年 9月 15日～平成14年 3月 29日 |
| 組織 | 調査部長 佐久間 豊 南部調査事務所長 高田 博 担当職員 上席研究員 地引尚行 |
| 対象 | 確認調査 上層312m ² /3,120m ² 本調査 上層1,150m ² |

佐貫横穴群

| | |
|----|--|
| 期間 | 平成14年 2月 1日～平成14年 3月 29日 |
| 組織 | 調査部長 斎木 勝 南部調査事務所長 鈴木定明 担当職員 上席研究員 石川 試 |
| 対象 | 本調査 横穴墓 2基 |

平成14年度

佐貫城跡

| | |
|----|--|
| 期間 | 平成15年 1月 6日～平成15年 1月 31日 |
| 組織 | 調査部長 斎木 勝 南部調査事務所長 鈴木定明 担当職員 上席研究員 田島 新 |
| 対象 | 本調査 上層630m ² |

根木田入口山脇皆跡

| | |
|----|--|
| 期間 | 平成15年 2月 3日～平成15年 2月 21日 |
| 組織 | 調査部長 斎木 勝 南部調査事務所長 鈴木定明 担当職員 上席研究員 田島 新 |
| 対象 | 本調査 上層460m ² |

平成15年度

高田遺跡

期間 平成16年2月4日～平成16年2月27日
組織 調査部長 斎木 勝 南部調査事務所長 矢戸三男
担当職員 上席研究員 沖松信隆
対象 確認調査 上層170m²/1,497m² 下層0m²
本調査 上層0m²

平成16年度

高田遺跡

期間 平成16年10月25日～平成16年12月17日
組織 調査部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博
担当職員 上席研究員 稲生一夫
対象 確認調査 上層184m²/1,714m² 下層204m²/1,714m²
本調査 上層1,100m² 下層0m²

(2) 整理作業

平成18年度

期間 平成19年3月1日～平成19年3月31日
組織 調査研究部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博
担当職員 副所長 相京邦彦
内容 高田遺跡（水洗・注記～実測・拓本）

平成19年度

期間 平成19年4月1日～平成20年1月31日
組織 調査研究部長 矢戸三男 南部調査事務所長 西川博孝
担当職員 上席研究員 小高春雄
内容 高田遺跡（写真撮影～刊行）、佐貫城跡（水洗・注記～刊行）
佐貫横穴群（水洗・注記～刊行）、根木田入口山脇砦跡（水洗・注記～刊行）

第3節 遺跡の位置と周辺の歴史的環境

今回報告する4遺跡は、いずれも鹿野山麓に源を発する染川の中流域に立地する。周辺は標高40～60m程の丘陵地帯で、砂質泥岩よりなる佐貫層が分布する。

縄文時代では、染川下流の平野部付け根に立地する大坪貝塚は縄文前期の遺物を豊富に出土しており¹¹⁾、近隣の古船遺跡、八幡遺跡（第2図の西側範囲外）とも併せ縄文前期の遺跡群のまとまった地域として注目される。しかし、中期以降は城山遺跡（中期～後期・近世佐貫城地の平坦面）が上げられる程度で、このような状況は弥生時代（芝ヶ谷遺跡が確認されるのみ）に継続する。

その一方、古墳時代の横穴墓は多く存在する。群集するものでは、亀田横穴群（20基）²⁾・下岩入横穴群（12基）³⁾、発掘調査済みの神宿横穴群（8基）⁴⁾、その内容が報告されている比叡神社脇横穴群（4基）⁵⁾等であるが、その性格からしてさらに埋もれているものもある。これに次ぐのが、古船やぐら群（33基・横穴墓との分離不明）⁶⁾に代表される中・近世のやぐら・岩窟である。横穴・やぐら共に盛行するのは泥岩の崖面が広く展開する当地の地形・地質条件によるのであろう。しかしその一方で、横穴・やぐらを造った該期の集落は不明というに等しく、調査例もないに等しい。

その意味で、今回報告する佐貫城跡と高田遺跡の調査成果は示唆するところがある。佐貫城跡では中・近世の整地層中から古墳時代後期の土器が出土し、高田遺跡では住居跡こそ見つからなかったものの、古墳時代後期の溝や前面の埴地から該期の土器類が多く出土した。つまり、丘陵の裾や谷間の段丘面上に彼等の生活ないし活動痕跡が造されていたわけで、恐らく条件の良い僅かの平場が居住地となっていたのではないかろうか⁷⁾。結論からいえば今日の集落と多分に重なっていると言ってよい。

なお、古墳も横穴にまじって散見されるが、地形的にみて丘陵の尾根などには未だ未確認の古墳があると予想される。相互の時期的な変遷ないしはその住み分けについては該期の墓制を考えるうえで重要な視点ながら、その知見は乏しい。

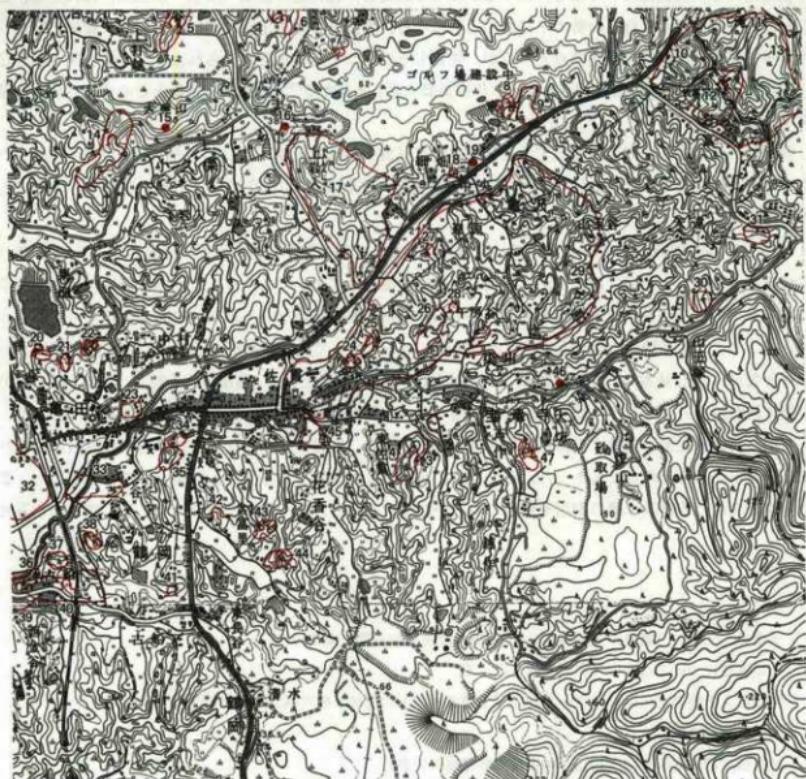
次に城跡が佐貫城を筆頭に、岩富城、根木田入口山脇砦、北上砦と一緒に集中する。佐貫城はその初めはともかく、16世紀の中頃の天文末～永禄初期には北条氏が抱え⁸⁾、その後に里見氏が西上総経営の拠点とした城で、当地の中世城郭を代表する城といえる。当然、その範囲も外郭を含め広域にわたっている（書第2章参照）。この佐貫城の出城ともいべき城が東方2kmの峰に位置する岩富城である。平成15年～16年に発掘調査が行われ、堀切を主とした（峰の平場は寺院敷地）戦国末期の城郭遺構が検出されている⁹⁾。

これに対して根木田入口山脇砦は単純にその支城と理解してきたところがあるが、その構造や出土遺物を検討すると、佐貫に対する向城と考えられ、この谷を巡る被我勢力の抗争・交代（武田氏～里見氏、北条氏～里見氏）を物語る遺産の可能性が高い。なお、北上砦については、従来こちらを古佐貫城と捉える考えもあったが¹⁰⁾、現在は城跡かどうかを含め否定的な見解が多い¹¹⁾。

さて、以上当地周辺を特徴付ける横穴墓、城跡を中心に概説したが、もちろんそれはそれ以外の時期の遺跡が存在しない、ということではない。確かに瘦せ尾根の卓越する丘陵地と狭い谷間は人々の活動を妨げた要素はあったろうが、横穴墓群の存在の示すごとくとりわけ古墳時代以降は確実に開発の働きかけがなされたはずで、要はその程度である。さらに岩富城における尾根の各所で見いだされた平安時代の遺構（住居跡を含む）などは開発の進展を裏付けるものと思われ¹²⁾、その延長に中世があったことは確かであろう。

中世、南北朝期の初め、足利尊氏は元弘の変以来の動乱の犠牲者を追悼する目的で、諸国に安国寺、利生塔建立を命じたが、この安国寺が佐貫亀田の安国寺ではないかとされている¹³⁾。

室町期には佐貫は北方と南方に分かれ、北は「上級領主の被官か在地領主の得分が設定」¹⁴⁾されていた国衙領であったのに対し、南は相模金沢の称名寺領（ないしその経営）であった。称名寺は加賀の寺領と交換に対岸の佐貫を得¹⁵⁾、その旧主は鎌倉府の役人にして足利家の家人でもあった町野氏であったというから、もとは御料所ないしは足利氏の家領であったのかもしれない。また、この当時、梶取、黒部、岩戸（現岩富か）など今日亀沢に属す字名も既に登場し¹⁶⁾、それらは寺家分として見えることから、佐貫南方の一部であったと思われる。



第1図 高田遺跡ほか3遺跡と周辺の遺跡(国土地理院1:25,000地形図「鹿野山」「鬼泪山」合成)

| | | | |
|--------------|-------------|---------------|-------------|
| 1 高田遺跡 | 13 岩富寺遺跡 | 25 清水横穴群 | 37 古船遺跡 |
| 2 佐貫城跡(調査地点) | 14 下岩入横穴群 | 26 城山遺跡 | 38 古船Cやぐら |
| 3 佐貫横穴群 | 15 下岩入大塚山古墳 | 27 八間やぐら | 39 下箕和田遺跡 |
| 4 根木田入口山脇砦跡 | 16 下岩入塚 | 28 富士見台横穴 | 40 古船やぐら群 |
| 5 近藤横穴群 | 17 北上砦跡 | 29 佐貫城跡 | 41 古船Hやぐら |
| 6 百坂遺跡 | 18 東谷やぐら | 30 稲子沢I遺跡 | 42 合富里C号横穴群 |
| 7 八平屋敷やぐら | 19 敲戸古墳 | 31 稲子沢IV遺跡 | 43 合富里B号横穴群 |
| 8 北上横穴群 | 20 亀田A号横穴群 | 32 大坪貝塚(亀田貝塚) | 44 合富里A号横穴群 |
| 9 根上り遺跡 | 21 亀田B号横穴群 | 33 芝ヶ谷遺跡 | 45 瓦烟遺跡 |
| 10 岩富遺跡 | 22 亀田C号横穴群 | 34 奥谷川遺跡 | 46 大坊古墳 |
| 11 岩富城跡 | 23 安国寺跡 | 35 足柄山峰火台跡 | 47 神宿横穴群 |
| 12 岩富寺やぐら群 | 24 比叡神社脇横穴群 | 36 川崎遺跡 | |

戦国期には上総武田氏が寺領を押領するかたちで成長し、15世紀の終末（文明～永正期）には上総、とりわけ西上総の多くを自己の勢力下に置くようになる。本拠とした真里谷の他に、椎津、久留里、横上、百首等、要地には城郭を築き拠点とするが、佐貫もその一つであったと考えられよう。件の安国寺鐵懸仏（銅製十一面觀音坐像）銘には「永正十六年佐貫郷大乱」と見える¹⁷。武田氏と北条氏とのせめぎ合いに関連するものであろうか。

戦国期には既述した如く、北上する里見氏の拠点（当主義弘の居城）として一大城郭に整備・拡張された（詳細は第2章・第4章まとめ参照）。今回の調査地（南東城外の山裾）も城下外れの様相を示すものとみられよう。

ところで、染川中流域の稻子沢遺跡では数地点にわたって鍛冶関係の遺物が採取されている¹⁸。その年代や性格等は必ずしも明瞭ではないが、中世～近世の所産とみてよいであろう。今回の佐貫城の調査でも羽口が3点出土しているが（造構は未発見）、両者は1kmと離れていない。お互いに関連するものであろう。

さてこのような下地ゆえか、近世には内藤氏が二万石をもって入城したが、元和8年（1622）、岩城平へ転封となり、以後、城番時代を間に挟み、桜井松平氏一能見松平氏と続き、幕領時代を経て、宝永7年（1710）、阿部正鎮が約1万5千石で入城・幕末まで存続した。侍屋敷は城下北側、西側また南側の谷部におかれ、町人地は西側武家地に隣接する街道筋に形成された。なお、佐貫は安房と江戸を結ぶ房州往還沿いにあり、また鹿野山へ至る分岐点でもあった。そのため、宿駅として整備される一方、宿場としても繁盛した。また、城下の西の八幡浜は藩の御用を勤める船方が存在するなど、江戸湾内の湊の一つとして賑わいをみせた。

註

- 1 千葉県 2000 「富津市大坪貝塚」「千葉県の歴史」旧石器・縄文時代
- 2 その基數については次の分布調査報告による。
財団法人千葉県文化財センター 2003『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』
- 3 同様、註2文献による。
- 4 神宿横穴群発掘調査団 1978『神宿横穴群発掘報告書』
- 5 富津市史編さん委員会編 1982『第二編古代第四章古墳時代』『富津市史』通史
- 6 基數については、最新の調査成果である註18分布地図（『千葉県埋蔵文化財分布地図（4）』）に従ったが、次の文献も参照のこと。 千葉県 1996『千葉県やぐら分布調査報告書』
- 7 条件の類似する長生地城では瘦せ尾根山裾の緩斜面で集落の検出される事例が増えている。
- 8 永禄2年頃作成と推測されている「所領役帳」には、小田原衆布施康朝が「佐貫在城」と記され（平塚市博物館編『平塚市史』四付録「北条氏所領役帳」）、また、川越衆加藤氏（太郎左衛門、大藏丞）、玉綱衆朝倉右馬助が佐貫周辺（現君津市郡・杉谷）を領有する。
- 9 財団法人君津都市文化財センター 2005『岩富城跡発掘調査報告書』
- 10 例えば、『富津市史』通史、『日本城郭大系6』千葉・神奈川の記述など。
- 11 千葉城郭研究会編 『図説 房総の城郭』の「佐貫城」の項など。
- 12 註9参照
- 13 富津市史編さん委員会編 1982『第三編中世第一章富津地方の推移』『富津市史』通史

- 14 福島金治 1987「金沢称名寺領上総国佐貫郷について」『三浦古文化』No42
- 15 「足利義満御判御教書」(金沢文庫古文書)『千葉県史料』中世篇 県外文書192・194
- 16 「上総国佐貫郷内寺家分田年不員敷注文」(金沢文庫古文書)『千葉県史料』中世篇 県外文書247
- 17 千葉県『千葉県史料』金石文編一 君津郡84号
- 18 財団法人千葉県文化財センター 2000『千葉県埋蔵文化財分布地図(4)』ほか

第2章 高田遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の方法

調査に先立ち、公共座標に基づく方眼杭打作業を業者委託して実施した。地区割りは南北を算用数字、東西をアルファベットで20m方眼の大グリッドを設定し、そのなかを更に2m方眼の小グリッドとした。北西隅を4Qとしたのは、遺跡の広がりを考慮したためである。

確認調査はこの地区割りと基本杭に基づき、幅2mのトレンチを東西方向に適宜設けて行ったが、必要に応じて南北方向や一部拡張するかたちでも対処した。本調査は確認調査の結果をうけて範囲を決定したのち、まず重機によって表土を除去し、遺構の新旧を勘案しながら発掘を進め、実測・写真撮影を行った。また、遺構の全景はラジコンヘリによる空中写真とした。

2 調査の経過

平成16年2月にまず方眼杭打作業を実施したのち、北側約1,500m²の確認調査に取りかかった。重機と人力を併用し、トレンチを東西方向に凡そ7m間隔で適宜設けて調査を進めた。その結果、調査区北側から北西にかけて土師器を伴う広範囲の包含層を確認したので、拡張ないしは新たにトレンチを設定し、その範囲や形状の確認に努めた。しかし、その形状は不定形でかつ規則的な方向性もなく、むしろ自然流路と想定される要素が強いことから、確認調査で終了した。調査期間は約1か月である。

南側約1,700m²については、同年10月に方眼杭打測量を実施したのち、北側と同様にトレンチを設定して確認調査に取りかかった。その結果、北東部を除き全体に古墳時代の住居跡らしき落ち込みや、中・近世の溝と思われる遺構が確認されたので、北東部を除いた1,100m²を本調査範囲とした。

本調査は継続して行い、古墳時代溝1、中・近世竪穴遺構2・区画遺構1、溝2・ピット列2、ピット群ほかを検出した。とりわけ、中・近世の溝は遺跡の平坦部を巡るように配置され、内部にはピット列・ピット群が伴うことが明らかになった。また、下位には礫が多く含む流路らしき層が確認されたので、上層の調査終了後に下層調査としてトレンチによる確認作業も実施したが、縄文土器は出土したもの、遺構は確認されなかったことから、確認調査のみで終了した。

以上をもって調査は同年12月半ば過ぎに終了した。調査期間は約2か月である。

第2節 遺構と遺物

当遺跡で検出された遺構は古墳時代の溝跡、中・近世の遺構群である。また、このほかに中期～後期縄文土器を含む包含層と土師器を多く出土した旧流路がある。以下、時代の古い順に説明することとする。

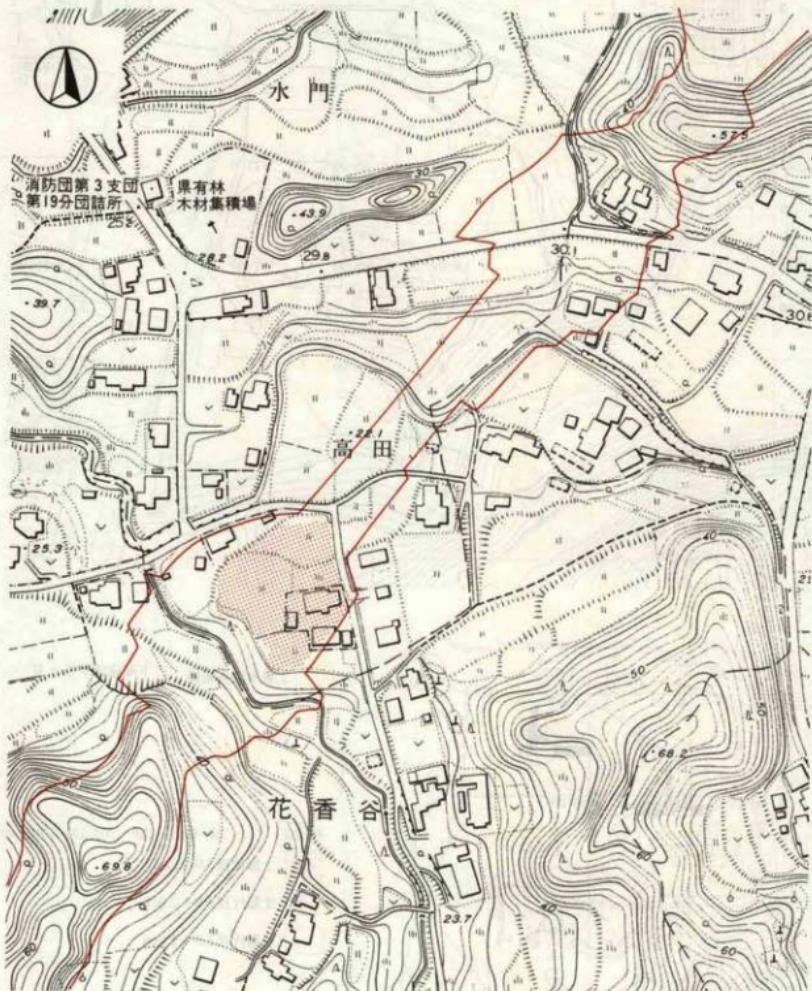
1 縄文時代

(1) 包含層

6R34～6R37縄文期包含層（第5・6図、図版4・10）

SK006の北側、調査区西側の小河川沿い約10m四方の地で縄文土器の包含層が確認された。土器は実数にして50点足らずであり、6R34～37に多少まとまっているものの、散在する傾向がある。

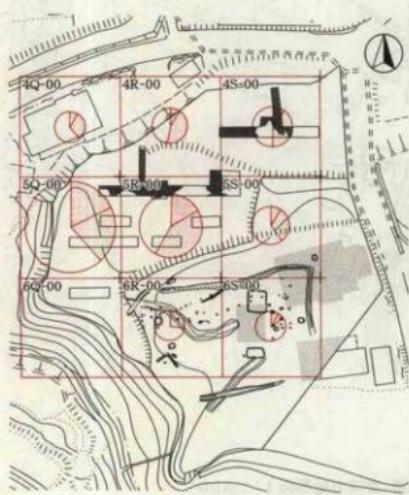
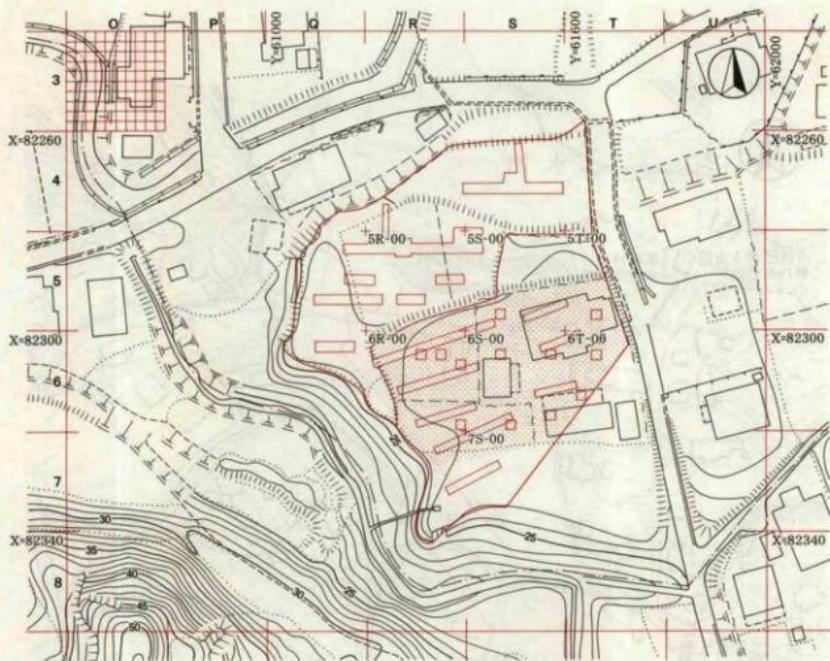
その出土層位であるが、出土レベルは25.20m～25.70mの間にあり、北側と西側では深く、東側では逆に



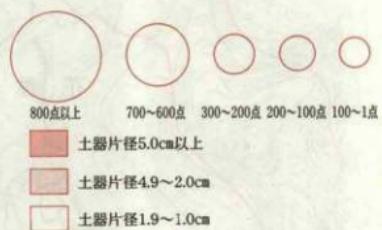
■ 調査対象範囲

第2図 高田遺跡と調査範囲(富津市地形図 1:2,500)

THE 2nd FIGURE HIGH FIELD SITE AND SURVEY AREA (TOMI CITY TOPOGRAPHIC MAP 1:2,500)

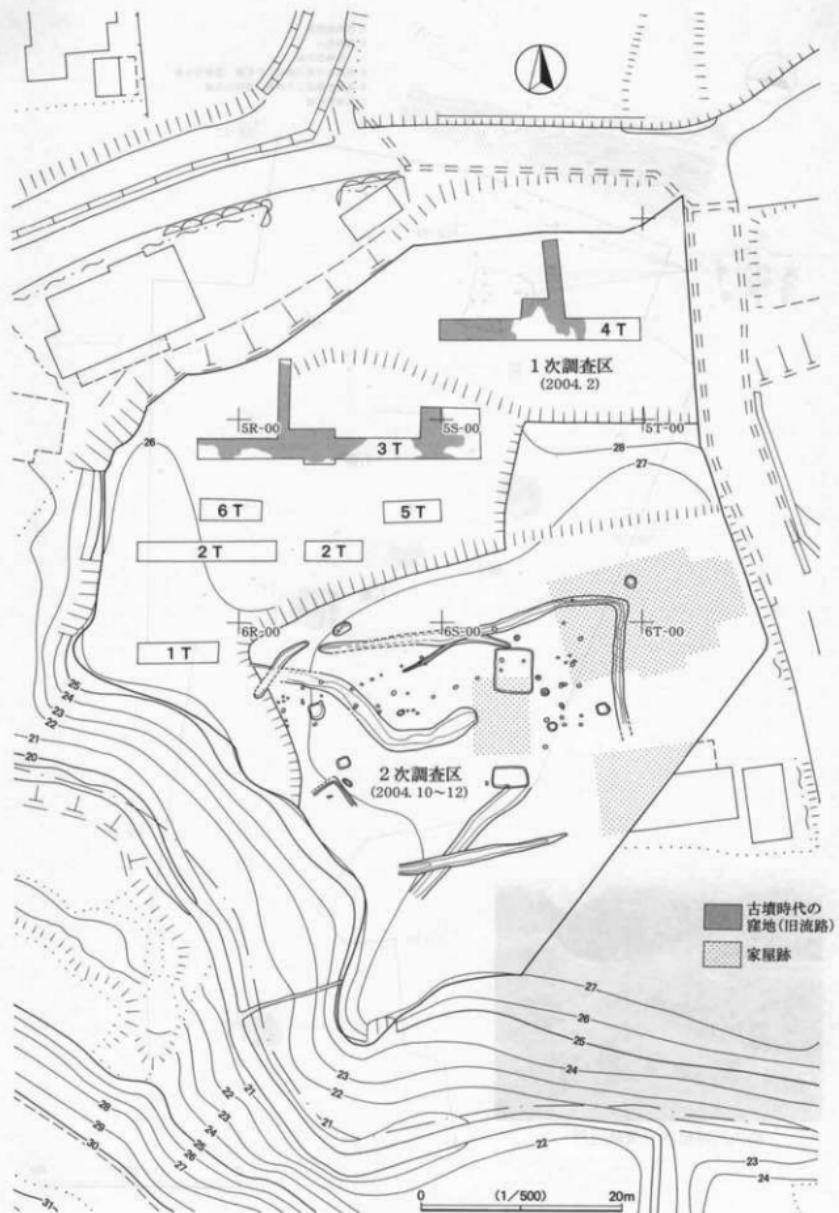


■ 上層本調査範囲 □ 下層確認グリッド

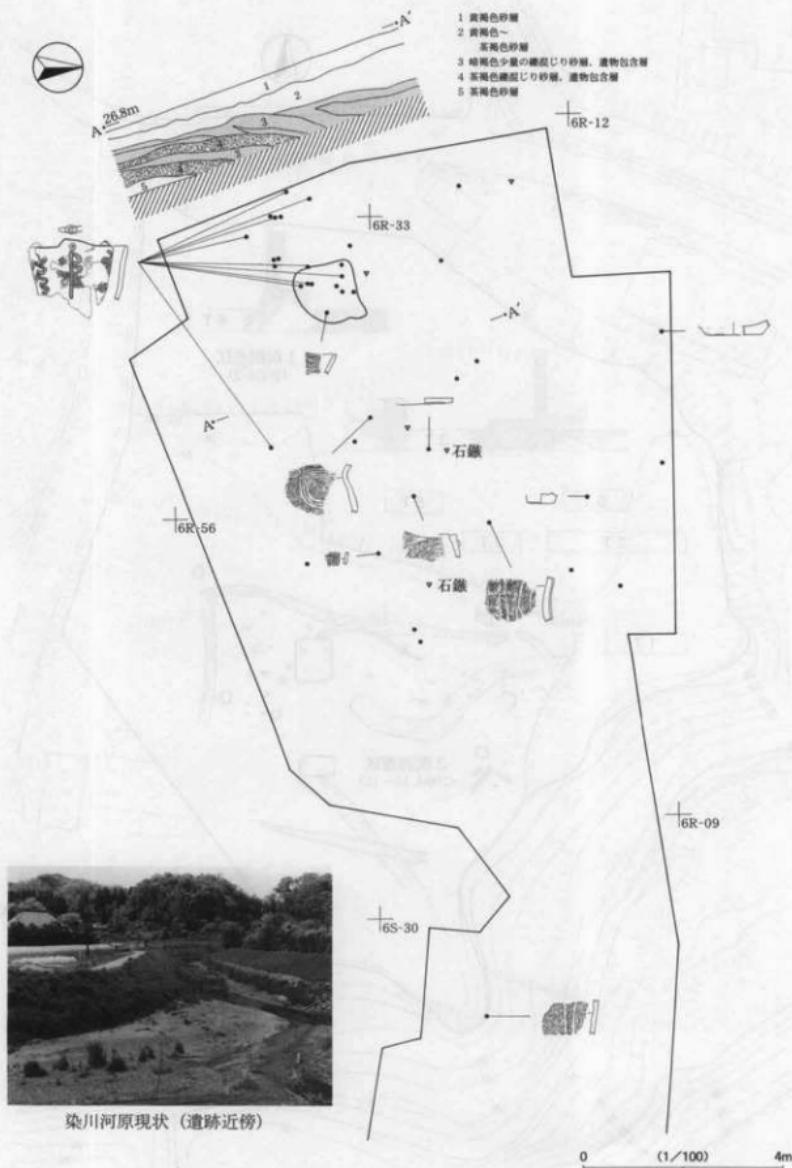


0 (1/1000) 50m

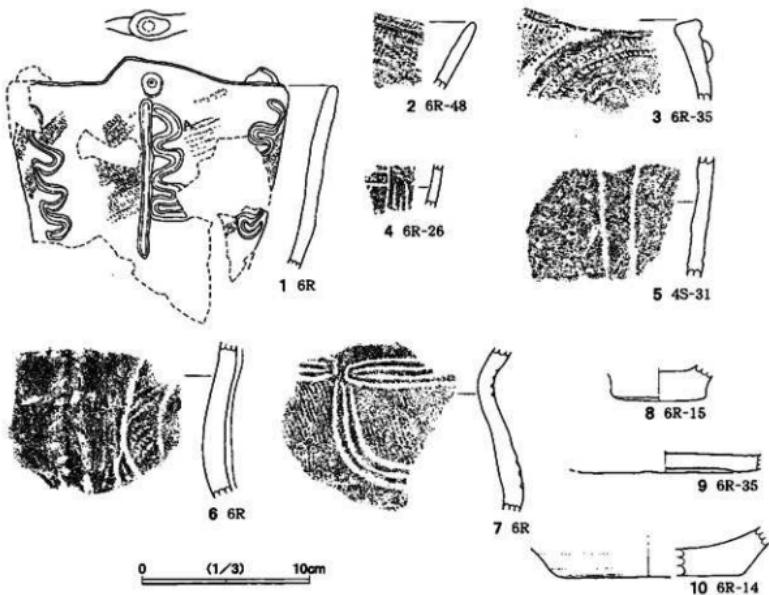
第3図 高田遺跡確認トレンチと遺物(土師器)出土状況



第4図 遺構全体図



第5図 下層(縄文時代)調査範囲と遺物出土状況



第6図 下層出土遺物

浅い位置で出土する傾向があった。下層確認調査では6R28~64のラインを境にその北側では北へ向かって礫層の落ち込みが確認された。この礫層は水平に堆積する層を切っているので、ある時期に河谷の浸食があつたことを物語っているが、また、間に黒褐色の砂層を介在することから、途中に休止期が存在したと考えられる。このある時期とは、これら縄文土器がこの礫層の落ち込みのなかから出土し、しかも年代的な幅が阿玉台式土器～堀之内式土器にあって、それらが混在する点などから、その下限を過ぎた辺りと推測する。

その埋没条件としては、浸食による近隣からの流れ込みもあったかもしれないが、河原を舞台とした活動の所産とみるのが至当であろう。今回の下層調査はあくまでも遺物の出土したトレンチの周囲を拡張したにすぎないが、地形図でみると染川の旧流路（河岸）らしき地割がその前面を廻っている。つまり、縄文時代中期～後期には現在とは違う位置に染川の流れがあり、その流路が埋没する過程で縄文人の痕跡が残された結果と捉えておきたい。

出土遺物は縄文土器片45点である。その出土状況は礫層（間の褐色～黒褐色の砂層中も含め）に散在するかたちであり、多少のまとまりをもって接合・復元し得た1点のほかはまったく接合しなかった。時期的には中期阿玉台式土器から後期堀之内式土器で、中期加曾利E式後半のものが主体を占める。

1は堀之内式土器である。径約2m程の範囲にわたる8ブロックの破片が接合した。口径17.5cm、器高は現存で19cm、底径は恐らく7cm程度になろうか。3単位の突起部を有し、突起の下には円形の凹みと垂下する太い沈線を配して3等分し、間を縦位の太いジグザグ状の沈線を胴部中位まで施す。なお、地文の縄立はLRであるが、これも全体ではなく、胴部中位の沈線までの施文である。色調は赤褐色、胎土は砂礫を

含む。

2～4は阿玉台式土器と思われる。2は波状口縁の小形鉢形土器口縁部片である。口縁に併行して数条の押引文帯を施すが、その下位は弧状となる。色調は黒褐色で、胎土には雲母また砂礫を多く含みザラザラした感じである。3は多少内傾する波状口縁鉢形土器口縁部片である。口唇部を肥厚させ、そこから斜めに隆蒂を下ろし、押引文による縁取りを施す。色調は灰褐色であり、胎土は雲母と砂礫を多く含む。4は2と同様の器形ながら、こちらは胴部片で、文様は角押文による。色調は黒褐色で胎土は砂礫を含む。

5・6は中期後半～末葉の土器で、共に深鉢形土器胴部片である。5は縱位の磨消繩文帯を構成するものであるが、全体に摩耗が激しく繩文は不明瞭である。色調は明黄褐色、胎土は砂粒を含む。6は縱位の微隆起線文と磨消繩文帯による文様構成の土器で、繩文原体はLRである。色調は外面暗褐色・内面黄褐色、胎土は砂礫を含む。

7は堀之内式土器の深鉢である。胴部の括れ部に細長の梢円（間に2本の平行沈線）を廻らし、交点からは3本の沈線束を垂下させる。なお、地文はLRの繩文である。色調は赤褐色～黒褐色で、胎土は砂礫を多く含む。

8～10は底部である。8は中期末ないし後期に下る所産と思われ、9・10は中期阿玉台式と思われる。8は褐色で胎土に砂礫を含む。9は赤褐色～黒色で、雲母と砂礫を多く含む。10は外面黄褐色・内面灰黒色で、胎土は雲母と砂礫を多く含む。なお、10は赤彩らしき痕跡が認められる。

2 古墳時代

(1) 溝

SD006 (第7図、図版5・10)

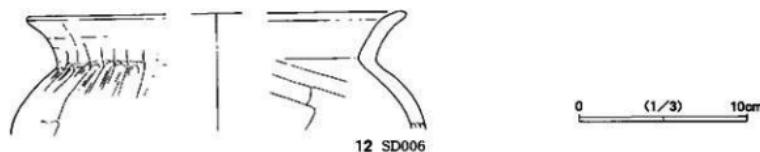
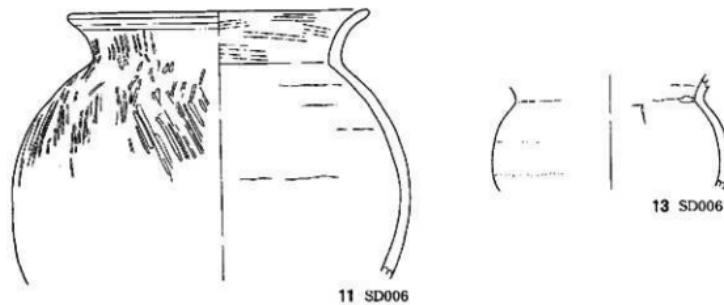
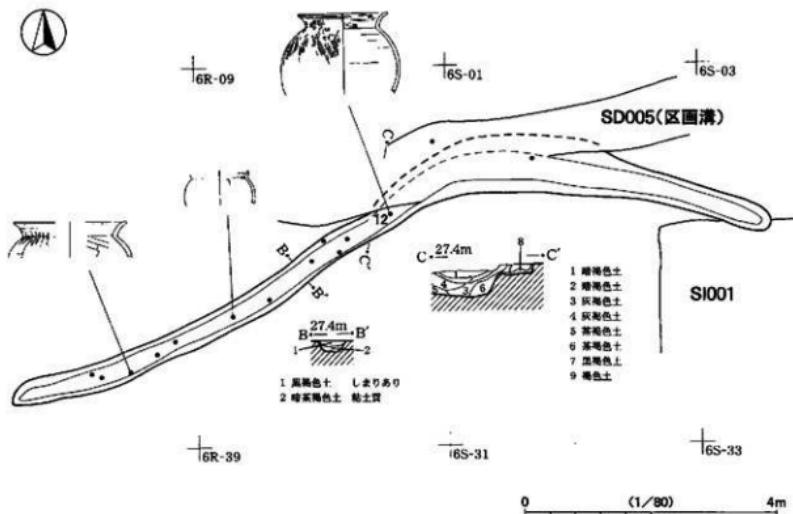
SD006は西側はSD002と同じ向きながら、東側は南に曲がり、また多少うねりがある。区画溝北側溝(SD005)、SI001と重複するが、当遺構が古い。幅は0.4m～0.6mであり、深さは確認面から10cm～20cm程である。また、その断面形状は箱形ないし凹レンズ状を呈し、覆土は茶褐色から黒褐色の粘質土である。自然堆積であろう。なお、当遺構の時期決定についてであるが、約半個体に近い土師器壺上部が中央部覆土中より出土したほかに、土師器片が約40点で中・近世の遺物はない。その点から、古墳時代の所産として報告するが、ここは土師器を多く出土した北側流路跡に近く、そちらに起因する遺物の可能性もなくはない。

出土遺物は既述した壺ほかがあるが、図示できるものは計3個体ほどであった。11は溝の中央部覆土中位から出土した壺で、口縁から胴部約1/2個体である。頸部から上胴部にかけてハケ目が認められる。12は溝西端覆土上位から出土した壺で、口縁から上胴部約1/6個体を復元実測した。そのため、径については多少の誤差があるかと思われる。13は溝西側覆土下位から出土した小形の壺で、頸部から胴部約2/3個体である。

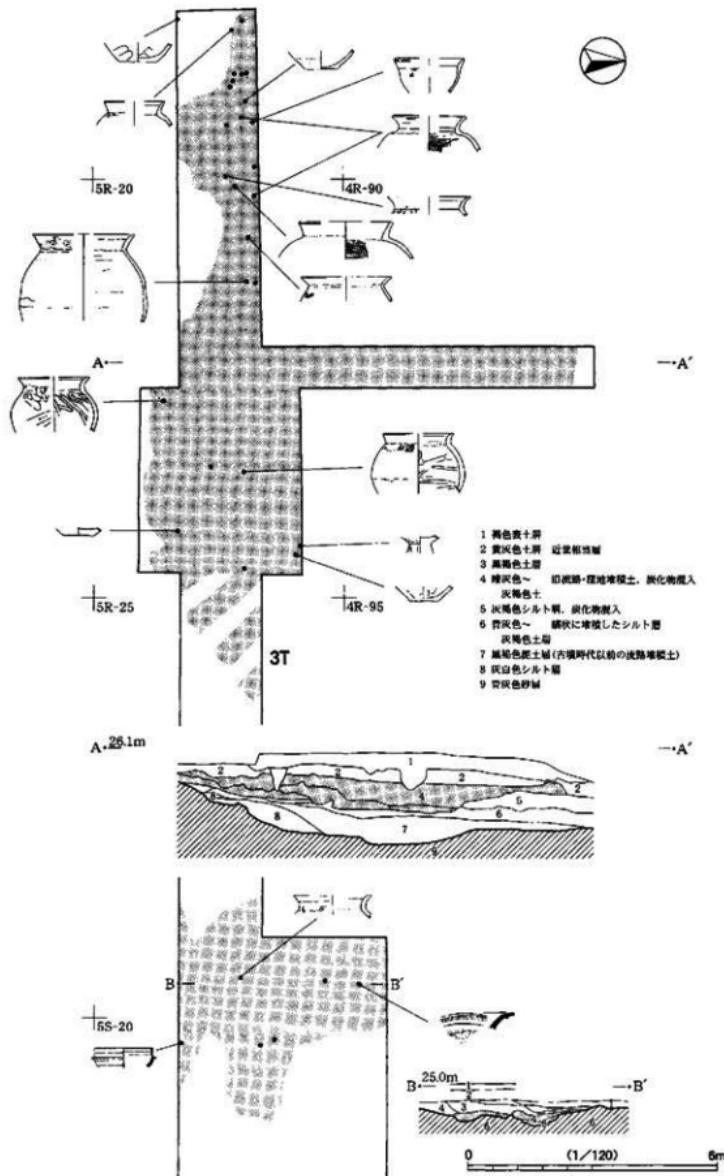
(2) 遺物包含層

遺物を包含する墓地 (第8～10図、図版11)

遺跡北側の一段低い地において上層確認調査トレンチ内より土師器が多く出土した。ここは第2図及び第3図の地形図でもわかるとおり、染川の低位段丘面上に当たり、かつては北東から南西に蛇行するその河床部に相当する地である。既述した繩文時代の包含層はまさしく河岸から河原へかけての斜面に形成されたもので、繩文時代後期には下の河原に降りるのに数m以上の段差があったものと思われる。それが、



第7図 SD006



第8図 古墳時代遺物包含層(窓地)

古墳時代中・後期には僅かな凹みを残すまでに埋まってしまい、葦や蘆木が生い茂り流路に沿って池が点在する景観が形成されたと考えられる。というのは、この低地に対し直交するように入れた数か所のトレチ断面に浅い窪みとそこに形成された黒褐色泥層が確認されるからであるが、この泥層から土師器が出土する。

その出土状況は調査区北西の窪地に多少の集中がみられるが、意図的な配置ないし投棄また器種、器形の特殊性などいわゆる水辺祭祀に関連するような徵証は発見なかった。かといって、破片は流れ込みに由来するような小片かつ水磨されたものでもない。つまり、日常生活に由来する土器が窪地に断続的に捨てられたとでも形容するような姿を示しているのである。高師小僧が高い頻度で付着しているのも周囲からの流れ込みというより、最初から水辺にあった故であろう。

なお、この流路ないし窪地であるが、全体に北側に傾斜している。染川の流れが北にあり、また、当遺跡の北側が広く周囲の段丘面により3~7m近く低いことから、その後に北側が大きく浸食されたとみればその影響が南側に及んだとも考えられる。更に、中世以降の耕地化に伴う地形の変化（段々田）も窺え、これらが相俟って現在の地形に至ったと思われる。

そこで、土師器をもたらした人々との因果関係であるが、窪地に近くそれに併行するように走るSD006を除いて該期の遺構は確認されなかった。背後の段丘に集落は存在しないとすれば、その土器を残した人々はどこにいたのかが問題となる。周囲の遺物の散布状況を含め今後の課題といふしかない。

出土遺物はこの窪地から出土した遺物（といっても須恵器と土師器のみである）を小片を含め出来るだけ復元実測することに努めた。出土地点との対応については図を参照していただくとして、ここではその概略のみを述べる（詳細は観察表）。

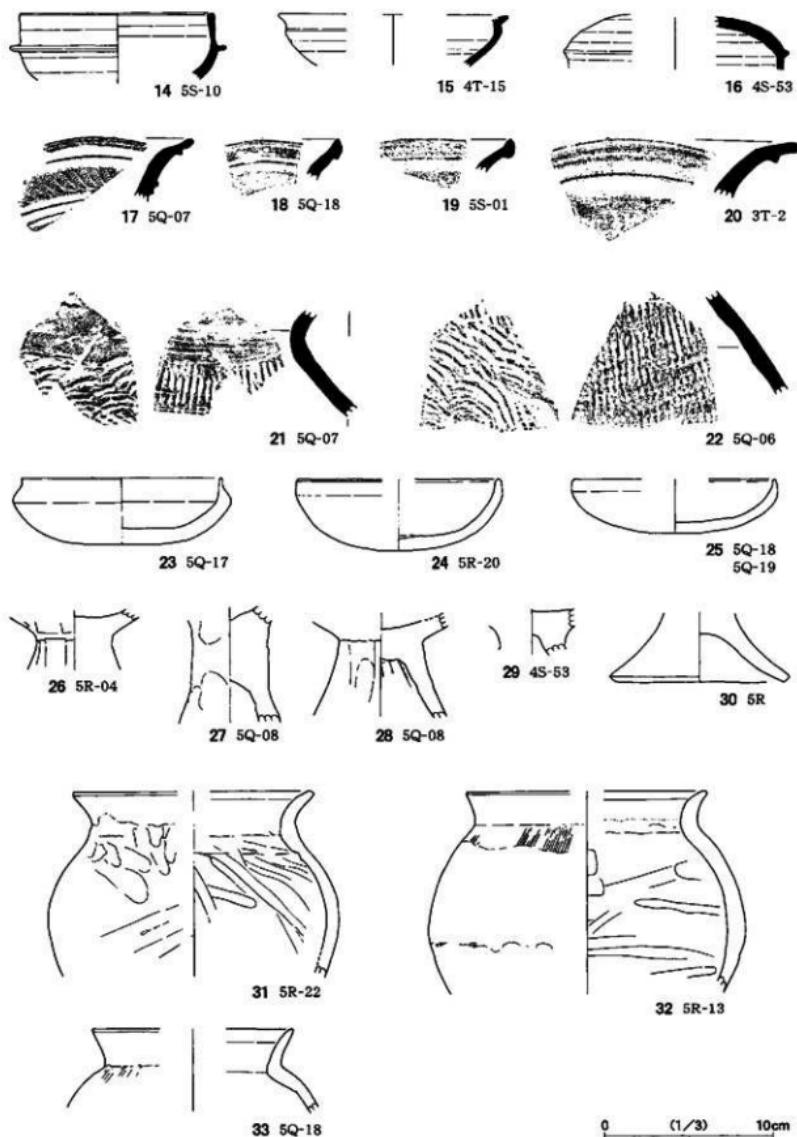
14~22は須恵器である。14・15は壺身で、16は蓋になろう。17は壺ないしは器台口縁部と思われる。18・19は小形、20は大形の壺（甕）口縁部になろう。また、21・22は色調・胎土・叩き目が酷似することから、同一個体（破片数13）としてよいもので、恐らく湖西産の壺であろう。

23以降は土師器である。23~25は壺であり、23は須恵器模倣、24・25は丸底のものである。26~29は高壺括れ部であるが、27は脚部が一旦括れて立ち上がる形態をなす。30は小形の高壺脚部である。

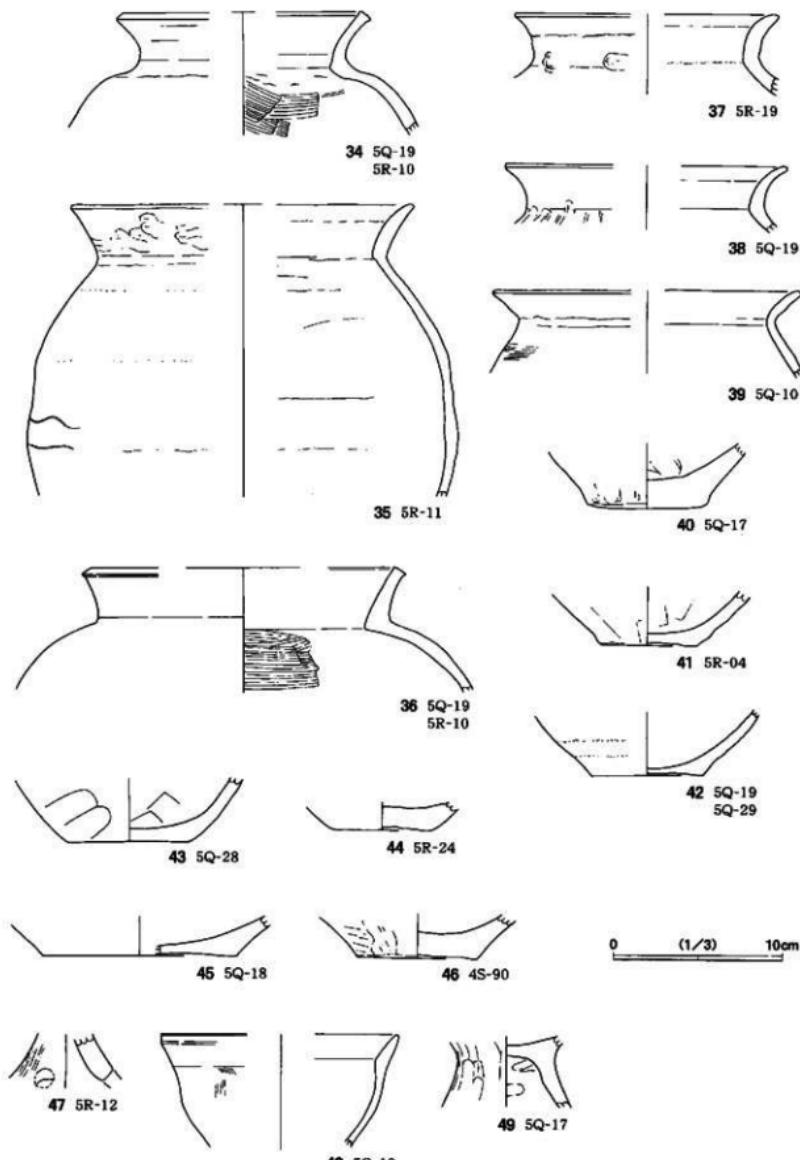
31~46は壺・甕である。31・32は口縁が緩やかに外反するもの、33・35はくの字状となるもの、38はその中間である。34・36は口唇部が明瞭に平らとなり、頸部から上胴部にかけて大きく屈曲する壺であり、共に内部にハケ目調整を施すという特徴がある。37は頸部が多少コの字形を呈する。40以降は底部である。このうち、41・42は壺、43以降は甕と思われるが、断定はし得ない。

47~49は古墳時代でもより遡る土器をまとめた。47は器台、48は小形の鉢、49は台壺甕の脚部になろうか。

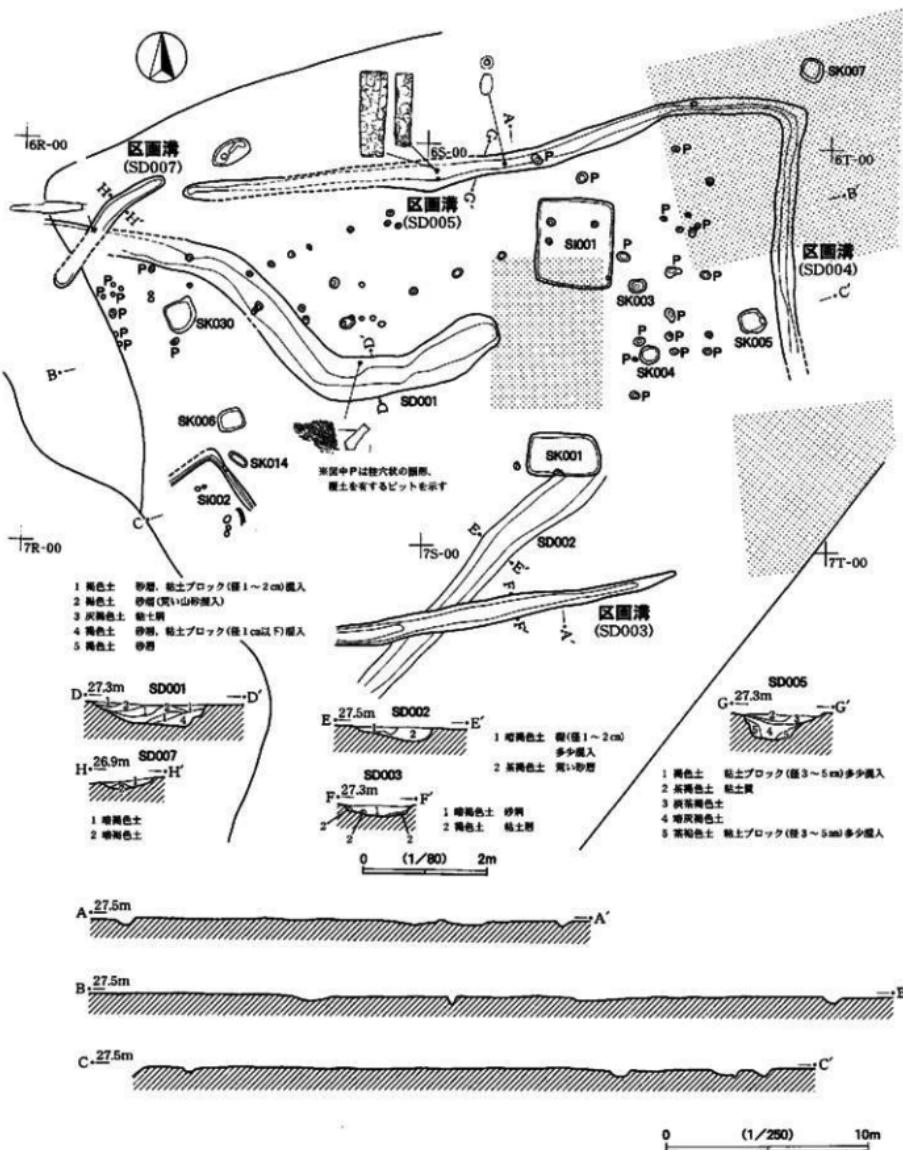
以上の出土遺物を從来の編年観に照らすと、一部は古墳時代前期に遡るもの、そのほとんどは同後期初めの5世紀後半段階にあると捉えられよう。もちろん、湖西産とした須恵器もあるが、こちらは調査区西端の5Q大グリッドの一角に破片が集中している。それ故、窪地に泥土が溜まった時期も5世紀前半から後半頃に求められるのではなかろうか。



第9図 古墳時代遺物包含層出土遺物(1)



第10図 古墳時代遺物包含層出土遺物(2)



第11図 中・近世遺構全体図（時期不明含む）

3 中世・近世初頭

(1) 区画溝（第11図～13図、図版5・6・13）

平場を長方形に廻る溝は調査時に各辺を単独の溝として番号を付した（北側SD005、東側SD004、南側SD003、西側SD007）が、同一の造構であることから、区画溝として以下説明する。なお、北西の箇所（SD007）については、必ずしも東辺と対応しないが、西側を区切るように走ることや形状また覆土の類似性から一連のものと考えた。

区画溝は南側調査範囲の平場を廻るかたちで検出されたが、ここは南から西側にかけて蛇行する染川の縁に相当し、比高差6m以上の段丘面を形成する。

溝は西側の多くを欠いているが、これはそこが傾斜面に当たっているためで、本来は四面を廻っていたものと思われる。溝を含めた区画は多少歪んだ長方形であり、規模は南北で47m、東西で65m～70mの間と推測される。溝自体は幅0.8m～1m、深さ20cm～30cm程度であり、断面形態は逆台形となる。覆土は比較的均質な暗褐色土で、自然堆積と思われる。なお、出土遺物の年代幅からすると、溝の時期は16世紀代となるようか。

遺物の出土状況は北東コーナー部で常滑甕片がまとまって出土したほかは、東溝中程で擂鉢片、北溝で土錐・砥石2、北西端で刀子といったところで、時期を異にする土器片は北側に集中していた。層位的には、砥石が溝下位から出土したほかは、中位から上位に位置するものである。

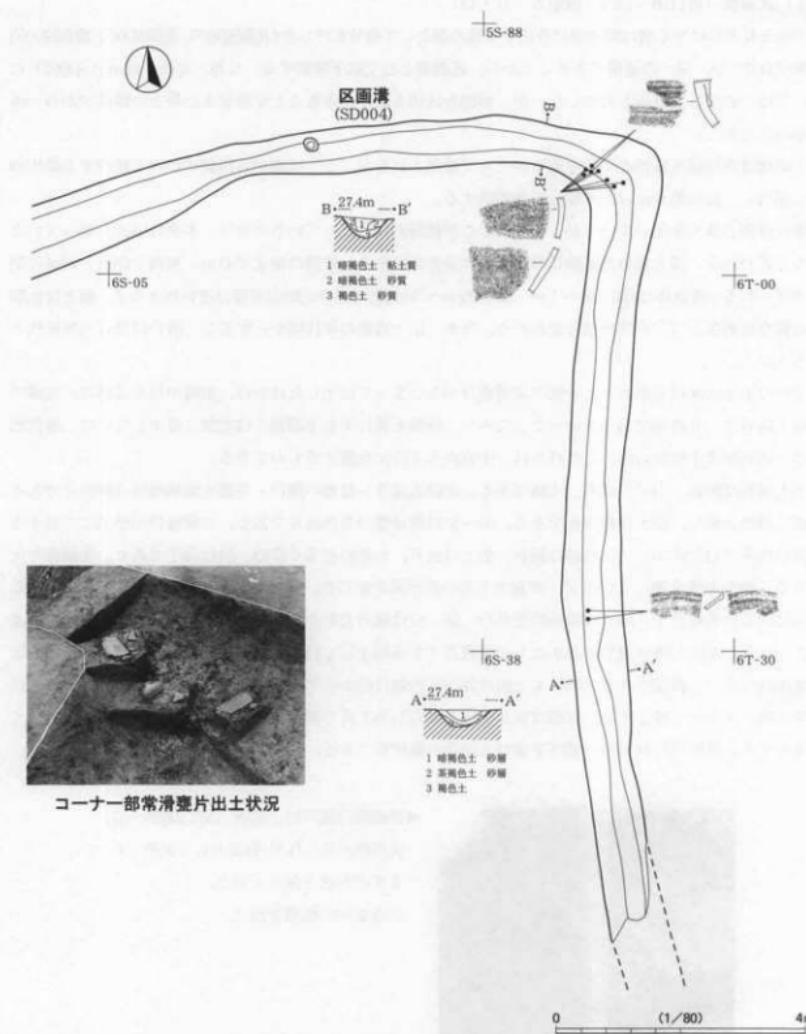
出土遺物は陶器、刀子、砥石、土錐である。50は大窯Ⅱ～Ⅲ期の瀬戸・美濃大窯期擂鉢口縁部片である。全面に鋳釉を施し、胎土は黄灰色である。51～53は常滑甕の各部破片である。口縁縁帯が頭部に密着する時期の所産（11型式か）で、色調は褐色、胎土は長石、石英粒を多く含む。54は刀子であり、先端部を欠損する。鋒が全体を覆っているが、実線で本来の外形線を示した。55は完形の土錐（重量22.7g）である。色調は明るい黄褐色で、胎土は微砂粒を含む。56・57は砥石であるが、使用痕が見られず、未使用の製品と思われる。2点が横に並列するかたちで溝底近くから出土しており、溝が若干埋まった段階で意図的に遺棄されたものと推測される。何れも上面は外から内側に向かって調整剥離を施して面取を行い、側縁部は荒く磨って多少平滑とする。背面は56が縁辺を整らしき工具で調整しているが、57は側縁と同様磨って平滑とする。石質は何れも多少黄味を帯びた灰色の凝灰岩である。



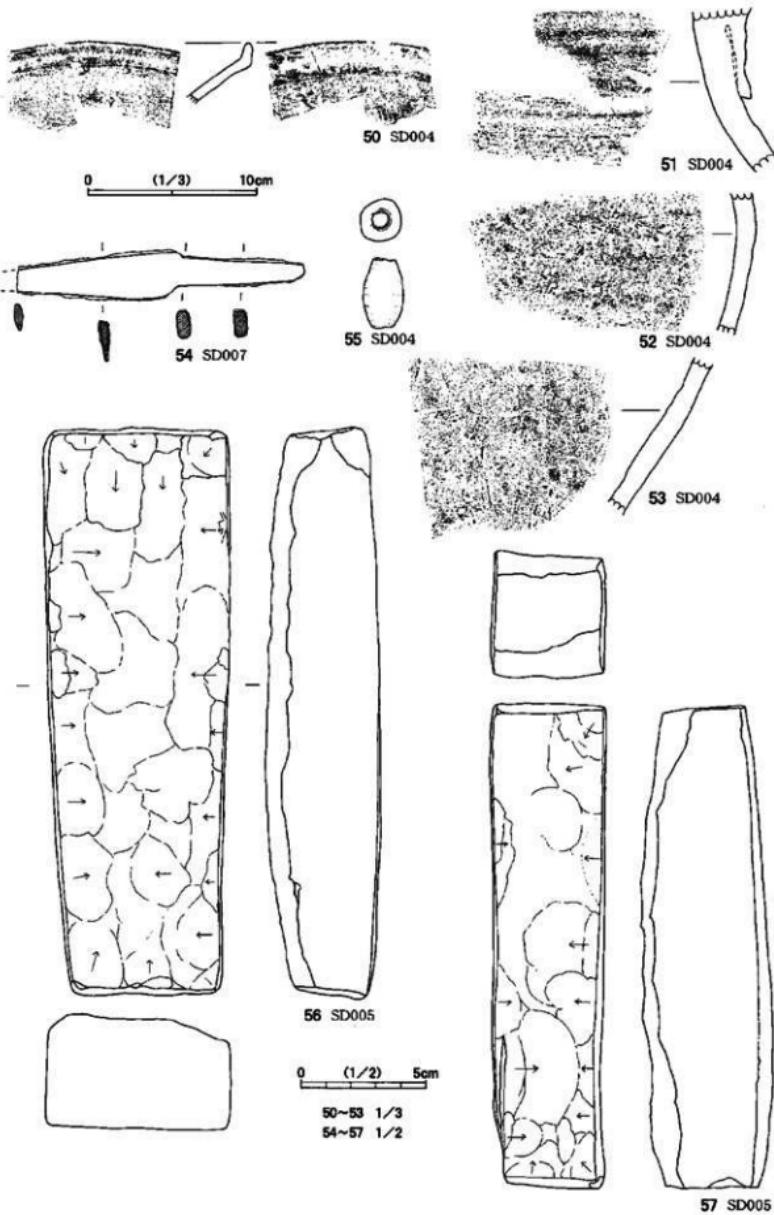
◀区画溝内砥石出土状況（第13図56・57）

使用痕が見られず、製品として供給された
ままの形状を保っていた。

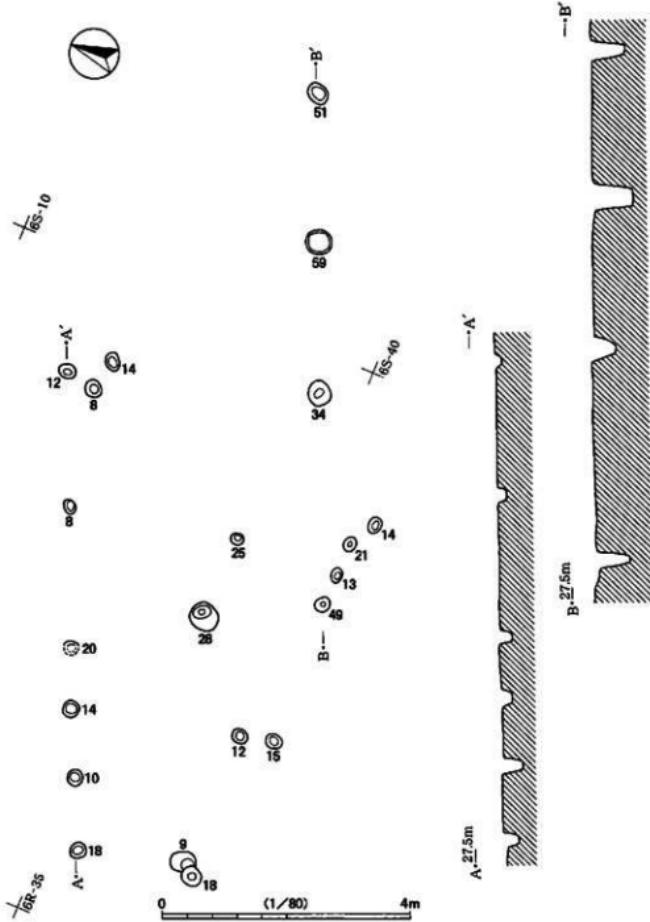
2点並列の状態で出土。



第12図 区画溝北東部と遺物出土状況



第13図 区画溝出土遺物



第14図 中・近世ピット列

(2) 区画内ピット列 (第11・14図、図版7)

区画内北側には溝と併行するように走る2列のピット群がある。その向きは区画溝 (SD005) よりもむしろそれと重複するSD006に等しい。

北側のピット群は1mないし2m程の間隔で、計6本が明瞭に同一線上となり、端から端までの長さはだいたい8mである。各ピットは径約25cm、深さ10cm~18cmで、比較的均質である。これに対して、南側のピット群は、2.5mないし3m程の間隔で、計4本が同一線上となり、その長さは北側と同様約8mである。その径は25cm~35cm、深さ40cm~60cmと、北側に比べて概して大きく、また深さもあり、多少不揃いである。

両者の関係については、南側ピット群西端のピットで大窯IV期相当の天目茶碗口縁部片が出土しており、

その上限を押さえることができるが、北側ではそれに匹敵する遺物もなく、その前後関係は不明である。しかし、お互いの走行や長さが等しいことを思えば、同時に機能していたとみるのが自然であろう。

なお、両列の西端には、そこからそれぞれ南北に直角に折れてお互い交差するようなかたちでピットが存在する。鍵形に区画するような意識があったのだろうか。しかし、それはあくまでも両者を同時併存とした場合の話ではある。

出土遺物は土師器片は別として、既述した南側ピット群西端覆土中より出土した瀬戸・美濃天目茶碗口縁部片のみである。口唇部から内面に鉄釉（胎釉）を施し、胎土は灰白色である。近世初頭の製品であろう。

(3) 溝

SD001 (第11図、図版6)

SD001は区画溝の北西部から中央に延びる溝である。その北西部で区画溝と重複するものの、重複部が確認トレチに当たったためにお互いの新旧関係については不明のままである。しかし、調査時の所見や区画内の土地利用を考慮すると、少なくとも区画溝以前で尚かつ中・近世の一連の溝のなかでは最も遡る所産の可能性が高いと思われる。

溝の幅は多少の広狭はあるものの、だいたい2m前後で、深さは確認面から20cm～40cm程である。また、その断面形状は浅い椀形を呈するも、西側では多少平底となる。覆土は褐色から灰褐色の粘質土であるが、間に山砂や粘土のブロックを含み、また層位に乱れがあるなど人為的所産の可能性がある。

出土遺物は僅かの土師器片は別として、常滑片口底部片が覆土上位より出土したのみであった。色調は赤褐色で、胎土は砂粒を多く含む。比較的堅めの焼き質で、15世紀代の製品ではなかろうか。

(4) 穫穴遺構

SI001 (第15図、図版7・13)

その形状や内部のあり方から、中世の竪穴遺構の可能性が高いと判断したものである。区画溝内北東部に位置し、全体に遺存が悪く、かろうじて壁を検出したにすぎない。

その形態は多少縱長の長方形であり、規模は長径4.4m、短径3.8mである。柱穴は北側2か所が明瞭ながら、それに対応する南側では検出できなかった。これを当時のものと見れば当然屋根の構造にも反映されたであろう。なお、西側壁下のピットはあるいは出入口に伴うものかもしれない。

覆土は砂礫混じりの暗褐色土である。

遺物は覆土中に土師器の小片を数点含むのみであった。

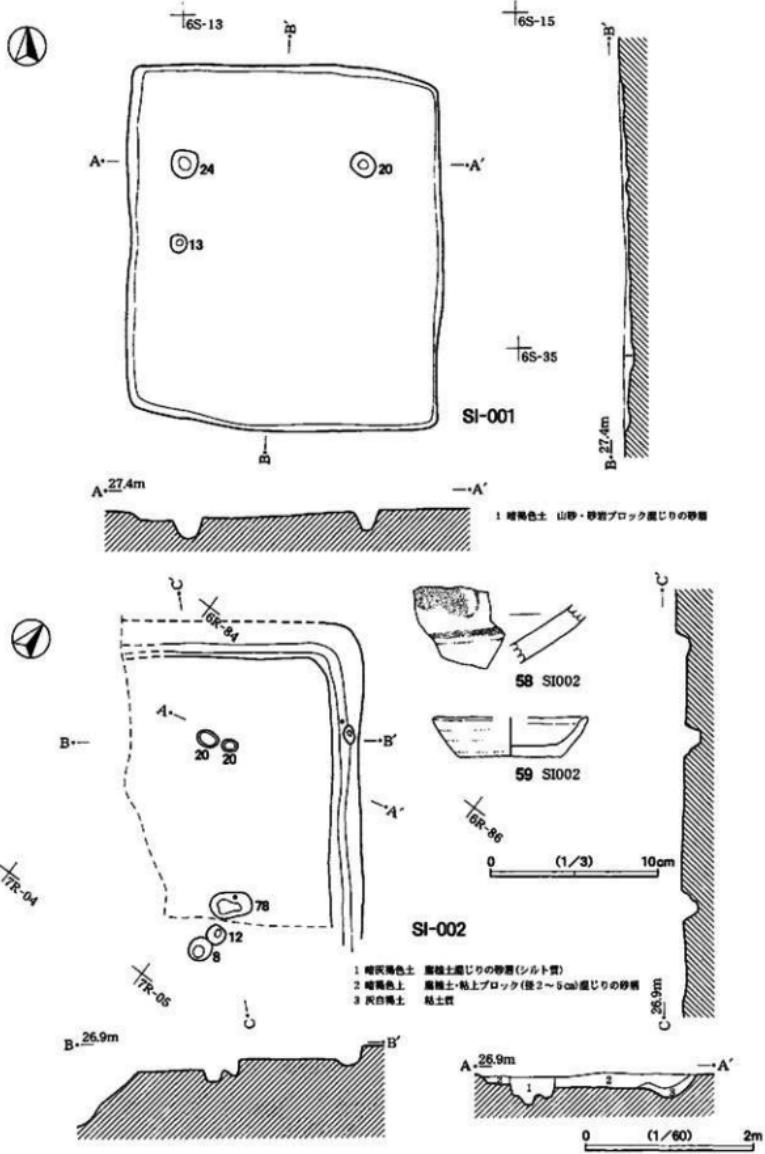
SI002 (第15図、図版7・13)

調査時に古墳時代の住居跡と判断されたが、整理時に検討した結果、近世初めの竪穴遺構と判断した。

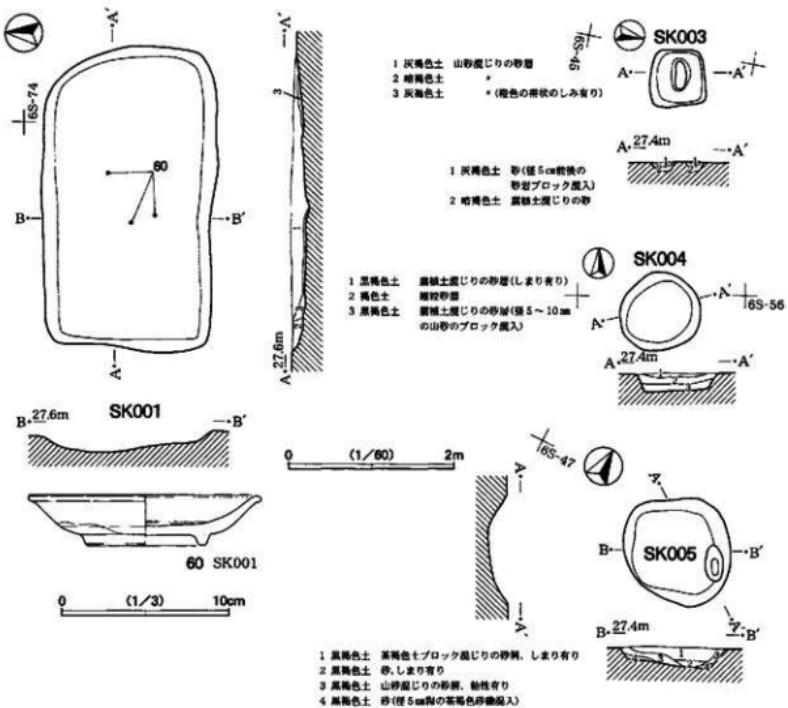
区画溝内西端に位置する。その形態・規模は西側および南側が傾斜面に当たっているために全体の形態または規模は不明ながら、柱穴は2か所遺存していることから、少なくとも1辺は4.5m～5mの長さになろうかと思われる。また、その向きについては、遺存度の悪さもあり確定はできなかった。

柱穴は北東から北西にかけての2か所が明瞭である。共に近接して2個1対のかたちで対応するが、これは建て直しとみるべきであろうか。なお、南東柱穴に隣接するピットのうち、外側のものは梯子穴の可能性もある。また、壁直下には20cm程の幅で小溝が埋っている。

覆土は壁下に灰褐色土、中央に灰褐色の共に粘土質の土が回レンズ状に堆積するものであった。自然堆



第15図 中・近世堅穴遺構



第16図 中・近世土坑(1)

積であろう。

出土遺物は北東コーナー付近の周溝上床直レベルでかわらけ1点(約2/3個体)が出土した。かわらけは復元径(9.2)cm、底径6.0cm、器高2.4cmで、胎土に礫を含む。色調は灰褐色である。また、南側ピット床面近くで、近世初めの唐津皿の体部片が出土した。

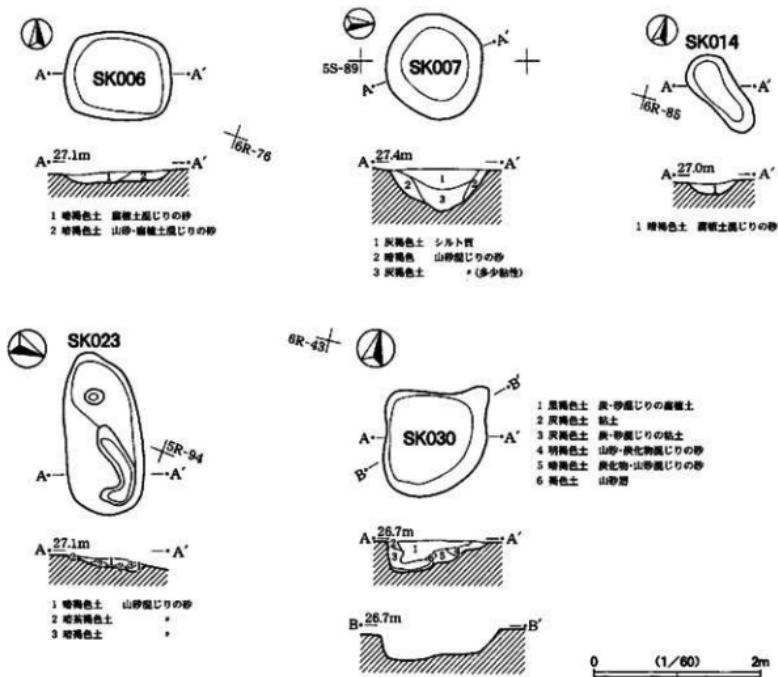
(5) 土坑

SK001 (第16図、図版13)

区画溝内中央南寄りに位置する。SD002と重複するが、当遺構が新しい。方位は長径をほぼ東西に向け、形態は東側が隅丸の長方形で、規模は長径3.6m、短径2.0mである。

底面は多少の凹凸があり、柱穴は確認されなかった。また、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は灰褐色土で、壁付近が異なる(暗褐色土)ほかは、ほぼ単一の層であった。自然堆積であろうか。

出土遺物は土坑中央底面から若干浮いた状態で、近世初めの灰釉皿約半個体(3点接合)が出土した。復元口径13.9cm、底径6.9cm、器高3.0cmである。高台は付高台で、見込みには直接重ね焼きした痕跡がある。なお、釉は長石分の多いもので、胎土が黄灰色のゆえか全体に黄色がかた志野釉のように見える。このほかには、覆土中から土師器小片が若干出土したのみである。



第17図 中・近世土坑(2)

当遺構の年代は図示した灰軸皿に加え、SD002より新しい点など、近世初めと思われるものの、その性格については明確ではない。

SK003 (第16図、図版8)

SI001南東に近接する土坑である。形態は方形で、規模は径約70cm、深さは確認面から10数cm程である。底面中央に厚み10cm程度の灰褐色粘土が人為的におかれた状態であり、覆土も砂岩の塊を含むなど意図的に埋め戻した形跡が窺える。なお、遺物は出土しなかった。

当遺構は近世以降の所産と推測されるが、その性格については明確でない。

SK004 (第16図、図版8)

SK003の南、約4mの位置に所在する。形態は略円形で、規模は径0.9m、深さは確認面から0.3mである。覆土は回レンズ状に何層にも区分されるもので、自然堆積と推測される。なお、遺物は出土しなかった。

当遺構の年代は中世以降と推測されるが、その性格については明確ではない。

SK005 (第16図、図版8)

区画溝東溝 (SD004) 中程の内側に隣接 (約1mの距離) する土坑である。類似する土坑 (SK004) とは約9m東の位置にある。形態は略円形で、規模は径1.3m、深さは確認面から約0.2mである。覆土は回レ

ンズ状の堆積を示す。なお、遺物は出土しなかった。

当遺構の年代は中世以降と推測されるが、その性格については明確ではない。

4 時期不明の遺構

(1) 溝

SD002 (第11図、図版6)

SD002はその南側で区画溝と重複するが、セクションの検討から中世の区画溝より古い所産である。

その向きは南西～北東方向に走り、多少うねりがある。区画溝南溝 (SD003)、SK001と一部重複するが当遺構が古い。幅は1m～1.5mであり、深さは確認面から凡そ25cm程である。その断面形状は多少崩れた箱形であり、覆土は暗褐色の砂質土である。

出土遺物は土師器片が10点ほどであるが、小片であり且つ出土状況から判断して混入遺物と考えられる。当遺構の年代は区画溝より古いものの、具体的な時期については断定しえない。またその性格は不明である。

(2) 土坑

SK006 (第17図、図版8)

SI002の北、約1mに位置する。形態は略隅丸長方形とも梢円形ともとれるもので、規模は長径1.3m、短径1.0m、深さは確認面から約0.1mである。覆土は東側の高みから流れ込んだと思われる堆積のあり方であった。遺物は規模の割には土師器片40点（ほとんどは小片）以上出土したもの、それがこの年代を示すものかどうか明らかでない。その性格についても不明である。

SK007 (第17図、図版9)

区画溝北東コーナーの北側、約1.5mに位置する。形態は円形で、規模は1.2m、深さは確認面から約0.5mである。また、断面形態は多少V字を示す点で、当遺跡のなかでは特異な存在である。覆土は層位ごとに内容が異なり、人為的に埋め戻した様相が窺える。それがこの年代を示すものかどうか明らかでない。

当遺構の年代、性格については、明確ではない。

SK014 (第17図、図版8)

SK004の南、約1mに位置し、SI002に近接する。形態は瓢形といってよく、規模は長径約1m、短径0.5m、深さは確認面から0.15mである。また、覆土は単一の暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

当遺構の年代、性格については、明確ではない。

SK023 (第17図、図版9)

区画溝西北部外側に近接して所在する。形態は細長い梢円形であり、規模は長径2m、短径約1.0m、深さは確認面から約0.1mである。覆土は暗褐色土で乱れがある。遺物は出土しなかった。

当遺構の年代、性格については、明確ではないが、底面（凹凸あり）や覆土の状況から近代に下る可能性もある。

SK030 (第17図、図版9)

遺跡西端の崖を見下ろす位置に所在する。調査の過程で北西側を掘り下げ本来の形を損ねてしまったが、形態は梢円形になろう。その規模は推定で径約1.5m、短径1.3m、深さは確認面から0.35m程である。壁の立ち上がりは西側が急な反面、東側は緩やかで、また多少の出入りがある。覆土は炭化物や焼土を含み、その堆積のあり方には人為的に埋め戻した形跡が窺える。

遺物は覆土中から縄文土器片が散在するかたちで出土したが、周辺の土層中から同レベルないしはそれ以下で出土した土器片が接合する（深鉢形土器約2/3個体に復元）ことから、包含層の縄文土器が混入したものと判断される。縄文土器より時期的に下る遺物はないが、覆土の状況や遺跡のあり方からして古墳時代または中・近世の所産と思われるものの、具体的にその年代を指示し得ない。また、その性格についても同様である。

（3）区画内ビット群（第11～14図、図版7）

区画溝内東側に集中してビット群がある。数としては18ながら、このうち近代と思われる焼し瓦を多く出土したSK017（径40cm）のように明確に時期比定できるものもあるが、それ以外は出土遺物もなく根拠に欠けるが、何れにせよ中世末期以降の所産であろう。

セクションの検討から柱穴の可能性が高いものを分離しておいたが、かといってそれが掘立柱建物としてまとまるわけではない。この点、参考として、調査前の民家の建物の範囲を入れておいた。建物の範囲とビットの空白部分が多分に重なることに注意されたい。つまり、建物の基礎等、その造成に伴う地業によって浅いビットが壊されてしまったことも考慮しておく必要がある。それゆえ、図示した造構で総てを語ることは適当ではない。ここでは、とりあえず壊された部分を含め、掘立柱建物が区画内の東側にあった可能性を指摘しておくと共に、それが中世以降、一部は明確に近代にまで下る時期の所産であることを付言する。

なお、東側以外にも区画溝内北西部において部分的に小ビットの分布がみられるが、規則性はなく、遺物の出土もない。また、区画溝内北側においても散在するかたちで、多少のビットがみられるが、同様の内容である。

5 造構に伴わない遺物

グリッド出土の一括遺物が中心であるが、一部に近世以降に下る造構から出土したものも含まれている。

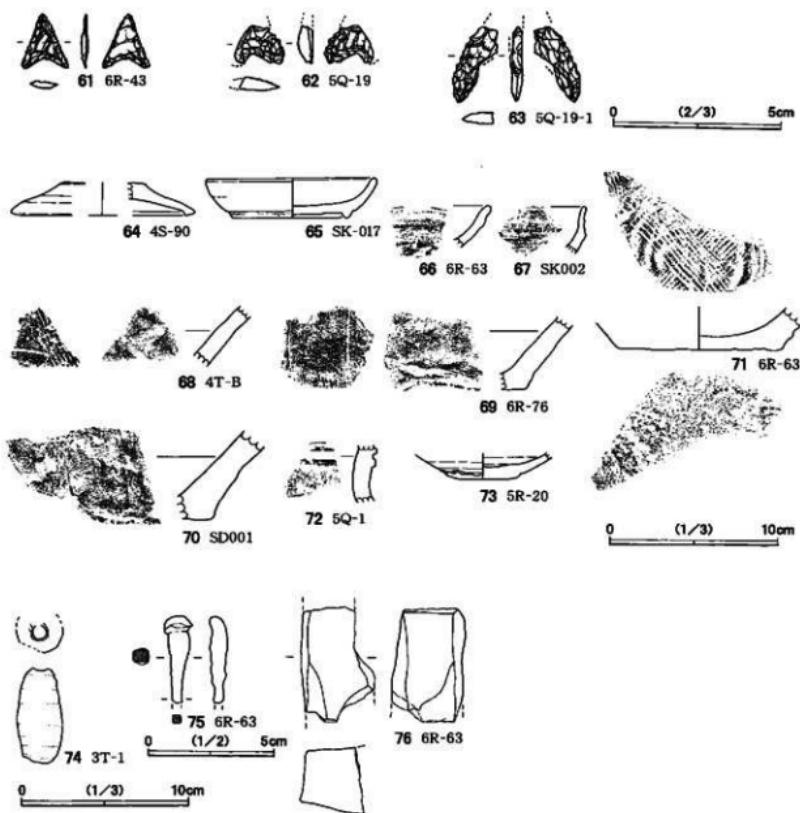
（1）縄文時代（第18図、図版5）

61～63は石錠である。61は安山岩製、62は黒曜石製の無茎石錠であるが、63は欠損品である。なお、63は黒曜石製の多少大形となる石錠欠損品であり、明瞭な逆刺を有する。重さは61が0.39g、62が(0.6)g、63が^a(0.74)gである。

（2）中・近世（第18図、図版5）

64～72は陶器である。このうち、64～69は瀬戸・美濃製品、70は常滑製品、71は産地不明、72是在地製品である。

64は蓋片（復元口径11.0cm）であり、内面と口縁外面に灰釉（灰白色）を施す。古瀬戸後期15世紀代の製品であろうか。65は大窯IV期の志野丸皿（約1/2個体弱、復元口径10.2cm・同底径11.0cm、器高2.5cm）と思われ、高台内の釉は拭い取られる。なお、釉の色調は乳白色、胎土には茶褐色の砂粒の混入がみられる。66もほぼ同じ時期の志野皿口縁部片であり、胎土は暗灰色である。67は大窯IV期頃の天目茶碗口縁部片と思われ、口唇部から内面に鉛色の鉛釉を施す。68は擂鉢の体部片、69は底部片である。共に紫褐色の錫釉を施し、近世初めに下るものであろうか。なお、69は胎土が黄桃色を呈する。70は常滑の片口底部である。色調は赤褐色を呈し、胎土に長石粒を主とした砂礫を含む。15世紀代の製品であろう。71は胎土に黒色粒子を多く含む擂鉢底部である。目は部分的に磨り減っている。72は手あぶり体部片である。数本の突堤は



第18図 造構に伴わない遺物

型押しによる。色調は黒褐色であり、胎土は僅かながら長石礫が含まれる。

73はかわらけ底部（底径4.3cm）である。底面は糸切り痕を有し、整形はロクロによる。色調は明黄褐色を呈し、胎土に微砂粒が含まれる。

74は土錘であり、縦方向に1/3程欠失する。重量は30.8gである。75は和釘であり、長さは現存で3.4cm、重量は2.87gである。76は砥石片である。3面共に磨り減っているが、一面に産地での加工痕跡らしき条線が遺存する。石質は灰白色の凝灰岩であり、重量は53.9gである。77は炉壁片である。壁外側はガラス化し、内部は小石混じりの粘土である。

このほかに図示しなかったが、キセルが1点、和釘片が2点程ある。

| 探査番号 | 遺物番号 | 遺物名 | 種別 | 器種 | 遺存度 | 計測値 (cm) | | 地 土 | 色 調 | 文様・調査手法 | |
|------|------|-----------|-----|------|----------------------|----------|-----|---------------------|------------------|------------------------------|------------------------------------|
| | | | | | | ○ | △ | □ | △ | | |
| 7 | 11 | SD006 | 土師器 | 壺 | 口縁～脚部約 1/2 | 18.0 | | 砂粒混入 | 黄褐色～灰黃褐色 | 口縁部ヨコナギ、壺部～上部外表面ハ ケ目、内面ナダ | |
| 7 | 12 | SD006 | 土師器 | 壺 | 口縁～上部脚 約1/4 | 22.0 | | | 赤色スコリア、赤 砂粒混入 | 口縁部ヨコナギ、上部外表面ハ ケ目、内面ナダ | |
| 7 | 13 | SD006 | 土師器 | 小壺 | 壺部～上部脚 片 | | | | 赤色スコリア、赤 砂粒混入 | 口縁部ヨコナギ、上部外表面ハ ケ目、内面ナダ | |
| 9 | 14 | SS10 | 須恵器 | 壺身 | 口 縁～ 体 部 約1/4～1/5 | 01.0 | | | 白色微砂粒混入 | 灰青色 | 内外面クロロ調整 |
| 9 | 15 | 4T | 須恵器 | 壺身 | 体部1/4～1/5 | 03.0 | | | 白色微砂粒混入 | 青灰色 | 内外面クロロ調整 |
| 9 | 16 | 4S3 | 須恵器 | 壺身 | 体部1/4～1/5 | | | | 微砂粒混入 | 灰色 | 内外面クロロ調整 |
| 9 | 17 | SQ07 | 須恵器 | 壺(蓋) | 口邊部片 | | | | 微砂粒混入 | 灰青色 | 壺部外面に放状文 |
| 9 | 18 | SQ18 | 須恵器 | 壺 | 口邊部片 | | | | 微砂粒混入 | 暗灰青色 | 内外面クロロ調整 |
| 9 | 19 | SS01 | 須恵器 | 壺 | 口邊部片 | | | | 微砂粒混入 | 暗灰青色 | 内外面クロロ調整 |
| 9 | 20 | ST2 | 須恵器 | 大型壺 | 口邊部片 | | | | 白色微砂粒混入 | 灰色 | 内外面クロロ調整 |
| 9 | 21 | SQ07 | 須恵器 | 壺 | 壺部～上部脚 片 | | | | 砂粒混入 | 灰色 | 壺部外面に放状文 サジ目、内面青褐色文 |
| 9 | 22 | SQ06 | 須恵器 | 壺 | 上部脚部片 | | | | 砂粒混入 | 灰色 | 上部脚部サジタマ目、内面青褐色文 |
| 9 | 23 | SQ17 | 土師器 | 壺 | 約15 | 12.0 | 4.0 | 赤石斑、砂粒、赤 色スコリア混入 | 褐色～にぶい褐色 | 口縁部ヨコナギ、体部内面ナダ、外 面ヘラナダ | |
| 9 | 24 | SR20 | 土師器 | 壺 | 約1/2 | 12.3 | 4.3 | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | にぶい黄褐色 | 全体ヨコナギ、内面に赤茶らしき赤み？ | |
| 9 | 25 | SQ18・SQ19 | 土師器 | 壺 | 約1/3 | 02.0 | 3.2 | 砂粒混入 | にぶい黄褐色 | 口縁部ヨコナギ、体部内外面ヘラナダ、 全体ヨコナギ | |
| 9 | 26 | SR04 | 土師器 | 高壺 | 洗丸部 | | | | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | 黄褐色 | 芦追形輪郭、全体に序滅 |
| 9 | 27 | SQ08 | 土師器 | 高壺 | 洗丸部 | | | | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | 褐色 | 内面ナダ、脚部外表面ヘラナダ、 内面指輪痕 |
| 9 | 28 | SQ08 | 土師器 | 高壺 | 脚部 | | | | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | にぶい黄褐色 | 内外面ナダ |
| 9 | 29 | SS3 | 土師器 | 高壺 | 洗丸部 | | | | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | 内面にぶい黄褐色、 外表面青褐色 | 内外面摩滅 |
| 9 | 30 | 5R | 土師器 | 高壺 | 脚部約1/3 | 00.6 | | | 砂粒混入 | 灰色 | 良質 |
| 9 | 31 | SR22 | 土師器 | 壺 | 口縁～脚部約 1/4 | 04.0 | | | 砂粒混入 | 黄褐色 | 口縁部ヨコナギ、脚部上位ナダ、下位 ヘラナダ、脚部内部ヘラナダ |
| 9 | 32 | SR13 | 土師器 | 壺 | 口縁～脚部約 1/5 | 04.3 | | | 砂粒混入 | 内面にぶい黄褐色、 外表面黄褐色 | 口縁部ヨコナギ、脚部外表面ヘラナダ、 内面ナダ |
| 9 | 33 | SQ18 | 土師器 | 壺 | 口縁～脚部約 1/3 | 02.0 | | | 砂粒混入 | 褐色 | 口縁部ヨコナギ、脚部外表面ヘラナダ、 内面ナダ |
| 10 | 34 | SQ19・SK10 | 土師器 | 洗形土器 | 口縁～脚部約 1/3 | 05.0 | | | 砂粒混入 | 灰褐色 | 口縁部ヨコナギ、脚部外表面丁寧なナダ、 内面ハケ目 |
| 10 | 35 | SR11 | 土師器 | 壺 | 口縁～脚部約 1/4 | 04.0 | | | 砂粒混入 | 黄褐色 | 口縁部ヨコナギ、脚部上位ナダ、下位 ヘラナダ、脚部内部ヘラナダ |
| 10 | 36 | SQ19・SK10 | 土師器 | 壺 | 口縁～脚部約 2/3 | 05.0 | | | 砂粒混入 | 外表面青褐色、内 面青褐色 | 口縁部ヨコナギ、脚部外表面丁寧なナダ、 内面ハケ目 |
| 10 | 37 | SR09 | 土師器 | 壺 | 口縁～脚部 | 05.0 | | | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | 褐色 | 口縁部ヨコナギ、脚部外表面ナダ、多 少コロの付着部 |
| 10 | 38 | SQ19 | 土師器 | 壺 | 口縁～脚部 | 06.0 | | | 砂粒混入 | 明赤褐色 | 口縁部ヨコナギ、脚部外表面ナダヘラナ ダ |
| 10 | 39 | SR10 | 土師器 | 壺 | 口縁～脚部約 1/4 | 05.3 | | | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | 褐色 | 口縁部ヨコナギ、脚部外表面ヘラナダ |
| 10 | 40 | SQ17 | 土師器 | 壺 | 底部約2/3 | 7.0 | | | 長石斑混入 | 内面青褐色、外面 褐色 | 内面ヘラナダ、外表面ヘラナダ |
| 10 | 41 | SR04 | 土師器 | 壺 | 底部約 | 5.8 | | | 砂粒混入 | 黄褐色 | 内面丁寧なヘラナダ、外面ナダ |
| 10 | 42 | SQ19・SQ29 | 土師器 | 壺 | 底部約2/3 | 6.4 | | | 微砂粒混入 | にぶい黄褐色 | 内面丁寧なヘラナダ、外面ナダ |
| 10 | 43 | SQ29 | 土師器 | 壺 | 通体充形 | 3.8 | | | 砂粒混入 | 内面青褐色、外面上 にぶい黄褐色 | 内面丁寧なヘラナダ、外表面ヘラナダ |
| 10 | 44 | SR24 | 土師器 | 壺 | 底部約2/3 | 5.8 | | | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | 内面にぶい黄褐色、 外表面青褐色 | 内面ヘラナダ、外面ナダ |
| 10 | 45 | SQ18 | 土師器 | 壺 | 通体約1/3 | 01.0 | | | 微砂粒混入 | 内面にぶい黄褐色、 外表面青褐色 | 内面丁寧なナダ、外面ナダ |
| 10 | 46 | SR20 | 土師器 | 壺 | 底部約2/3 | 7.0 | | | 砂粒混入 | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | 内面青褐色、外面 にぶい褐色 |
| 10 | 47 | SR12 | 土師器 | 器合 | 脚部1/2 | | | | | | 口縁部ヨコナギ、体部外表面ヘラナダ 内面ナダ |
| 10 | 48 | SQ19 | 土師器 | 壺 | 約1/4 | 04.0 | | | 微砂粒混入 | にぶい黄褐色 | 内面ナダ、外表面ヘラナダ |
| 10 | 49 | SQ17 | 土師器 | 台付壺 | 通体充 | | | | 砂粒、赤色スコリ ア混入 | 内面青褐色、外面上 にぶい褐色 | 内面ナダ、脚部内面ナダ、外表面ヘラ ナダ |

表1 高田遺跡出土土師器属性表

第3節 まとめ

1 縄文時代中・後期の包含層について

既に事実記載において包含層の形成環境についてふれた。ここではその意味するものについてふれたい。染川は鹿野山山麓に源を発し、西流して佐貫を抜け東京湾（八幡浜）に流れ出る。高田遺跡は丁度その流域左岸に位置し、標高26m～28mの段丘面上にある。丘陵地の狭い谷を抜ける川筋故か、把握された縄文時代の遺跡数は少なく、北側対岸の城山遺跡や、約1.5km下流の大坪貝塚をあげる程度である。しかしそれが総てでないことは当然予想されるところで、恐らく丘陵の尾根筋や狭い段丘面上に当時の遺跡が眠っているものと思われる。殊に後者の場合、そこは現在の集落と重なったり、土砂の堆積や河川の浸食の影響を受けたりと、遺跡の分布状況を把握するうえで困難な条件が多い。それはまた、当然ながら遺跡のあり方をも規制したであろう。

そこで、翻って当遺跡の様相であるが、河岸に残された散在する土器片の性格があらためて問われるところとなる。背後の平場に何らの遺構がないことから、集落に伴う遺物ではないとすると、川の恵みを求めてやってきた縄文人たちが河岸に残した遺物とみるのが自然であろう。下層確認調査結果からすると、遺跡の東側では該期の包含層に当たっていないことから、西側に彼らの足跡が残されたことになるが、そこは染川本流と南側一支流との合流点に相当する。その意味では広域の漁りさらには生業活動を支えるキャンプ地という想定も可能かもしれない。ただそれが具体的にどういう行動の結果なのか、それを限られた調査内容から導くのはいささか困難である。ここではとりあえずその性格をおおまかに提示するにとどめたい。

2 古墳時代後期の窪地に形成された包含層について

縄文時代の河原が埋没し、古墳時代にはそこが葦や灌木の茂る沼沢地と化したと推測されるが、とりわけ窪地に相当する辺りから土器が多く出土した。土器自体は集落で出土するものと大差ないものながら、高師小僧が明瞭に付着しており、浅い水辺（それも水溜まり程度）の環境におかれた結果と想定される。その出土状況や遺存度からして、土器が窪地に意図的なかたちで遺されたというより、当初から破損品が窪地に投げ込まれたと推測されるが、そのあり方にはこれといった法則性は見出せない。縄文時代と同様、背後的一段高い面に一条の溝を除いて該期の遺構が見出せない以上（それとて多少の疑問はあるが）、それを近辺の集落に起因する単なる捨て場とも言い得ない。結局、水辺における何らかの祭祀ないしは習俗を視野に入れて考えざるを得ないが、限られた調査範囲や類例の乏しさ等、今回の報告では更なる調査例の増加と仮説の反復によって将来その性格が絞られることを期待すると言わざるを得ない。

3 中・近世の遺構について

团画遺構からは常滑11型式の甕や瀬戸・美濃大窯II～III期の壇鉢、また、その内部の堅穴造構や土坑から初期登窯期の端反皿や近世初めの肥前陶器が出土しており、戦国末期から近世初めにわたってこの場所が活用されたことを示している。ただし遺構の密度は希薄で、その性格も明確でない。しかしそれも第2章まとめ述べたように、中世末里見氏時代から近世両松平氏時代までの佐貫城及び城下が城山からその東側一帯にあったことと関連するのであろう。つまり、ここは町外れに当たる地で、それに見あう遺構が残されたともいえる。その意味では北側前面さらには対岸のあり方—それは宿と外縁部をつなぐエリアとして—が将来の課題となるであろう。

第3章 佐貫城跡

第1節 調査の概要

1 調査の方法

事業範囲つまり館山道の路線は、佐貫城の南東部付近を北東から南西にクロスするように設定されている。ここは城跡の南を東西に流れる小河川の北側谷部から丘陵南端に相当する場所であることから、調査区の地区割りは基点となるべき北西部が事業範囲をカバーし、且つ公共座標とグリッド単位（20m）の整合性を考慮して決定した。地区割りは南北を算用数字、東西をアルファベットで大グリッドを設定し、そのなかを更に2m方眼の小グリッドとしたが、結果として、城跡全体をカバーするものではない。なお、この区割りに従い、調査区の要所に公共座標に基づく方眼杭打作業と併せて周辺も含め地形測量（主曲線0.5m）を業者委託で実施した。

確認調査は、城跡という性格に配慮し、曲輪と思われる平場の向きや傾斜に直交するトレンチを基本とし適宜条件に応じて設定し進めたが、谷の中央から末端にかけては厚い堆積層と湧水のため基盤層（岩盤）まで掘り下げるに至らなかった。

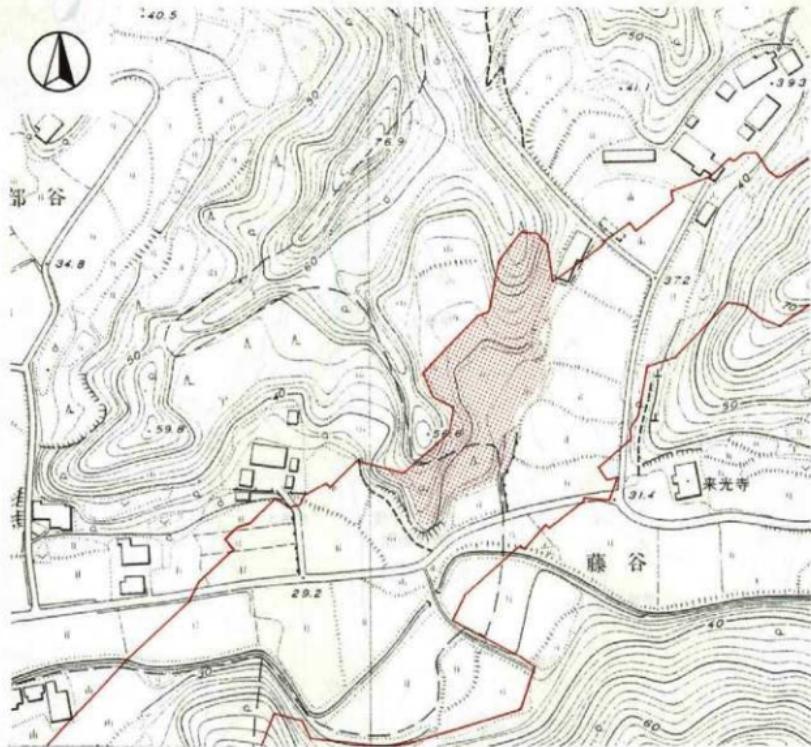
本調査は確認調査の結果をうけて範囲を決定したのち、該当する範囲をまず重機によって造構面まで除去し、遺物を順次取り上げながら造構の検出を行い、実測・写真撮影を行った。また、造構の全景はラジコンヘリによる空中写真（平成13年度のみ）とした。

2 調査の経過

平成13年9月から調査対象範囲3,120m²の確認調査を方眼杭打ち及び測量作業と併行しながら開始した。重機と人力を併用し、幅2mのトレンチを各平場に適宜設けて調査を進めた。その結果、調査区南側谷部末端（水田に面した場所）で中世末～近世初頭の掘立柱建物跡群、南西丘陵中腹平場で同じく該期のピット群を確認したので、一部拡張ないしは新たにトレンチを設定し、その範囲や形状の確認に努めた。また、北西山腹にも整形した平場3か所とそれに伴う人為的な構・段差が確認された。その一方、北側の丘陵部と谷部内側ではこれといった造構は確認されなかった。

確認調査の結果を受けて、上記平場5か所1,150m²の本調査を平成14年1月から実施した。その結果、谷部末端（平場3B）で構に区画された近世初頭の掘立柱建物跡3棟、区画溝1条、溝1条、ピット群、南西丘陵中腹（平場7）で同じく近世初頭の掘立柱建物1棟、土坑1、柵列1、ピット群、また、西側山腹の人為的な平場（平場4・5・6・8）では段差を伴う構や、火葬跡1、土坑1ほかが検出された。以上をもって平成13年度の調査は年度末に終了した。調査期間は約6か月半である。

平成14年度は用地取得の事情で調査に入れなかった平場7に隣接する南西丘陵部630m²の本調査を方眼杭打ち作業と併行して平成15年1月から開始した。急峻な地形ということもありトレンチとグリッドを併用し、まず造構の遺存状況を確認したうえで、平面的な調査に切り替えた。その結果、平場7に接する傾斜変換線付近で地山整形跡を検出したが、この他には明瞭な造構は確認出来なかった。調査期間は約1か月である。

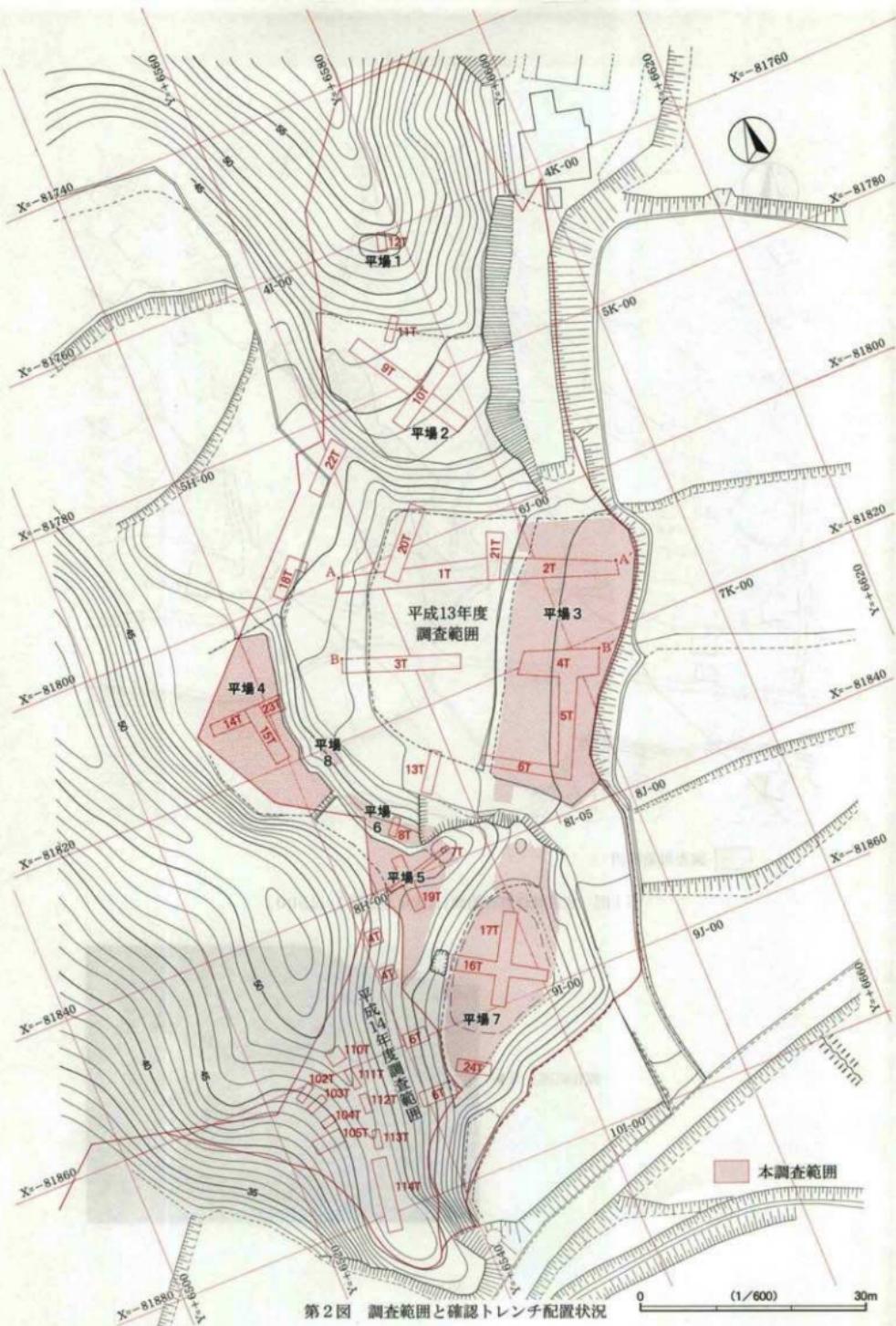


調査対象範囲

第1図 佐貫城跡調査範囲(富津市地形図 1:2,500)

調査範囲全景▶





第2図 調査範囲と確認トレンチ配置状況

0 (1/600) 30m

第2節 遺構と遺物

当遺跡で検出された遺構は中・近世の遺構群である。また、遺構としては確認出来なかつたがより遡る平安時代の遺物も若干出土している。以下、中・近世とりわけ当遺跡を代表する近世初頭の時代を中心にして説明することとする。なお、調査時点では各平場ごとに遺構種類別の通し番号をふっているので、報告においても踏襲した（頭に平場番号、次に遺構番号、例えば平場3の掘立柱建物1番は3SB001）。

1 近世初頭

(1) 屋敷跡（第3図～17図、図版12～18）

調査時に平場3Bとした調査区南側の谷部末端の平場であり、前面の水田との比高は約2mである。背後と両脇を溝で囲んでいたと思われ（部分的に検出）、南北36m、東西14m～16mの長方形の区画である。区画内には掘立柱建物が3棟南北に並んでおり、それぞれ北側から3SB001～3SB003と呼称した。3SB001と3SB002との間には垣根跡らしき溝が走り、また、3SB003の南には中庭のような空間が存在する。

なお、屋敷地への出入口については遺物の出土状況とも併せある程度の推定が可能である。遺物は平場3Bの屋敷地内とりわけ3SB001の北側から多く出土した。溝（3SD001）内の深いところでもまとまって出土していることから、溝が埋まり切らないうちに投棄ないし流入したと思われる。また、3SB003つまり南端の建物の東側崖寄りでも集中箇所がみられた。それに対して主屋（3SB002）の前面はほぼ無遺物地域といってよい。この主屋の前は現状でも崖面が内側へ大きく窪んでおり、しかも丁度その西側は主屋の入口と思われる土間に相当する。ここがこの平場への入口であったと推測する所以である。

検出状況についてもふれておく。ここは調査前には民家の宅地となっていたところで、表土の下に地業層が確認された。またその下には褐色の粘土層が存在したが、聞き取りによればここのみならずその上段平場（平場3A）もかつて水田として利用されていたようであり、それに伴って形成された層であろう。肝心の近世初頭の生活面はこの水田層の下が確認面となる。掘立柱建物内及びその周囲は泥岩ブロック混じりの土で地業されており、それに先だって客土・整地作業を行ったことがセクションの様相から窺える。なお、背後の平場とは調査前で約1mの段差があったが、これは近世の水田造成に伴う盛り土の結果であり、近世初頭にはなだらかに傾斜していたようである。

以下、各遺構毎に概説する。

3SB001（第5図、図版17）

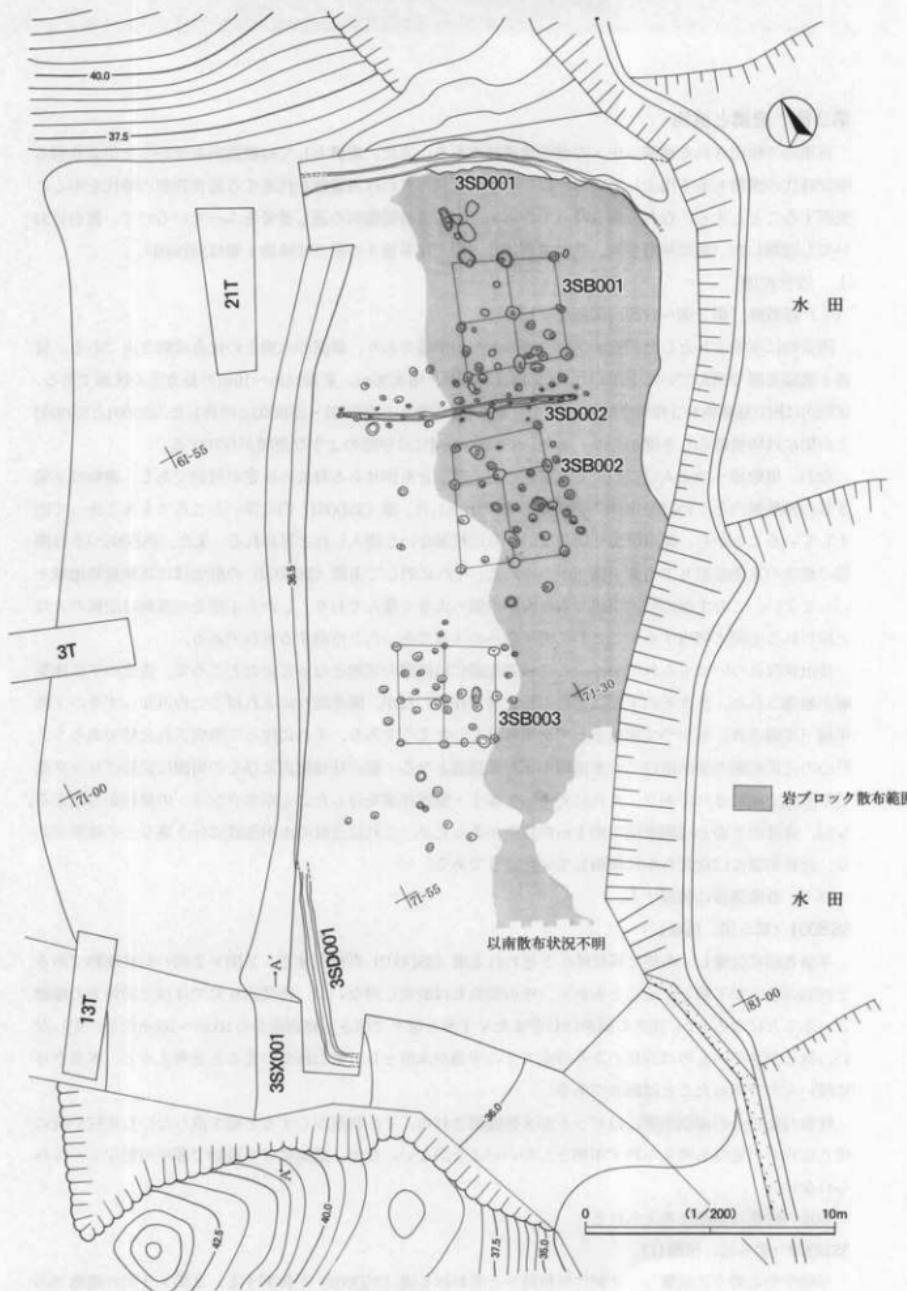
平場北端に位置し、南側に垣根跡かと思われる溝（3SD002）が併列する。2間×2間の総柱建物である。北西隅の柱穴が不明ということもあり、その間取りは断定し得ないが、柱間約6尺でほぼ2間四方の建物ということになろうか。柱穴の掘形はU字またはV字形と様々で深さも確認面から10cm～30cm代と一定しない。但し深さそのものは近世のある時点での平場が水田として使われていたことを考えると、本来さらに深いものであったことは確かである。

建物内及びその南側周囲にはピットが多数確認された。その状況からすると建て直しないし東柱や廻に伴う柱穴の可能性も考えられず不明としかいいようがない。なお、建物に伴う遺物で図示可能なものはみられない。

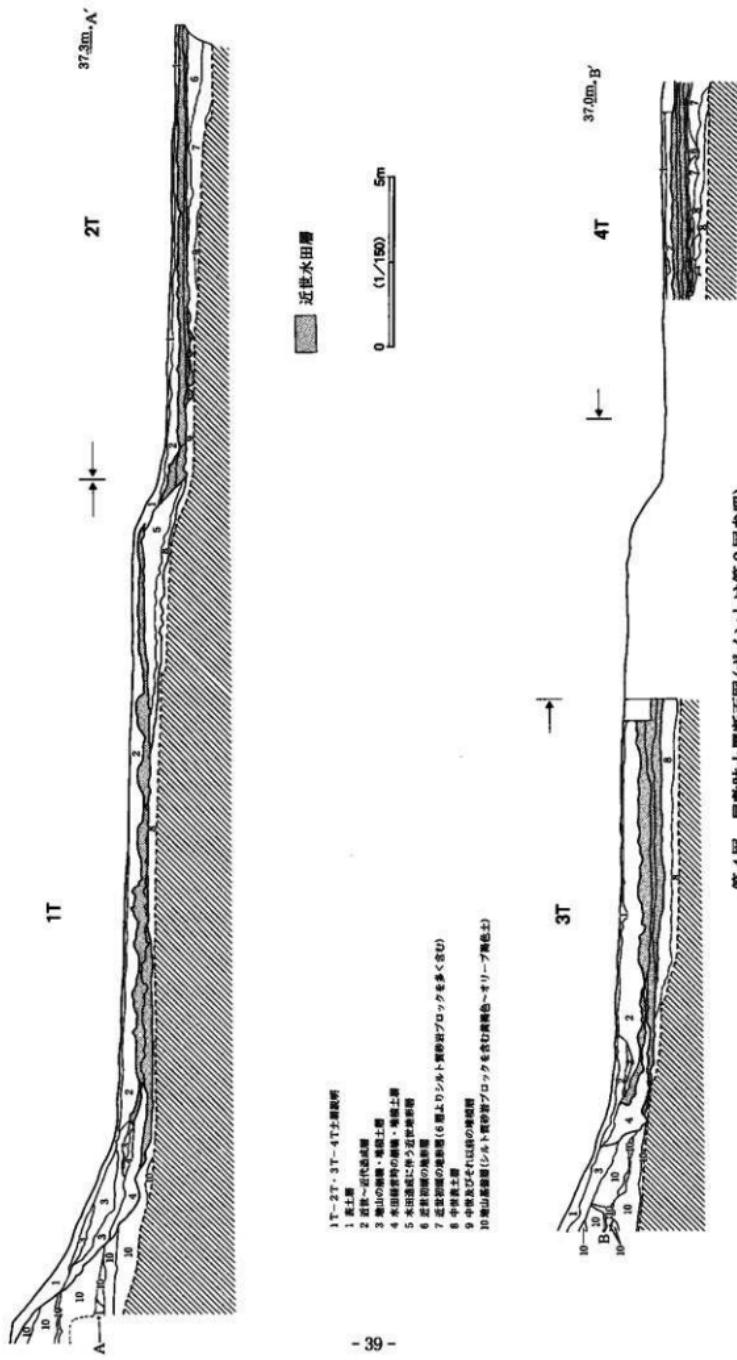
本址の性格は納屋と考えられる。

3SB002（第6図、図版17）

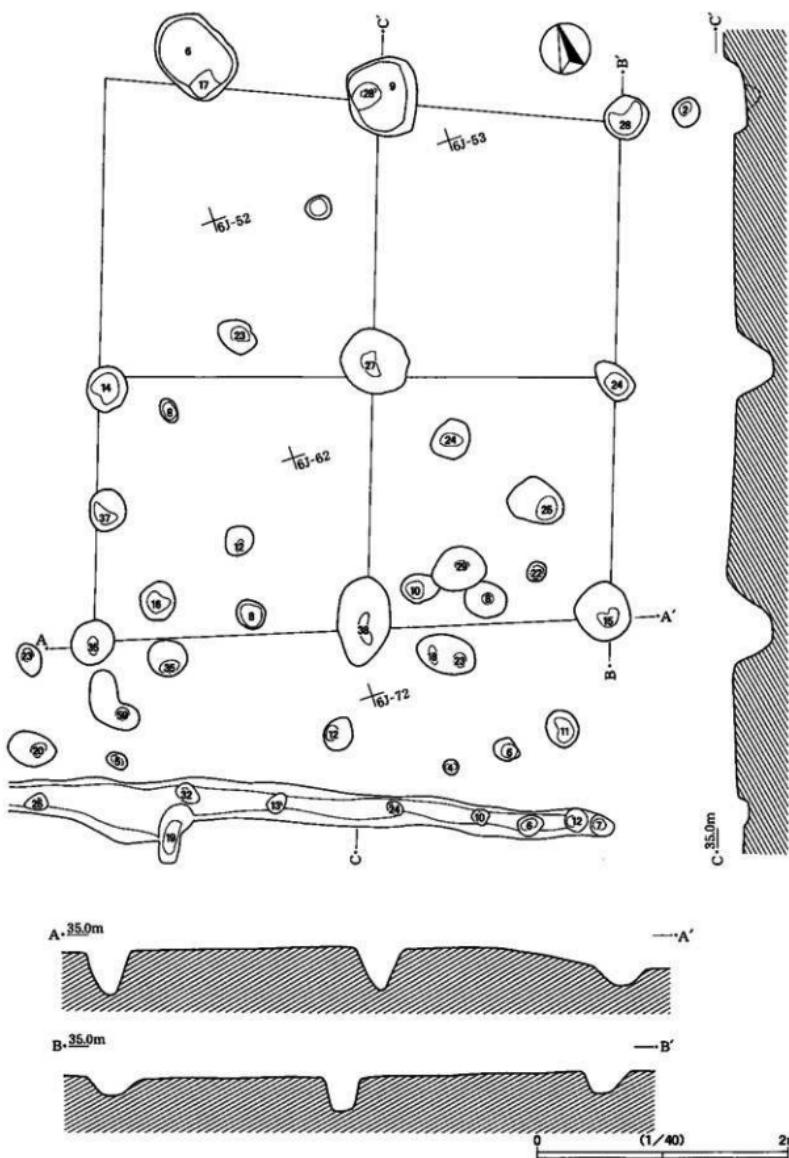
平場や北寄りに位置し、北側に垣根跡かと思われる溝（3SD002）が併列する。2間×3間の建物であ



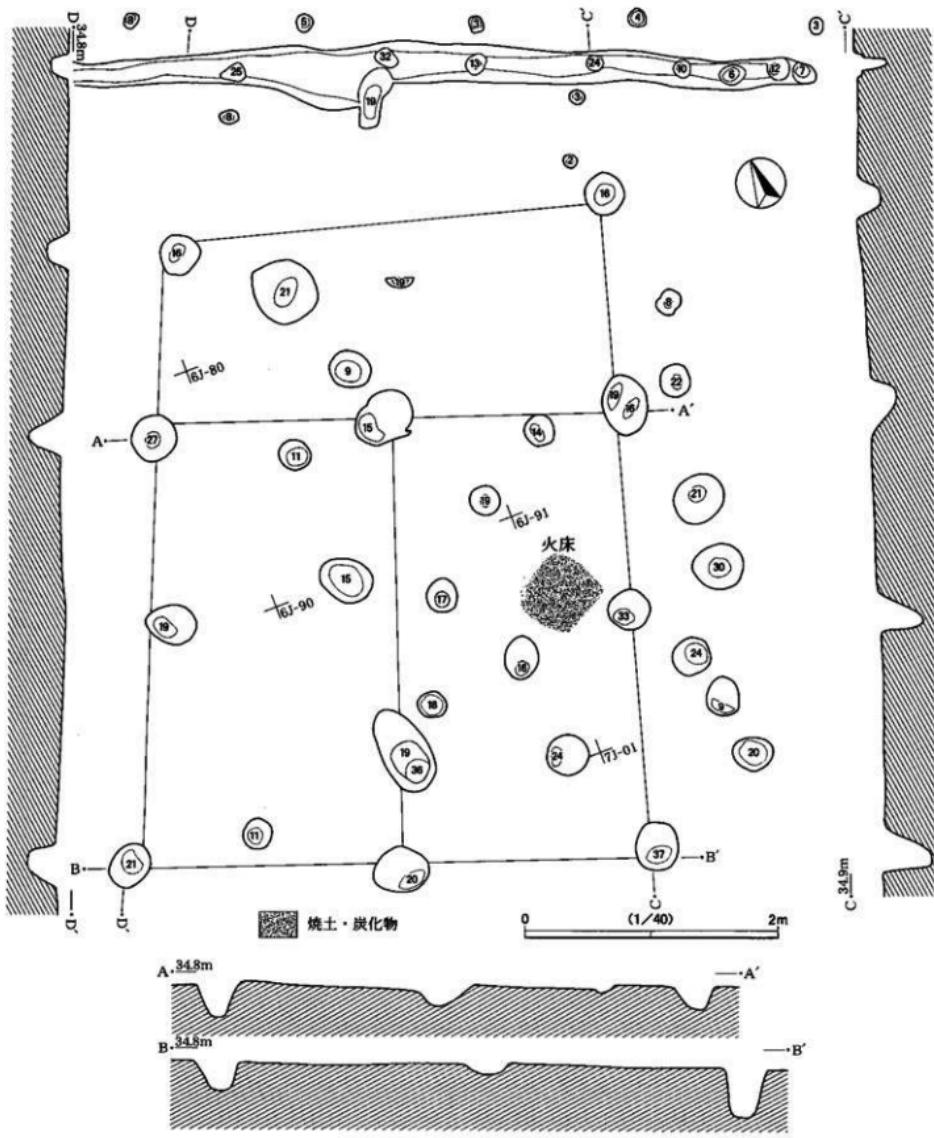
第3図 屋敷跡全体図



第4図 亂敷林土層断面図(ポイントは第2図参照)



第5図 3SB001



第6図 3SB002

るが、北側中央には対応する柱穴を欠く。その間取りは多少歪んでいるものもある。柱間約5尺～6尺で、桁行3間、梁行2間ほどということにならうか。柱穴の掘形はU字ないし皿形で、深さは確認面から20cm～30cm代が多い。なお、深さについては3SB001で既述したような事情もある。

建物内の区画であるが、近世民家の検出例からして、北側の区画は土間、東南の区画は焼土塀を火床跡とみて「座敷」、南西の区画は「納戸」に相当しうる。3SB001と同様、建物及びその周囲（とりわけ東側）にはビットが多数確認された。その状況からすると建て直しないし廻に伴う柱穴の可能性も考えられず不明としかいいようがないが、土間の東の2か所についてはその位置からして入口に伴うものであろうか。なお、建物に伴う遺物で図示可能なものはみられない。

本址の性格は主屋と考えられる。

3SB003（第7図、図版17）

平場中央にあり、建物のなかでは最も南側に位置する。2間×2間の総柱建物である。その間取りは、柱間約6尺でほぼ2間四方の建物ということにならうか。柱穴の掘形はU字またはV字形ないし皿形で様々で深さも確認面から10cm～50cm代と一定しない。なお、深さについては既述したような事情もある。

内部東側には、40cm×70cmの精円形の焼土塀があり、これを火床跡とすれば3SB002から土間を除いた構造となる。しかし、あるいは東側を地床炉付きの土間、西側を板間とみることもできよう。それもこの建物の性格如何ではある。この点、建物内及びその周囲にはビットが多数確認され、それとの関連も当然考慮されよう。その状況からすると南北ラインに並ぶ方向性が見てとれるものの、建物として組めるまでには至らず、東柱としての可能性が考えられるものもないようである。

伴う遺物は焼土塀の上位より出土した土錐があるが、他には図示可能なものはみられない。

本址の性格は作業場かと推測されるが、主屋とは別棟の家屋であった可能性もある。

3SB001北のビット群（第8図、図版17）

3SB001の北西に隣接してまとまったビット群が検出された。ビットは7個ながら5個はむしろ中にビットを伴う土坑というべきもので、屋敷地内に散在するほかのビットとは明らかに様相を異にする。また、この一角は遺物の空白地となっており、これも当然関連があつてのことであろう。ビットの配置状況やビット間の関連性の無さからして建物に伴う施設の可能性は薄く、むしろ短期間に次々と掘り直された結果かもしれない。具体性を欠くが屋敷それも建物の裏手における行為の痕跡ととりあえず報告するに留めたい。

3SD001（第9・10図、図版17・18）

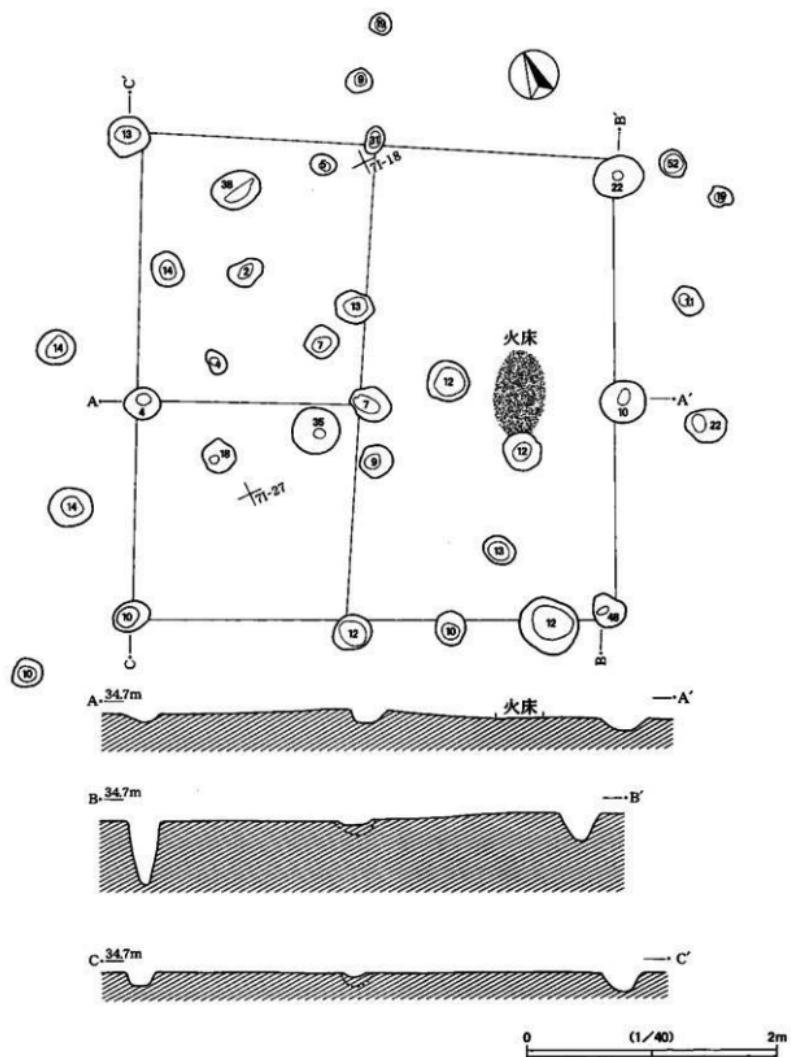
屋敷を区画する溝である。北側と南側コーナーを調査したのみながら、その廻り方からして屋敷地を長方形に区画するものと考えられる。

その規模は南北37m、東西15m前後であり、ほぼ谷の先端平場を地形なりに区切っている。溝幅は50cm～60cm、深さは確認面からだいたい50cm程である。なお、北側では丘陵裾を切るように廻っているものもある。段差をもって掘り込まれている。

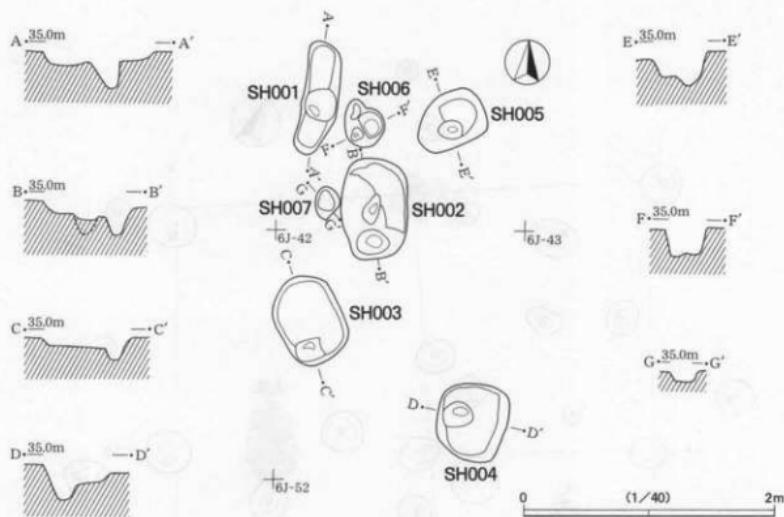
遺物は溝内及びその周囲から多く出土した。その出土状況は第12図を参照されたい。

3SD002（第11図、図版17）

3SB001と3SB002の間に併行して走る溝である。幅20cm～40cm、深さ10cm～20cm程で、そのなかに小さなビットを付設する（14個）。間が不均等で深さも概して浅いことなど、むしろ垣根とその植栽痕とみておきたい。



第7図 3SB003



第8図 屋敷跡北西ピット群



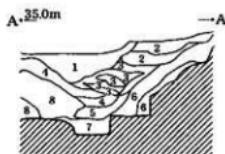
◀折縁灰釉皿出土状況（第13図6）

折縁皿は大窯後半期を特徴付ける遺物である。

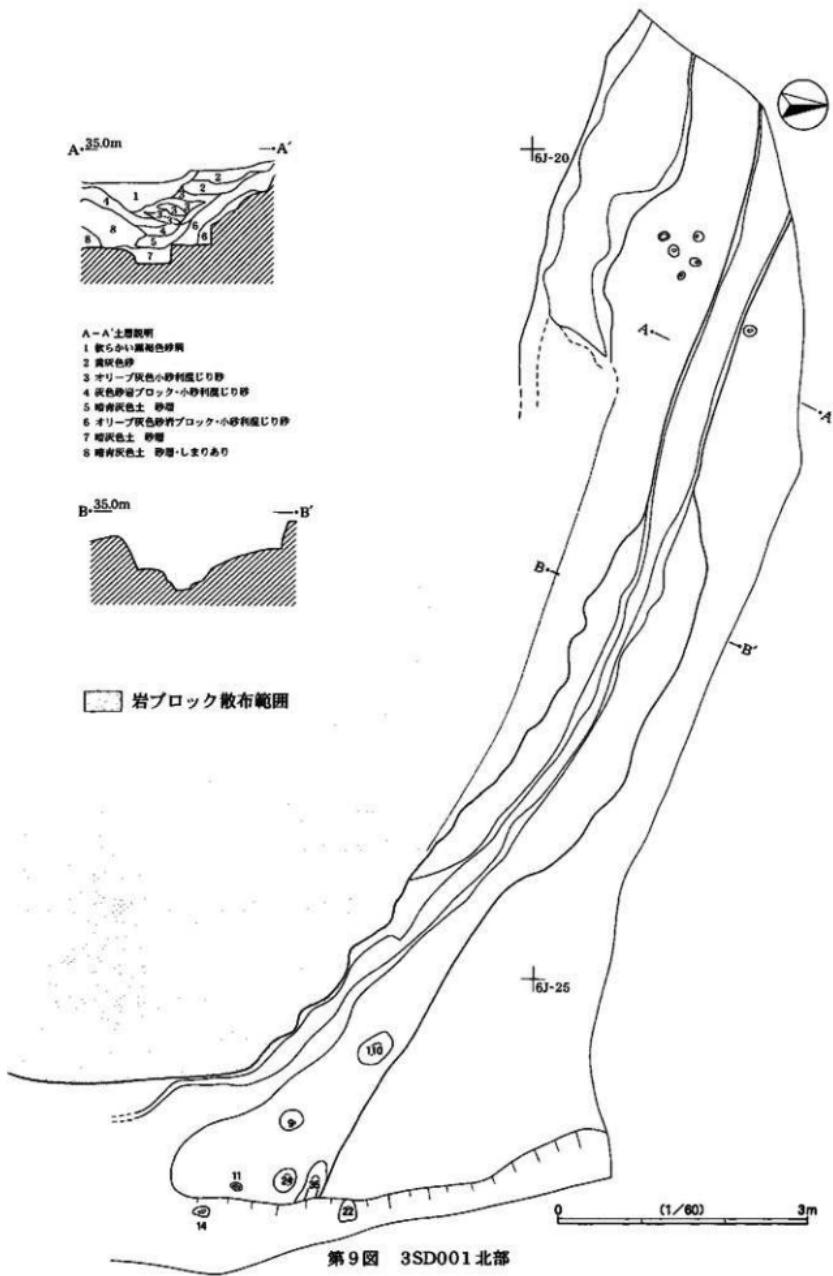


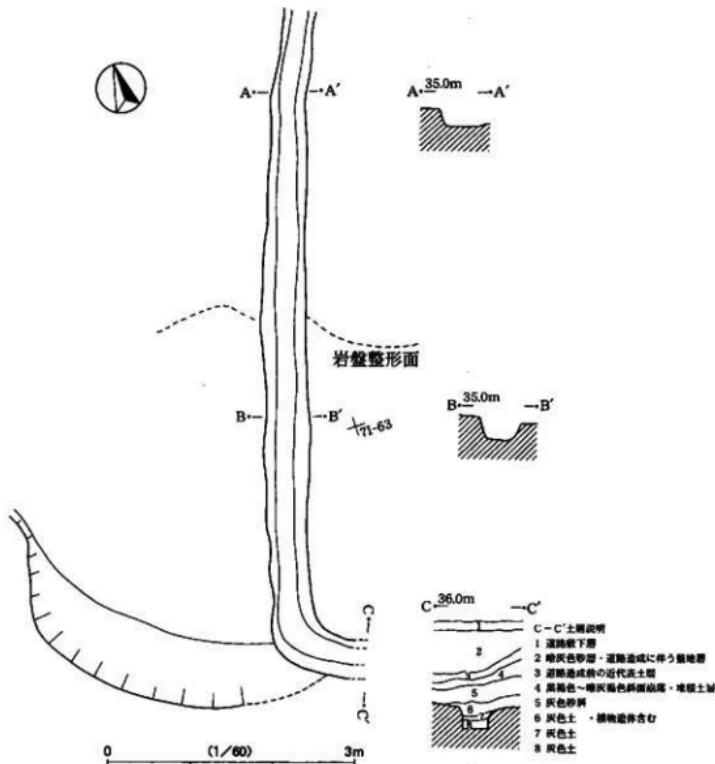
◀羽口出土状況（第16図83～85）

3SD001内より近接して出土。
同時に捨てられたものであろう。



■ 岩ブロック散布範囲





第10図 3SD001南西部

遺物は刀子片が西側端覆土中から、また若干の陶磁器片がその周囲から出土したのみである。

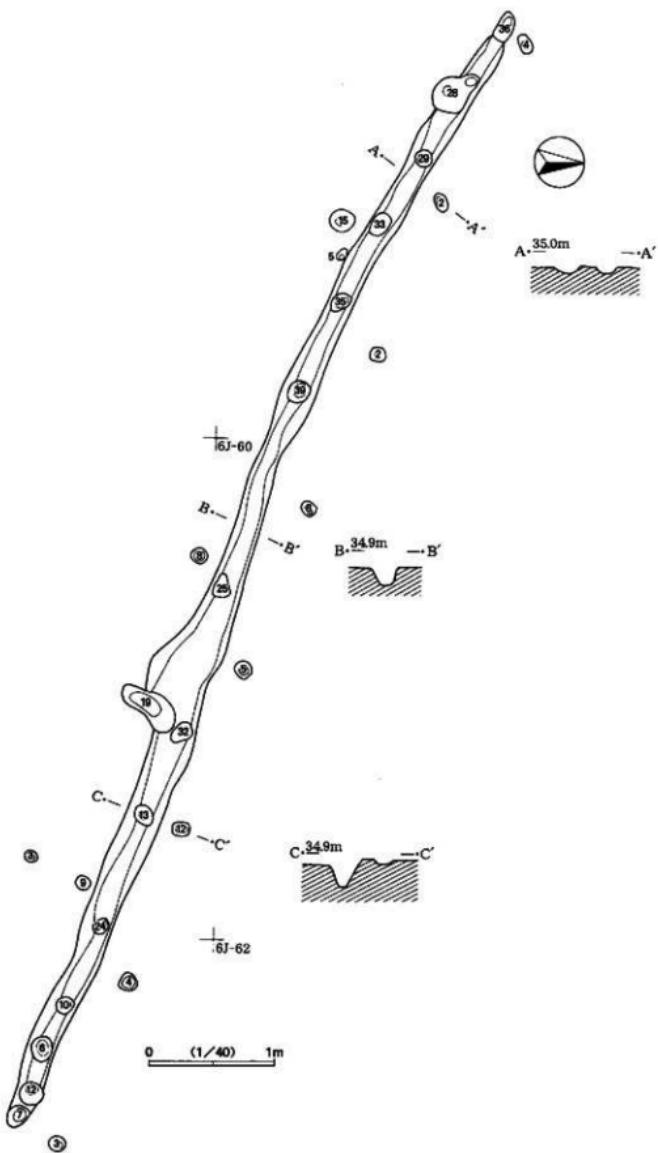
屋敷跡内出土遺物（第12図～17図、図版24～28）

出土した遺物は近世初頭の陶磁器が主体であるが先行する中世の遺物も存在する。それゆえ、まず先行する遺物と屋敷跡に伴う遺物に大きく分け、次に種類別、産地別、器種別に分けて概説する。なお、古代の遺物については屋敷地の関連性はないため後にまとめて扱っている（第28図）。

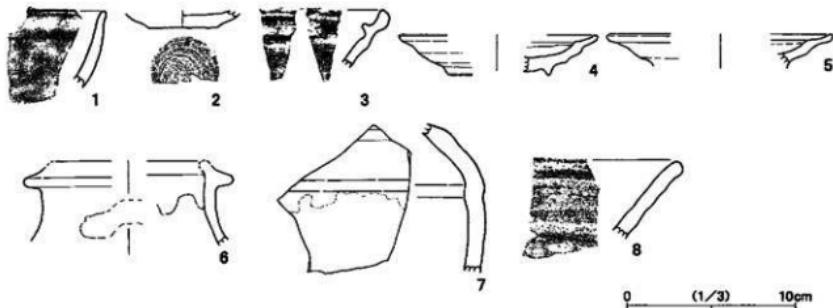
屋敷跡に先行する中世の遺物（第12図、図版24）

1～6は瀬戸・美濃産陶器である。1は灰釉天目茶碗片である。2は皿底部であるが、恐らく縁軸小皿であろう。3は鉄釉擂鉢口縁部片である。4・5は折縁の縁軸小皿である。共に破片であり、胎土・釉調共に類似するが細部の観察から別個体として扱った。6は口広有耳壺口縁部片である。これら瀬戸・美濃製品は後期様式Ⅲ～Ⅳ期（ないし大窯Ⅰ期）の所産と思われる。

7・8は常滑製品である。7は壺肩部片、8は常滑片口口縁部片である。共に6 a型式に相当するかと



第11図 3SD002



第12図 屋敷跡出土遺物(1)

思われる。

屋敷跡に併行する遺物 (第13図～16図、図版25～28)

9・10は貿易陶磁器である。9は青花磁器皿の底部片であり、基筒底をなすが、底部は無軸である。文様は内外面に草木または花を配す。10は褐釉壺胴部片である。

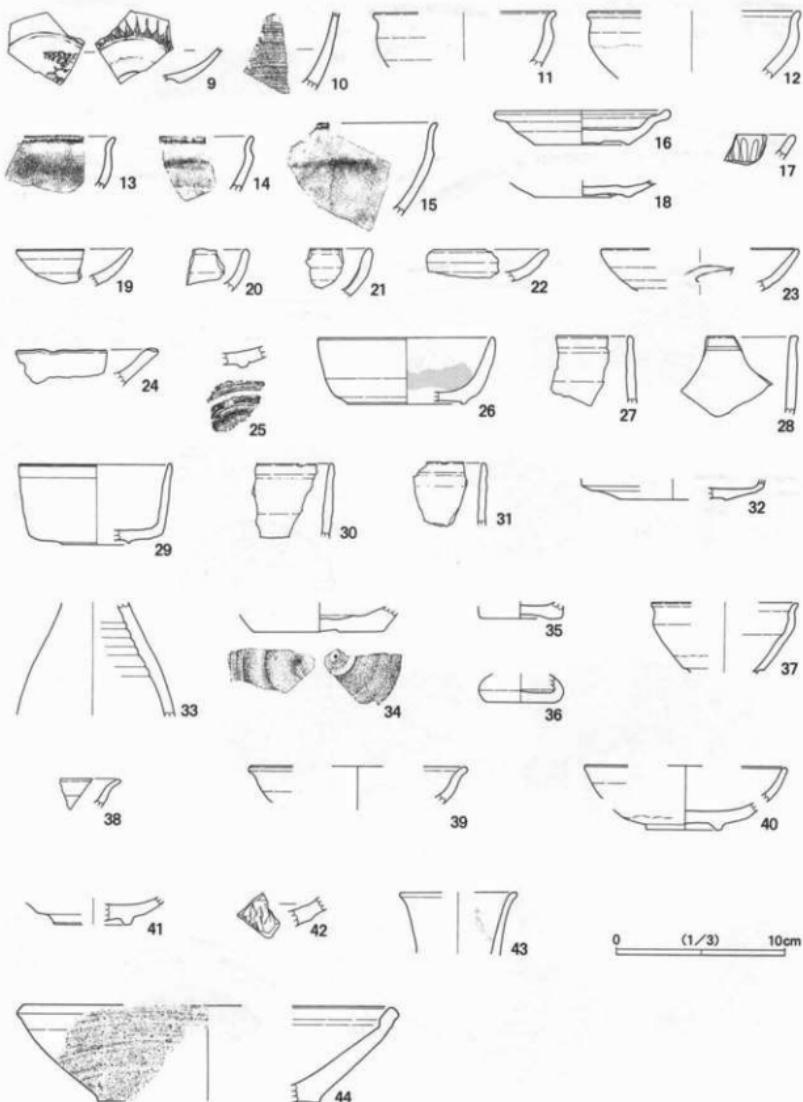
11～36、45～59は瀬戸・美濃産陶器である。11～15は天目茶碗であるが、11は鉛釉、12以降は鉄釉である。なお、11は胎土が多少磁器質である。16は瀬戸・美濃産灰釉折縁皿約1/2個体である。高台内も拭き取っているが、輪トチの融着痕が遺る。17は灰釉丸皿口縁部小片であり、内面に細かいソギが入る。18は削り出し高台の鉄釉皿底部である。全面施釉であるが、底部内面に3点のピン痕、底部外側に輪トチ痕がみられる。19～26は志野皿であり、19～23は丸皿、24は反り皿の各々口縁部片である。なお、23は内面に鉄絵がみられ、24は輪花になろうか。25は底部片で、高台から内側は無軸かつ付高台である。26は志野向付約1/3個体である。内面に漆と思われる膜が付着する。27～32は筒形碗口縁部または底部片(29は約1/4個体)であり、釉薬は27・28は鉛釉、29～32は灰釉である。33・34は鉄釉徳利であり、33は肩から胴部片、34は底部片(底面軽い拭き取り)である。35・36は鉄釉のそれぞれ花瓶底部である。底面は35が薄い錫釉を施し、36は拭き取っている。

45～59は錫釉擂鉢を一括した。このうち、53までは口縁部(から体部)片、以降が体部から底部である。口縁部はその特徴から外縁が玉縁状となるものと、平縁となるものに分けられる。なお、54は底面が一部露胎となる。56は外面に薄い釉がみられるもの(内面は摩耗)であり、底面の縁は摩耗する。より先行する遺物の可能性もあるがここで扱っておく。これら瀬戸・美濃製品は大窯IV期に併行する時期の所産と思われる。

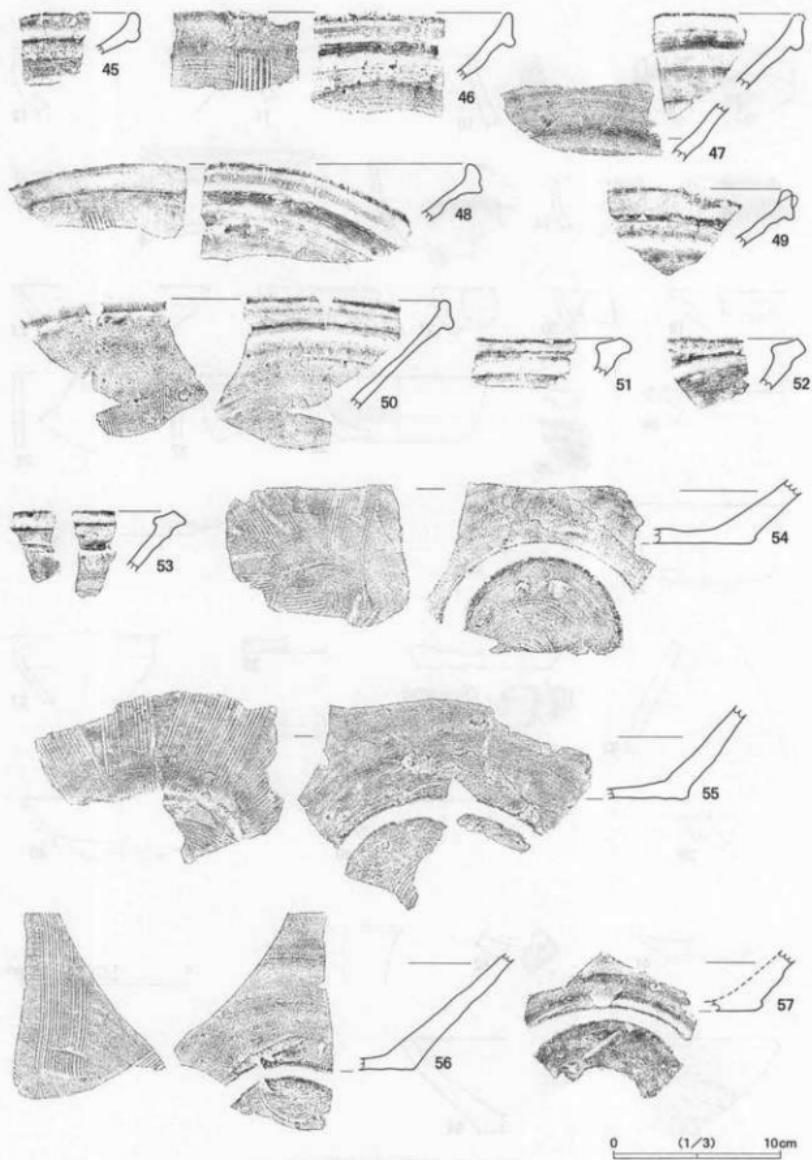
37は志戸呂産陶器と思われる。小形かつ薄手の鉄釉天目茶碗(約1/4個体)であり、体部下半は露胎である。屈曲する口縁の特徴などから既述した瀬戸・美濃製品と同時期の所産と推測する。

38～43は肥前産(唐津)陶器であろう。38・39は胎土が多少磁器質の長石釉端反皿であり、40・41も同様ながら40は直線、41は丸皿になろうか。なお、41は体部外側下位以下露胎で付高台となる。42は胎土が砂目かつ拓器質の長石釉皿底部であり、内面に鉄絵(摩文)を施す。43は小环口縁部である。灰釉系で斑状に白く発色する(いわゆる斑唐津か)。内面に鉄絵らしき文様がみられる。これら肥前製品の年代については関東への出現時期とも連動するものであり、まとめにおいてふれたい。

44は備前陶器である。表面が茶褐色に発色する小形の浅鉢であり、口縁部内側に明瞭な段を有する。



第13図 屋敷跡出土遺物(2)



第14図 屋敷跡出土遺物(3)

60～64は常滑産陶器である。このうち、60～63は甌の口縁部片また底部片、64は甌の体部上位大破片である。底部については時期等不明ながら、60、64は16世紀代の所産と推測される。

65以降は在地産の焼き物である。65～68はかわらけである。完形のものではなく破片から類推して実測・復元した。整形後の切り離しは回転糸切りながら、68はその後に多少の調整を行っている。

69は内耳土器片である。砂目の胎土で、淡い灰褐色を呈し、外面は煤が部分的に厚く付着する。

70は赤漆塗り木製の椀である。底部と体部は分離していたが推定復元した。材質は針葉樹でヒノキと思われる。

71は土鍾である。明黄褐色を呈し、重量は17.9gである。

72は明黄灰色の粘板岩製砥石である。上下の折損面も一面使用している。重量は73.0gである。73は砂岩製の砥石ながら、中世に通有みられるものと異なっており、あるいは古代の所産であろうか。なお、折損面は未使用である。重量は252.5gである。74は安山岩製の敲石である。上下と側縁に明瞭な敲打痕が確認される。全体に熱を受けており、黒色に変質している。重量は287.2gである。75は流紋岩の焼砾である。断面も被熱が認められる。76～78は火打石と思われる。いずれも片側に自然面を残した剥片を調整して主にその一方を使用したものである。石材は76が頁岩、77が石英、78が瑪瑙である。80は刀子の先端と思われる。79・81は鉄釘である。82は北宋銭の熙寧元寶である。

83～85は羽口であり、83には基部に轆との装着痕跡が遺っている。なお、85は胎土に礫・砂を多く混入する。

(2) 南西丘陵中腹平場跡：平場7（第18図、図版19・20・29）

屋敷地の南に隣接する丘陵中腹に位置する平場である。聞き取りやセクションの検討また比較的新しい水溜穴の存在などから、近代に耕地（水田または畠地）となっていたことは明らかである。それは丘陵側を多少削平し一部縁辺を土盛りする、つまり傾斜面を切り盛りするものながら、南側平場縁では更に盛土が存在した。すなわち、それは見かけ上では比高差10cm～20cmながら、セクションの観察から推し量ってかつては高さ30cm、幅約1m程の土手が周囲を廻っていたようである。水田の畦畔とみてよいであろう。

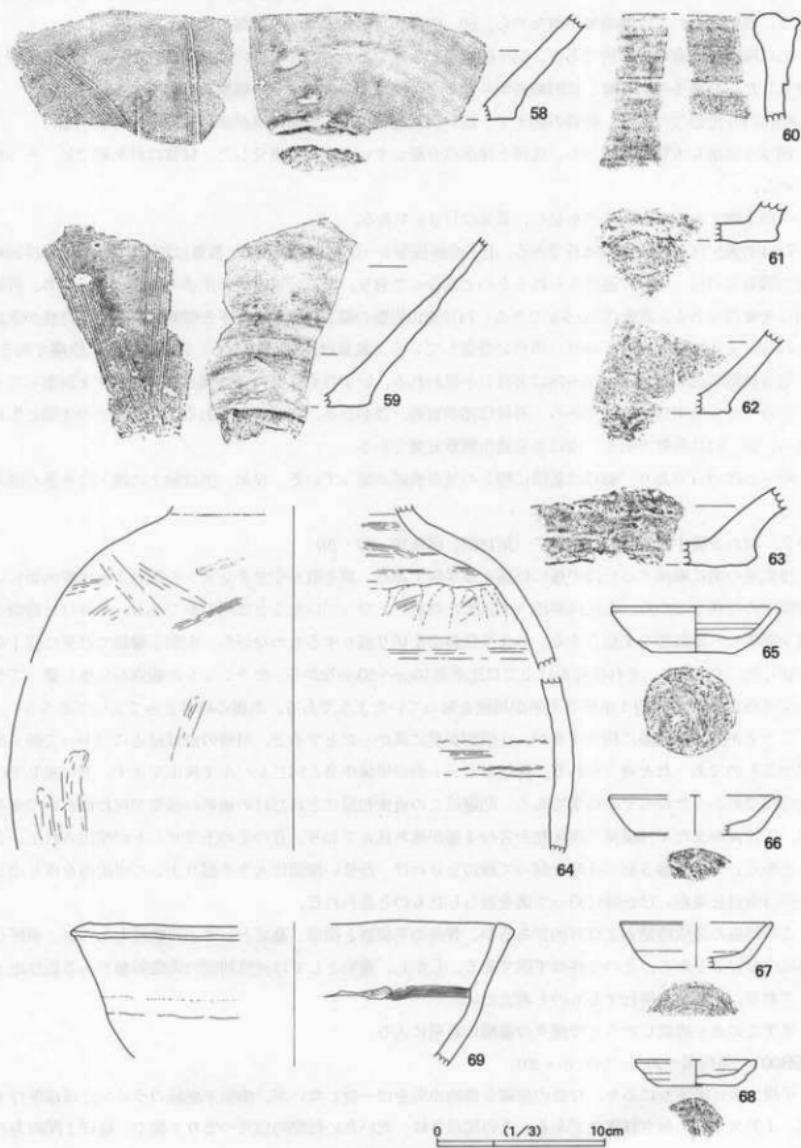
この下が近世初頭面に相当するが、丘陵側が更に高かったとすると、当時の面は縁辺に向かって緩く傾斜するものであったと考えられる。縁辺のピット列が平場中央と同じレベルで検出できず、更に掘り下げた過程でわかったのもその結果である。問題はこの近世初頭にどれだけの地形の改変が行われたかであるが、T17両端またT16崖側で炭化物を含む4層が落ち込んでおり、且つその上でピットが検出されていることからして、平場5側の丘陵を削って縁辺とりわけ一段低い南側に大きく盛り土して平坦面を作り出し、一部（南西丘陵裾）は丘陵に沿って溝を廻らしたものと思われる。

この平場の造成時期および目的であるが、背後の平場群と同様、墓域としての可能性もあるが、明瞭な墓坑がないことから、その性格は不明である。しかし、遺物としては近世初頭の陶磁器類がある程度出土しており、屋敷跡と併行するものと考えたい。

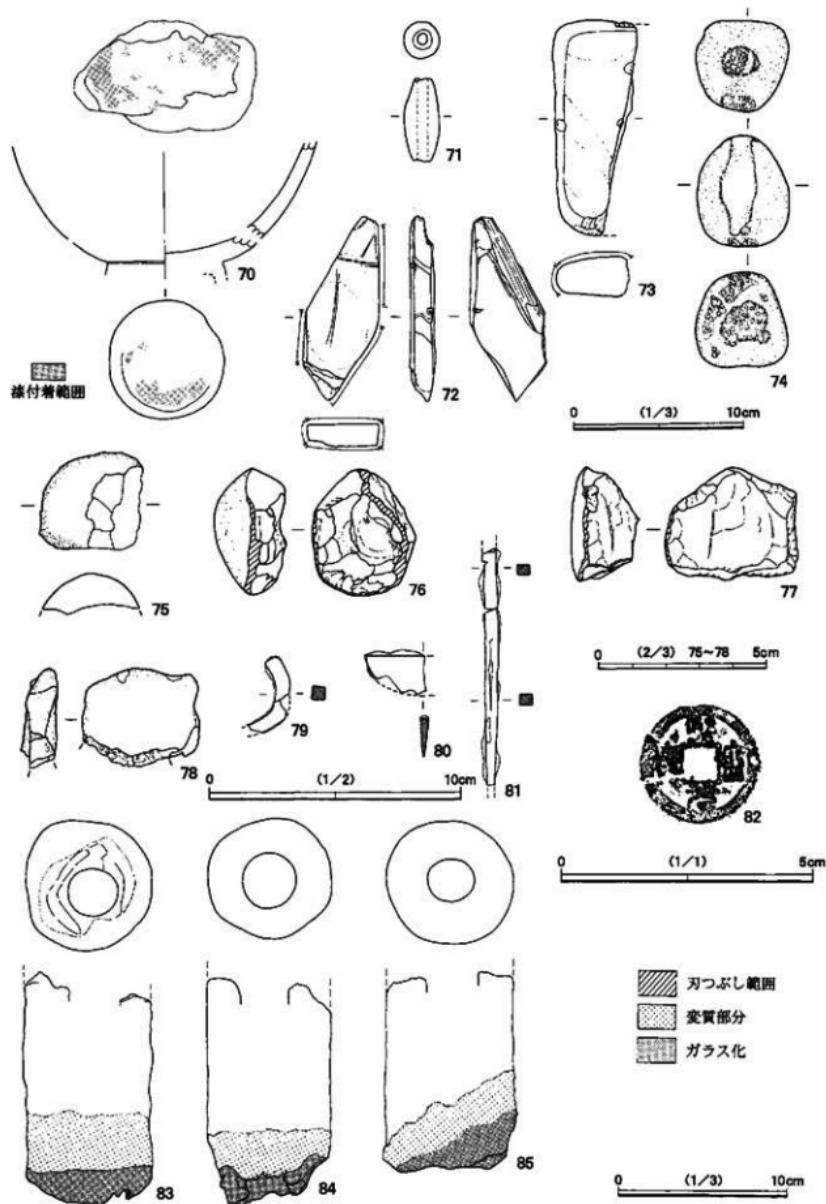
まずこの点を確認したうえで個々の遺構の説明に入る。

7SB001（第18図～20図、図版19・20）

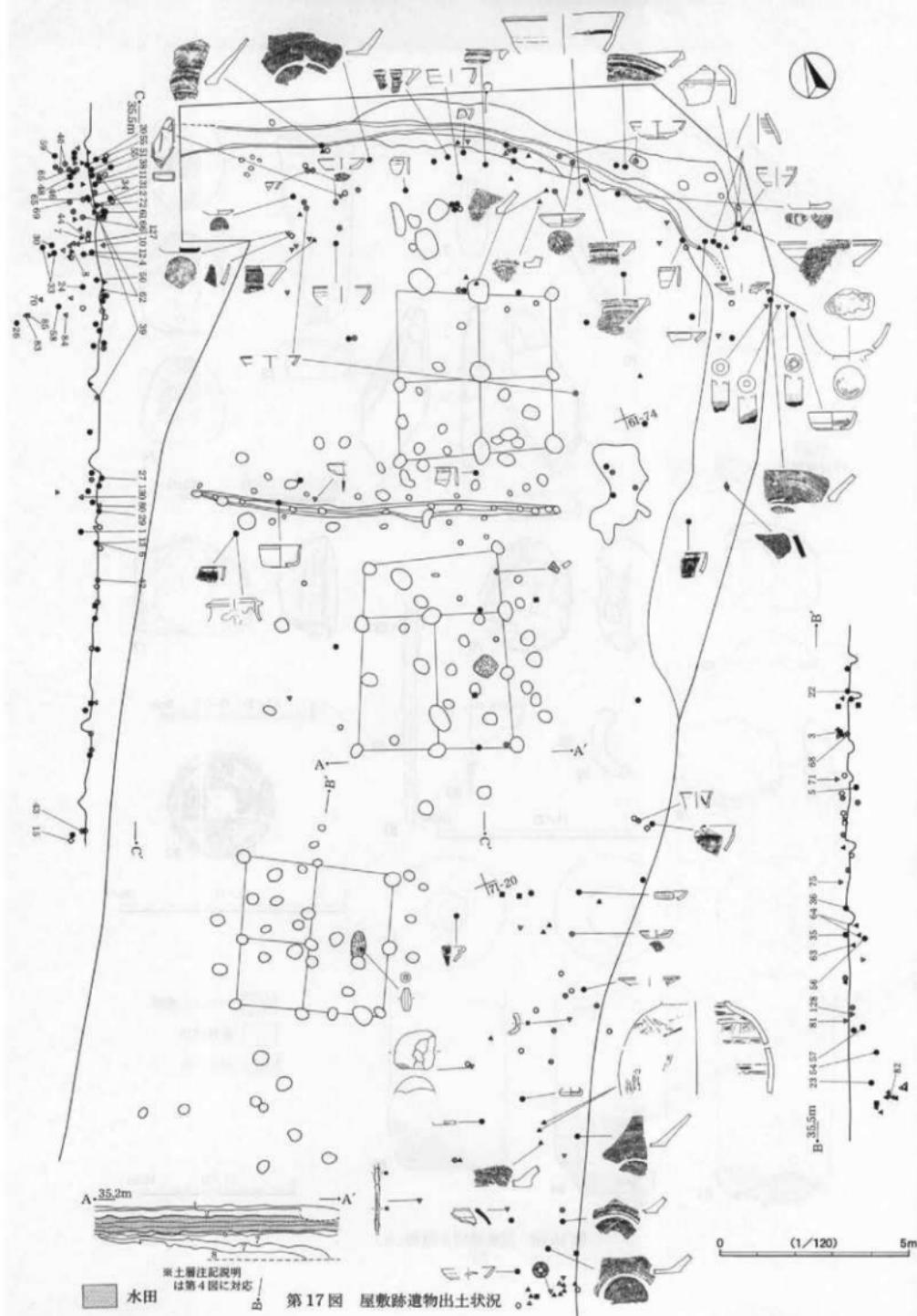
平場中央丘陵寄りにあり、背後の崖線と建物の向きは一致しないが、南側平場縁のラインとほぼ併行する。1間×1間の掘立柱建物である。その間取りは、だいたい柱間約12尺つまり1間で、ほぼ1間四方の建物ということになろう。柱穴の掘形や確認面からの深さは様々ながら、底面のレベルはほぼ等しいので、



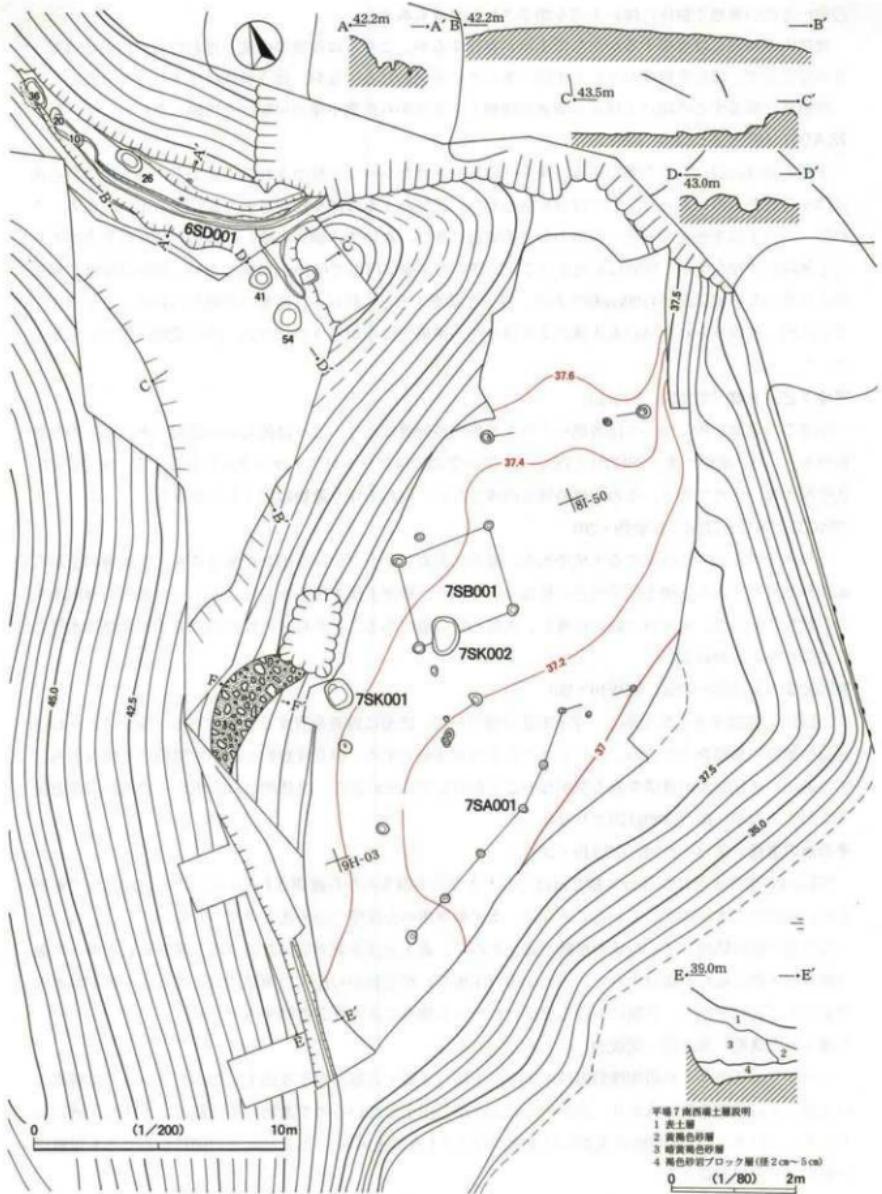
第15図 屋敷跡出土遺物(4)



第16図 屋敷跡出土遺物(5)



第17図 屋敷跡遺物出土状況



第18図 平場5・平場6・平場7

近世～近代の整地や耕作に伴い上部を削平された事情もある。

建物内南西部には重複するかたちで土坑が存在するが、こちらは後世の所産と思われる。内部にはピットが存在せず、構造や規模からして土間であったかと思われる。なお、伴う遺物は出土しなかった。

星敷地に隣接する平場に1棟ある簡素な建物という点から作業小屋の可能性を指摘したい。

7SA001 (第18図・20図、図版19)

平場南側縁に設けられた柵である。縁を一段掘り下げたレベルで検出されたことから、多少緩傾斜の面につくられたものであろう。柱穴は計8個ながら、北側の1本は径や深さ等明らかに劣るものである。それ故、この1個を無視すると、南端から4本直線に並び、次いで内側に屈曲し、最後に東に折れるかたちで1個離れて存在する。柱間は6尺から7尺、柱穴の平面は円形で径10cmに満たない。掘形は断面U字形、深さはだいたい確認面から20cm程である。以上を勘案すると、恐らく、南側の低地から斜めに上がって来る道に沿って設けられた細い丸太棒による柵と門の遺構ではなかろうか。なお、伴う遺物は出土しなかつた。

平場7 ピット群 (第18図、図版19)

平場7の北側2個については南側へ下る左右対照の位置にあり、これは何らかの意図があったものと思われる。一方、南側つまり7SB001と7SA001の間の空間にはピットがアランダムに存在する。加えて、形状や深さ等、区々であり、その所属時期も明確でない。何れも伴う遺物は出土しなかった。

7SK001 (第18～20図、図版19・20)

近代水溜め穴の下に位置する土坑である。壁面に泥岩ブロックが浮き出た状態であり、整地層の上から掘られたものである。覆土は暗褐色の軟質な土であり、壁面も湧き出る水分により十分な掘形を検出出来ない状況であった。旧水田の縁に位置し、水溜め穴の脇にあることから、近代における水田灌漑用水落としの窪みかと思われる。

7SK002 (第18図～20図、図版19・20)

7SB001と重複する土坑である。平面形状は梢円形で、底面に段差を有する土坑である。覆土はとりわけ底面や間層に黒褐色土を含み、多少しまりあるのを特徴とする。掘立柱建物との新旧関係は不明ながら、この遺跡で近世初頭の遺構を遡る例がないことからして、それ以降、具体的には近世から近代の所産と捉えておく。なお、伴う遺物は出土しなかった。

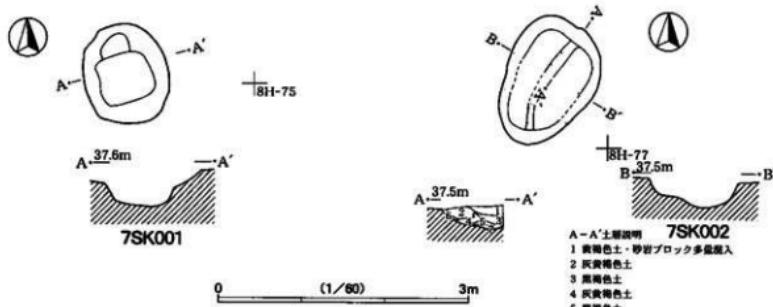
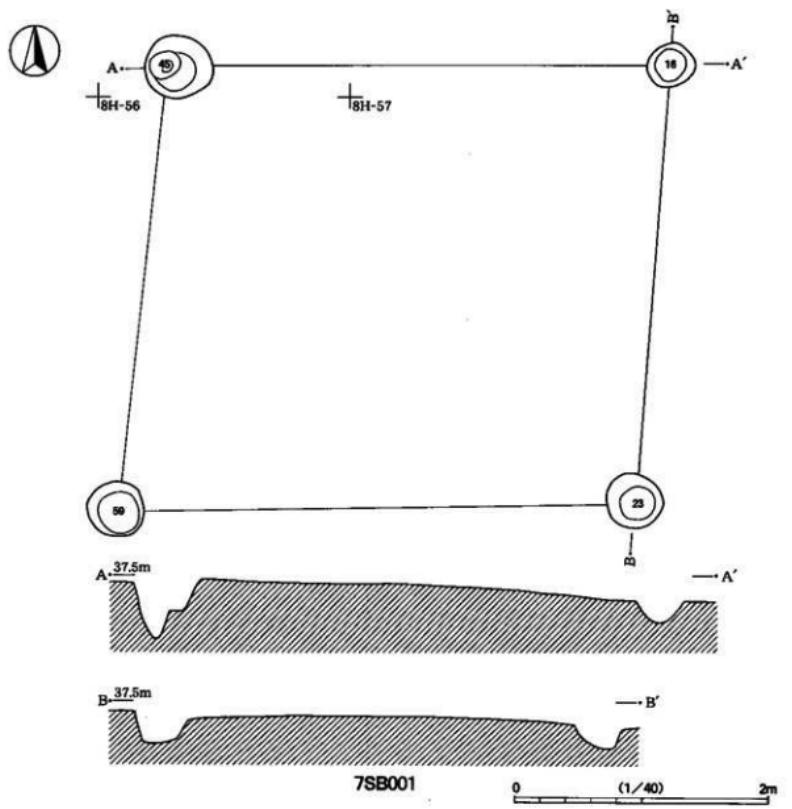
その他の遺構 (第18・21図、図版19・20)

7SB001の西側崖面に縦3m×横2mほどの大きな穴が調査前から確認されていた。穴の埋没状況や掘形、また、現状でも水が湛水していることなど、水田灌漑用の小規模な溜め池と考えられる。

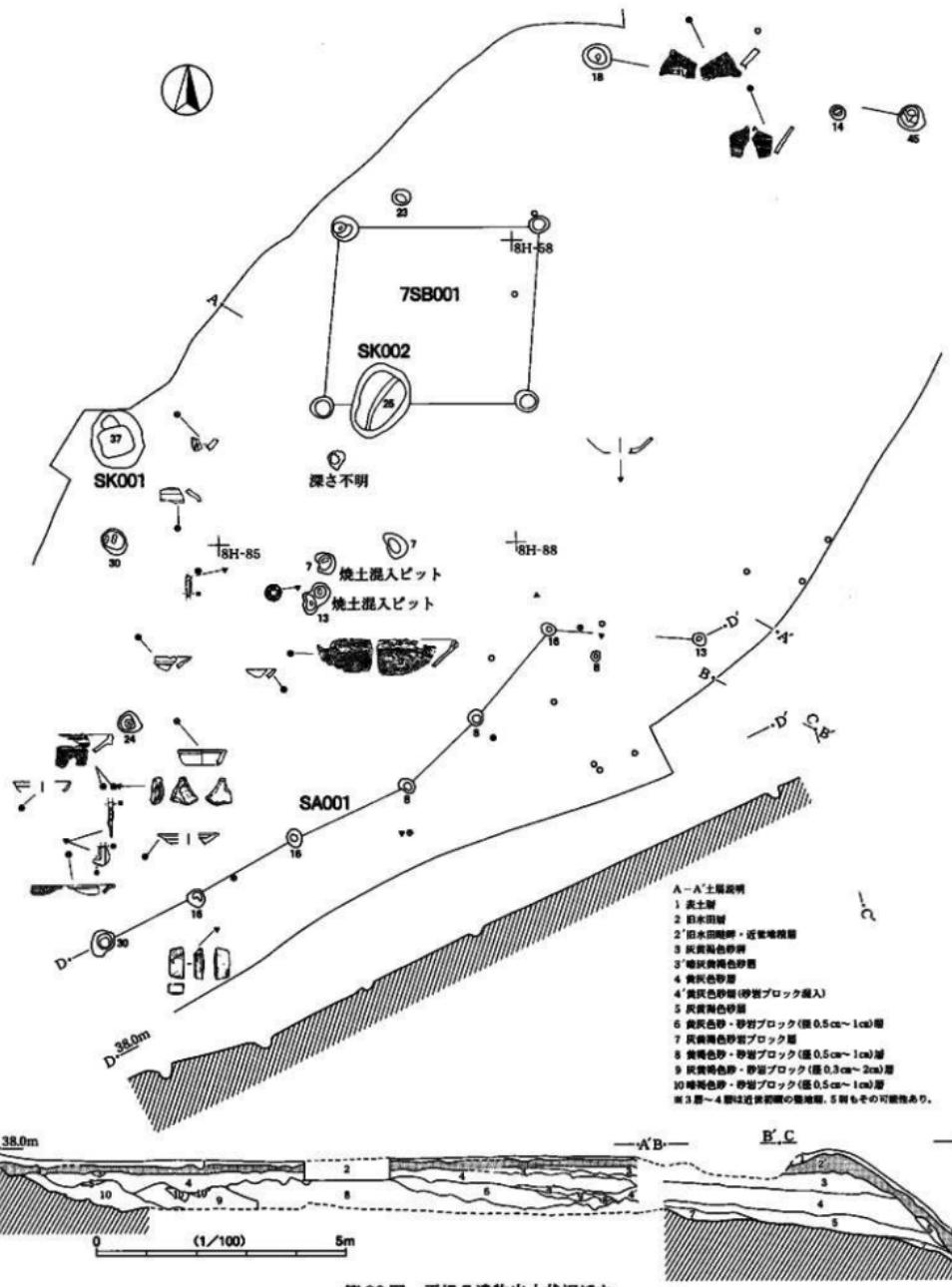
この溜め池に隣接して石垣状の痕跡が発見されたので、表土を多少剥ぎ取ったところ、崖面に石を張った面(縦4m×横2m)が確認された。上の平場(平場5)が近世から近代の畠地造成に伴う点や直下が水田であったことなどから、該期における擁壁代わりの石積みであったと推測する。

平場7 出土遺物 (第22図、図版29)

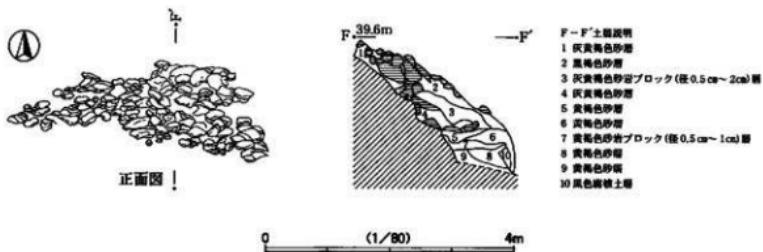
平場7ではその多くが南側緩傾斜面の水田下の土層(4層・5層)中より出土した。セクションの観察では4層・5層が整地面に当たり、尚かつその上位から出土しているので遺物の年代観とに大きな矛盾はないと考えられる。ここも建物の東側には遺物がなく(1点は土師器)、出入り口との関係からしても星敷跡と類似する状況が発見される。



第19図 7SB001・7SK001・7SK002



第20図 平場7遺物出土状況ほか



第21図 平場7～5間斜面石積み

86～96は瀬戸・美濃産陶器である。86は折縁の縁軸小皿片であり、87も同様折縁ながら、屈曲は弱く、遺存部には全面に灰釉が認められる。また、内面には2本1単位の恐らくクロコによるかと思われる浅い条線が3単位ほど施されている。その所属時期は、86については平場3と同一のものが出土しておりその説明に準ずるとして、87はより後出する要素と理解すべきであろうか。

88は鉄軸天目茶碗片である。89・90は志野丸皿口縁部片である。軸調は89が黒斑のあるザラついた外観に対し、90は透明感のある灰色である。91は灰釉折縁ソギ皿口縁部片である。92～96は鎌軸擂鉢であり、92・93が口縁部、94～96が体部下半部片である。口縁部片は平場3と比較すると内面有段のものもなく、また、93のように外面が玉縁状ではなく、幅広の縁帯をなすものがある。

97～99は肥前（唐津）産陶器であろう。97は端反りの長石釉皿である。いわゆる巴高台で、高台周辺は無釉である。内面見込みに3点のピン痕が遺存する。98は長石釉皿底部近くの破片であり、胎土は砂目、内面に鉄絵を施す。99は口縁が内側に湾曲する向付の破片と思われ、釉は鼠色の長石釉である。

100はかわらけ（1/4個体）である。口縁内側に明瞭な一条線が走る。101は凝灰岩製砥石である。両面及び脇的一面を使用する。上下の断面は古い折損である。102は恐らく火打石であろう。剥片の一方を使用したもので、石材は瑪瑙である。

103～105は鉄釘であるが、共に破損品である。陶磁器と同レベルより出土しているので同一時期の所産であろう。

106は銭貨である。腐食しているものの元符通寶と読み取れる。

なお、古代の遺物については1点図示できるものがあり、それについては別途報告している（第28図）。

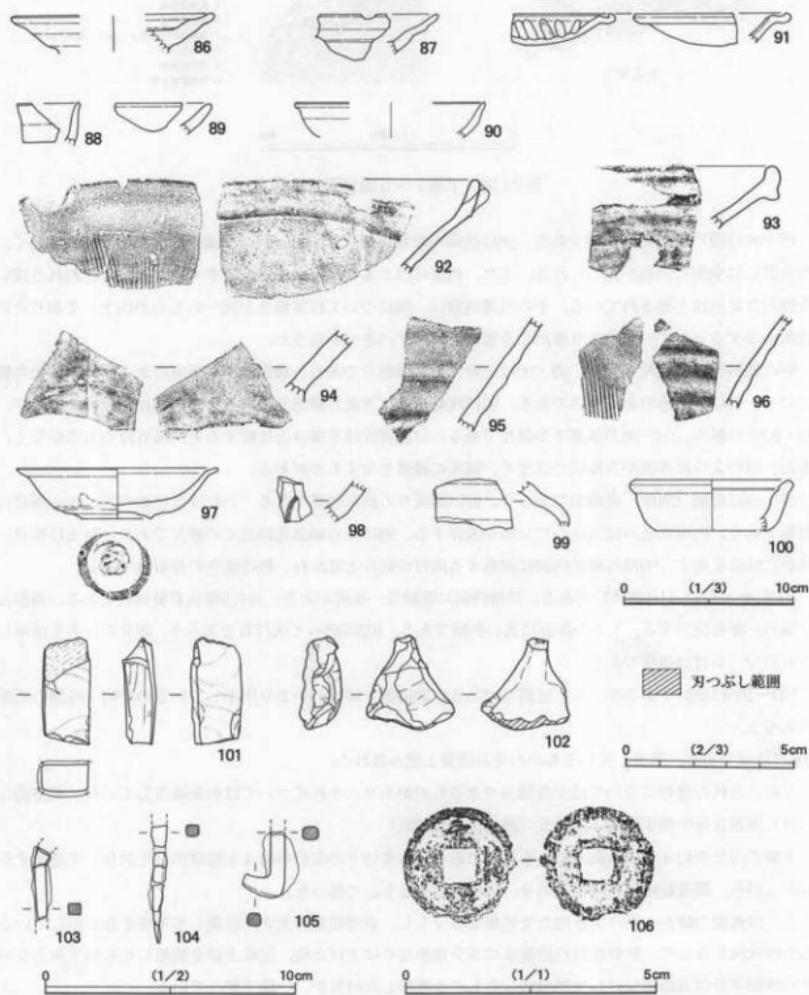
（3）南西丘陵中腹平場跡：平場5（第18図、図版21）

平場7の北西約4～5m高みにある平場である。本来はその北の平場4と隘路部分を共有して連続するものながら、調査範囲との関係もあり、南側を平場5として扱った。

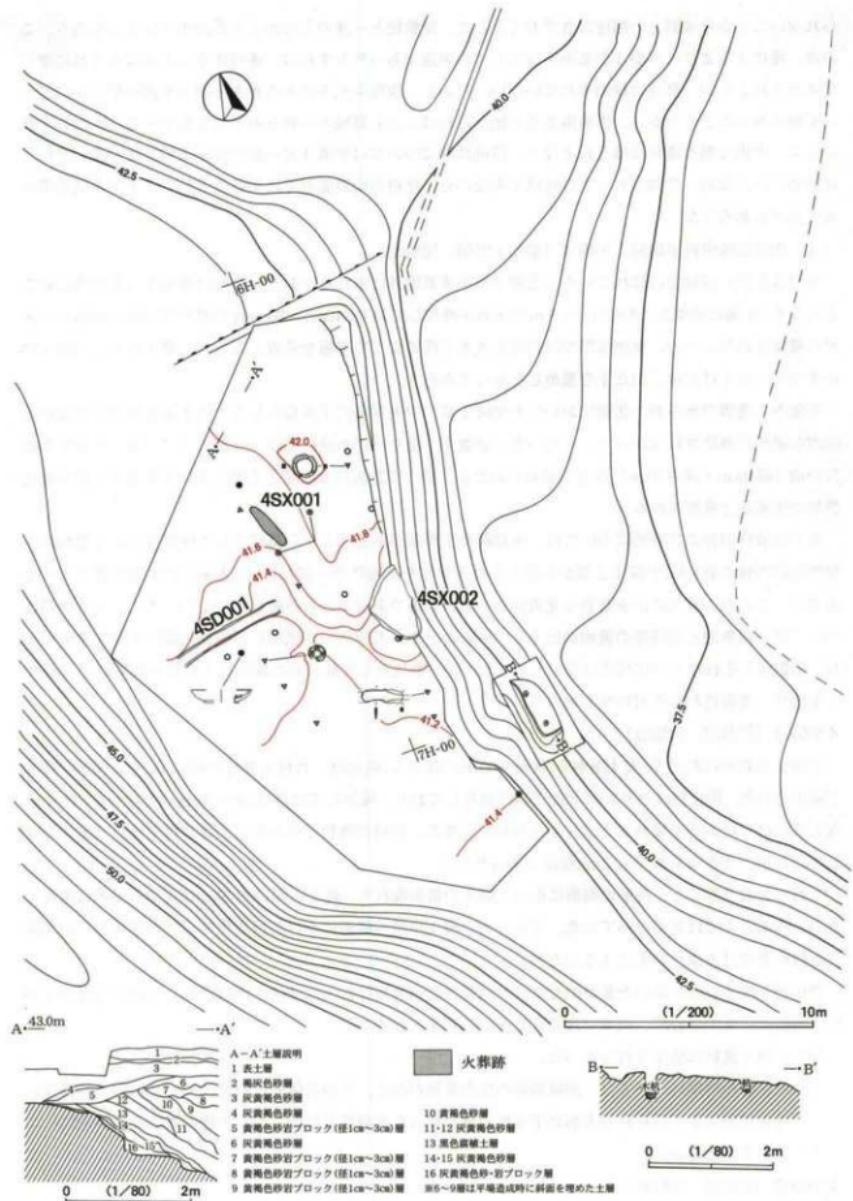
ここは西側の峰から東へ突き出した支尾根をカットし、自然地形を大きく改変して平場を作り出している。断面の状況からして、軟質泥岩の岩盤まで多少地形なりに下げた後、出土土砂を整地したものであろうが、その南側半分は人為的ないし自然崩壊したものを整形した結果か、一段下がっている。

削平範囲については支尾根先端には及ばず、その手前で終わっている。結果として、岩盤面で比高差約50cmの段差が生じているが、その手前にはこの段差の向きに併行するようにピットが2本確認された。

さて、この平場の造成時期および目的であるが、外郭ラインの外側にあって背後の丘陵に城郭構造がみ



第22図 平場7出土遺物



第23図 平場4・平場8

られないことから城郭との関連はさておくとして、屋敷地と一連のものかどうかがポイントとなろう。この点、後述するように平場4が墓地造成としての用途であったとすれば、連続するこの平場もそれに準じて考えられようが、墓坑は検出されていない。しかし、現在来光寺にある寛永年間の宝篋印塔はかつてこの平場にあったというから、供養塔造立の地とみればここも墓域の一角とみることもできる。ただいずれにせよ、中世に遡る遺物はほとんどなく、造成時期については平場4と一連の所産の可能性が高いといふに留めたい。なお、2個のピットは性格不明ながら、尾根の切断面近くにあることから、土留め防止用の丸太穴でもあろうか。

(4) 南西丘陵中腹平場跡：平場4（第23・25図、図版22）

平場5と狭い回廊で結ばれている。北側半分が事業地外に当たっており、今回は南側半分を調査したことになる。平場は岩盤まで約0.7m～1mの土砂が堆積しており、10cm～20cm程の厚みの土層が縞状かつ水平に確認された。一方、東側崖際では斜面を大きく埋め立てて平場を造成しており、要するに、山側を地山まで平らに下げた後、出た土を整地したものであろう。

平場内の遺構であるが、北側において火葬跡1基、中央崖際で土葬墓らしき土坑1基を検出したほかは明瞭な遺構は確認されなかった。その一方、岩盤まで掘り下げた過程では、一部に「ノミ痕」を有する細長い溝（幅40cm×深さ10cm）などが認められたが、総じて意図的な所産とも思えず、平場造成に伴う地山整形の所産とか推察される。

その造成時期および目的については、火葬跡や土葬墓があることから墓域として使用されたと思われ、屋敷地南西縁の4SX001の覆土上層から出土した人骨片や五輪塔の一部などは、本来この平場に伴うものであろう。この点、背後に山を背負う北東向きの狭い平場であることにも考慮されてよい。また、その時期については、屋敷地と同時期の遺物が出土していることや、五輪塔（空風部）が中世末期の形態を遺す点から、屋敷地とそれほどの年代差はないとしておくが、墓地として使われた期間は火葬跡（4SX001）の様相とも併せ、長期にわたる可能性もある。

4 SX001（第24図、図版22）

平場4の北側において、表土層から50cm～60cmの深さで、炭化材・竹材・骨片が縦2.5m×横0.6mの範囲で検出された。炭化材はとりわけ北側で良く遺存しており、塊としては径2cm～6cmほどながら、本来は丸太状の材（杉か）を廻らせる破片もみられた。また、竹材は籠竹と思われる。骨片は同様、北側に集中していたが、大きなものでも2cm程度であった。

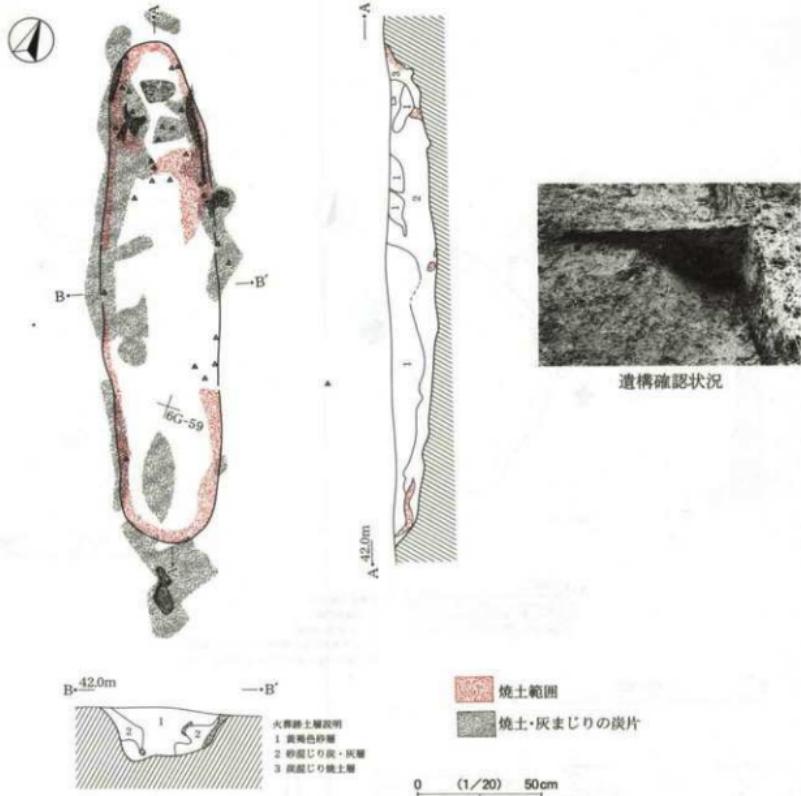
これらを取り除くと、舟形の掘形に沿って焼土の帯が現れた。焼土の幅は約5cmほどで、壁際に遺存したが、底面近くでは無くなっていた。その一方、覆土中位～底面にかけては炭化物・灰が堆積していたが、これは火を受ける条件の差によるのだろう。

炭化物・焼土を取り除いた最終的なプランは長径2m×短径45cmであり、両端が丸くすぼまる舟形ながら、断面は中央で逆台形、両端で浅く立ち上がる形態となる。

なお、伴う遺物は検出されなかった。

この火葬跡の時期については、陶磁器等の伴出遺物がなく、その具体的な時期については言及し得ない。但し、近世初頭によくみられる方形にT字形の構を切った火葬坑とは明らかに形態が異なる。時期的により下るものであろうか。

4 SX002（第25図、図版22）



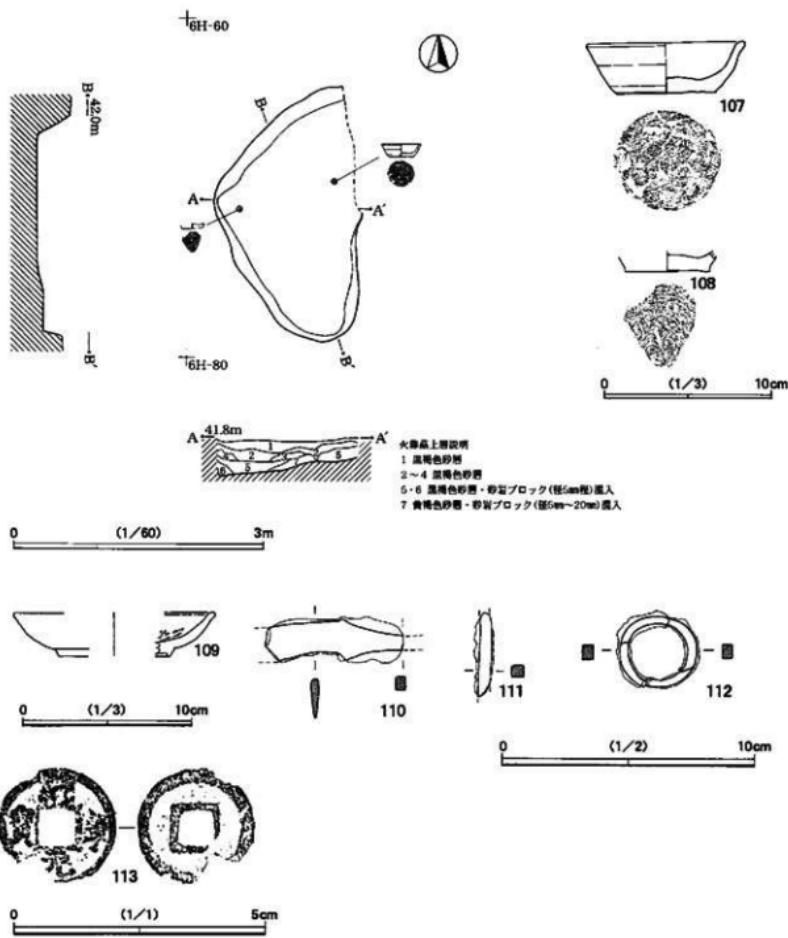
第24図 4SX001

平場4の南側崖際にあり、一部は壁が崩壊していることから、本来は平場そのものがさらに道路側にせり出していたと思われる。形態は不定形ながらこれもその置かれた条件ゆえ本来の形状とは多少異なるものかもしれない。一応長軸を南北方向とすると、縦3m×横1.8m×深さ0.4mほどとなる。底面には多少整地した様子が窺え、また、覆土は黒褐色土に砂岩ブロックを含み人為的な堆積状況を呈する。さらに、覆土内からかわらけ2点が出土するなど、人骨こそ認められないものの、墓坑の可能性が高い。

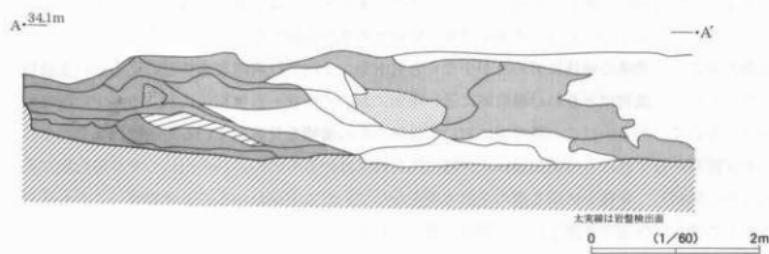
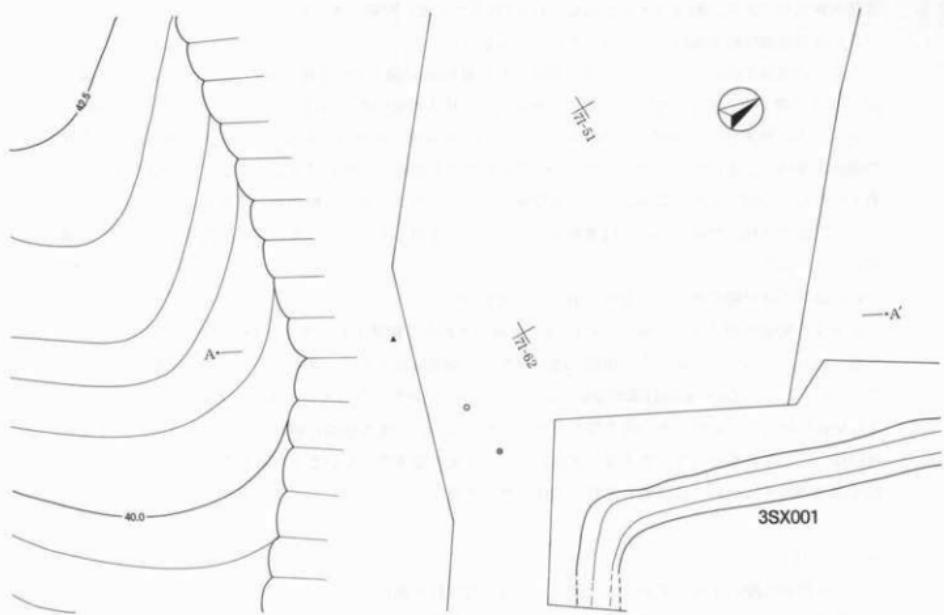
遺物は1層内から出土した。葬送に際し遺体の上に置かれたものであろうか。107は遺存の良いかわらけである。底面は糸切り後、調整を行っている。108は底部片である。

平場4出土遺物（第25図、図版30）

出土遺物は僅かであり、このうち図示可能な4点を報告する。109は瀬戸・美濃産志野丸皿片である。全面に釉を施し、底部は削り出し高台である。内面や口縁の一部にスグリが遺存しており、灯明皿として用いたものであろうか。110は刀子であるが刃部中程から先端と茎末端を欠く。111は鉄釘片である。112はリン



第25図 4SX002・平場4出土遺物



3SX001土層説明

- 砂岩ブロック
- 灰黄褐色～褐灰色砂層
- 砂混じり砂岩ブロック層
- 腐植土ブロック
- 腐植土混じり砂岩ブロック層



3SX001セクション近景

第26図 3SX001

グ状の鉄製品であり、断面は方形である。113は錢貨で北宋の熙寧元寶である。

(5) 南西丘陵中腹平場跡：平場 6（第18図、図版21）

平場 5 の南西下約1.3mほどのところで検出された幅1.5mに満たない平場である。崖際には幅30cm・深さ20cm程度の溝が廻っているが、粘土質の土層からして排水の意図から設けられたものと思われる（北側のピットもその関連か）。平場そのものの幅については、斜面側が急傾斜であることに加え、真下に通る近代の道路工事時に法面の整形がなされたものと思われることから、いずれにせよかつては更に幅があったと考えられる。なお、上段の平場 5 との前後関係であるが、セクションの検討から平場 6 が新しい。

この平場の年代・性格については遺物もほとんど不明であるが、近世以降の階段状の畑（ないし墓域）とみておきたい。

(6) 南西丘陵中腹平場跡：平場 8（第23図、図版23）

平場 4 の東側中腹に狭い平場（幅約1.5m）が検出された。確認トレンチでかかった範囲の拡張であり、平場 6 に対応するものであろう。崖際に溝が廻るも、南側は谷の方向に落ちているので、平場そのものはここで終わっているが、北側は溝が続いているので、さらに北側に延びていたものと思われる。2個のピットは崖面に併行してあり、その深さ等から柱穴とみてよいが、崖の崩壊に備えたものであろうか。平場 6 と同様、ここも自然の崩壊や農道等の破壊によって本来の幅を失っていると思われる。なお、平場 4 との前後関係や性格については平場 5 と 6 の関係に準じて考えたい。

2 その他

(1) 屋敷跡上段の平場：平場 3 A（第2・3図、図版17・18）

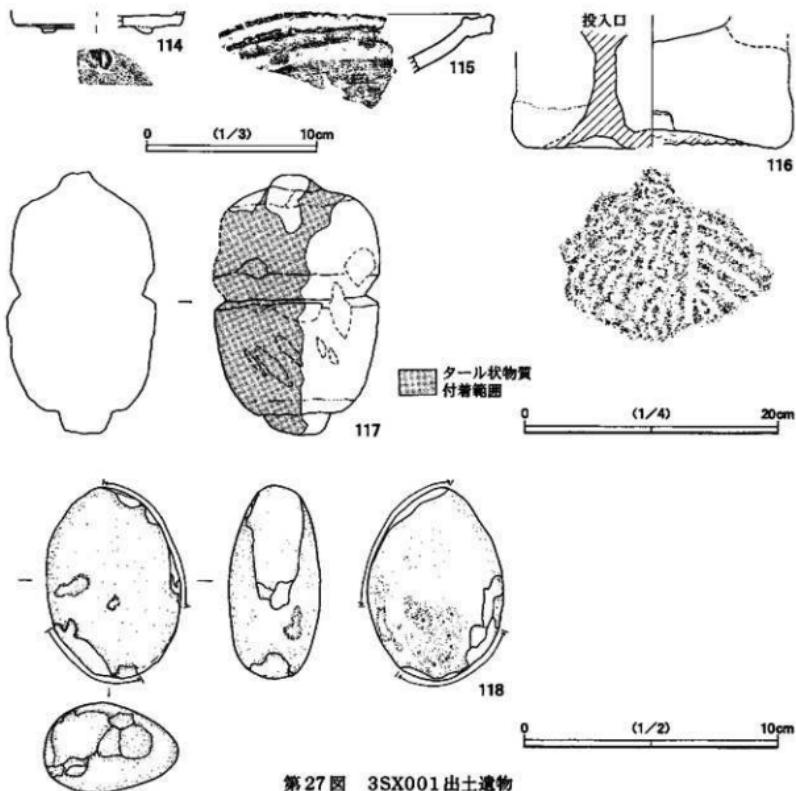
屋敷跡が検出された平場（平場 3 B）の背後にはそれより少し広い平場がある。この平場は現状ではなだらかに傾斜する一枚の畑であったが、セクション（1 T、3 T、20 T）を検討すると、レベルの違う水田層が場所を異にして3面ほど確認できる。つまり、こもより下の平場 3 B と同様かつては水田として活用されていたが、より高低差があるため地形なりに階段状の水田を経営していたのである。

この水田層を除去して造構の確認に努めたが少なくともトレンチ内では明瞭な造構といえるものを確認し得なかった。しかし、遺物はとりわけ屋敷跡に近い南側において中世～近世初頭にわたる多少の陶磁器の出土をみているので、あるいはこの隣接地においては何らかの造構を見逃している可能性はある。なお、トレンチの断面観察からすれば近世初頭面は水田層に切られてはいるものの、谷の出口つまり屋敷地に向かってなだらかに傾斜し、背後を区切る溝の手前で段をなしていたことがわかる。近世初頭にこも活用されていたとした場合、畠地や菜園としての利用が想定されよう。

(2) 平場 3 B 西端横穴：3SX001（第26・27図、図版17・18・30）

屋敷跡を区画する溝（3SD001）の南西コーナー外側に所在する。覆土上位で石塔、石臼片が出土したことから掘り進めた結果、丘陵崖側に向かって横穴状を呈したものである。形状としては、横穴墓ないし中・近世のやぐらや岩窟とも異なるもので、むしろ近代の穴蔵の一種に類似する。それゆえ、本調査範囲から外れた位置にあることも考慮し、セクションと写真のみの記録にとどめ平面図は省略した。

そこで遺物との関連であるが、山際に近いところでは天井の崩落層かと思われる土砂が堆積し、それを埋めるかたちで斜面の崩落層が厚く覆っている。遺物はいずれもこの中から出土しており、石塔（中世末期小形五輪塔空腹部）などは本来斜面にあったものが転落した結果かと思われる。しかし、石臼片や敲石



第27図 3SX001出土遺物

(ないし磨石)が混入した理由はわからない。

出土遺物といつても本来この横穴に伴うものとはいえないが、とりあえずここで扱う。114は削り込み高台の筒形香炉底部片である。115は瀬戸・美濃産鉛釉擂鉢口縁部片である。口縁に縁帶の付くタイプであり、口唇部は摩滅して露胎となる。116は花崗岩製の石臼片である。上臼約1/3~1/4片を形状復元して掲載した。117は安山岩製五輪塔空風部である。高さ20cm・幅10cmの簡略化された空風部一石形である。118は砂岩製の砾石で上下対照2か所に剥離部がみられる。重量は201gである。

所属年代については、114・115・117は中世また近世初頭の遺物として問題なく、116も恐らくそうであろう。しかし、118については不明である。

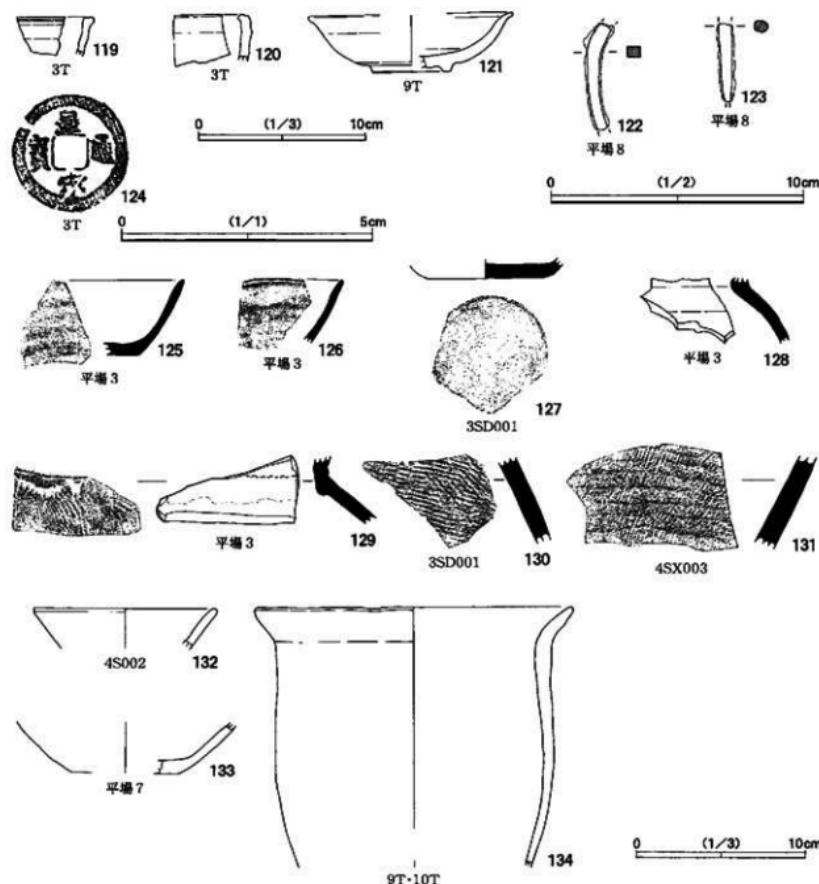
(3) 北側丘陵南端平場：平場2（第2・28図、図版31）

北側丘陵中腹緩斜面に設けた確認トレンチ内より土師器が出土した。その内訳は10T東側で底部を欠く土師器甕1点、9T南側で破片14点である。ここは緩斜面の下方に当たり、出土層位は表土下に堆積した

厚い黒色土（約20cm～30cm）中である。地形条件からしてより高所の9T北側周辺からの転落ないし流れ込みと思われるものの、トレンチ内では遺構は検出されなかった。時期的には9世紀代の所産と推測され、該期にしばしばみられる山中の類例の一つであろうか。なお、図示し得る遺物は土師器壺1点（第28図）のみであり、詳細は表を参照されたい。

3 遺構に伴わない遺物

(1) トレンチほか出土の遺物（第28図、図版31）



第28図 トレンチ出土遺物・古代の遺物

119・120は3T(平場3A南側)より出土した。119は瀬戸・美濃産陶器であり、筒型椀であろうか。120は志戸呂産と思われ、同じく鉄軸の香炉になろうか。共に口縁部片である。121は9T(平場2:北側丘陵中腹)より出土した長石軸唐津皿である。削り出し高台であり、底部外面は無軸である。124は3Tより出土した錢貨であり、北宋の皇宋通寶である。122・123は平場4の南東斜面で確認された僅かな平場から出土した鉄釘である。平場自体が斜面の養生を意図した(柱穴らしき穴あり)可能性があるものの、いつの所産か明確でない。一応報告する。

(2) 古代の遺物(第28図、図版31)

中世を過る遺物を一括して報告する。125~131は須恵器であり、このうち125~127は壺片、128~131は壺・甕の破片である。なお、125・126は明瞭ではないが内外面に火襷、129~131は外面にタタキ目が認められる。132~134は土師器であり、132は壺口縁部片、133は椀の底部片、134は甕(体部下半~底部欠)である。

出土状況については、125~130が平場3Bの星敷地内、131・132が平場4内、133が平場7内、134が9T内である。また点数については、須恵器片が報告した遺物を含めて10数点であり、特に集中箇所はない。一方、土師器片は平場3と9Tに10数点の出土があったものの、他は各所に散在し総てを含め約50点という数である。なお、134については4・5点の破片が接合するもので本来は1個体に近い土器として埋没したものであろう。



◀勝隆寺境内

内藤氏石塔群

内藤家長・元長父子
は慶長5年8月1日
伏見城に於いて討死
家長室(馨崇院)は
文禄4年没

無
銘(内藤家長室?)

善昌寺殿(内藤家長)
背銘(藤原家長)

修徳院殿(内藤元長)

無
銘(不明)

第2表 陶磁器ほか観察表

| 件番号 | 建物番号 | 遺物番号 | 種別 | 器種 | 裏存度 | 計測値(cm) | | 土 | 色調・釉薬 | 文様・西壁手形・底地等 | |
|-----|--------|-----------|------|---------|---------|---------|---------|-------|-------------------|-----------------------|-----------------|
| | | | | | | 0 | 12(裏充填) | | | | |
| 口径 | 底径 | 高さ | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 12 | 平場3 | 陶器 | 天目系碗 | 口縁部片 | | | | 黄灰色 | 灰輪 | 灰褐色の発色、窓戸・美濃 | |
| | 平場3 | 陶器 | 皿 | 底筋付側面 | | 39 | | 黄灰色 | | 底筋部軽赤褐色、窓戸・美濃 | |
| | 平場3 | 陶器 | 盤 | 口縁部片 | | | | 黄灰色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 平場3 | 陶器 | 折腰皿 | 約1/4體 | | | | 黄灰色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 平場3 | 陶器 | 折腰皿 | 口縁・全体部片 | | | | 黄灰色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 平場3 | 陶器 | 舟 | 口縁部・底部片 | | | | 灰色 | 灰輪・墨褐色 | 口広有耳型、窓戸・美濃 | |
| | 平場3 | 陶器 | 舟 | 底筋 | | | | 灰色 | 灰輪・灰墨色 | 常滑 | |
| | 3SD001 | 陶器 | 口鉢 | 口縁部片 | | | | 長石織入 | 明灰白色 | 常滑 | |
| 13 | 9 | 3SD001 | 織部 | 背花皿 | 体部・底部片 | | | 白色 | 灰輪 | 真荒窯、文様模様、中因窯 | |
| | 10 | 平場3 | 陶器 | 盤 | 開口片 | | | 黄褐色 | 紺土質褐色 | 外正輪輪、白輪輪模様 | |
| | 11 | 平場3 | 陶器 | 天目系碗 | 口縁部片 | | | 磁青色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 12 | 平場3 | 陶器 | 天目系碗 | 口縁部片 | | | 乳白色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 13 | 2T | 陶器 | 天目系碗 | 口縁部片 | | | 乳白色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 14 | 平場3 | 陶器 | 天目系碗 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 15 | 平場3 | 陶器 | 天目系碗 | 口縁部片 | | | 乳白色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 16 | 平場3 | 陶器 | 折腰皿 | 身口縁部片 | 10.4 | 5.7 | 2.0 | 灰白色 | 灰輪・灰濃 | |
| | 17 | T4 | 陶器 | 皿 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 灰輪 | 内面シザ、窓戸・美濃 | |
| | 18 | 3SD001-2T | 陶器 | 皿 | 底筋片 | | 15.7 | | 黄灰色 | 全面紋様 | |
| | 19 | 5T | 陶器 | 丸皿 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 長石輪(窓野) | 窓戸・美濃 | |
| | 20 | 3SD001 | 陶器 | 丸皿 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 長石輪(窓野) | 窓戸・美濃 | |
| | 21 | 平場3 | 陶器 | 丸皿 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 長石輪(窓野) | 窓戸・美濃 | |
| | 22 | 平場3 | 陶器 | 丸皿 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 長石輪(窓野) | 被施、窓戸・美濃 | |
| | 23 | 平場3 | 陶器 | 丸皿 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 長石輪(窓野) | 内面紋様、窓戸・美濃 | |
| | 24 | 3SD001 | 陶器 | 織反皿 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 長石輪(志野) | 長石輪織け織目、窓戸・美濃 | |
| | 25 | 4T | 陶器 | 皿 | 底筋片 | | | 黄灰色 | 長石輪(志野) | 村松台・高台内無輪、窓戸・美濃 | |
| | 26 | 3SD001 | 陶器 | 丸皿 | 約1/2 | 60.0 | 66.0 | 3.8 | 灰白色 | 底筋輪(志野) | 内面に溝付章、窓戸・美濃 |
| | 27 | 平場3 | 陶器 | 青釉碗 | 口縁部片 | | | 灰色 | 灰輪 | 青釉色の紋様、窓戸・美濃 | |
| | 28 | 2T | 陶器 | 青釉碗 | 口縁部片 | | | 灰色 | 灰輪 | 青釉色の紋様、25と同一側面か、窓戸・美濃 | |
| | 29 | 平場3 | 陶器 | 青釉碗 | 約1/4體 | (3.0) | (4.0) | (4.0) | 黄灰色 | 灰輪 | 削込み凸台内無輪、窓戸・美濃 |
| | 30 | 平場3 | 陶器 | 青釉碗 | 口縁部 | | | 灰白色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 31 | 3SD001 | 陶器 | 青釉碗 | 口縁部 | | | 灰白色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 32 | 2T | 陶器 | 青釉碗 | 底筋片 | | | 灰灰色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 33 | 3SD001 | 陶器 | 砂利 | 身・脚部 | | | 磁灰色 | 外正輪輪、内面青い滑輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 34 | 平場3 | 陶器 | 砂利 | 底筋片 | | | 灰白色 | 外正輪輪(底正小ラ有り)、内面無輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 35 | 平場3 | 陶器 | 花瓶 | 底部 | | 17.0 | | 灰色 | 全面紋様 | 底面外正輪輪、灰輪、窓戸・美濃 |
| | 36 | 平場3 | 陶器 | 花瓶 | 底部 | | | 4.5 | 灰色 | 底面無輪、窓戸・美濃 | |
| | 37 | 3SD001 | 陶器 | 天目系碗 | 約1/4體 | (8.0) | | 黑色 | 体側下笠跡を全面無輪 | 窓戸品 | |
| | 38 | 平場3 | 陶器 | 織反皿 | 口縁部・底部片 | | | 灰色 | 灰輪 | 店津 | |
| | 39 | 平場3 | 陶器 | 織反皿 | 口縁部片 | | | 灰色 | 長石輪 | 店津 | |
| | 40 | 3SD001 | 陶器 | 丸皿 | 口縁部片 | | | 灰色 | 長石輪 | 店津 | |
| | 41 | 2T | 陶器 | 丸皿 | 底筋付1/4體 | 4.5 | | 灰輪 | 灰輪 | 店津 | |
| | 42 | 平場3 | 陶器 | 皿 | 底筋片 | | | 灰輪 | 灰輪 | 味山、唐体 | |
| | 43 | 平場3 | 陶器 | 小杯 | 口縁部片 | (7.0) | | 灰褐色 | 灰輪 | 内面無輪、店津 | |
| | 44 | 平場3 | 陶器 | 西鉢 | 約1/3體 | | | 長石織入 | 磁褐色 | 保前 | |
| 14 | 45 | 2T | 陶器 | 織部 | 口縁部片 | | | 磁灰色 | 灰輪 | 口縁部スレ、窓戸・美濃 | |
| | 46 | 3SD001 | 陶器 | 織部 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 灰輪 | 8.6の縁り口、窓戸・美濃 | |
| | 47 | 平場3 | 陶器 | 織部 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 灰輪 | 口縁部スレ、窓戸・美濃 | |
| | 48 | 3SD001 | 陶器 | 織部 | 口縁部片 | | | 灰白色 | 灰輪 | 口縁部スレ、窓戸・美濃 | |
| | 49 | 2T | 陶器 | 織部 | 口縁部片 | | | 赤灰色 | 灰輪 | 口縁部スレ、窓戸・美濃 | |
| | 50 | 平場3-4T | 陶器 | 織部 | 口縁部・全体 | | | 灰褐色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 51 | 平場3 | 陶器 | 織部 | 口縁部片 | | | 赤灰色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |
| | 52 | 平場3 | 陶器 | 織部 | 口縁部片 | | | 赤灰色 | 灰輪 | 窓戸・美濃 | |

| | | | | | | | | | | |
|----|-----|--------|-------|------|----------|-------|--------------|-----------|--------------------------|---------------------------|
| 14 | S3 | 平塚 3 | 陶器 | 埴輪 | 口縁部片 | | 赤灰色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 54 | 平塚3 | 陶器 | 埴輪 | 底面20個体 | 9.5 | 黄灰色 | 織物 | 14条の縫り目、廻戸・美濃 | |
| | 55 | 3SD001 | 陶器 | 埴輪 | 底面1/2個体 | 0.0.9 | 赤灰色 | 織物 | 14~15条の縫り目、廻戸・美濃 | |
| | 56 | 平塚3 | 陶器 | 埴輪 | 底面~表盤片 | | 黄灰色 | 織物 | 15条の縫り目、廻戸・美濃 | |
| | 57 | 平塚3 | 陶器 | 埴輪 | 底面の1/2個体 | | 軟質・灰白色 | 織物 | 内面剥離、廻戸・美濃 | |
| 15 | 58 | 3SD001 | 陶器 | 埴輪 | 体部~底面片 | | 灰色 | 織物 | 24~25条の縫り目、廻戸・美濃 | |
| | 59 | 3SD001 | 陶器 | 埴輪 | 体部~底面片 | | 灰白色 | 織物 | 底面周縁部スレ、廻戸・美濃 | |
| | 60 | 平塚 3 | 陶器 | 埴輪 | 口縁部~底面片 | | 黄白色調入 | 黒赤色 | 常滑 | |
| | 61 | 平塚 3 | 陶器 | 埴輪 | 上側部片 | | 良石磨削入 | 黄褐色 | ナデ・ヘラナデ調整、常滑 | |
| | 62 | 平塚 3 | 陶器 | 埴輪 | 底面片 | | 砂粒混入 | 黄褐色 | 常滑 | |
| | 63 | 平塚 3 | 陶器 | 埴輪 | 体部~底面片 | | 砂粒混入 | 黄褐色 | 常滑 | |
| | 64 | 平塚 3 | 陶器 | 埴輪 | 底面片 | | 砂粒混入 | 灰色 | 常滑 | |
| | 65 | 平塚 3 | 素焼き土器 | かわらけ | 底面の2個体 | 0.0.0 | 5.3 | 2.8 | 織物鉢底入 | 底面田縞糸切り痕・3SD001の造物番号12と重合 |
| | 66 | 平塚 3 | 素焼き土器 | かわらけ | 体部~底面片 | | 織物鉢底入 | 灰色 | 底面鉢底糸切り痕 | |
| | 67 | 平塚 3 | 素焼き土器 | かわらけ | 約14個体 | (8.9) | (4.9) | (2.0) | 織物鉢底入 | 明黄色 |
| 22 | 68 | 平塚 3 | 素焼き土器 | かわらけ | 約14個体 | (7.0) | (4.6) | (1.2) | 織物鉢底入 | 明黄色 |
| | 69 | 平塚 3 | 瓦葺上器 | 内耳土器 | 口縁部~体部片 | | 織物鉢底入 | 灰黑色 | ハケ状工具・ナデ調整 | |
| | 70 | 平塚 7 | 陶器 | 壺 | 口縁部片 | | 灰灰色 | 灰釉 | 折縁且、廻戸・美濃 | |
| | 71 | 平塚 7 | 陶器 | 壺 | 口縁部片 | | 灰灰色 | 灰釉 | 折縁且、廻戸・美濃 | |
| | 72 | 平塚 7 | 陶器 | 天日茶碗 | 口縁部片 | | 灰白色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 73 | 平塚 7 | 陶器 | 丸壺 | 口縁部片 | | 灰灰色 | 灰釉(志野) | 廻戸・美濃 | |
| | 74 | 平塚 7 | 陶器 | 丸壺 | 口縁部片 | | 灰白色 | 灰釉(志野) | 近明感のある物、廻戸・美濃 | |
| | 75 | 平塚 7 | 陶器 | 折縁壺 | 口縁部片 | | 灰白色 | 灰釉 | ソギ且、廻戸・美濃 | |
| | 76 | 平塚 7 | 陶器 | 折縁壺 | 口縁部片 | | 灰灰色 | 絹物 | 10条の縫り目、廻戸・美濃 | |
| | 77 | 平塚 7 | 陶器 | 折縁壺 | 口縁部片 | | 灰灰色 | 絹物 | 口唇部スレ、廻戸・美濃 | |
| 25 | 78 | 平塚 7 | 陶器 | 折縁壺 | 口縁部片 | | 灰灰色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 79 | 27T | 陶器 | 埴輪 | 頭部片 | | 灰灰色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 80 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰白色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 81 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰白色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 82 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 絹物 | 10条の縫り目、廻戸・美濃 | |
| | 83 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 絹物 | 口唇部スレ、廻戸・美濃 | |
| | 84 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 85 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 86 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 織物 | 巴系台、内面3点ピン痕、唐津 | |
| | 87 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 織物 | 内面鉢底、唐津 | |
| 27 | 88 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 絹物 | 向付?、唐津 | |
| | 89 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 織物 | 口唇部に一欠損 | |
| | 90 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 織物 | 底面四伝糸切り後、再調整 | |
| | 91 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 織物 | 底面四伝糸切り後 | |
| | 92 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 絹物 | 割り山・西台、全面施釉、内面スス村界、廻戸・美濃 | |
| | 93 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 絹物 | 三井村、廻戸・美濃 | |
| | 94 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 95 | 27T | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 96 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰白色 | 織物 | 廻戸・美濃 | |
| | 97 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | 0.19 | 4.0 | 3.0 | 灰白色 | 表物 |
| 28 | 98 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 表物 | 巴系台、内面3点ピン痕、唐津 | |
| | 99 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 表物 | 内面鉢底、唐津 | |
| | 100 | 半幅 7 | 陶器 | 埴輪 | 脚部片 | | 灰灰色 | 表物 | 向付?、唐津 | |
| | 101 | 底面土器 | かわらけ | 埴輪 | 脚部片 | | 微砂粒混入 | 灰黑色 | 口唇部内に一欠損 | |
| | 102 | 45X002 | 素焼き土器 | かわらけ | 約3/4個体 | 9.5 | 5.9 | 2.8 | 赤色・黒色混入、砂粒混入 | 底面四伝糸切り後、再調整 |
| | 103 | 45X002 | 素焼き土器 | かわらけ | 底面片 | | 赤色・黒色混入、砂粒混入 | 底面四伝糸切り後 | | |
| | 104 | 平塚 4 | 陶器 | 丸壺 | 約15個体 | | 灰白色 | 長石釉(志野) | 割り山・西台、全面施釉、内面スス村界、廻戸・美濃 | |
| | 105 | 3SD001 | 陶器 | 香炉 | 底面片 | | 乳白色 | 絹物 | 志戸呂? | |
| | 106 | 3SD001 | 陶器 | 香炉 | 口縁部片 | | 赤灰色 | 織物 | 志戸呂? | |
| | 107 | 3T | 陶器 | 香炉 | 口縁部片 | | 與同色 | 織物 | 志戸呂? | |
| 29 | 108 | 3T | 陶器 | 香炉 | 口縁部片 | | 與同色 | 絹物 | 志戸呂? | |
| | 109 | 120 | 3T | 陶器 | 香炉 | | 與同色 | 絹物 | 志戸呂? | |
| | 110 | 9T | 陶器 | 焼成灰 | 約15個体 | | 明るい褐色 | 長石釉 | 体部下位以下施釉、表物 | |
| | 111 | 45X002 | 素焼き土器 | かわらけ | 約3/4個体 | | 外面灰褐色・内面灰褐色 | 外面タキ目・灰被り | | |
| | 112 | 45X002 | 素焼き土器 | かわらけ | 脚部片 | | 微砂粒混入 | 青灰色 | 外面タキ目 | |
| | 113 | 45X002 | 素焼き土器 | かわらけ | 脚部片 | | 微砂粒混入 | 灰白色 | 外面タキ目 | |
| | 114 | 45X002 | 素焼き土器 | かわらけ | 脚部片 | | 微砂粒混入 | 灰白色 | ヨクロ土御器 | |
| | 115 | 45X002 | 素焼き土器 | かわらけ | 脚部片 | | 微砂粒混入 | 灰白色 | 外縁全軸にヘラ調理 | |
| | 116 | 9T | 陶器 | 焼成灰 | 約15個体 | | 微砂粒混入 | 灰白色 | ロジナグ・削部ヘラ調理 | |
| | 117 | 9T | 土器 | 灰 | 灰被り | 18.8 | | 砂粒混入 | 灰被り | |

第3表 佐賀城跡出土銭貨計測表

| 辨認番号 | 銘種 | 王朝名 | 書体 | 初鑄年 | 綴錠径 | 横径 | 縦内径 | 横内径 | 銘厚 | 背文 |
|---------|------|-----|----|------|-------|-------|------|------|------|----|
| 第17回B2 | 熙寧元宝 | 北宋 | 篆書 | 1068 | 24.10 | 24.16 | 6.64 | 6.58 | 1.15 | |
| 第22回106 | 元符通寶 | 北宋 | 行書 | 1098 | 23.21 | 23.31 | 6.59 | 6.69 | 1.04 | |
| 第25回113 | 熙寧元宝 | 北宋 | 真書 | 1068 | 23.21 | 23.90 | 7.01 | 7.01 | 1.33 | |
| 第28回124 | 皇宋通寶 | 北宋 | 真書 | 1038 | 23.54 | 23.42 | 6.34 | 6.36 | 0.92 | |

第3節 まとめ—近世初頭佐貫城との関連において—

検出された屋敷跡は近世佐貫城から約400mほど東にいった字八幡下の地にある。ここは小さな谷の入口に相当し、前面に水田、その先に染川支流の小河川が西流する。その構成は掘立柱建物3棟に、周囲を巡る構であった。また、背後の平場は屋敷地より若干高く、谷奥に向かって小高くなっている、多分に推測ではあるが畠地の可能性が指摘される⁹。

問題はこの屋敷地から出土した遺物、それも陶磁器の年代がある一時期それも近世初頭の様相を示すことである。即ち、編年の進んでいる瀬戸・美濃産陶磁器で言えば一部にそれ以前の製品を含むものの、ほぼ大窯IV期¹⁰のなかに収斂することで、これは数多い本県の中・近世遺跡調査例でも極めて珍しいケースといつてよい。大窯IV期の年代は藤沢良祐によれば1590年代初頭から1610年代の間にあり、志野製品の登場をもって前半と後半に分けられ、更に末期には織部や鼠志野もあらわれるという¹¹。流通・消費のタイムラグもあるだろうが、屋敷の年代はIV期の後半のなかにほぼ収まるものとしてよいだろう。

佐貫城は里見氏に替わって天正18年（1590）8月に内藤家長が入城するが、元和8年（1622）10月、子の政長代に磐城へ転封となった。当初は2万石後に加増され4万石となり、その領地は上総国天羽郡さらに安房平郡が加えられた。すると、当屋敷地はこの内藤氏時代の所産とみてよいだろう。

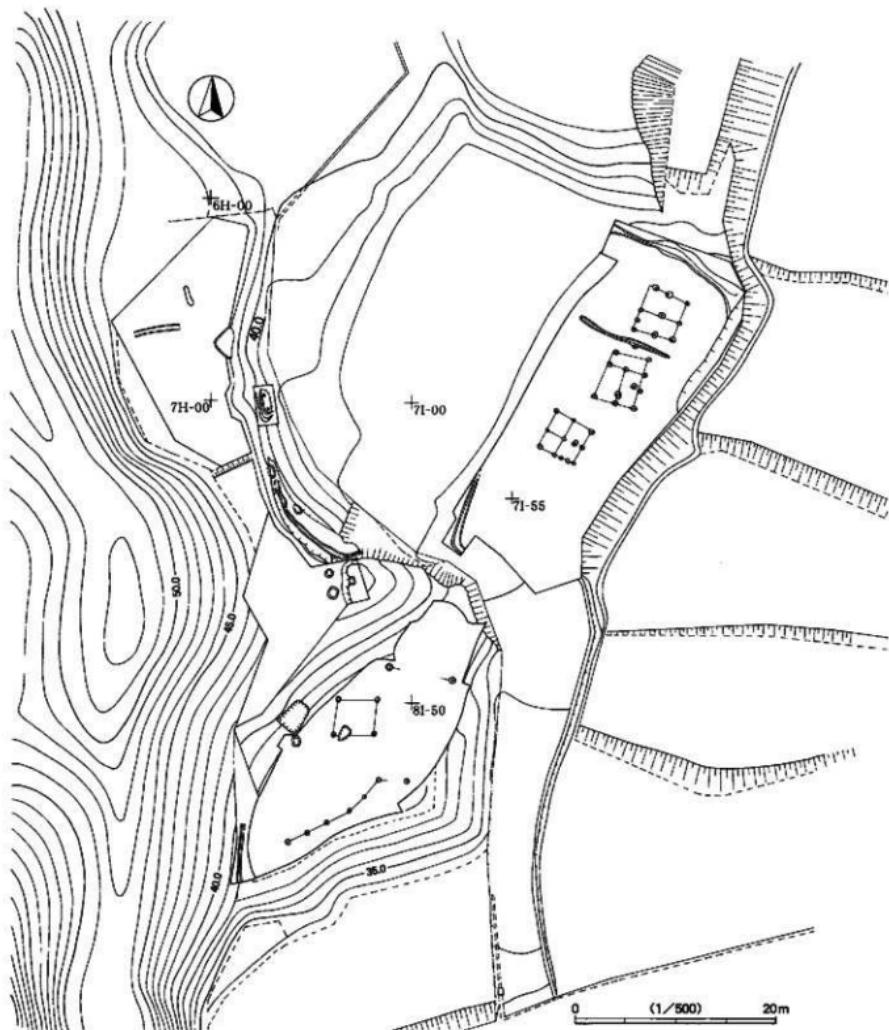
内藤氏は三河岡崎の郷士を出自とし、代々徳川（松平）氏に仕えて頭角をあらわし、家長代には石川数正に属して戦功を積み、家康の関東入国に当たり佐貫を与えられた。江戸屋敷は桜田である。慶長5年（1600）、関ヶ原の役前哨戦ともいべき伏見城の戦いで鳥居元忠、松平家忠等と共に討死、二男元長もこれに殉じた。現在、父子の石塔は佐貫勝隆寺（当時善昌寺）境内にある。

佐貫時代の内藤氏は、慶長19年の館山城請取（里見氏改易）、元和元年（1615）大阪夏の陣（政長江戸在番、嫡子忠興従陣）、同5年の東金鷹狩り供御、同6年久留米城請取（田中氏収封）と多事を極めたが、この間の佐貫城及び城下の情報は残念ながらまったく乏しい¹²。しかし、内藤氏は里見氏の跡をうけるかたちで入っており、少なくとも当初は前代の遺跡に規制されたはずである。そこで、推測を交え以下多少の見通しを述べる。

戦国末期の佐貫城は永禄8年頃から、里見家当主義弘の居城であった。天正6年（1578）に義弘が没して後、小弓公方の血を引く実子梅王丸がその継承者として登場したものの、安房に居た長子義頼と対立し、天正8年には梅王丸というより彼を支えた上総分国家臣達が敗北するかたちで終結した。一乱後の佐貫城には北条氏時代から城代的立場にあった加藤氏¹³が在城し、それは天正18年まで続いたようである¹⁴。では、現存する遺構がそれにどう対応するのだろうか。

一般的に、上総の丘陵城郭は戦国末期に至り大堀切と切岸による曲輪の懸崖化が顕著となる。この点、現存する佐貫城の曲輪の周囲も基本的に同じ手法である。ただ一つ特異なのは本丸一二の丸間の堀の規模の大きさと内構形状の虎口構造であり、内藤氏が手を付けたとすればやはりこの部分であろう¹⁵。とはいえ、全体的に見れば中世の面影を色濃く残した城であるといってよい。

さらに、本丸北東の字黒部谷・産所谷・島屋敷はそれを大きく囲む丘陵尾根の外側を切岸状に整形しており、内容からして中世佐貫城に伴うものと考えられる¹⁶。このようなあり方は戦国末まで存続した上総国衆クラスの居城で認められ、いわば根小屋または宿を包括する思想の産物でもある。調査地点はまさしく黒部谷の切岸外東南にあり、その西側には北新宿という字名もある。内藤氏が里見氏の遺産をそのまま受け



第29図 遺構全体図

継いだとすればまさしく宿の一角ということにならうか。

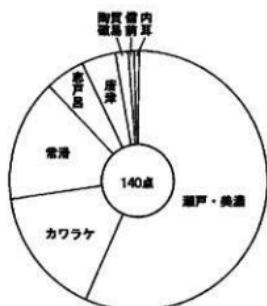
ところで、内藤氏の後は、桜井松平氏—能見松平氏—（城番・廢城期）—阿部氏と交代した。阿部氏が入城（宝永7年：1710）するに当たっては、幕府に再興願（宝永7年「上総国佐貫城地取立普請所々」絵図）⁹を提出しており、この絵図をみると佐貫城の縄張は現存する状態と基本的に同じで、要するに阿部氏は入城に当たって本丸から三の丸の門や、三の丸御殿及びその周囲の屋敷地（御殿山）付近の平地また染川南の宇古宿・新宿一帯）を重点的に整備したにすぎない。ただ注目される点は、本丸一二の丸間の堀



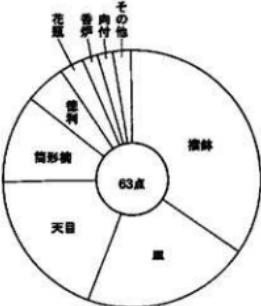
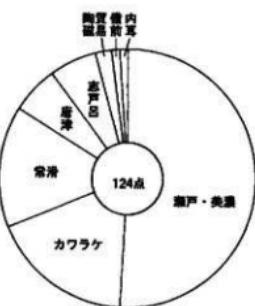
第30図 佐賀城跡縄張図

を「如元」復元したいとしていること、また、現国道127号沿いの上宿～島屋敷～和田、黒部谷や産所谷までその南まで「侍屋敷明地」と記していることである。つまり、阿部氏以前に本丸一二の丸間の堀の原型は既にあり、また、本丸からその東側一帯はかつては侍屋敷であったということになる。両松平氏が佐賀城を改変する理由は見当たらないので、現存する城郭構造さらには外郭一帯における墨敷地の存在は少なくとも内藤氏時代に遡る可能性が高いとみてよいのではなかろうか。

ところで、島屋敷の北側には字上宿があり、対になる字下宿はないものの、恐らくその下手、つまり字



平場3 中世～近世初頭陶磁器等在地產土器产地別割合 平場3 近世初頭陶磁器等產地別割合 平場3 近世初頭窯戸・美濃製品器種別割合



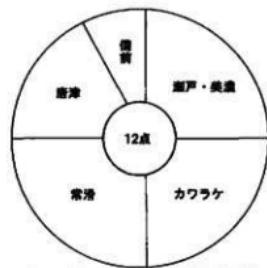
第31図 佐貫城跡陶磁器組成

小和田先が本来下宿に相当するのであろう。そして、黒部谷南に現存する字北新宿及南新宿とはむしろこの北側の宿に対するものであつたと思われる。だとすれば、その成立はいつにもとめられようか。

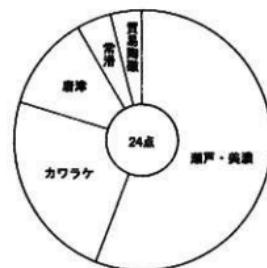
この点、弘治年間（1555～1557）には、既に「佐貫新宿」の存在が知られる^四ことから、まさしくこの新宿がそれに相当するとすれば天文期であろう。しかし、調査範囲内では中世の遺物は希少であり、より下層の調査に至っていないとはいえそこが宿の一角であつた可能性は少ない。むしろ前面の染川支流沿いが候補地となろう。

そうすると、近世初頭にこの谷戸において屋敷地が出現した背景が問題となるが、一つにはその階層性が鍵を握っていると考えられる。掘立柱建物自体は東国では近世に入っても継続することから問題ないとしても、その構造上はいさか貧弱である。日常生活用品は残るものとそうでないものがあり、一概に言えないが、陶磁器は明瞭な砥石や石臼がないかわりに、羽口と火打ち石は各3点ほど出土している。羽口の存在が即鎧物と結びつくとは思われないが、いずれにせよ土分層でも下級ないしは農民層といるべきであろう。とはいえ、屋敷地に隣接して小屋を有する平場や畠地、墓地があることから農民としても近世初頭の検地帳にみられる名請人^五に比定されようか。

以上の点からあえて結論を述べると、佐貫城は里見氏時代に根小屋また内宿とも言うべき黒部谷、島屋敷を取り込み、当初北上川沿い^六また後には南側谷にも宿が形成された。近世内藤氏時代にはその遺産を継承するかたちで宿が発展し、近世佐貫城下となった。検出された屋敷跡はこの宿外れない一角にあり、そこには既述した階層の人々の生活の跡がこされていた、ということになるが、里見氏時代の外郭部の調査は今回が初めてであり、あくまでも試論に



平場4 中世～近世初頭陶磁器等產地別割合



平場7 中世～近世初頭陶磁器等產地別割合



佐貫城跡 中世～近世初頭陶磁器・在地產土器等產地別割合

すぎない。ただ、里見氏時代の遺構は少なくともここでは検出されなかった、という事実は最後に付け加えておきたい。

註

- 1 屋敷地の背後に入れた確認トレンチでは遺構はなく、遺物も希少であったが、逆にいえばそういう緩斜面が背後に広がっていた事実に注目した。
- 2 藤沢良祐氏の瀬戸・美濃大窯編年四期区分による。
- 3 藤沢良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要』第10輯 なお、当註とは直接には関連しないが、古瀬戸後期様式の編年については藤沢氏、また、常滑の編年については中野晴久氏の次の文献ほかを参考とした。
藤沢良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅹ』
中野晴久 1994「赤羽・中野「生産地における編年について」「中世常滑焼を追って」資料集
- 4 僅かに内藤家文書ほかに拵って川名氏が言及したにすぎない。
- 5 川名登 1972「佐貫在城時代の内藤氏」『譜代藩の研究 譜代内藤藩の藩政と藩領』
- 6 この加藤氏については不詳の部分が多い。ただ同氏の軌跡からして、本来内房を出自とするものであろうか。なおこの点、「真里谷武田氏の旧臣で、佐貫城近辺を本拠としていた存在」との指摘がある(黒田基樹 2004「天文後期における後北条氏の房總侵攻」『市史研究 横須賀』第3号)。
- 7 梅王丸後の佐貫はその相対的位置は弱まるとはいって、天正18年まで里見領国の主要城郭として機能したことは確かで、それは城代加藤氏のみに収斂されるものではなく、この当時、同じ状況にあった久留里などと共に正木一族が配置されている事実にも注目してよい(西門院藏正木家過去帳「上総国諸侯大夫過去帳」『勝浦市史資料編中世』)。
- 8 昭和55年に本丸内で行った発掘調査はトレンチ調査で、かつ中途まで掘り下げたに過ぎず結果として、この課題に答えるものではない。本丸一二の丸間の土橋が盛土によるものであったり、瓦を含む「土壤版築」面があつたり、一部に「石垣」が認められたり、という点が明らかになっている。
- 9 黒部谷周辺を始めとした広域にわたる中世佐貫城の実態を最初に指摘したのは松本 勝氏である(「佐貫城跡」『千葉県中近世城館跡詳細分布調査報告書』Ⅱ)。ただ、この外郭のあり方は外側のみ切岸手法を施していることから、その内部の谷を取り込んだものと考えられる。
- 10 船橋市西図書館蔵 宝永7年(1710)「上総国佐貫城地取立普請所々」絵図
この御殿山であるが、現在の佐貫町並に近い日枝神社の背後の山を指し、そのまま解せば城主の居館であり、その北側平地の新御太刀谷(新御館の転訛か)も関連するのであろう。ここは阿部氏時代の御殿跡ではなくその館主の比定が待たれる。なお、参考ながら御殿山には城郭遺構はない。
- 11 佐藤博信 2003「日我周辺の人々の軌跡—日侃・日膳・日恩をめぐって—」『中世東国日蓮宗寺院の研究』所収 なお、佐貫城南西の勝隆寺門前付近も新宿というが、これは隣接する古宿に対応するものと考えられる。街道沿いに並んだ近世阿部氏時代の藩士屋敷地また長屋群に由来するものであろう。
- 12 とはいって、分付記載がそのまま上下に直結しないことは名請人でありかつ作人の事例がみられるなど、従来から議論がなされているところもある。
- 13 恐らくその起源は武田氏時代に遡るもので、信嗣開基の天佑寺が上宿とは北上川を挟んで対峙する点は示唆するところがあろう。また、里見氏時代に久川流域が町堀化(新宿)したとすれば、城の北側が相対的に廢れたわけで、天佑寺が天正年間に加藤信景中興とされることと符号しよう。

第4章 佐貫横穴群

第1節 調査の概要

1 調査の方法

佐貫横穴群は、調査対象の2基共に根木田入口山脇砦跡調査範囲内に所在しており、城跡の本調査終了をまって実施した。既に周囲には砦跡の調査に伴うグリッド杭があることから、調査に当たっては横穴中央主軸線上に複数の杭を設定し、公共座標と整合させることとした。

遺構の平面図は平板測量とし、断面図は主軸線と直交するラインを適宜設けて作成したが、SI002についてはその構造から遺構の形状に合わせて実施した箇所もある。また、遺構の写真は中判（主にモノクロ）及び35mm（モノクロ、スライド）で行った。

なお、遺構の名称についてであるが、調査時には横穴1、同2というように番号をふっているが、城跡ではすべて奈文研方式で行っており、整合性という点から報告書ではST001、同002とした。

2 調査の経過

調査は平成14年2月から着手した。既にST001については、中世の城跡普請に伴い上部地表の形状が大きく損なわれ、ST002についても壁の崩壊が顕著であった。まず、羨道、玄室に堆積した土砂を取り除き、次に清掃に至るも、開口していたためかその過程を含め遺物はまったく出土しなかった。実測作業は清掃終了後に順次おこない、最後に写真撮影を終えて調査を完了した。丁度2か月の期間である。

なお、このほか、調査時に城跡大堀切に重複するかたちで、横穴1基（横穴3）を新たに検出したとするが、整理時に検討した結果、遺構と判断し難いことから、これについては報告書では割愛することとした。

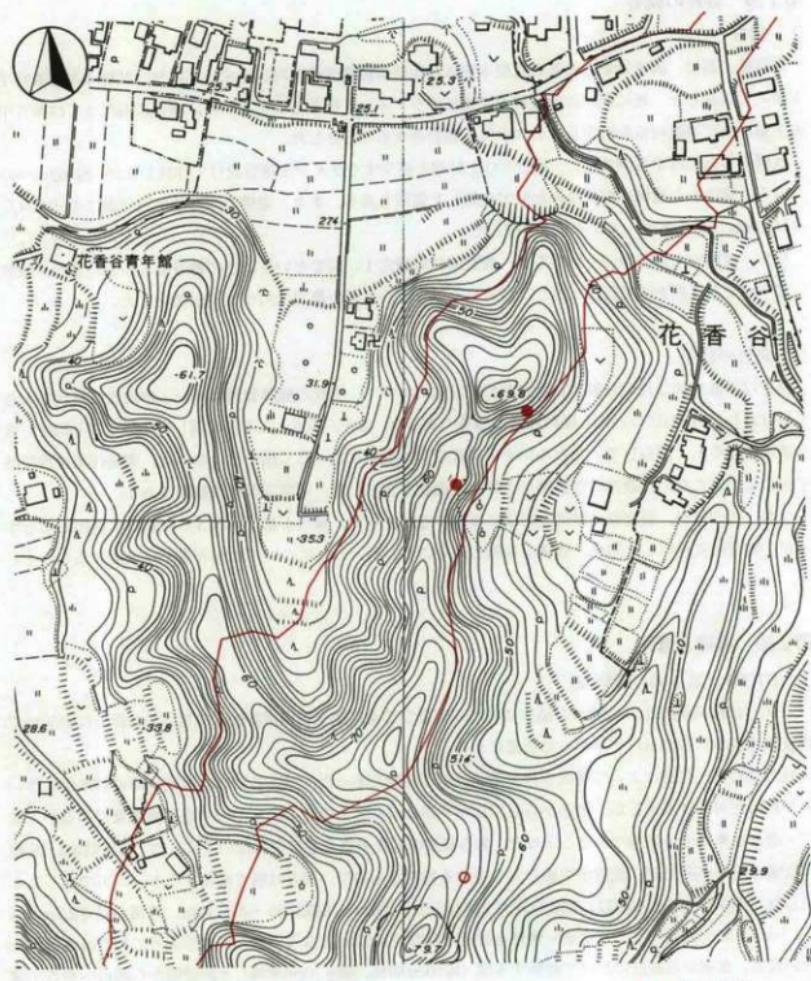
第2節 遺構と遺物

1 ST001（第4図、図版32）

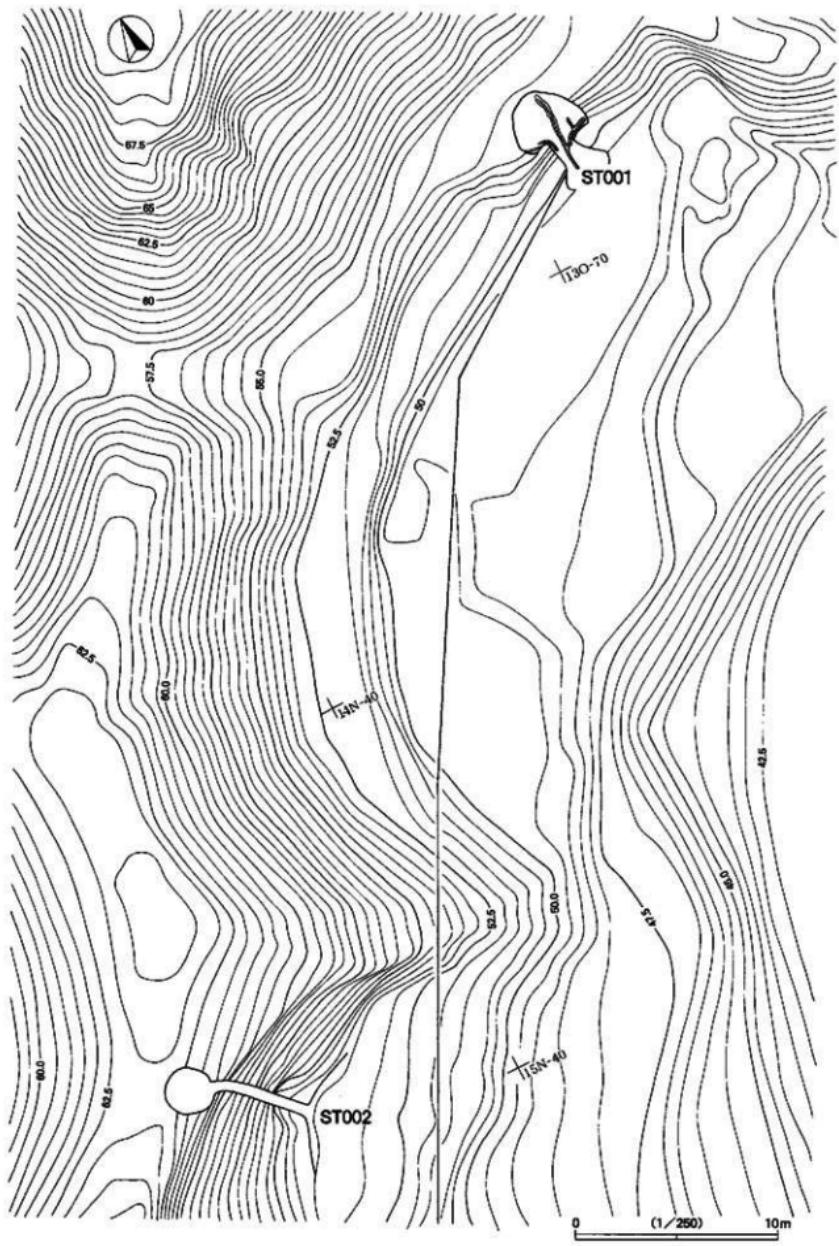
ST001は標高約80mの山陵から染川に向かって延びる支尾根先端の東斜面に立地する。標高は約50mで、背後の尾根から約15mほど下がった位置にある。

横穴は玄室、羨道によって構成され、墓前城は不明瞭であった。城跡普請また近世以降の耕地化に伴い失なわれた可能性があるが、地形からして広がりがあったとも思えない。その向きは南南東であるが、玄室・羨道自体が多少不整であることなど、ある程度の幅を考慮せざるを得ない（N-13°-W前後）。形態は玄室平面形が剣先形、羨道が中膨らみを呈する特殊なもので、天井は緩く湾曲するドーム形であったと思われる（前面崩落）。規模は、玄室が最大で奥行2.7m～3.8m・同幅3.7m・高さ1.8m、羨道が長さ2.7m（以上）・幅1.9m～2.9mであり、玄室・羨道を併せた現存長は5.3mとなる。底面には棺座等の施設は確認されない反面、玄室から羨道にかけて縦断する溝（幅20cm前後、深さ10cm未満）と前壁際から羨道へ走る小溝が検出された。また、壁面の線刻等は確認されなかった。

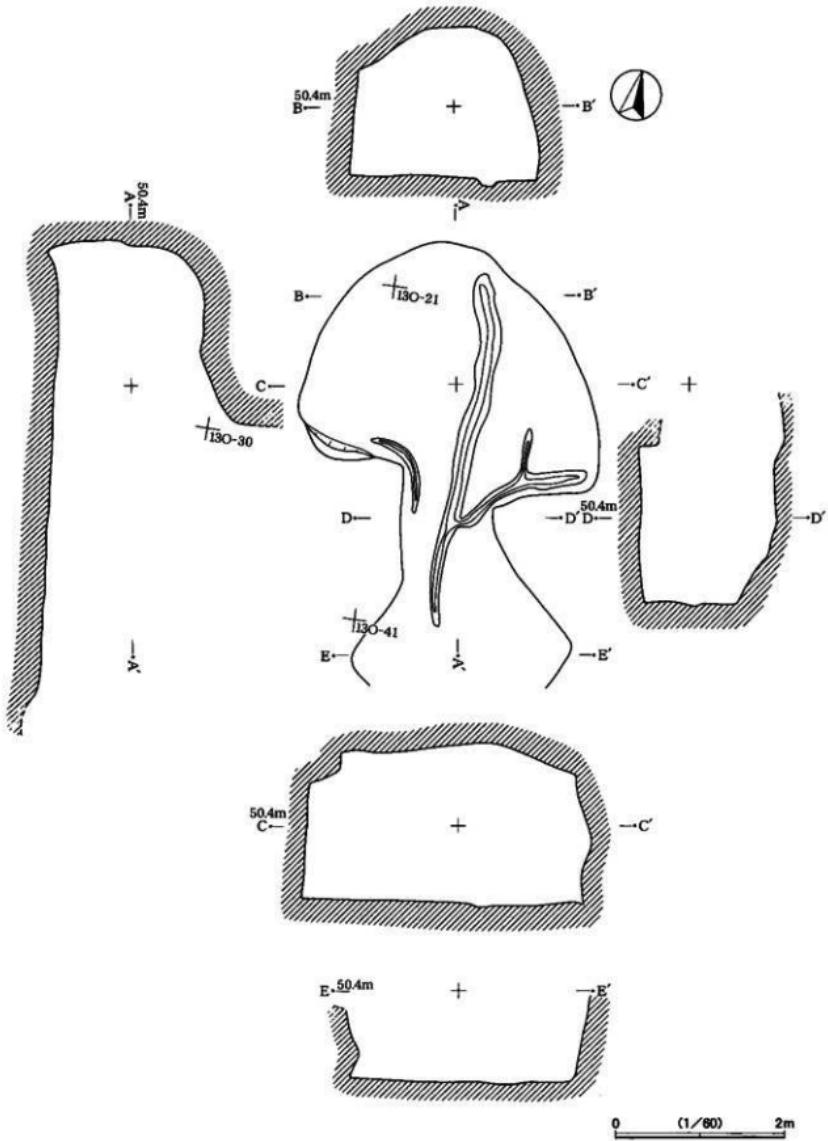
出土遺物は底面を精査したがまったく認められなかった。



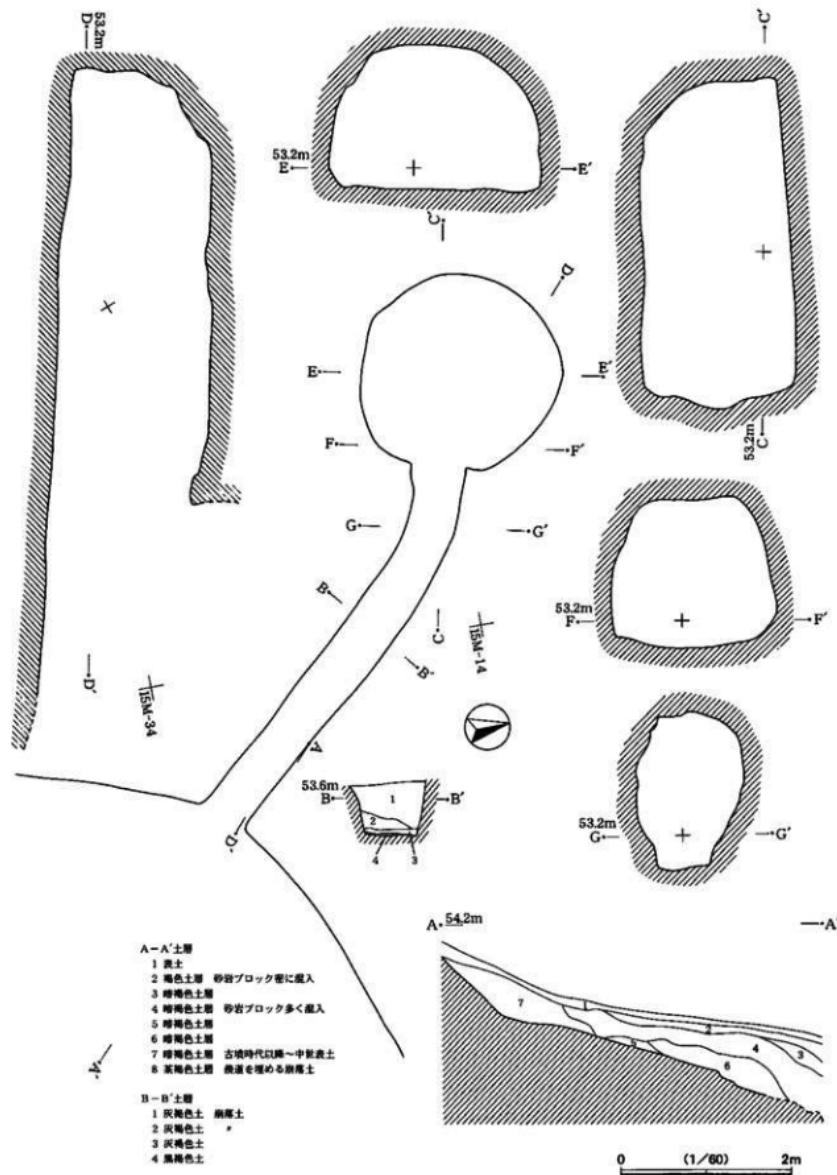
第1図 佐貫城跡横穴群調査範囲 (富津市地形図 1 : 2,500)



第2図 横穴の位置



第3図 ST001



第4図 ST002

2 ST002 (第4図、図版33)

ST002はST001の手前約50mの丘陵東斜面に立地する。標高は約53mで、背後の尾根から約10mほど下がった位置にある。

横穴は玄室と細長い羨道によって構成され、墓前域は001と同様不明瞭である。ただこちらは耕地化の影響は少ないとと思われることから、いずれにせよ明瞭な遺構は羨道までと解しておく。その向きは玄室が精円形でしかも羨道が長くかつ大きく湾曲していることなど、玄室の向きで考えれば東南東 (N-75°-W 前後)、羨道ではより南向きということになる。形態は玄室平面形が精円、羨道が細長い通路状をなし、天井はドーム形としてよい。規模は、玄室が奥行・幅共に2.3m・高さ1.7m、羨道が長さ5m(以上)・幅0.55mであり、玄室・羨道を併せた現存長は7m以上となる。底面には棺座、排水溝等の施設は確認されず、羨道を閉塞したような痕跡も発見しなかった。壁面の線刻等も同様である。また、出土遺物は底面を精査したがまったく認められなかった。

第3節 まとめ

佐貫横穴群は今回調査対象となった2基が確認されていたが、新たにその南の調査対象範囲外に1基が見つかったことから、計3基となる¹⁾。いずれも丘陵東側の花香谷に開口し、その方位は南または南東である。この谷は現在も水田が奥深く続き、東岸には緩斜面も見られることから、横穴を営んだ集落の存在が想定される。

次にその構造であるが、ST001が平面三角・断面アーチ形の玄室に前開きの羨道部、ST002が平面円形・断面ドーム(天幕状)形の玄室に細長い羨道部を有するものであった。いずれも玄室と羨道の間は無段で、棺台・棺座が無い反面、1基(ST001)にはいわゆる排水溝が付属する。このような構造は周辺はもちろん、西上総でも類例に事欠くものであり、伴う出土遺物も皆無であった。しかし、従来の編年観²⁾では、平面方形ないし長方形で、無段、無棺台ないし奥壁に平行して割り抜き棺台(造り付け石棺)を設けるタイプは初現期と想定されており、その意味では古い要素を有しているといえるであろう。群集をなさない点も同様である。

そうすると、出土遺物に事欠くものの6世紀代に遡る年代が想定されるが、丘陵を隔てた東側谷に所在する神宿横穴群³⁾ではまさにこの初現期から続く古いタイプの横穴群であり、そこでは2号横穴のようにST002に近い平面形を有するものもみられる。重要な点はこの神宿例はその後の横穴の変遷に合致することで、その意味からすれば佐貫横穴群はそれを遡る所産の可能性があり、未確認の横穴を含め今後の詳細調査が望まれる。

註

- 南北約300mに及ぶ丘陵の間で3基というあり方はいずれにせよ実態ではないであろう。
- 次の文献等があげられる。
 - 西原崇治 1991「上総地方の横穴墓の諸相(上)」「立正考古」第30号
 - 松本昌久・上野恵司 1991「千葉県内の横穴墓群」「関東横穴墓遺跡検討会資料」
 - 野中 徹ほか 1978「神宿横穴群発掘調査報告書」神宿横穴群発掘調査団

第5章 根木田入口山脇砦跡

第1節 調査の概要

1 調査の方法

根木田入口山脇砦跡は高田遺跡の南に隣接することから、その地区割りは両者を大きく含むかたちで行った。地区割りは、南北を算用数字、東西をアルファベットで20m方眼の大グリッドを設定し、そのなかを更に2m方眼の小グリッドとした。なお、この区割りに従い、調査区の要所に公共座標に基づく方眼杭打作業を業者委託を行った。

確認調査は、佐賀城と同様、曲輪と思われる平場の向きや傾斜に直交するトレーナーを基本に、一部は十字形に設定するなど適宜条件に応じて進めたが、排土処理や地形上の制約から調査の手が及ばなかった箇所もある。

本調査は確認調査の結果をうけて範囲を決定した。とりわけ遺構が集中する主要な平場についてはほぼ尾根全面の調査となった。検出した遺構の実測は平板によるが、石積みは簡易造り方とした。また、遺構の各景は中判（主にモノクロ）・35mm（モノクロ、スライド）で記録し、全景はラジコンヘリによる空中写真（平成13年度のみ）とした。また、城跡全体の測量図は業者委託により、1/500の地形図を作成した。

なお、高田遺跡と接する北側中段の平場（平場A・B・C）については年度を改め（平成14年度）調査を行ったが、前年度の調査結果から確認無しの本調査とした。

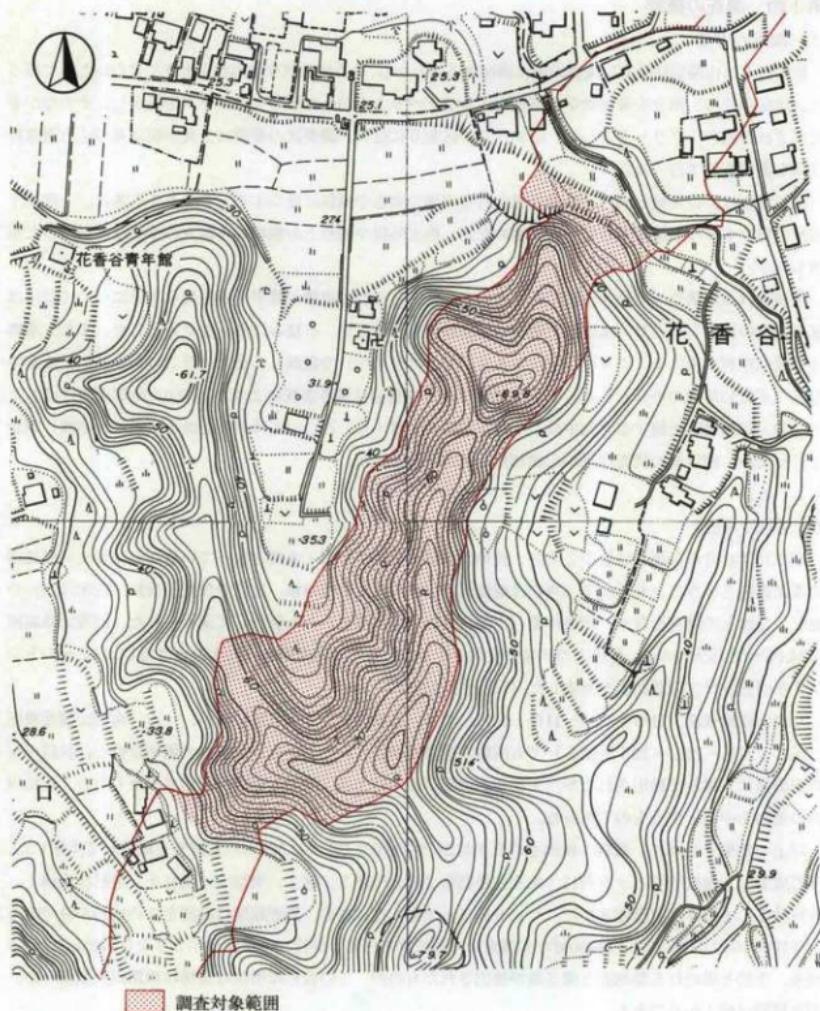
2 調査の経過

平成13年6月から調査に着手したが、現地は城跡の周囲が民家・寺院となっていることに加え、道路幅の事業範囲ということもあって、当初は環境整備（進入路、法面対策、通路の設置、伐採・伐木ほか）や地区・住民との調整を含め、測量作業（方眼杭打ち・地形測量）とも併行して進められた。調査対象範囲は24,140m²と広大ながら、尾根上の平場や緩斜面を対象として一部重機それに人力を併用し、幅2mのトレーナーを適宜設けて確認調査を実施した（743m²/24,140m²）。

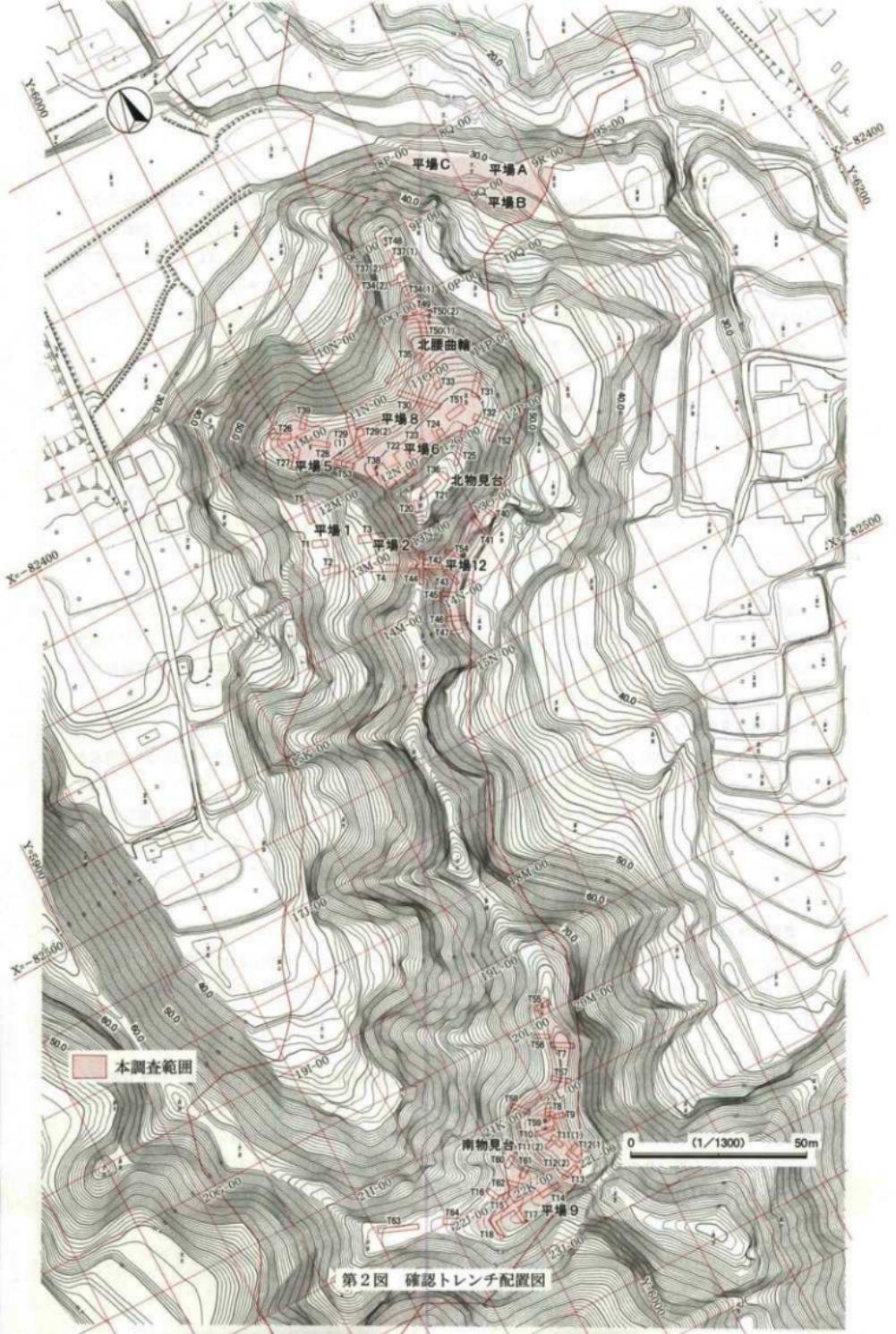
北側山陵尾根面（11O・11M～11O・12N）では、多數の中世ピット群・溝が、一方、南側山陵尾根面（20L・21K～21L・22J～22L）でも同様の遺構が確認された。また、北側の大堀切東側では数段の平坦面肩部に石積みが検出されたが、大堀切西側緩斜面では土坑・溝等の遺構が確認されたものの、近世以降の遺物を中心とするものであった。

以上の結果を受けて、遺構の検出された平坦面（平場9か所）約2,500m²の本調査を継続して実施した。その成果は、規格的なピット列11、掘立柱建物跡2棟、門跡1、堀2、堀切1、溝11条、道路状遺構1、井戸跡1、土坑4、石積み3か所、ピット群ほかであった。なお、調査期間は確認を含め約10か月である。

平成14年度は北側中段平場460m²の本調査を方眼杭打ち作業と併行して平成15年2月から開始した。その結果、中世と思われる整地面と溝3条が検出されたものの、この他には明瞭な遺構は確認出来なかった。調査期間は約1か月である。



第1図 根木田山駆除調査範囲（富津市地形図1:2,500）



第2図 確認トレンチ配置図

第2節 遺構と遺物

各遺構の呼称として、城郭用語は対象の性格を表すものという観点から、一部については整理時に改めている（その異同については第4表参照）。また、平場という呼称も佐貫城の場合とは異なり、調査結果からすると腰曲輪と呼ぶべきかもしれないが、城跡の性格も加味してそのままとした。以下、個別の説明に移るが、遺構は大きく北側山陵、南側山陵、北側中腹に分かれており、便宜上その3ブロックに大別する。なお遺物の説明のうち、とりわけ直接に遺構の年代とかかわる瀬戸・美濃産陶磁器の時期については、ほぼ單一（古瀬戸後期IV～大窯I期）の様相を示すため必要な場合以外はあえて記さなかった。

1 北側山陵の遺構

（1）北物見台（第3・4図、図版34～37・44・46）

北側山陵山頂部（標高69m）の平場を北物見台と呼称した。ここは、南側尾根続きを堀切で画し、北側は斜面下部を整形して平坦面（平場6）を作り出し、独立した平場とする。平場は東西20m、南北5m～6m程の広さで、多少瓢箪形の細長い形状である。周囲には土壘、堀なく、地山整形ないし整地層も見られないことから、平場自体は自然地形をそのまま活用したものであろう。また、検出された遺構は墓坑1基と緩慢な分布を示すピット群にすぎず、希薄なあり方といえよう。

SK004（第4図、図版37・44・46）

土壤は西端の山頂部に設けられ、その大きさは長径2.7m、短径1.25m程で、深さは確認面から0.4mである。覆土は砂岩ブロックを多く含むもので、埋め戻した痕跡が明瞭である。遺物は底面近くから宋錢が2点出土した。いわゆる六道錢であろう。出土位置が北側中央であることから、北向きの横臥ないし伸展葬で葬られた可能性が高いと思われる。錢は2点共に北宋錢（元豈通寶）である。

北物見台東側ピット群（第3図、図版35・37）

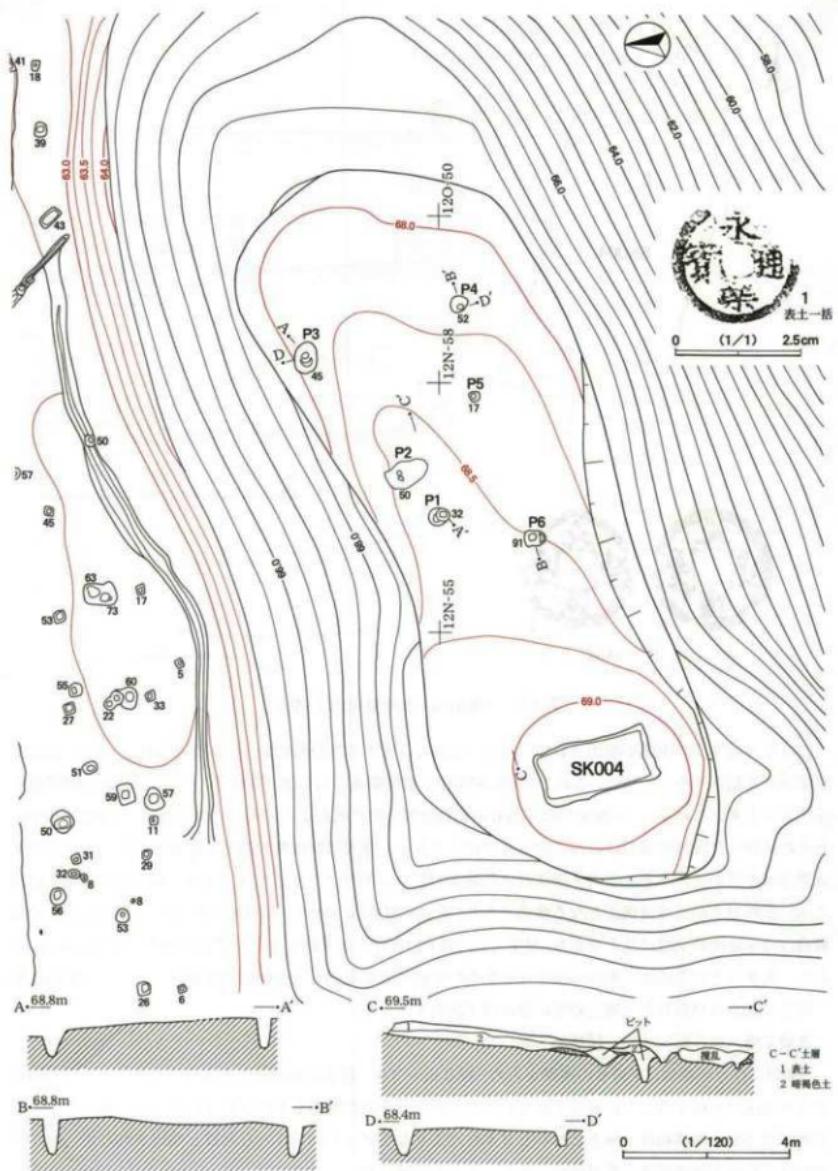
ピット群は東側で検出された。その総てが掘形内側が方形となるも、深さはP2・P3・P4が50cm前後と揃っている他はまちまちである。また、P1は内部に焼土・炭化材が多く入っているという状況であった。これらはP3とP4が同一の特徴を有していることから一連のものと考えられ、P2も木の根の攪乱で上部が破損しているものの、類似する。しかし、P2に対応するピットは見あたらず、この3基だけでは三角形の構造物となってしまう。P3とP4と間隔からして、東側本調査範囲外にも対応するピットが存在する可能性はあり、いずれにせよ結論は差し控えたい。

遺構に伴わない遺物（第3・4図、図版44・46）

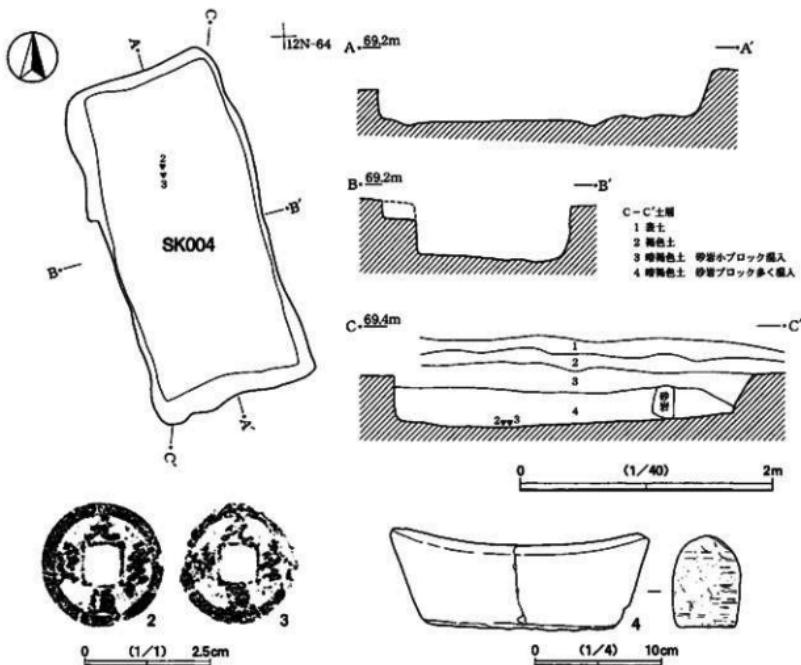
曲輪内から出土した中世の遺物は明錢（永楽通寶）1点のみである。この他に近世の遺物として、石祠の棟に当たる部分が物見台表土層中から出土した。城跡とは直接の関係はないが、山頂部が後世に信仰の地として活用されたことを物語っているのである。

（2）平場6（第5図～10図、図版35・36・44・46）

北物見台の北側中段（標高62m～63m）に位置し、その比高差は約6m程である。南側、つまり物見台側を多少削って整形したことはセクションからも窺われるが、それは大規模なものではなかったようで、北側にも大きく盛り土をした痕跡は見当たらない。人々、物見台の北側に平場が廻っていたということなのである。その幅は6m～8m、長さは30mをこえるも、周囲は人為的に整形したり掘り切るということもない。いわば自然にまかせたもので、これはこの城の一般的な様相でもある。



第3図 北物見台



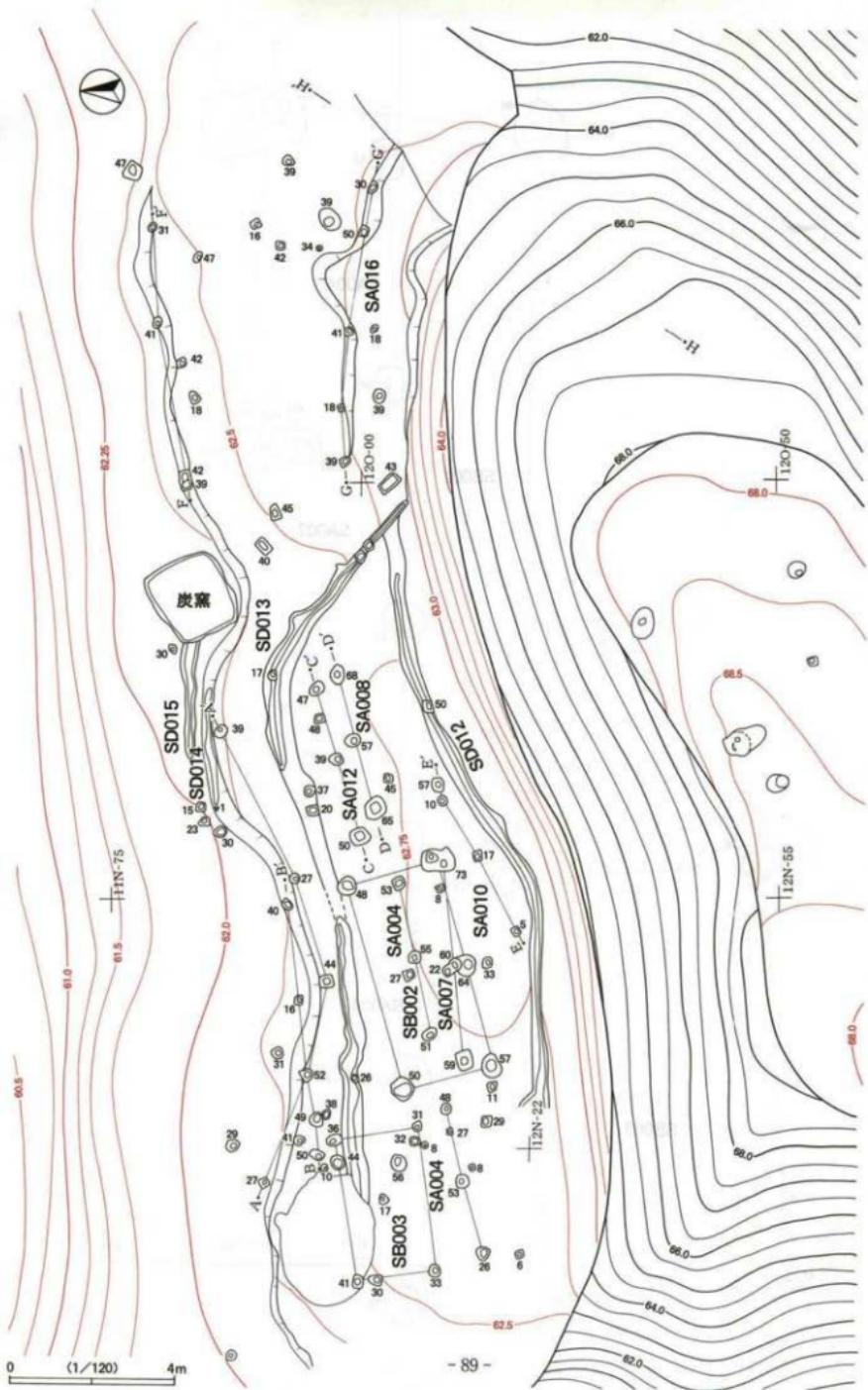
第4図 SK004・北物見台出土遺物

ここからは多くの遺構が検出されているが、それらは大きく部分的に溝（SD012、SD014）を伴う2段の平場面に集約される。しかし、これとは別にSD012と重複関係にある溝（SD013）があり、これは時期差を示すものと考えられる。このSD013は平場6の南西を部分的に囲むように走っている反面、SD012・SD014とそれに伴う2段の平場はほぼ同じ向きに併行しており、後者は同時期の所産と想定される。ではその前後関係はどうかというと、この平場に設けた数条のトレントセクションでは、ほぼ全域に渡って表土に統く薄い漸移層下が直接遺構面となる状態であり、それはSD013の内側でも同様であった。つまり、2段の平場造成は平坦面の全域に及んでおり、結果としてSD013に伴う面を壊すかたちで行われたと推測される。しかし、両者はその企画性や地形の程度などからいずれにせよそう大きな時間的懸隔はないものと思われる。

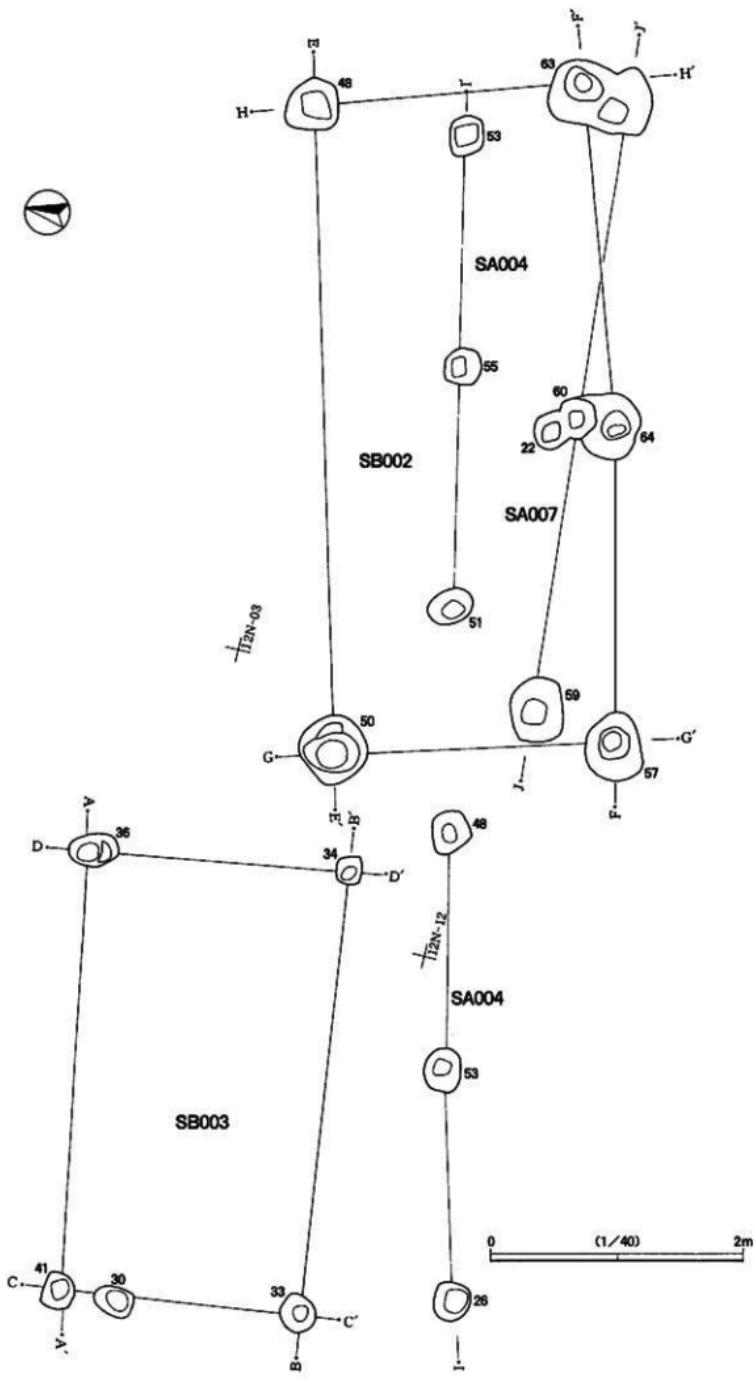
以上の点から平場6を古期と新期に分け以下説明する。

古期平場（第5図～8図、図版35・36）

SD013に伴う平場は、平場6の西側を占め、幅2m～3m、長さは20m程の大きさである。ちょうど物見台の平坦面と平行するように設定されていることから、その意識のもとに企画されたものであろう。この区画内には掘立柱建物跡1棟と2ないし3本柱穴よりなるピット列が4～6列ほど検出されたが、掘立柱建物跡は新期平場に帰属する可能性が高く、そちらで扱った。



第5図 平場6



第6図 SB002・SB003・SA004・SA007

SD013 (第5図、図版35・36)

古期平場を区画すると考えられる溝であり、段差（南側が10cm～20cmほど高い）に伴うかたちで平場南側を区画する。一部途切れている箇所もあるが、本来は廻っていたものと思われる。その幅はだいたい20cm～30cmほどで、深さは北側からで10cm、南側からは20cm以上となる。物見台の東端直下を基点に北西方向に向けて平場を横切り、途中で平場と併行するようにその西端に至る。概して、規則的かつ整った作りといえよう。

SA007 (第5・6図、図版35・36)

SB002南側ピットと一部重複しながらも多少方向の異なるピット列であり、建て替えの可能性はないと思われる。その新旧は不明ながら、径・深さ共にあり、また掘形も整っており、該種ピット列のなかでも中心的なものといってよい。3本1組で、柱間は約8尺程である。

SA004 (第5・6図、図版35・36)

東側はSB002の内側に収まるように延び、その西側はSB003と併行するピット列であり、全体として古期平場の向きに最も合致する。6本1組のピット列である。あるいはその東西で3本1組として捉えられなくもないが、中央の間隔も同一であることから、一連のものと考えた。その柱間はだいたい6尺で、長さは9mとなる。

SA006 (第5・6図、図版35・36)

SB002の東側に並列する2列のピット列のうちの南側のものである。3本1組で、柱間は約5尺程である。

SA012 (第5・6図、図版35・36)

SB002の東側に並列する2列のピット列のうちの北側のものである。3本1組で、柱間は同じく約5尺程であり、両者は規模・構造共に似通っている。

新期平場 (第5・6図、図版35・36)

SD012・SD014とそれに伴う2段の平場は平場6の全域（古期平場含む）を占め、幅7m～10m、長さは33mを前後する大きさである。南側柵台1に接する裾には、浅い溝（SD012）ないし低い段差を廻らせて境界とする一方、西側は特別に肩部を整形した様子は窺えない。この点は東西両脇も同様である。この区画内には掘立柱建物跡1棟と段差に沿って設けられたピット列群、それに不連続かつ散在するピット群である。

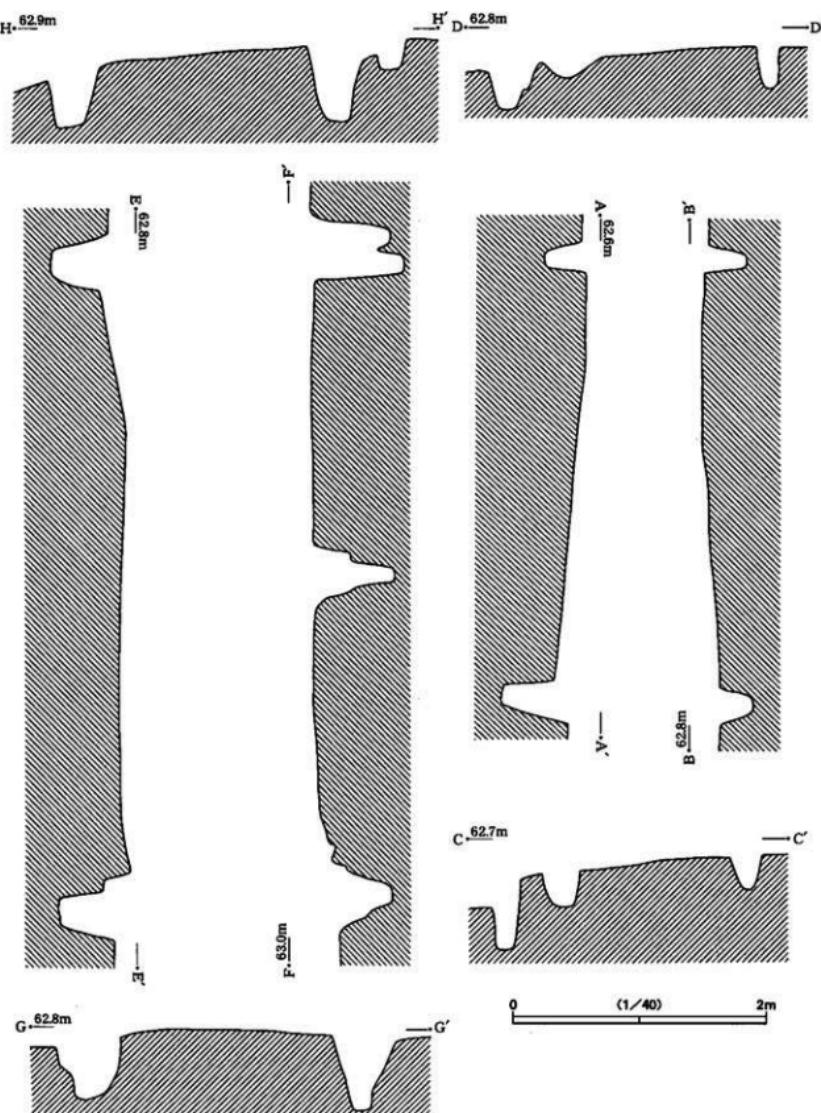
SD012 (第5・6図、図版35・36)

新期平場の山裾を区画すると考えられる溝である。その東側は一部不連続となるものの、SA016に伴う段差と本来一連のものであろう。幅は40cm～70cmながら、深さは10cm前後と浅い。物見台の東端直下を基点に多少波打ちながら西側に延びているが、その西端では不明瞭となる。形状や底面の凹凸など全体に雑な作りである。

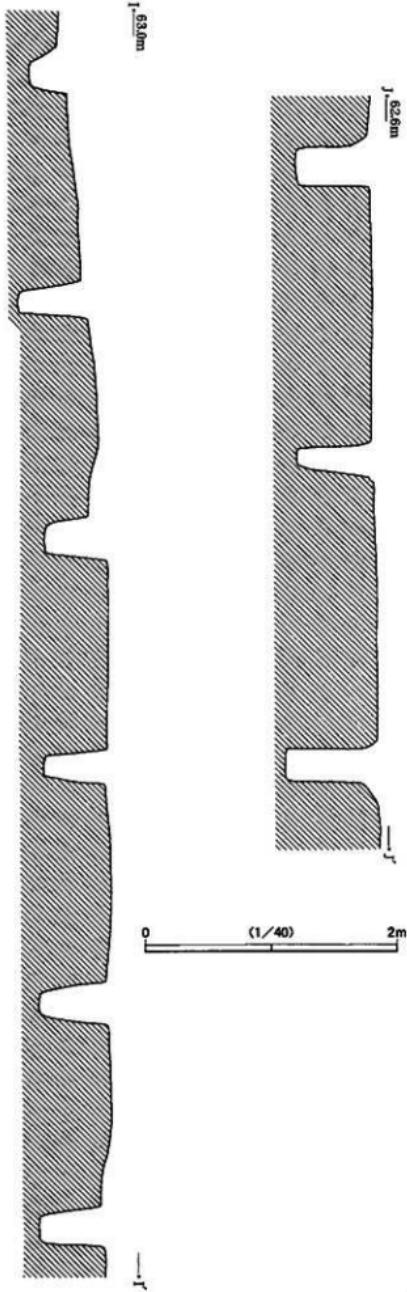
SD014 (第5・6図、図版35・36)

新期平場の谷側を区画する溝であり、その両側に続く段差と本来一連のものであろう。溝自体の遺存部は僅かであり、幅も狭く浅い（10cm未溝）ので、段差の縁に沿って廻っていたとしても検出部分を越えるものではないと思われる。段差は西側で明瞭（20cm）ながら、炭窯付近から東側では徐々に浅くなつてゆく。

溝の西端付近から宝篋印塔基礎部が出土した。2段の段形を有し、各面は2区とする。上幅約12cm、下



第7図 SB002・SB003断面



第8図 SA004・SA007断面

幅17cmで、高さは18.5cmである。なお、石質は安山岩である。

SD015 (第5・6図、図版35・36)

SD014の遺存部谷側に併行するように隣接する溝である。幅は20cmほどながら、深さは5cm未満と浅く、痕跡程度にすぎない。SD014との関係は不明ながら、その向きからして、あるいは、その東側段差に伴うものかもしれない。

SB002 (第5図～7図、図版35・36)

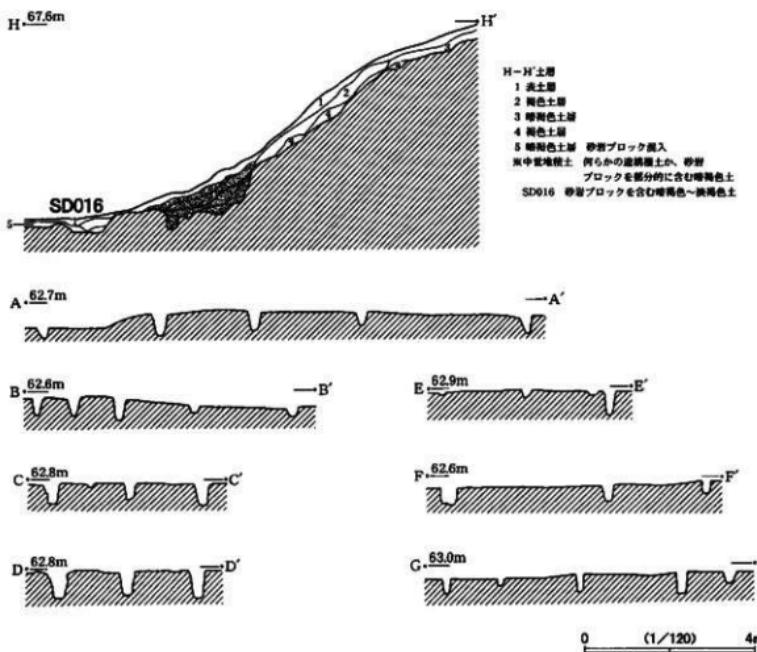
北東尾根平場の門の遺構と並んで、当城跡では明瞭な掘立柱建物跡である。間取りは梁間8尺、桁行17尺で、1間×1間の細長い建物となる。なお、南側は中程に間柱があるので、南側桁行のみ柱間8.5尺ということになる。南側が山際に当たっていることから、建物自体の向きつまり北側が前面になろう。

北側に間柱が無く、柱の間隔が開いていることなど、上屋があったとしても矮い程度で、前面もオープンの状況ではなかったかと推測される。佐貫城を望む北側山陵の中心部にあり、しかもこの城跡内では他にない明瞭な建物構造を有するなど、敢えていえば本陣に相当する施設と考えられる。

SB003 (第5～7図、図版35・36)

SB002の西隣に併行するが、こちらは北側に大きくずれ、SD013をまたいでいることから新規平場に伴う遺構とした。間取りは梁間約6尺半、桁行約11尺半で、1間×1間の横長の建物と思われる。これも、建物自体の向きは北側になろう。

SB002と比べると、より規模は小さく且つ柱穴の規模や作りが劣ることは明らかである。その方向もSB002とは多少異なりむしろ地形の向きに合わせて設けられたようである。とはいって、SB002の脇にそれを避けるかたちで作られたことは確かであり、いわゆる本陣に付属する建物とみておきたい。



第9図 平場6 トレンチセクション・造構断面図及び出土遺物

SA010 (第5・9図、図版35)

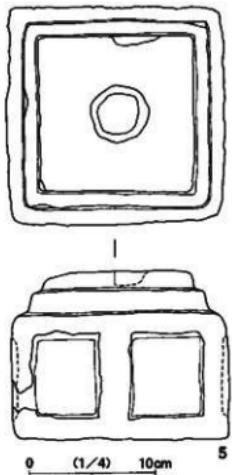
SD012の北側に近接して設けられたピット列であるが、ピットの径・深さ共に幾分貧弱で、これは段差の縁やそれに伴う溝に付属する一般的なピット列と異なる特徴である。3本1組で、柱間は約6尺半程である。

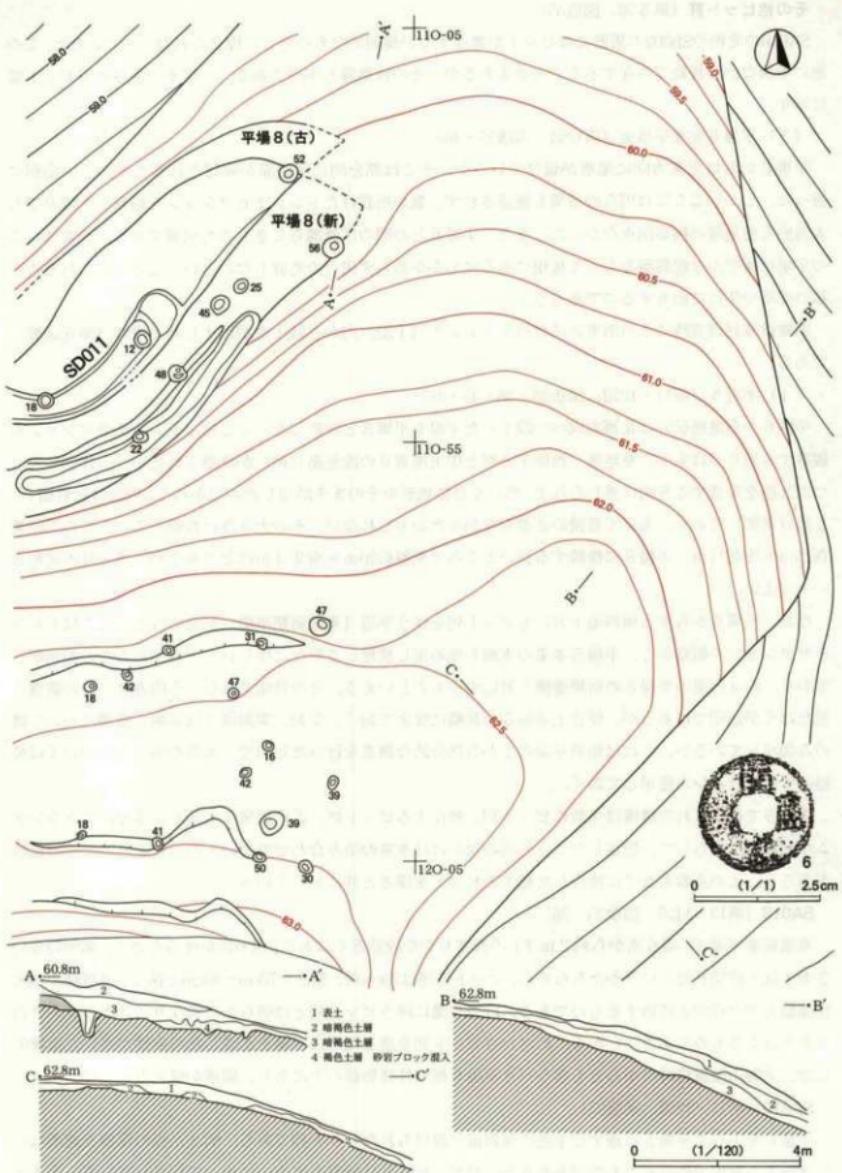
SA016 (第5・9図、図版35)

SD012の東端北側約1.5m程の位置にそれと併行するかたちで低い段差(約10cm)が約8m程認められ、その縁に沿ってピット列が廻っている。ピットは計5本で、径のわりに深い(30cm~40cm)という特徴がある。なお、その間隔は4尺~8尺と一定しない。

北側段差縁に付属するピット列 (第5・6図、図版35・36)

北側段差の縁に付属するピット列はその間隔もまちまちで、規則的な繋がりとしては捉えられない。しかし、径のわりに深さはあり(30cm以上)、該種のピット列の特徴を有している。いちおう検出したもののエレベーションを示しておくが、見逃しているピットもあるう。





第10図 平場6北東平垣図

その他ピット群（第5図、図版35）

SA016の北側やSB002の周囲にはピットが散在するが規則的なものとして捉えられなかった。また、この他に単独ないし複数で存在するものもままあるが、その性格等も不明である。一応その深さのみピット脇に示す。

（3）平場6 北東平坦面（第10図、図版35・46）

平場6からは北東方向に尾根が延びているが、そこは部分的に平坦面が確認されることから一応別に扱った。しかしここには何らの遺構も確認されず、數か所設けたトレンチセクションを観察した限りでも人為的な整地層は観察出来なかった。また、平場6との間の区画溝らしきものも同様である。つまり、この平場は緩やかな緩斜面をもって尾根に至るにもかかわらず何らの処置もないということで、これもこの城の性格や年代に由来するのであろう。

遺物は確認調査時にその南東部に設けたトレンチ（T32）内から銭1点が出土した。唐銭（開元通寶）である。

（4）平場5（第11・12図、図版35・36・45・46）

平場6から尾根伝いに北西方向へ一段下った平場を平場5と呼称した。ここは、トレンチセクションを観察する限りでは多少の整地層（西側中央部と中央南寄りの段差面北側）が確認されたが、全体として一つの区画を形成する意図は感じられず、恐らく自然地形をそのまま活用したのであろう。周囲は急斜面（とりわけ南側）であり、あえて普請の必要もなかつたかもしれない。その大きさは西側の広いところで、東西約20m×南北4mほどであるが、多分に不定形といつてよい。

なお、平場6から下る傾斜面下方にもピット列を伴う平場（東端新規平場）が見られる。ここはトレンチセクションの観察から、平場5本来の東端を埋め戻し整地して新たに作られた平場であることが判明しており、約4m東の平場8の新規遺構と対応するものといえる。その意味ではむしろ両者は一つの遺構と見たほうが適切ではあるが、便宜上平場5の範疇に捉えておく。なお、実測図では平場5東端について溝のみ図示しているが、これは新規平場の上から部分的な調査を行ったためで、本来のあり方については波線にて復元ラインを提示しておく。

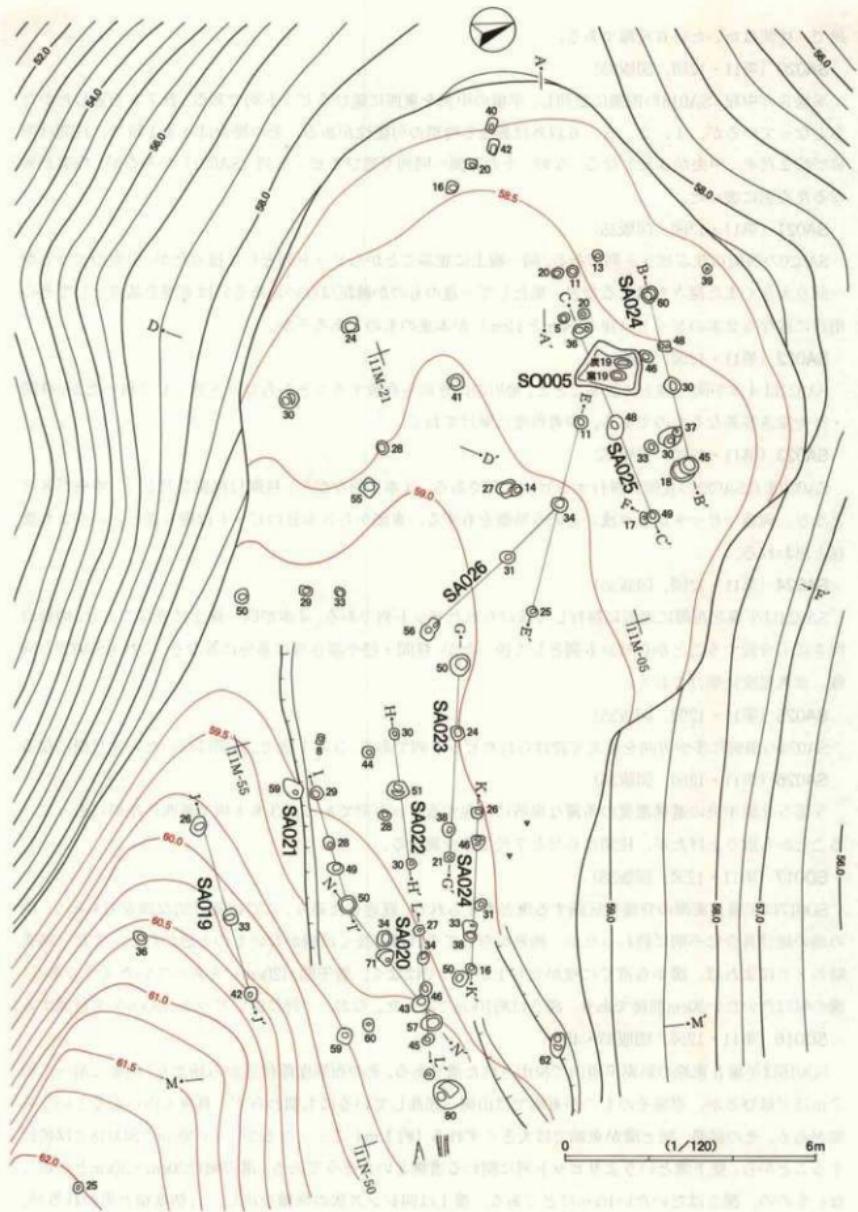
平場5で検出された遺構は多数のピット列、散在するピット群、近代炭窯1である。多分にアトランダムな配置状況からして、想定したピット列のなかには本来の組み合わせでないものも含まれている可能性があろう。この点参考までに検出した総てのピットを深さと共に示している。

SA018（第13・14図、図版35・36）

東端新規平場（平場6南から約2m下）の西寄りやや段差近くにあり、SD016が後ろを廻る。類例の多い3本1組・柱間6尺というかたちながら、ピットの径は70cm程、深さも70cm～80cmと深く、当城跡では北腰曲輪の門の柱穴と匹敵するものである。段差や溝に伴うピット列とは明らかに異なり、3本ピット列の頂点と言えるものである。しかも、わざわざピット列を造るために平場を造成した可能性が高い。位置的には、北側山陵遺構群の中心とも言うべき平場6据立柱建物群の下にあり、関連が窺える。

SA019（第11・12図、図版35）

平場6を下って平場5に連する手前の傾斜面に設けられたピット列である。幅3m程の尾根を遮断ないし遮蔽する意図で作られたものであろうか。なお、ピットは傾斜の度合いに沿って掘られている。3本1



第11図 平場5(1)

組で、柱間はだいたい6尺程である。

SA020 (第11・12図、図版35)

平場5の中程、SA018の西側に並列し、平場の中央を東西に延びるピット列である。計7本を通したかたちとなっているが、1、2、5、6以外は異なる時期の可能性がある。その場合は4本1組で、柱間は両脇が約2尺半、中央が4尺となる。なお、その西側へ同列で延びるピット列(SA021)があるが、内容が異なるため別に扱った。

SA021 (第11・12図、図版35)

SA020の西側に並ぶピット列である。同一線上に並ぶことからピット列として扱ったが、中央のピットが一回り大きくまた深さも異なるなど、果たして一連のものか確認はない。あるいは東端を基点としてその南西に連なる2本のピット(深さ28cmと44cm)が本来のものであろうか。

SA022 (第11・12図、図版35)

SA022は4本が同一線上に並ぶことと、地形の向きにも合致することからピット列として扱ったが、柱間・径や深さ等異なるものである。参考程度に挙げておく。

SA023 (第11・12図、図版35)

SA020またはSA022の北側に併行するピット列である。4本1組ながら、柱間は両脇2尺5寸、中央が8尺となり、両脇のピットがより浅いという特徴を有する。東側から3本目のピットは掘り直しというより重複と思われる。

SA024 (第11・12図、図版35)

SA024は平場北西端に地形に併行して設けられたピット列である。4本が同一線上に並ぶことと、地形の向きにも合致することからピット列として扱ったが、柱間・径や深さ等は多分に異なる。これもSA022と同様、参考程度に挙げておく。

SA025 (第11・12図、図版35)

SA024の南側に多少方向を変えて設けられたピット列である。3本1組で、柱間はだいたい8尺程になる。

SA026 (第11・12図、図版35)

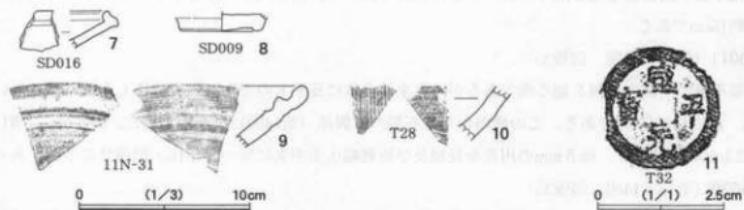
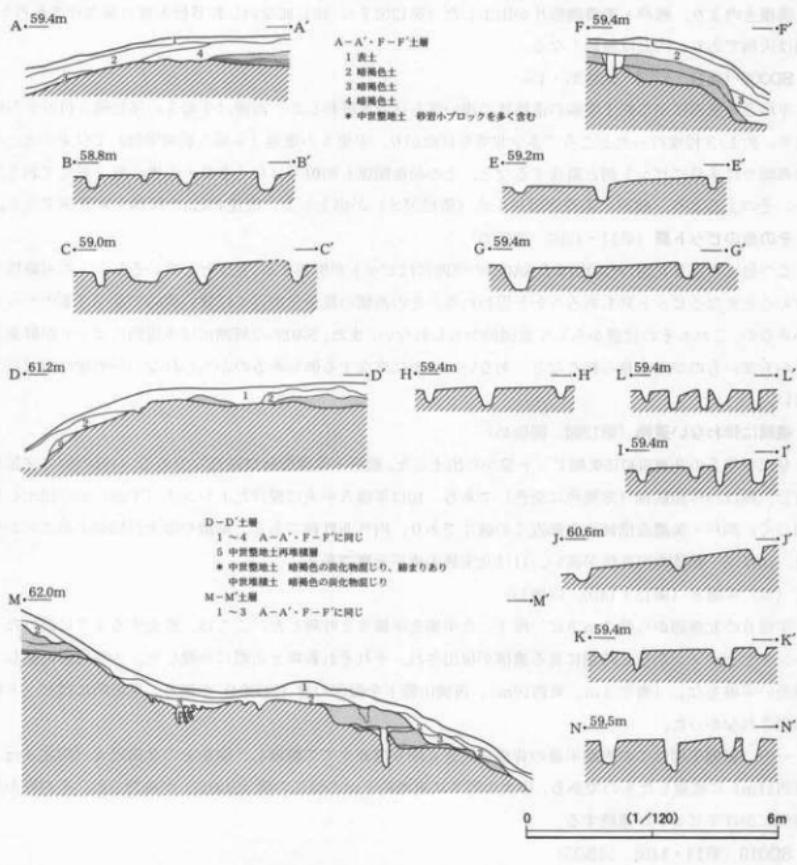
平場5北側中央の遺構密度の希薄な場所に存在するピット列である。3本1組で東西の地形に沿っていることから取り上げたが、柱間は6尺と7尺で多少異なる。

SD017 (第11・12図、図版35)

SD017は平場5東端の背後を区画する溝と考えられる。既述した通り、ここは部分的な調査でもあり、溝の端の延び具合は不明に終わったが、地形からしてそれほど長くは続かないものと思われる。また、調査時のメモによれば、溝から直ぐに壁が立ち上がるのではなく、若干間(20cm)をおいていたようである。溝の幅はだいたい30cm前後であり、深さは約10cmであった。なお、一部に深いピット(50cm)も付属する。

SD016 (第11・12図、図版35・45)

SD016は平場5東端の新規平場内で検出された溝である。その西端壁際付近から始まり、地形に沿って約7mほど延びるが、平場そのものが東側では山側へ屈曲しているにも関わらず、真東方向へ走るという特徴がある。その結果、壁と溝が東側では大きくなれる(約1m)こととなるが、その前面のSD018とは併行することから、壁下溝というよりピット列に関わる遺構といえそうである。溝の幅は30cm~50cmと一定しないものの、深さはだいたい10cmほどである。覆土は回レンズ状の堆積を示し、自然堆積と思われるが、



第12図 平場5(2)

間に薄いロームブロックの層がみられる。

溝覆土内より、瀬戸・美濃陶器片が出土した（第12図7）。卸し皿ないし卸目付大皿口縁部片であろう。釉は灰釉であり、内面は無釉となる。

SD009（第11・12図、図版35・45）

平場5を東西に走る約1間幅の道路状の浅い落ち込みを呼称した。西側は平場5の尾根続き付近から始まり、約1/3程度行ったところで多少北寄りに曲がり、平場5の東端（平場5新期平場）で収束する。その西側では多分にピット列と重複するなど、その前後関係も明瞭ではなく中世～近世の幅で考えておきたい。その上面より、瀬戸・美濃陶器片1点（第12図8）が出土した。底径4.9cmの灰釉平碗底部である。

その他のピット群（第11・12図、図版35）

この他に平場5北西のSA024またはSA025の周囲にはピットが群集する。見落としているピットの可能性を含めると更なるピット列もあるうかと思われる。その西側の尾根先端近くに狭い間隔で並ぶ3本のピットがあるが、これもその位置からして意図的かもしれない。また、SA020の周囲には不規則にピットが群集し、しかも深いものがまま見られるなど、あるいは地形に直交する例もあるのかかもしれないが明確に指示しえない。

遺構に伴わない遺物（第12図、図版45）

9は平場5の北東SD016東端ピット脇から出土した。瀬戸・美濃産擂鉢口縁部片である。口縁内側に突起を有し、釉は外面鐵釉（赤褐色に発色）である。10は平場5中央に設けたトレンチ（T28）から出土した。同じく、瀬戸・美濃産擂鉢の底部近くの破片であり、外面鐵釉である。釉調や胎土が類似することから、9、10は同一個体の可能性が高い。11は北宋錢の咸平元寶である。

（5）平場8（第13・14図、図版35）

平場6の北東部から約2m下に一段下った平場を平場8と呼称した。ここは、直交するように設けたトレンチセクションから2時期に亘る遺構が検出され、それぞれ新期と古期に分離した。古期は谷に面して細長い平場をなし（南北3m、東西10m）、西側山際下を幅広の溝（SD004）が廻る。平場内にはピットは検出されなかった。

一方、新期平場はこの古期平場の背後を大きく削り埋め立てて整地し、幅をその2倍近く（南北4m、東西11m）に拡張したものである。中央山際下に東西約7mの幅広の溝（SD011）が確認され、その縁から東側にかけてピットが連続する。

SD019（第13・14図、図版35）

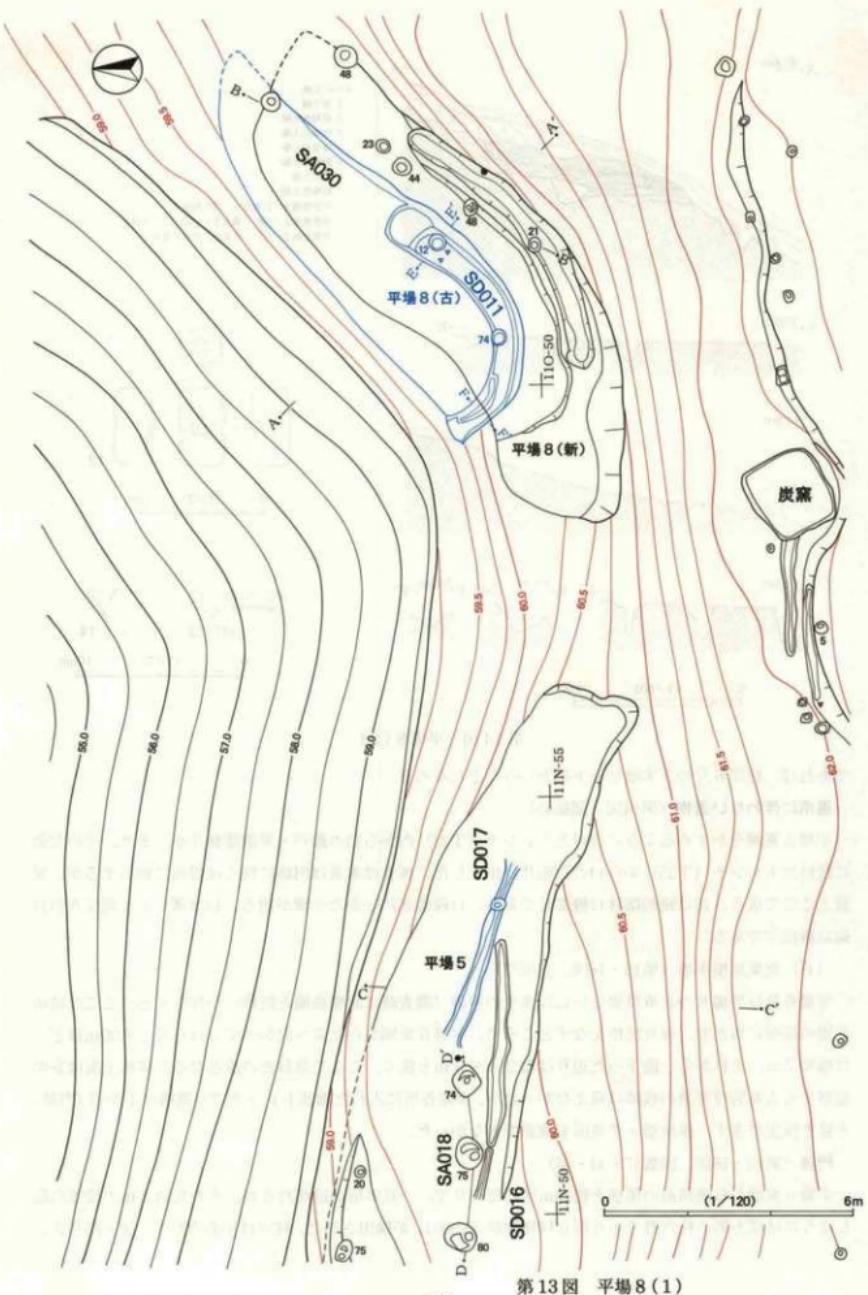
古期平場の南側裾を廻る溝である。平場の形状に沿って西側は大きく屈曲する。幅はだいたい60cm、深さは約15cmである。

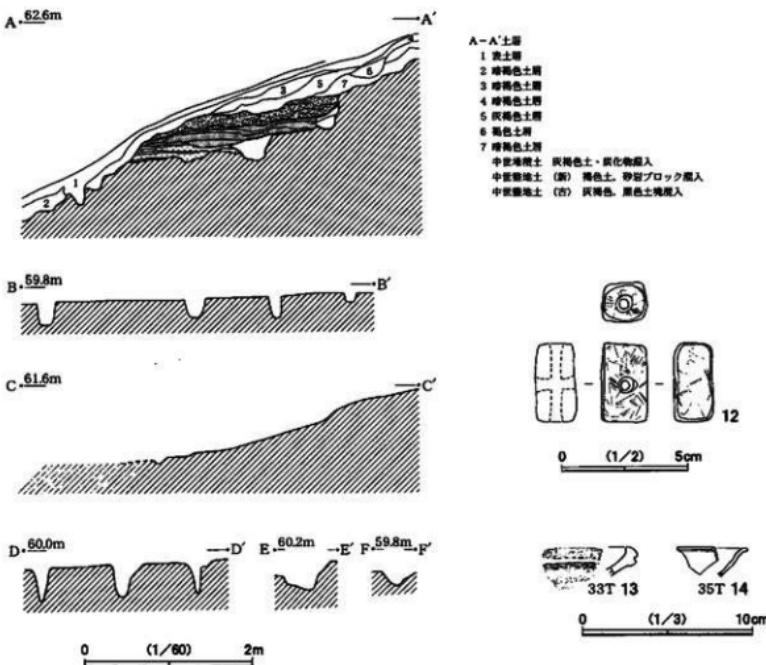
SD011（第13・14図、図版35）

新期平場の南側中央裾を廻る溝であるが、本来は全体に及ぶものであった可能性もある。幅はだいたい70cm、深さは約50cmである。この溝内から滑石製の石製品（第14図12）が出土した。縦1.7cm、横1.3cm、長さ3.1cmの角柱形で、径5mmの円孔を長軸及び短軸幅広面中央に穿つ。年代・用途共に不明である。

SA030（第13・14図、図版35）

新期平場の山際寄りに、直線的に繋がる4本をSA030としたが、そうすると、最後の1本は平場をまたぐかたちにもなるので、あるいは、これはむしろ東端の1本と一連のものとみるべきかもしれない。もしそう





第14図 平場8(2)

であれば、柱間6尺の3本組ピット列ということになろう。

遺構に伴わない遺物 (第14図、図版45)

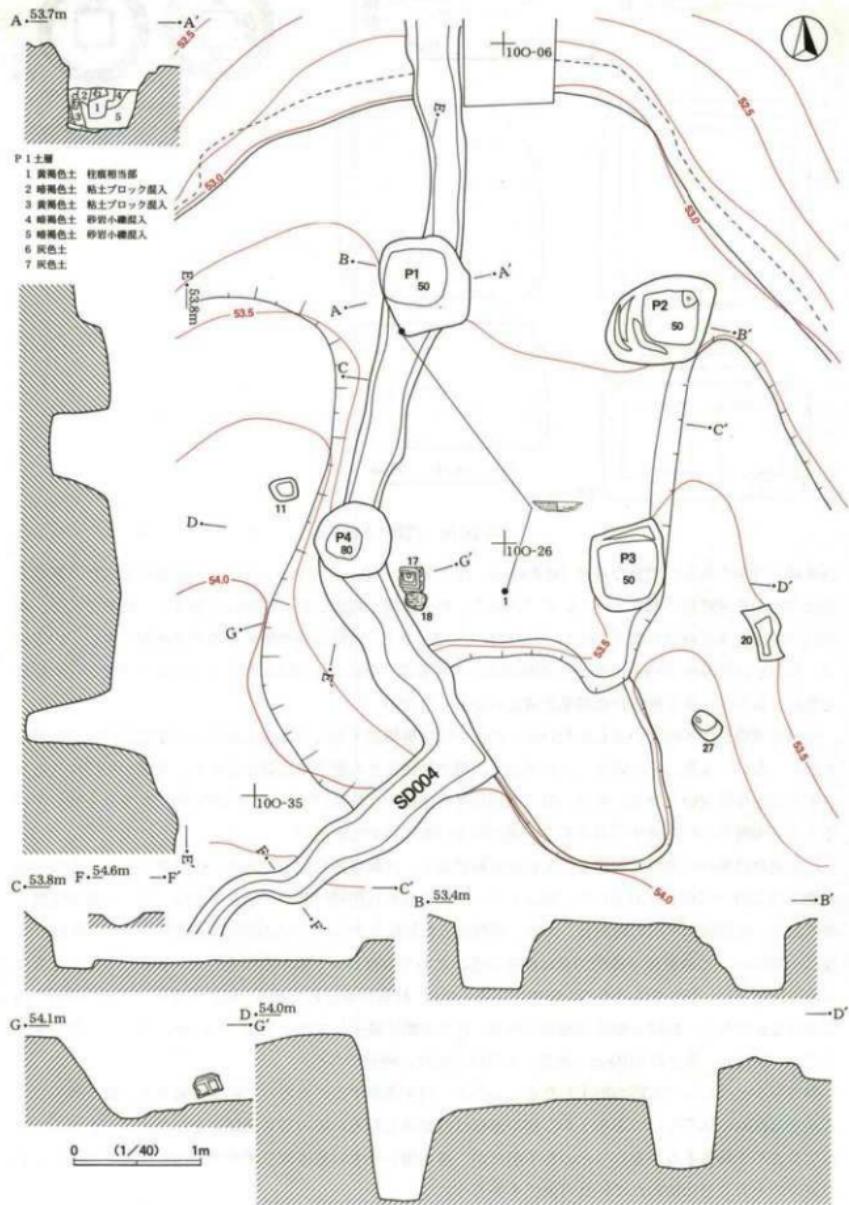
平場5東端をかすめるように設けたトレンチ (T33) 内から13の瀬戸・美濃播鉢片が、また、その北側に設けたトレンチ (T35) から14の白磁片が出土した。後者は本来は門跡に続く尾根面に相当するが、便宜上ここで扱う。13は鉢釉播鉢口縁部片である。口縁端部に一条の小溝がある。14は薄手かつ端反りの白磁口縁部片である。

(6) 北東尾根平場 (第15・16図、図版37)

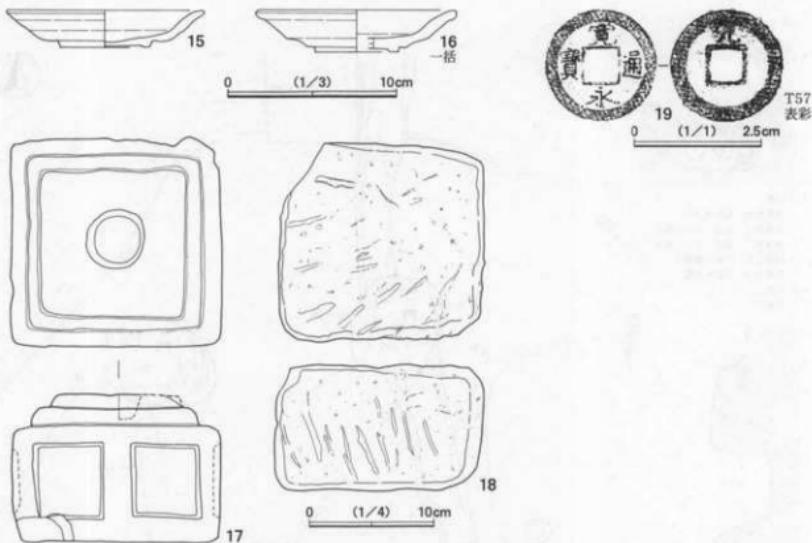
平場6及び平場8の北東尾根伝いには多少の平場 (調査時に北腰曲輪と総称) が存在する。ここは城跡北端の尾根に当たり、瘦せ尾根をなすところで、平場6東端から北東へ向かってしばらく (約20mほど) は幅約7m、それから一段下った辺りは幅2m~3mと狭く、ここで急斜面の崖となる。尾根上面は表面観察でも人為的な普請の痕跡は窺えなかったが、実際各所に入れた確認トレンチでも遺構は1か所 (門跡) を除き検出できず、整地層・整地面も確認できなかった。

門跡 (第15・16図、図版37・44・46)

平場6東端から緩斜面の尾根を約20m進んだ辺りで、一旦平場が途切れるが、その先約3mの段差に臨むようにはぼ方形の柱穴群である掘立柱建物跡 (SB001) が検出された。柱穴は平面方形で、径・深さ共に



第15図 門跡(1)



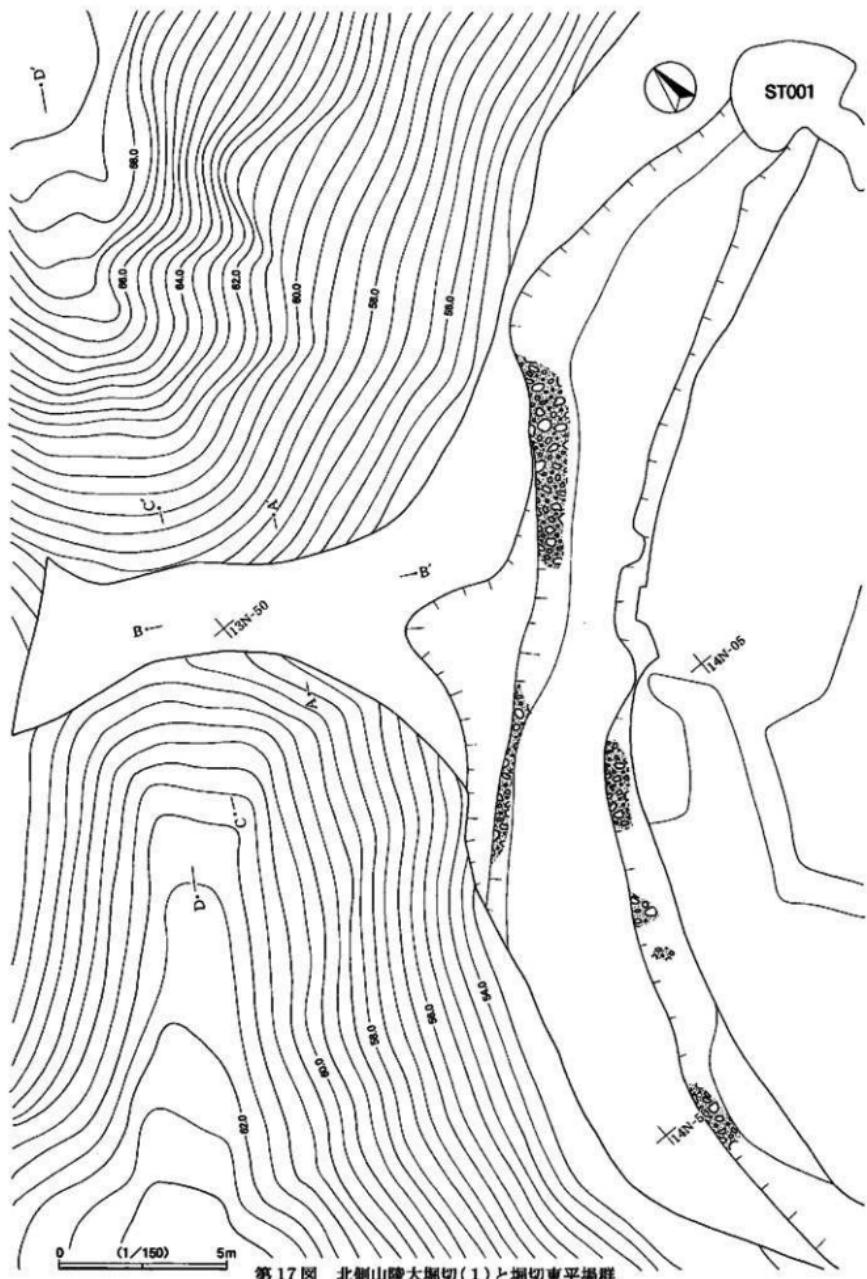
第16図 門跡(2)

当城跡では類をみない明瞭なもの（径約60cm、深さ50cm～60cm）であり、しかも、尾根筋に当たる南北方向は前後から通路状に掘り下げていることから、門の遺構と判断した。柱間は東西9尺、南北7尺で、西側柱穴間は前後に延びる溝（SD004）で結ばれている。また、両脇は自然地形をそのまま掘り造しているので、内部との比高差は20cm～30cm（西側が高い）に及ぶ。なお、柱穴は北西の1本を除き明瞭な柱の痕跡を遺しておらず、抜き取られた結果と言えるかもしれない。

その上部構造は不明というしかないが、あるいは階層構造となる可能性もある。屋根は付いたかどうかわからない。また、その向きについては、尾根の長軸よりも若干東に偏っており、北側から門に入ろうとすると多少斜交いとなる。その一方、内側は逆に通路を2度曲げている。門の西側に高まりを残していくこと（側射用か）と併せて考えると、意図的な所産の可能性が高い。

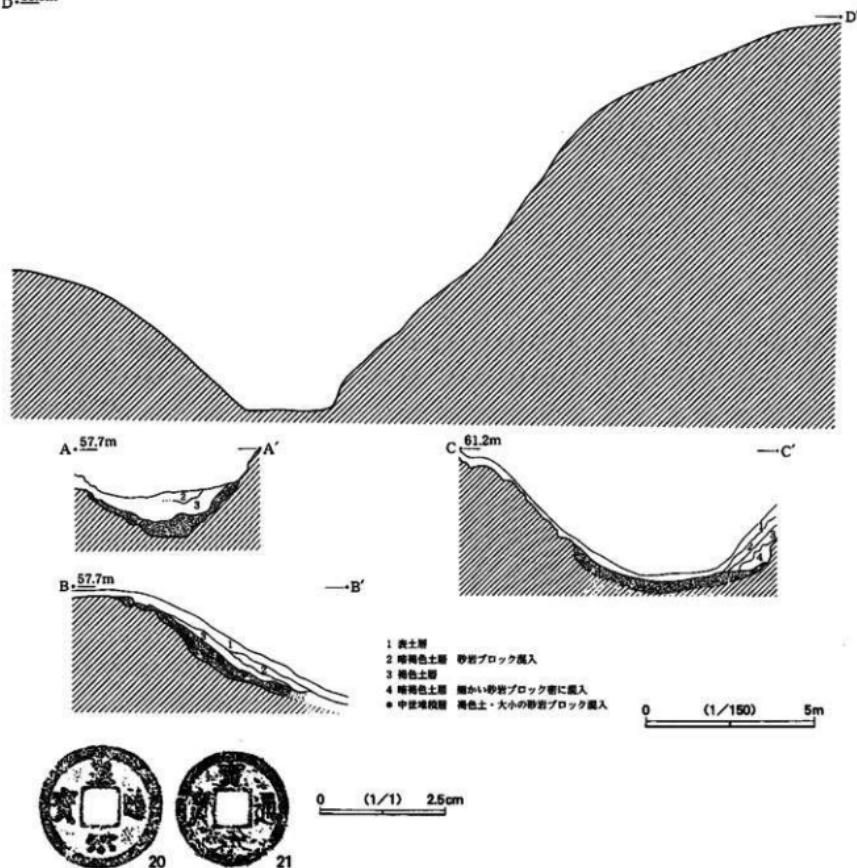
出土遺物は瀬戸・美濃産陶器2、宝篋印塔基礎部1、五輪塔地輪部1である。15はP3とP4との中间の地山近くのレベルより出土した。16はレベルは同じながら門跡内部の一括品である。共に灰釉端反皿半個体品で、底部は削り出し輪高台、また、底部周辺を無釉とする。17は宝篋印塔基礎部であり、径10cm前後（一部20cm）の砂質泥岩礫約20点に混在するかたちで南西ピット脇から出土した。側面は2区、上部は二段の段形とし、塔身を受ける孔も明瞭である。なお、材質は安山岩である。幅は四面共に16.5cm前後、高さは11.6cmである。18は五輪塔地輪部であり、17の南側に隣接して出土した。幅は面によって差があり、15.4cm～16.4cm、高さは約10cmである。石質は当地産の礫岩である。

礫のなかに混じって石塔が出土した点であるが、門を遺棄するに当たって両側に盛り上げた土砂等で埋め戻した行為に伴うものであろうか。他の部材は内部はもちろん周辺でも確認できなかったことから、何故宝篋または五輪各1点が混じったのか不明だが、再利用しやすい基礎部や地輪部が門に関連するなんらかの施設の土台などに使われていた可能性もある。



第17図 北側山陵大堀切(1)と堀切東平場群

D. 69.5m



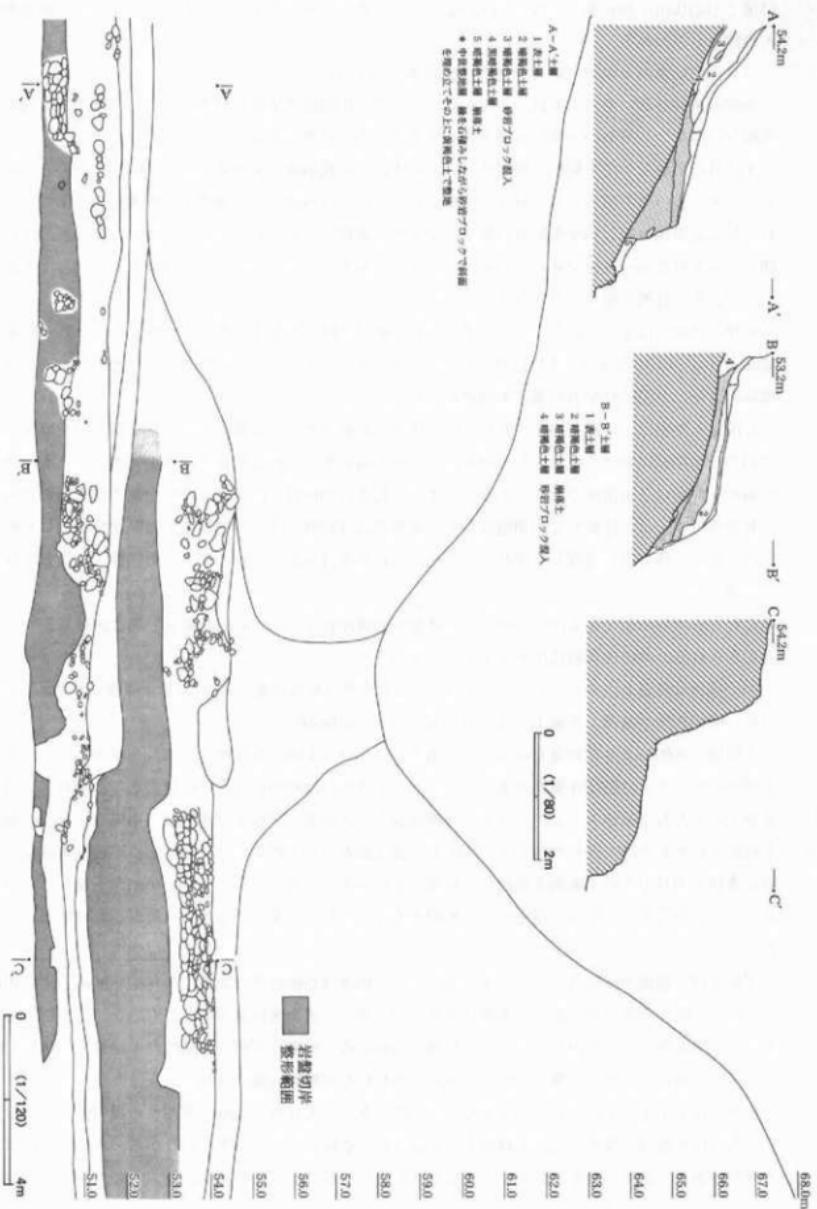
第18図 北側山陵大堀切(2)

この他に、一括品として寛永通寶（新寛永）1点がある。

(7) 北側山陵大堀切（第17・18図、図版38～40）

権台1の南側にあり、北側山陵を大きく分離する大堀切である。現状では標高約70mの権台から10数m、尾根続きの南側から4mの比高差があり、とりわけ権台からの俯瞰はインパクトがあるが、この部分は元々両側から谷が迫りネックとなっており、その普請の程度は見かけほどは大きくなない。旧状を復元してその掘削の度合いを計ると、堀切中央でも旧表土面から実質3m半程度掘り下げられたにすぎないと思われる。つまり、最も効果的な箇所を掘り切ったのである。

その幅は上幅が約12m、下幅が4m、東西の長さが12mに及び、城内では最大規模のものである。また、堀底の障壁や土橋ないし橋脚柱穴など伴う施設はなく、大きく遮断する意図の結果であろう。大堀切とした理由である。両側の谷部へは基盤面が緩やかに傾斜しており、段差も見られなかった。覆土は中央部で



第19図 畑切東半島と石積み

は薄く(数10cm)、端に至って厚く(約1m)なるが、岩のブロックを多く含んでいることなど崖面の崩落・再堆積層と思われる。

(8) 堀切東側平場群(第17・18図、図版38~40・46)

堀切の東側谷部に沿って2段の平場が残っている。山陵際に位置し耕作地としては不向きな地ながら、明瞭な切岸ないし肩部の一部に石積みを有することから中世の所産とした。

1段目の平場なかでも堀切に隣接する辺りは主にその掘削排土を埋め立てて造成したものと思われ、肩口にはまとまった石積みが見られる。一部それがないのは谷頭という条件から崩壊した結果であろう。それに続く北東側はむしろ北側物見台裾を切岸とする過程で生じたものといつてよい。その幅は2m~4m、切岸の高さは2m~3mである。なお、この切岸であるが、下半部は地山の砂質泥岩を切って崖面としたもので、堅い岩盤が露出した状態であった。

石積みは場所によって色々ながら、遺存の良い場所では、下方に大きく且つ幾分平らな石(長径30cm~40cm)を並べている反面、上位に行くに従い、より小さくまた形状も不揃いとなる傾向がある。また、石積みの背後は意図的な礫石の裏込めは認められなかった。

2段目の平場は、一段目の切岸整形に伴う排土(泥岩ブロック多量混入)を以て縁辺部を盛土・造成しており、切岸面における盛土の割合は1段目よりも高いが、これは切岸の高さが劣ることとも関連するのであろう。幅は2m前後のところが多く、また、長さは20m近くに及び、切岸の高さは2m弱である。

石積みは1段目と比較して不明瞭ながら、南東部には岩盤の産みを埋めるかたちで整然とした箇所がみられ、また、横方向に連続した流れとして捉えられる場合もある。石の大きさも同様、1段目よりは不揃いで概して劣る。

これら石積みの石であるが、その多くは基盤の砂質泥岩ながら、砂岩や砾岩、稀に流紋岩、チャートなどもみられる。共に佐賀層に由来するものであろう。

出土遺物は銭貨2点のみであった。第18図20は北宋錢(皇宋通寶)、同21は寛永通寶(古寛永)である。

(9) 堀切西側平場群: 平場1・2(第20図~23図、図版40)

大堀切の西側つまり北物見台からみて西南の谷に2段の平場が存在する。下段を平場1、上段を平場2と呼称した。ここは勝隆寺墓地の裏山に当たり、境内からは約20m高い位置にある。調査自体は地形に直交するかたちで確認トレンチを設定し遺構確認をした結果、平場1で墓坑群、平場2で同じく墓坑・溝が検出されたものの、近世の所産との判断から確認調査のみで終了した。しかし、平場2の溝などは整理時に遺構のあり方や出土遺物を検討した結果、中世の所産と考えられ、トレンチ内出土遺物にも中世品が混じっていることなどから、項を立てて説明することとした。また、墓坑の一部もそれに準じてとりあげた。

平場1は丘陵据の勝隆寺を見下ろす位置にあり、標高は48m前後である。大凡南北30m、東西10m程度の北に広い略三角形の地である。本来は平場2から続く一連の緩斜面であったものを、その下方を切り盛りして平場を作ったことがセクションの観察から窺える。遺構は北側から墓坑群が錯綜する状態で検出され、その一角には下からの墓道に伴う石垣かと思われる石積みも確認された。

平場2は平場1の上にあり、約4m高い位置にある。大凡南北25m、東西8m程の三日月状を呈し、その背後は大堀切となる。ここも斜面を切り盛りして造成したことが明らかながら、その程度は平場1より軽微である。途中に段差がトレンチで検出されているが、果たして全体に及ぶものかどうかは不明であ

る。遺構は背後の山裾で掘が、南側で墓坑また焼土層が確認されている。

SD001（第20図～23図、図版40・45）

中世の堀と思われ、南物見台下（平場9）でみつかった堀と規模や形態が類似する。上幅は1.5m～2m、深さは0.6m程までは確認したが、掘りきっていないので不明である。断面形態からして恐らく箱堀になろう。覆土は自然堆積と思われる。

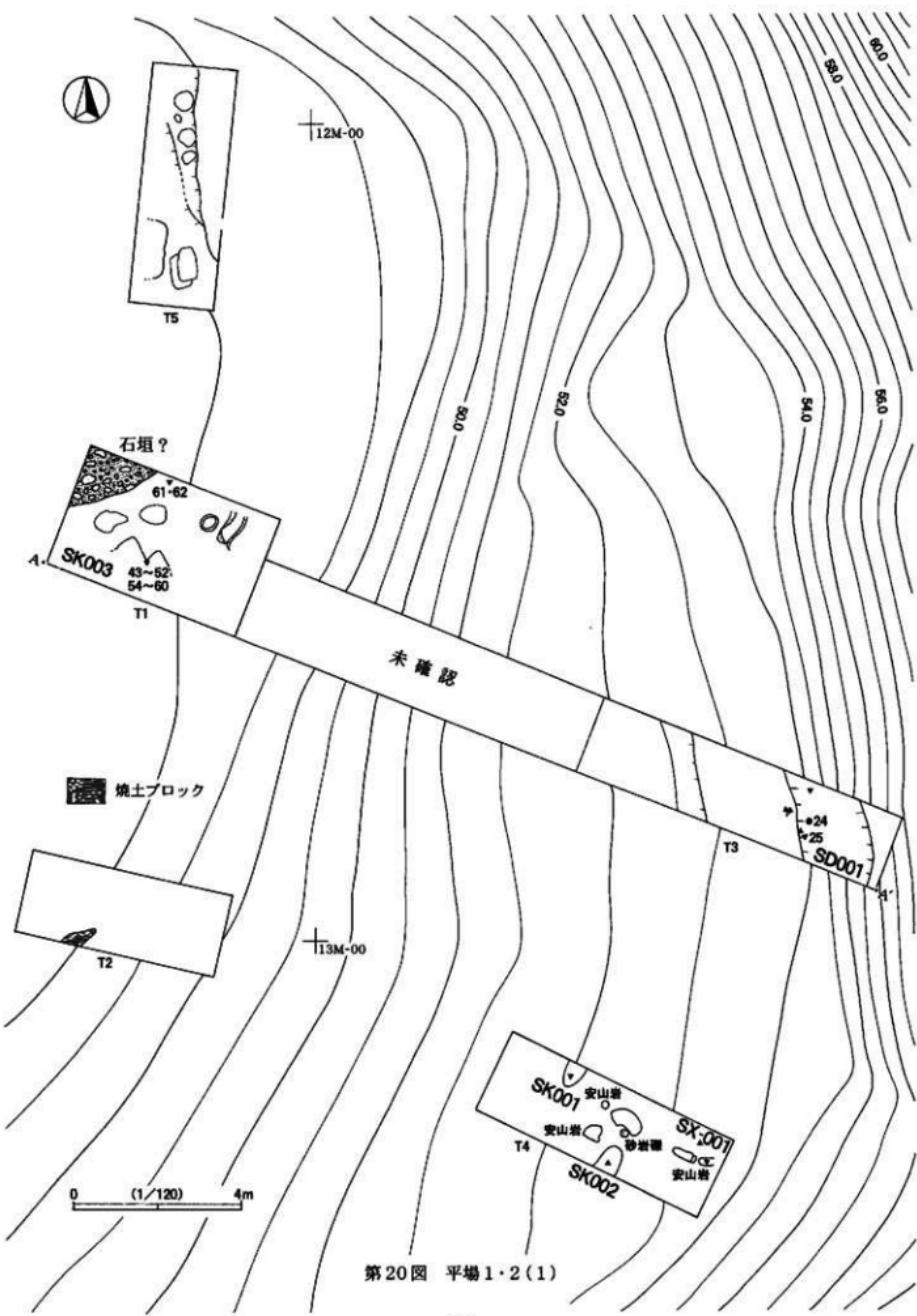
遺物は瀬戸・美濃皿、常滑壺、鉄釘などであるが、何れも覆土の上位ないしはⅡ層との境界付近から出土した。22は小形の常滑壺腹部片と思われる。胎土に砂礫を多く含み、色調は明黄褐色（外面）または黄灰色（内面）である。23は常滑の壺腹部片である。砂礫（とりわけ長石）を含み、色調は褐色である。24は瀬戸の小碗片であるが、縁の一部が欠けそこにスグが付着していることから、灯明皿として利用されたと推測する。軸は体部下半を除き施釉され、長石分を含んだ灰釉であろうか。25は鉄釘で、先端部を欠き、径は4mmである。これら遺物の年代については、常滑が中世ないし近世初めに所属すると思われるものの、小碗は近世（18世紀代か）の所産とみてよい。一方、鉄釘については不明である。堀上部からⅡ層の埋没年代を示すものとして掲げた。

墓坑群（第20・22・23図、図版44～46）

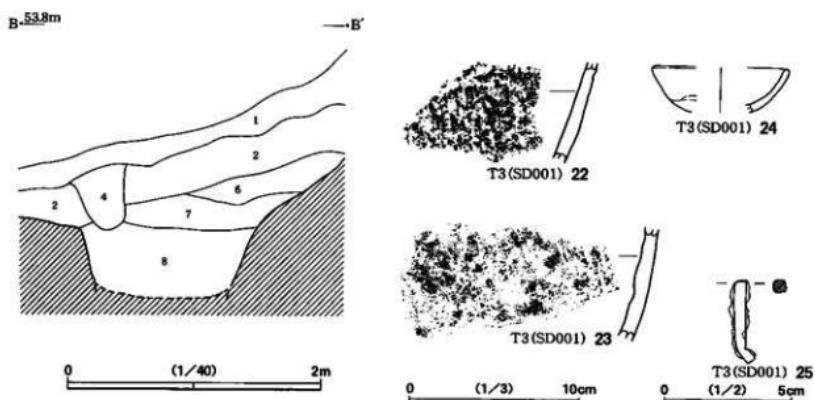
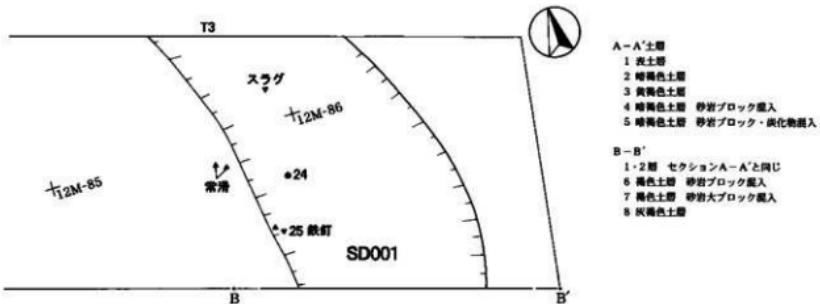
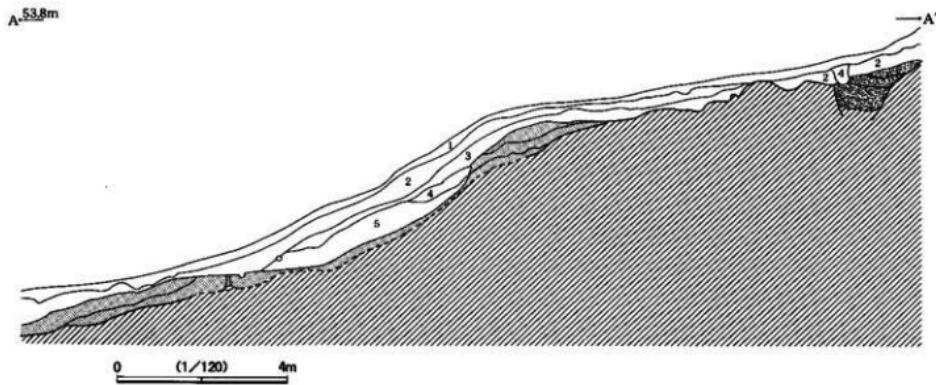
墓坑はトレンチ内の狭い範囲を調査したのみであり、しかもプランのみを確認したという側面が強い。このうち、SK001～SK003はプランや遺物から明確な例といえるが、ほかに6基～7基、計10基程度は想定できよう。しかし、これもトレンチ内の数であることから、要するにこの平場全体が墓地として活用されていたということであろう。とはいって、その南東部では火葬跡と思われる人骨混じりの焼土域が2か所検出されており（T4内、SX001ほか）、上段の一部は焼場として機能していたと考えられる。以下、個々の遺構の説明は図を参照していただくこととし、特徴的な遺物群に焦点を絞って説明する。

SK003から出土した一括の銭（第23図54～59）はいわゆる六道銭と思われ、しかも寛永銭を含まないものであり、中世～近世初めまでの所産である可能性が高く、墓坑の初源を考える資料といえよう。銭は6枚が付着した状態で出土した。銭種は宋銭4（皇宋通寶1、元豐通寶2、景祐元寶1）、南宋銭1（慶元通寶：背文六？）、不明1である。丸い円棒を鋼板で巻いた遺物（60）は一見煙管に似るが、中が中空ではなくそれとも違うようである。図示するに留める。この他、SK001から出土した鉄釘（42）があり、棺材に伴うものであろうか。2か所折れ曲がっており、断面形態は角というより円に近い。長釘でしかも先端のゆえかと思われる。

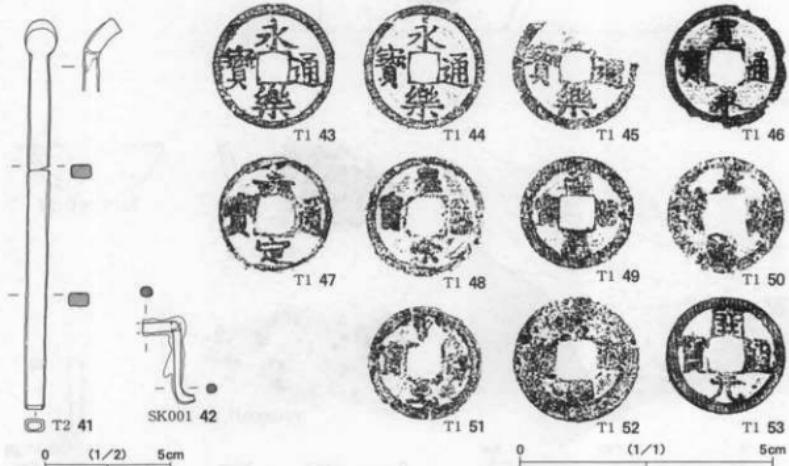
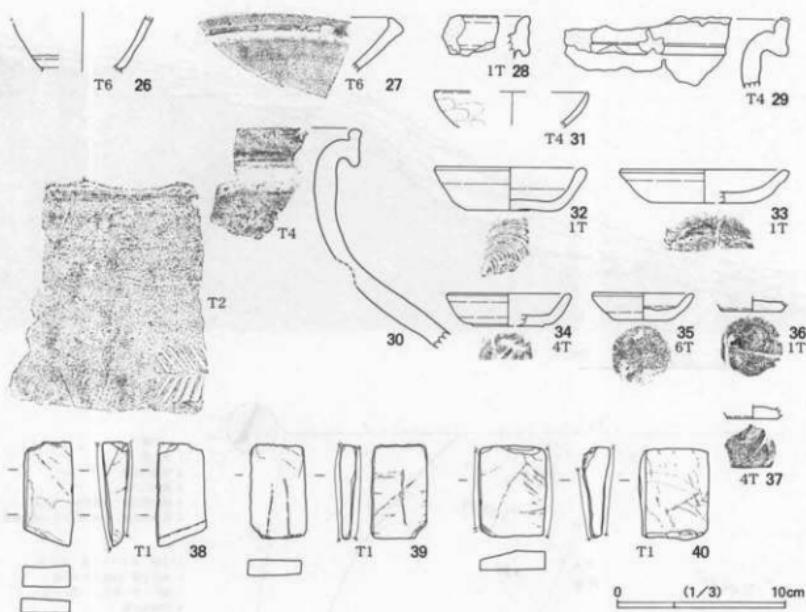
以下は遺構に伴わない遺物である。26・27は瀬戸・美濃陶器である。26は小形天目茶碗片であり、軸は灰茶褐色の鉄軸である。なお、底部周辺は回転ヘラ調整を施し、鍛軸を化粧掛けする。27は鍛軸（紫褐色）擂鉗口縁部片である。28～30は常滑である。28は口縁部片であり、自然軸が縁帯に明瞭である。色調は褐色である。29・30は恐らく同一かと思われるが、縁帯の幅など一応別図とした。いわゆるN字状口縁で、肩部に矢羽根状の押印がみられる。胎土は多少軟質で、内面は大きな斑点状の剥落が顕著である。色調は全体に黒褐色である。31～37はかわらけである。完形のものはなく（1/2～1/3）、復元実測した。31が手捏ねのほかは、ロクロ整形、回転糸切りによる。胎土は31の器壁芯が黒く変質している（焼成の為か）他は概して近似するものの、36は胎土が砂質となる。色調はいずれも黄褐色から明黄褐色である。38～40は粘板岩製の砥石である。いずれも両面ともに使い込まれたもので、下端は折損の跡が明瞭である。色調は明るい灰桃色である。41はガラス製の笄であり、長さ15.5cm、幅は8mm、厚みは5mmである。本体内



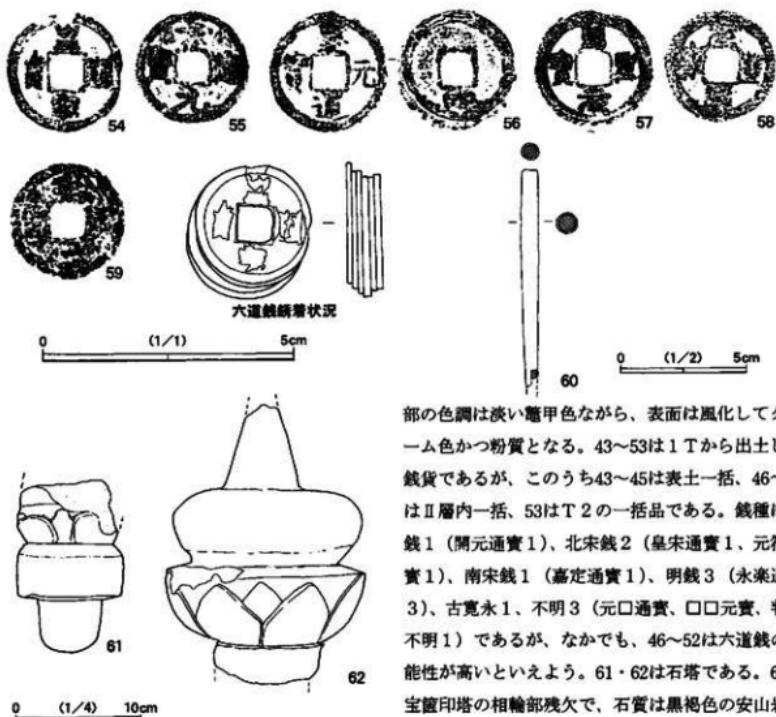
第20図 平場1・2(1)



第21図 平場1・2(2)



第22図 平場1・2(3)



第23図 平場1・2(4)

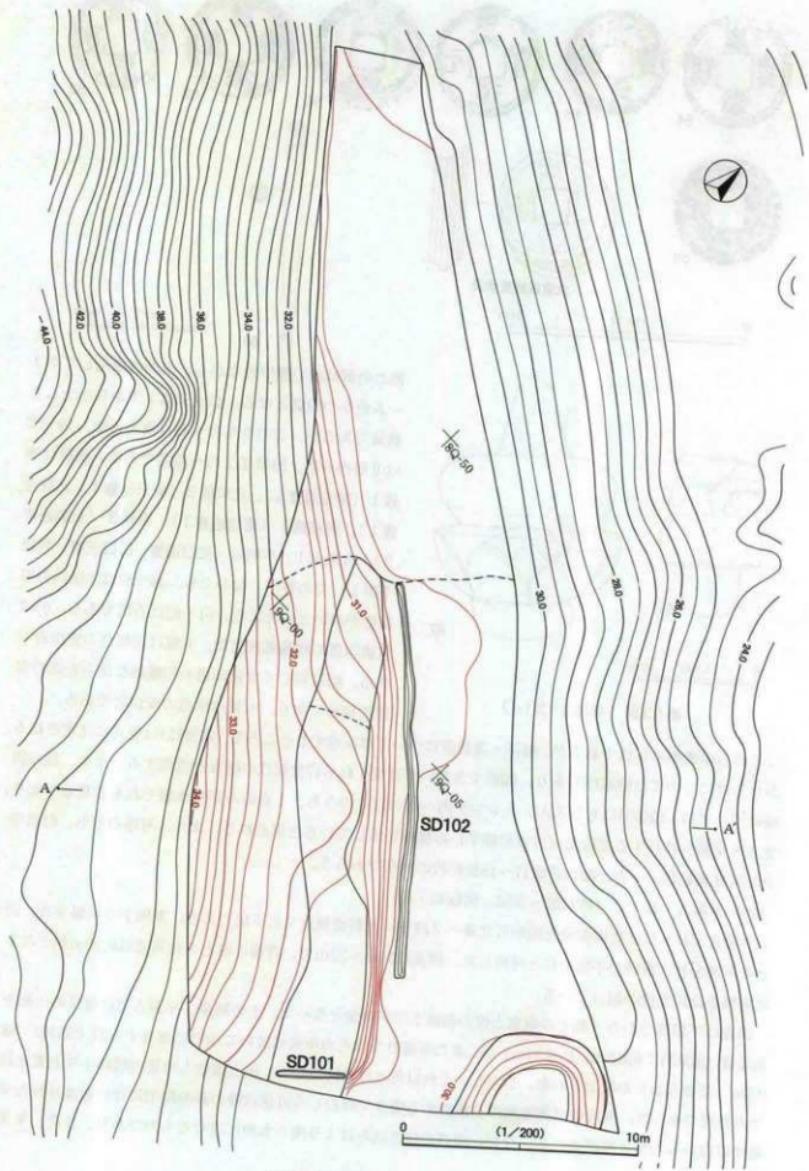
部の色調は淡い籠甲色ながら、表面は風化してクリーム色かつ粉質となる。43～53はI丁から出土した銭貨であるが、このうち43～45は表土一括、46～52はII層内一括、53はT2の一括品である。銭種は唐銭1（開元通寶1）、北宋銭2（皇宋通寶1、元符通寶1）、南宋銭1（嘉定通寶1）、明銭3（永樂通寶3）、古寛永1、不明3（元口通寶、口口元寶、判読不明1）であるが、なかでも、46～52は六道銭の可能性が高いといえよう。61・62は石塔である。61は宝蓋印塔の相輪部残欠で、石質は黒褐色の安山岩である。62は同じく宝蓋印塔の相輪部ながら先端の宝珠の部分であり、石質は灰色の安山岩である。

これらの遺物の年代であるが、瀬戸・美濃産については後述するところで、常滑は6a型式に比定される。かわらけについては地域性もあり、即断できないが近世それも17世紀代の所産と推測する。また、銭の組成については、SK003はもちろん、トレンチ内一括の11点のうち、1点のみが寛永銭それも古寛永であり、寛永6文銭へ移行する前段階（17世紀前半）の様相を示していると思われる。また、石塔のうち、61は中世でも16世紀代、一方、62は近世17～18世紀代の所産であろう。

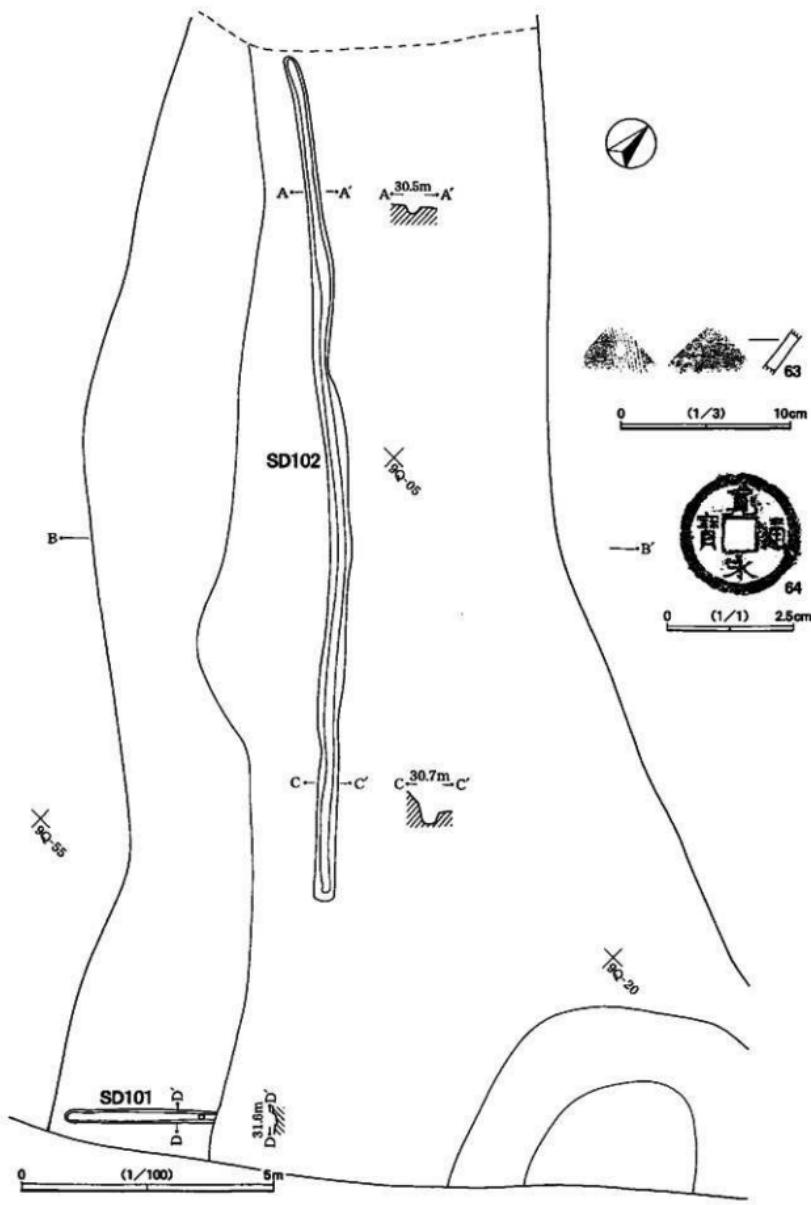
(10) 平場A・B・C (第24図～26図、図版43・48)

平場A・B・Cは北側山陵先端から北東へ2段下った斜面裾近くの平場である。東側下の平場をA、同上の平場をB、西側の平場をCと呼称した。標高は30m～32mで、背後の峰との比高差は約20m程となり、北東裾を染川支流が廻っている。

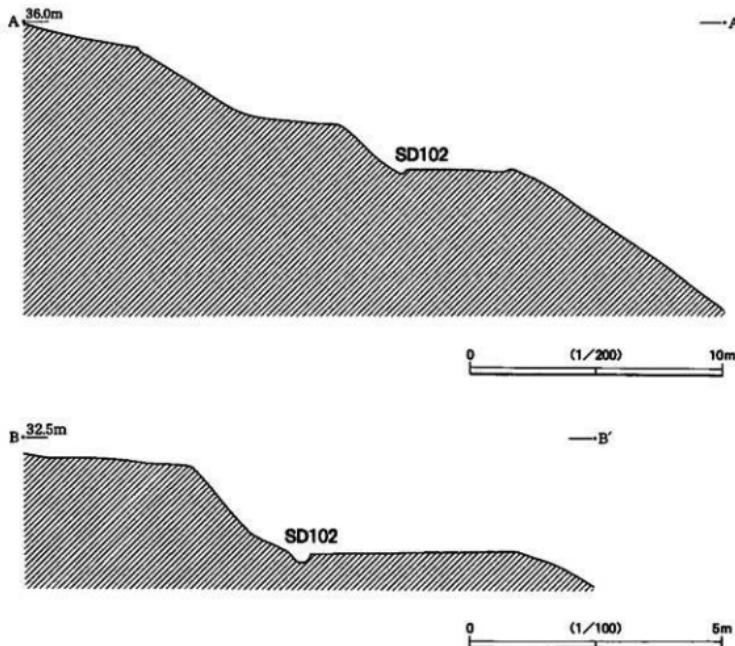
調査は平場部分から一部その南東上位の斜面までが対象となった。その結果、平場Aでは背後の山裾を廻る溝（SD101：幅0.8m、長さ34m）が、また平場Bではその中央に於いて地形に直交する溝（SD102：幅0.5m、長さ6m）が検出された。しかし、これ以外には遺構はなく、出土遺物も中世の擂鉢小片と寛永銭2点程度であった。現況や周囲の地形を観察する限りではむしろ近世以降の耕地開削に伴い造成された平場ではなかったかと推測される。なお、南西の抉り込みはより南の水田に連なるものであり、また、平場



第24図 平場A・B・C(1)
- 114 -



第25図 平場A・B・C(2)



第26図 平場A・B・C(3)

C西側の高まりは道の跡であった可能性が高い。

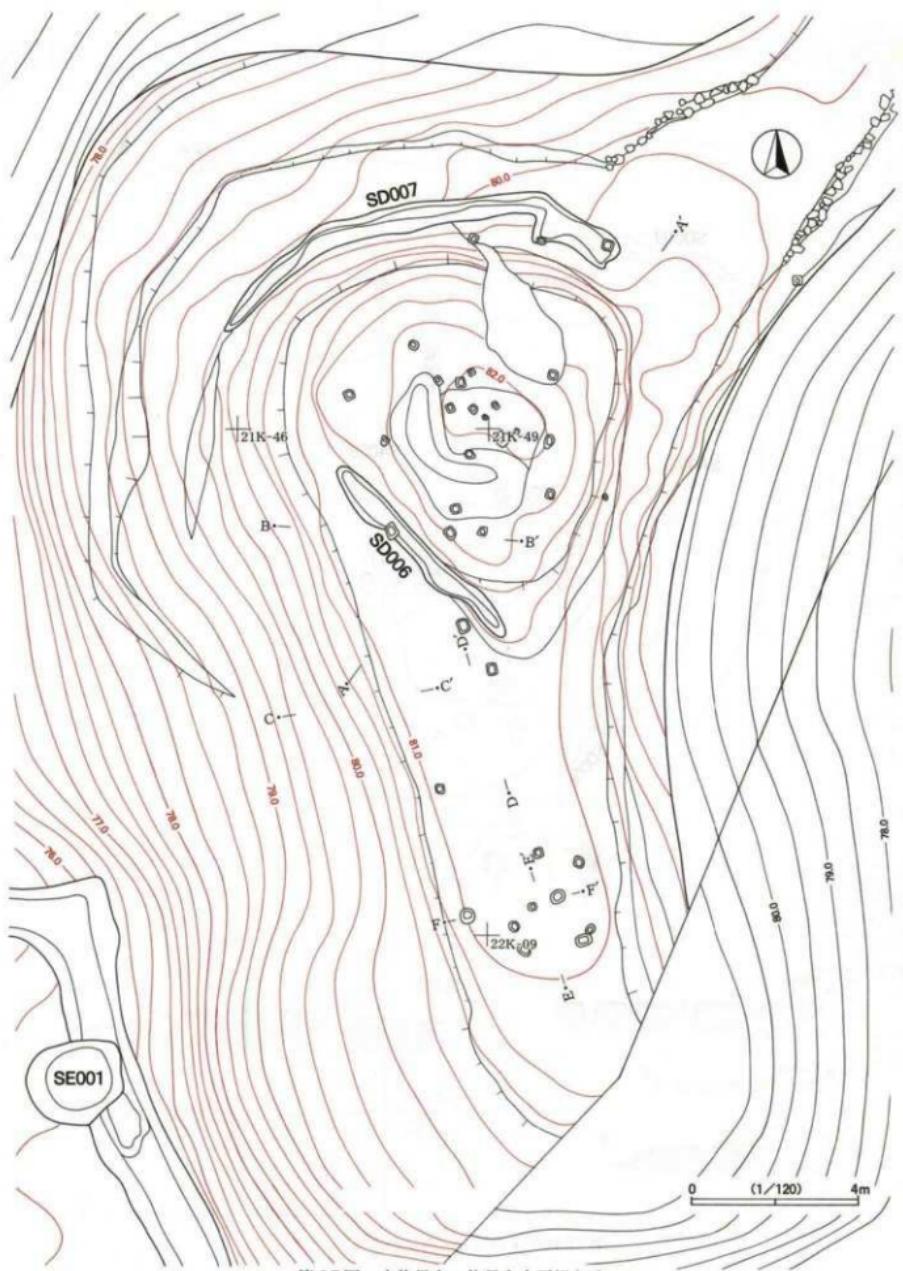
出土遺物は僅かの土器・陶磁器細片それに銭1点のみである。63は瀬戸・美濃産鉛釉播鉢片である。64は新寛永銭である。

2 南側山陵の遺構

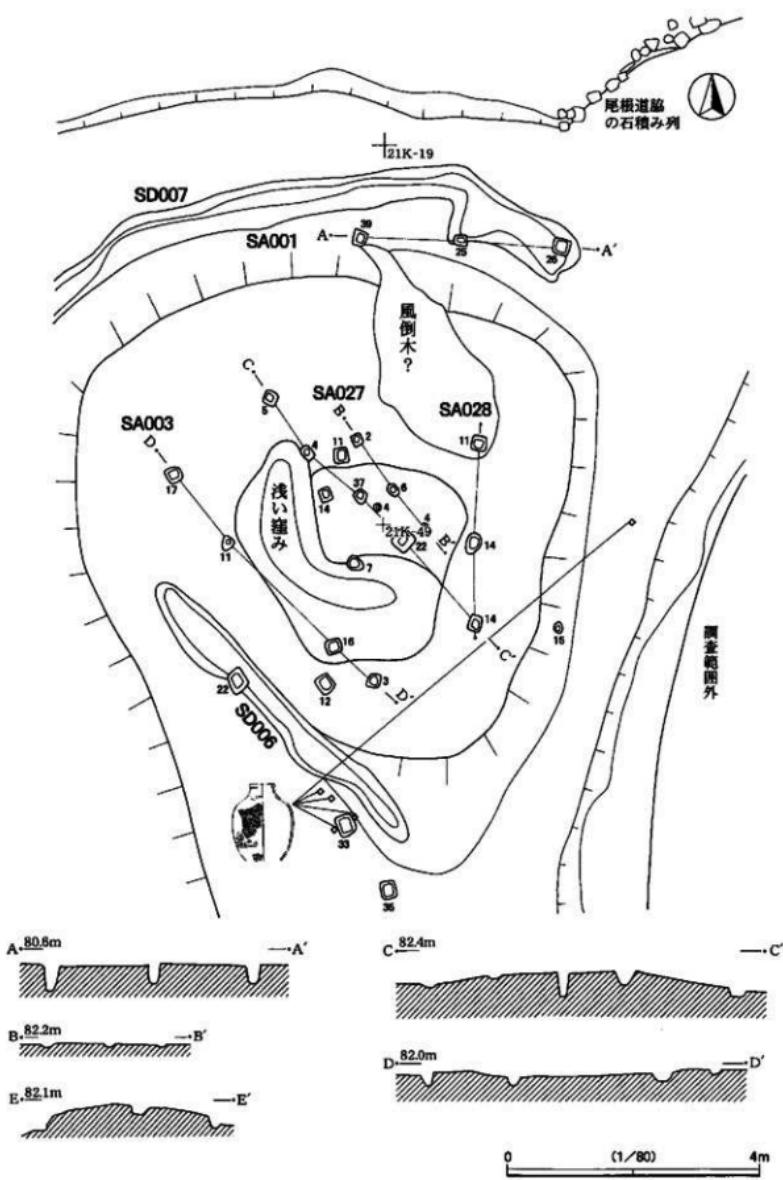
(1) 南物見台（第27図～29図、図版41～43）

南側山陵山頂部（標高82m）の平場を南物見台と呼称した。ここは、南側尾根続きを堀切、西側を堀で画す一方、北側尾根続きを何らの障壁もなく細尾根で結ばれている。物見台は東西8m、南北7.5m程の広さで、凹凸のある隅丸方形とでも形容される形態である。台上は取り立てて削平したような様子がみられない反面、台の周囲は明らかに整形し、北側の裾を廻るSD007はこの台を意識して掘られたものといつてよい。また南西縁近くのSD006も恐らくそうであろう。その一方、中央の浅い窪みは台との関連を具体的に指摘し得ない。

台上にはピット群が存在する。方形に組もうとするとどうしても歪が生じることから、直線的なピット列で考えると、北西～南東方向に幾つかの流れが確認できる。果たしてこれが意図的なものかどうかは不安もあるが図示しておく（第27・28図）。概して、ピットの径・深さ共に貧弱であり、何れにせよ、北側山



第27図 南物見台・物見台南平場(1)



第28図 南物見台・物見台南平場(2)

陵との違いは明瞭である。

遺物はSD006の周囲から散在するかたちで壺片多数（29図65で復元）が出土した。また、若干ではあるが、瀬戸・美濃製品や青磁が物見台や溝から出土している。

SA001（第27・28図、図版41～43）

SA001は物見台の北側縁にあって、ほぼ併行する。SD007と一部重複するが、その位置関係からして同一時期の所産であろう。3本1組で、柱間は8尺、径はともかく深さは十分にあり（50cm～60cm）、最も確實なピット列の例といえよう。

SA003（第27・28図、図版41～43）

SA006はSD006の内側にあって、それと併行するピット群である。必ずしも規則的とはいえないあり方で尚かつピットの径・深さ共に貧弱ながら、ピット群の全体的な並びから一連のものと判断した。なお、浅い窪みとの前後関係は不明である。

SA027（第27・28図、図版41～43）

SA027は浅い窪みを挟んでSA006と対峙する位置にあり、方向もほぼ等しい。このピット列は物見台のなかにあって最も貧弱なものながら、方向や径・深さ共にほぼ同じことから、一連のものとした。3本1組で、柱間は5尺と4尺である。

SA028（第27・28図、図版41～43）

SA028は物見台東側縁の方向に沿って並ぶピット列である。柱間は8尺と6尺半ながら、3本が直線上にあり、台と併行し、径や深さが類似することから、一連のものとした。

SD007（第27・28図、図版41～43）

SD007は物見台の北側を廻る溝である。幅は概ね50cm～60cm、長さは9mを少し越える程度で、深さは台側から25cm～30cm、北側平場から10cm内外である。なお、その西側に本来連続するような溝の痕跡が見られるが、そうすると長さは10cm以上となる。一方、その東側は明らかに途中で止まっており、これは、東側が通路として利用された結果かと思われる。

SD006（第27・28図、図版41～43）

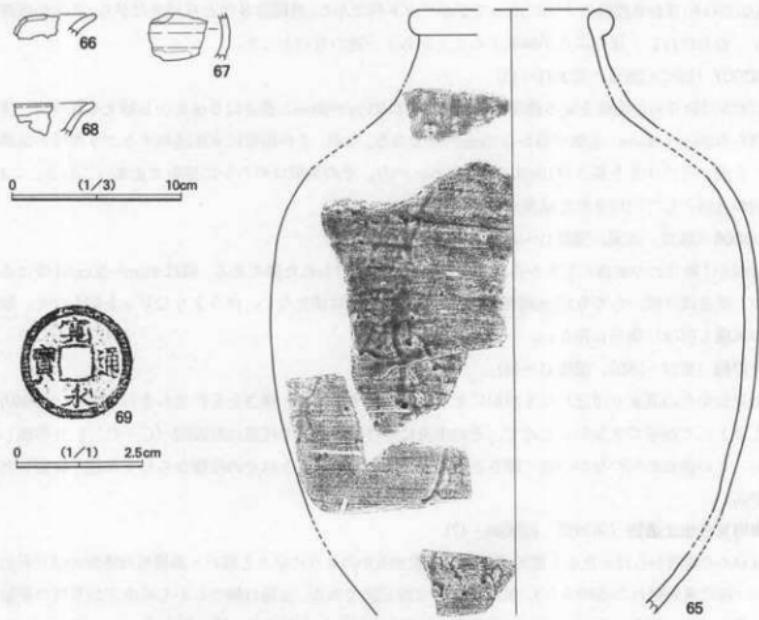
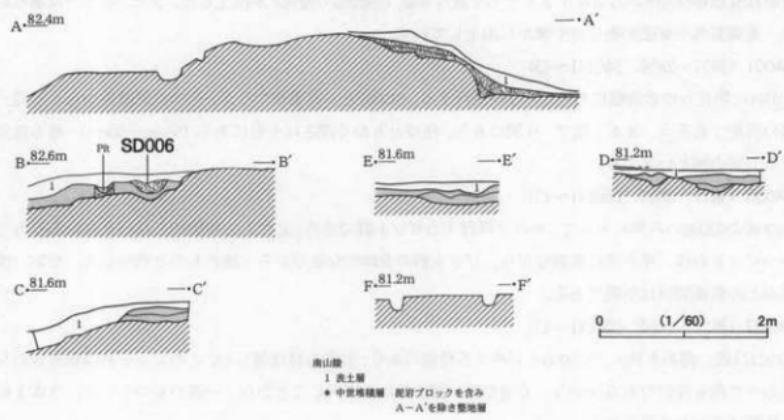
SD006は物見台の南西に北西から南東方向に向けて設けられた溝である。幅は30cm～50cm程度はあるものの、深さは台側からでも10cm前後と浅く、長さも6mに満たない。伴うようなピット列もなく、物見台との関係も明確に指示し得ない。

その他（第27・28図、図版41～43）

物見台中央の高まり付近には不規則にピットが密集する。径・深さともにまちまちであり、規則的なまとまりとして提示できなかったので、その中央にかけるかたちで任意に断面図（C—C'）を作成した。なお、この任意の列のなかの径・深さともに十分な1本のピットはその位置からして単独で機能した可能性が高い。

南物見台出土遺物（第29図、図版46・47）

SD006の周囲からはあたかも溝のプランと一致するかのように点々と瀬戸・美濃祖母懐壺の破片が出土した（一部は東側離れた場所から）。65はその推定復元図である。玉縁口縁でしかも多少下がり肩の形態をなすと思われる。肩部を欠いており、耳は復元し得なかった。大きさは、推定値ながら、口径12cm、胸部最大径30cm、器高40cm前後と思われる。内面はクロロ目が残り、胎土の色調は多少クリーム色を帯びた灰色



第29図 南物見台・物見台南平場(3)

を呈し、軸は内面を除き多少透明味を帯びた茶褐色の鉄軸である。68は物見台周囲の帯状平場から出土した。瀬戸・美濃端反りの縁軸小皿口縁部片である。69は南物見台一括品である。寛永通寶（新寛永）である。

（2）物見台南平場（第27図～29図、図版41～43・47）

物見台から南に続く尾根上に続く平場を物見台南平場と呼称した。ここは帯状の平場ではあるが、トレチ断面の觀察では中央の凹凸を埋め、周辺肩部に土盛りした様子が見られるので、旧状はさらに痩せ尾根状の地形であったと思われる。

平場の幅は先端で3.5m、物見台近くで5mとなり、長さは約11mほどである。物見台との境界は必ずしも明瞭でないものの、北東は細い回廊状の平場（幅約1m）で北側尾根平場と通じている。また、南側は城跡全体を掘り切る大堀切と面している。

遺構はその南側寄り中央で散在する大小のピット群が検出されているものの、規則性をもって結ばれる例に乏しく、径・深さ共に類似する1例（F-F'）を図示するに過ぎない。

遺物は、このピット群内から数点出土したのみである。66は端反りの青磁皿口縁部片である。小破片であり、断定はし得ないが、輪花になろうか。67は丸壺形の茶入胴部片であろう。胎土は堅く灰色を呈し、体部下端近くを除き鉄軸を施す。

（3）平場9（第30図～32図、図版42・47）

平場9は物見台の西側約6m下にあり、むしろなだらかに起伏する丘状の地形である。東西に細長く（約22m）、幅は明確には捉えられないが、5m～6m程になろうか。土層の堆積状況は陵線ラインでは表土下直ぐに地山となるが、傾斜面になると、20cm～30cmの岩混じりの層が介在する。中世の遺構はこの層の上位から確認されるので中世の表土面と推測される。

検出された遺構は中世の堀1条、井戸1基、溝（道）跡1、近世～近代炭窯跡3である。また、出土遺物は茶臼片等であった。

SD002（第30・31図、図版42・47）

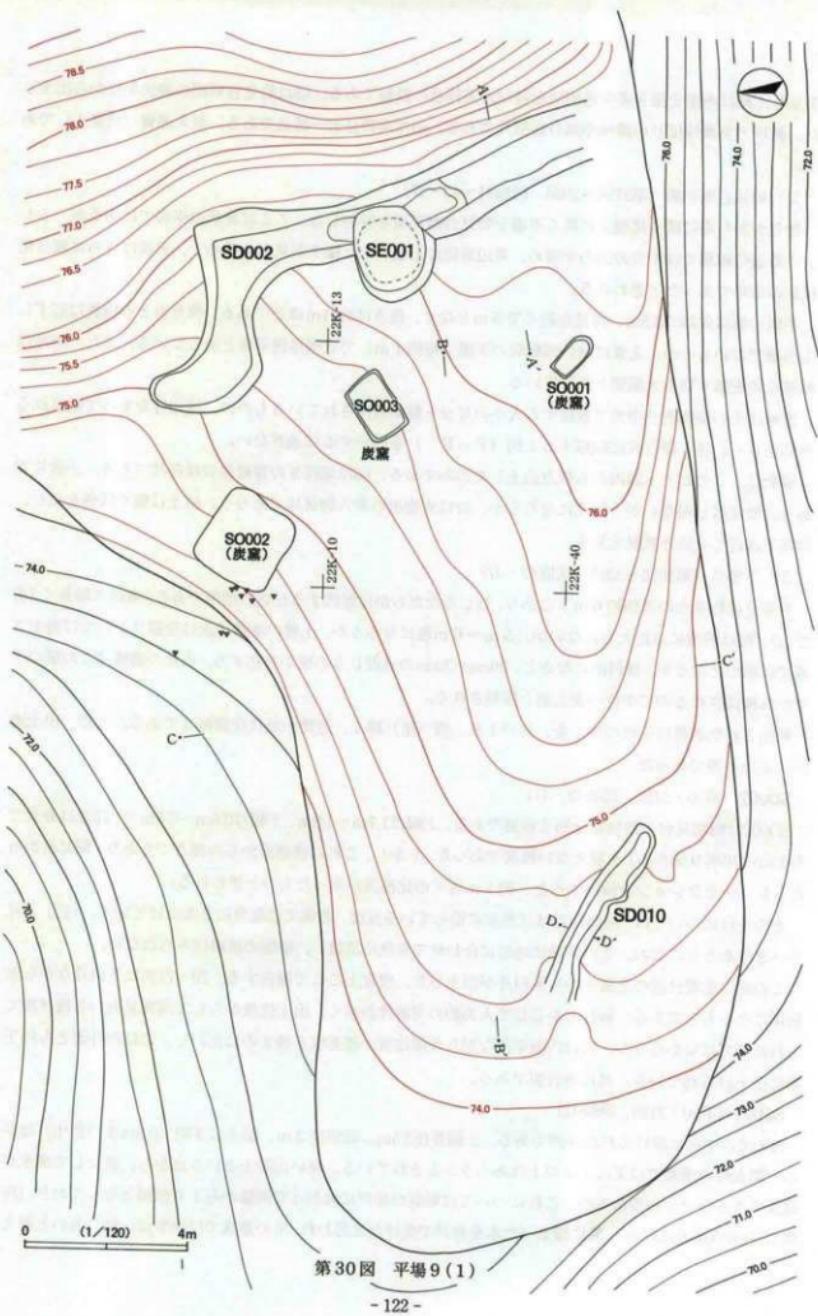
SD002は南物見台の西側裾を廻る箱堀である。上幅は1.7m～1.8m、下幅は0.6m～0.8mで、深さは最大でも0.5m（平場9側から）を越えない程度であった。しかし、これは確認面からの深さでもあり、堀に掛かつたトレチセクションを検討すると、約1m近くの比高差があったものと思われる。

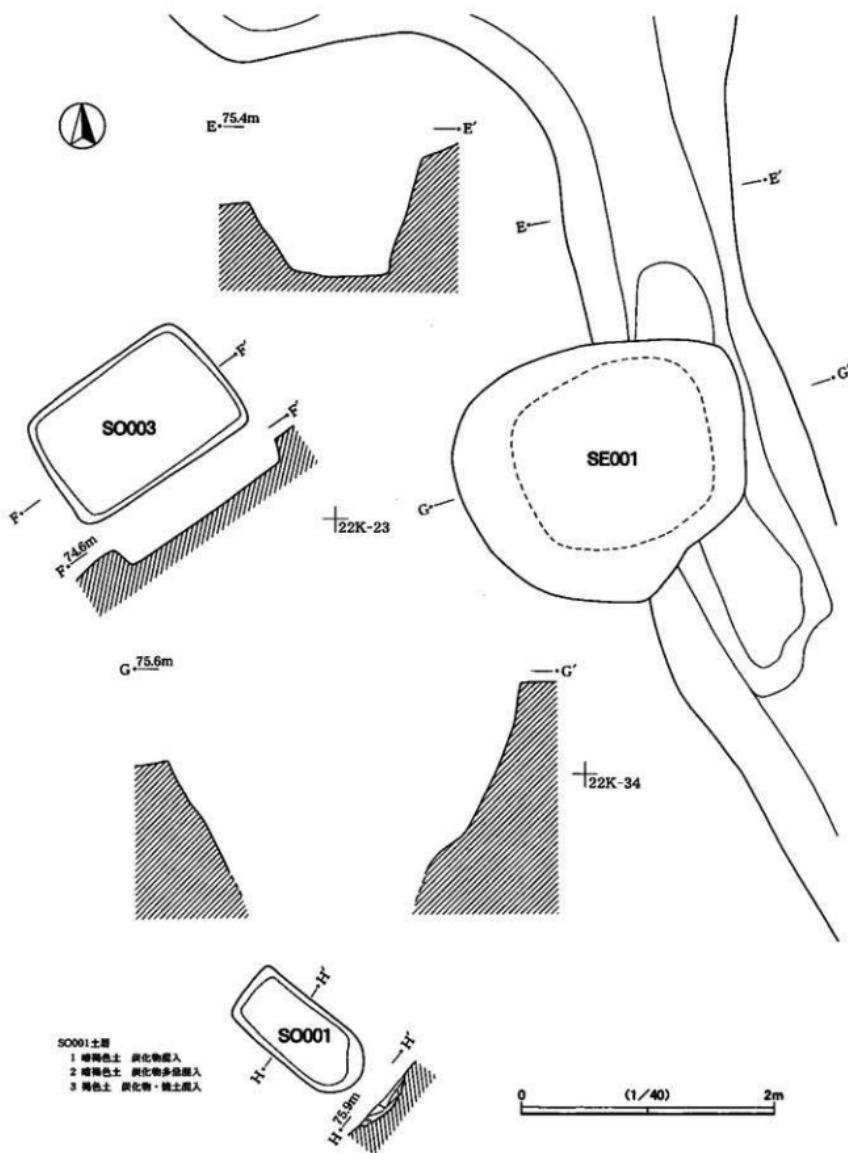
その走行については、南側泓はほぼ地形に沿っている反面、北側では直角に2度曲げている。「折」と見るべきであろう。なお、その両端は地形に合わせて自然に消滅し、縱堀の痕跡はみられない。

この堀の北端付近の土層中から茶臼片が出土した。便宜上ここで報告する。70・71共に下白片ながら別個体になるものである。割れ方からして人為的可能性が高く、出土位置からして南物見台から投げ捨てられたのではなかろうか。71は内面平滑ながら外面は荒い整形痕を残すのにたいし、72は内外面ともに丁寧に仕上げられている。共に砂岩製である。

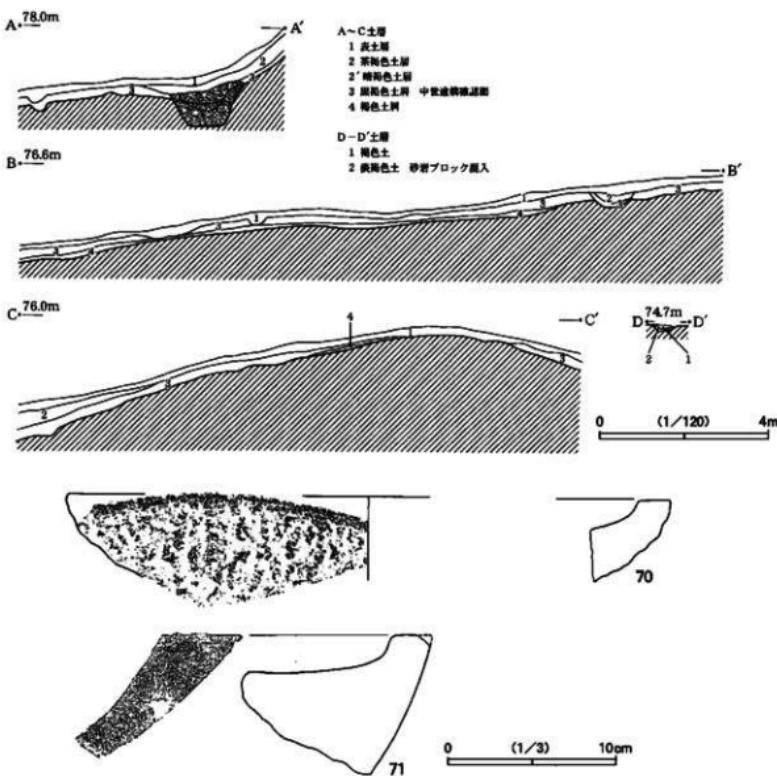
SE001（第30・31図、図版42）

SD002の中央に設けられた井戸である。上幅長径3.5m、同短径3m、深さは不明（0.6mまで排水）ながら、調査時の所見では更に1m以上はあろうかとされている。高い山陵上という点から、果たして涌水が確保できるかどうかであるが、これについては堀底が井戸に向かって両脇から下り傾斜となっており（南側では約30cmの比高差）、堀に溜まった水を井戸で受けたと思われ、その意味では两者は一体のものと捉え





第31図 平場9(2)



第32図 平場9(3)・SD002出土遺物

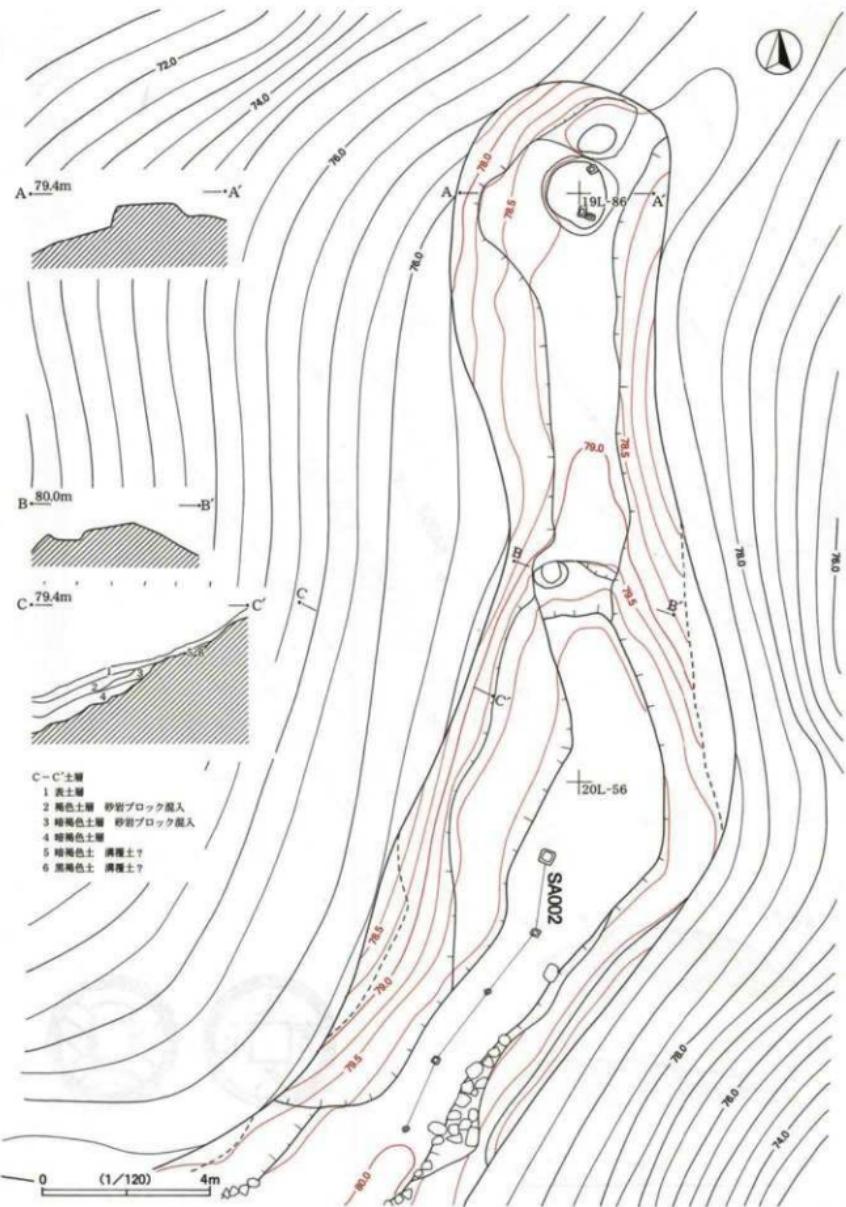
られよう。なお、井戸側や上部施設の痕跡は確認されなかった。

SD010 (第30図、図版42)

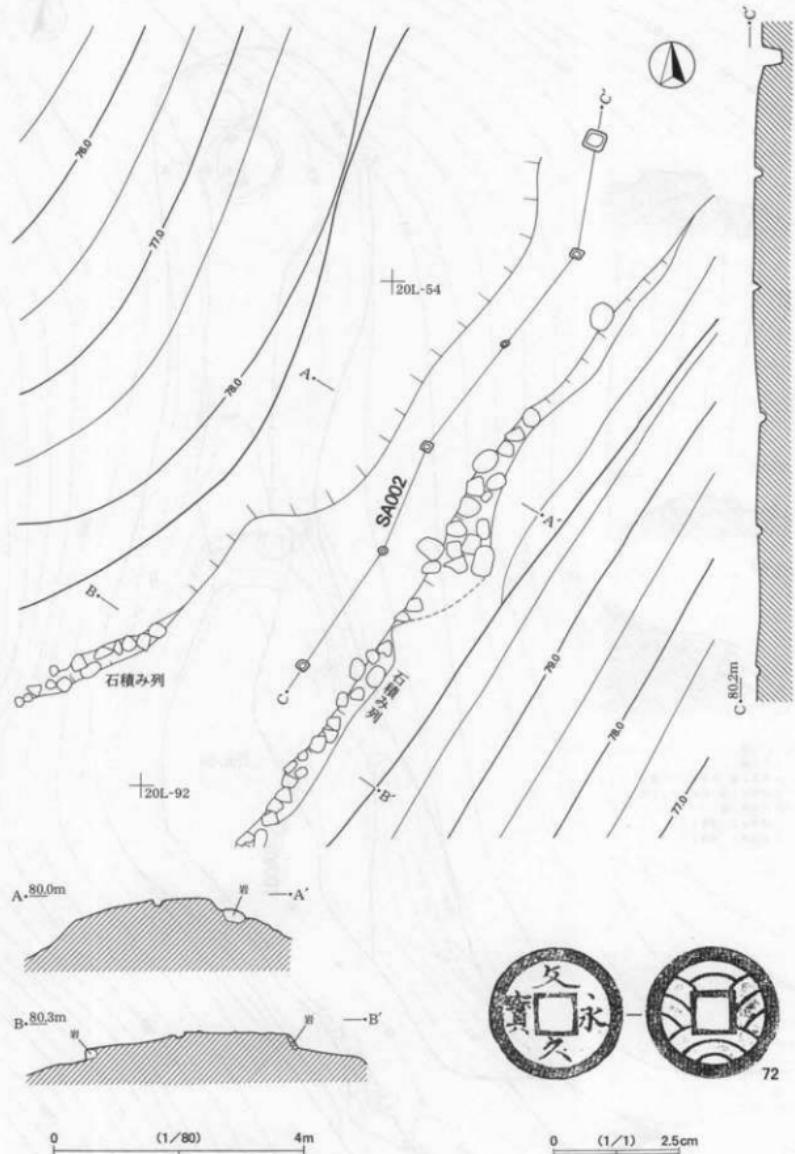
平場9の先端近くで検出された尾根道の跡である。幅は約50cm、深さは10cmを越える程度ながら、断面の形状からすると、本来は幅・深さ共に更にあったものと判断される。当平場から北西へ派生する尾根道の遺構の可能性があるが、あるいはまた、2基検出された炭窯を操業するために後世、運搬等の便宜上尾根筋の肩口を多少切り割った結果と解せないこともない。

(4) 北側尾根平場 (第33・34図、図版43・46)

南山陵物見台から北西へ延びる主尾根上の平場を呼称したが、明瞭な平場と捉えられるのは物見台に統く石積みを伴う付近 (幅1.5m~5m、長さ約20m) にすぎない。一応、その先も地形の凹凸を含め広く図示したが遺構と思われるものは限定されるであろう。確実なものを以下説明する。なお、遺物は表土層よ



第33図 北側尾根平場(1)



第34図 北側尾根平場(2)

り出土した文久永寶1点のみであった。

SA002 (第33・34図、図版43)

尾根の平場中央を縦に分割するようにピットが連続する。明らかに異なる北端の1本を別にすれば、径・深さ共に10cm程度であり、当城跡でも最も貧弱なピット列といつてよい。また、尾根の中央に並ぶことの意味など、その性格は明確に指示し難い。

北側尾根石積み (第33・34図、図版43)

物見台北東下から北側尾根平場南側にかけての平場肩口両脇に石積みがみられる。平場自体は盛土ではなく、石積みも肩口を整形して貼り付けたといつてよいものである。高さはせいぜい30cm~50cmにすぎず、石を数個無造作に積んだ状況であった。石の大きさは径20cm~30cmが主ながら、一部に50cm近くのものも含まれている。石質はほぼ地山の砂質泥岩である。

3 遺跡内表探・一括遺物

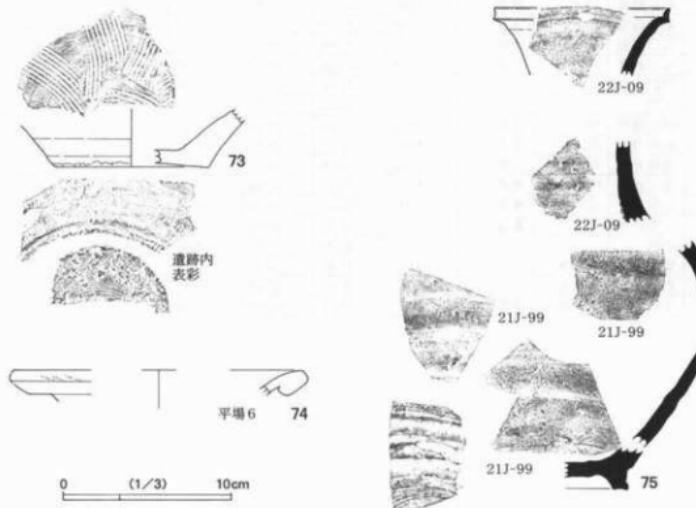
遺跡内一括でとりあげた中世遺物また地区内ではあるが中世以前の遺物をここで報告する。

(1) 中世の遺物 (第35図、図版48)

73は瀬戸・美濃擂鉢底部である。内面底部まで掘り目を施し、軸は鋲軸である。

(2) 弥生時代の遺物 (第35図、図版48)

平場6また5周辺では40片以上の弥生土器片が出土しており、器形は壺、甕の両者が確認できる。しか



第35図 遺構に伴わない遺物

し、いずれも小破片であり、実測・表示できるものは僅かに1点のみであった。74は平場6から出土した弥生時代後期の壺形土器口縁部である。複合口縁上に撚糸らしき施紋がかろうじて確認される（その場合は原体R捻り）ほかは無紋である。表面の剥落が頗著なためか、砂粒が浮き出しており、明黄褐色を呈する。

(3) 古墳時代の遺物（第35図、図48）

平場9の北側肩部（21J南東隅：T62北端）において須恵器片がまとまって出土した。75はその各破片を部位ほどに復元したものである。長頸壺と思われ、本来は1個体の遺物であったと思われる。佐貫横穴群に伴う遺物とみるのが自然ではあるが、近辺には由来する横穴ではなく、出土位置との相関関係は不明である。

第4表 根本田入口山駿岩跡出土銭貨計測表

| 拂団番号 | 銭種 | 王朝名等 | 書体 | 初鑄年 | 縦銭径 | 横銭径 | 縦内径 | 横内径 | 銭厚 | 背文 |
|--------|------|------|----|--------|-------|-------|------|------|------|----|
| 第3団1 | 永樂通寶 | 明 | 真書 | 1408 | 25.84 | 25.91 | 6.19 | 5.59 | 1.49 | |
| 第4団2 | 元豐通寶 | 北宋 | 行書 | 1078 | 24.92 | 24.55 | 7.37 | 6.86 | 1.42 | |
| 第4団3 | 元豐通寶 | 北宋 | 行書 | 1078 | 24.02 | 24.66 | 6.82 | 7.20 | 1.16 | |
| 第10団6 | 開元通寶 | 唐 | 真書 | 621 | 24.22 | 23.84 | 7.61 | 7.45 | 1.33 | |
| 第12団11 | 咸平元寶 | 北宋 | 真書 | 998 | 24.76 | 24.94 | 5.69 | 5.82 | 1.21 | |
| 第16団19 | 寛永通寶 | 新寛永 | | 17~18C | 22.64 | 22.57 | 6.38 | 6.41 | 1.03 | 元 |
| 第18団20 | 皇宋通寶 | 北宋 | 真書 | 1038 | 24.76 | 24.82 | 6.86 | 6.65 | 1.21 | |
| 第18団21 | 寛永通寶 | 古寛永 | | 17C | 22.78 | 23.13 | 6.81 | 6.91 | | |
| 第22団43 | 永樂通寶 | 明 | 真書 | 1408 | 24.90 | 24.79 | 5.46 | 5.73 | 1.20 | |
| 第22団44 | 永樂通寶 | 明 | 真書 | 1408 | 24.82 | 24.72 | 5.79 | 5.71 | 1.47 | |
| 第22団45 | 永樂通寶 | 明 | 真書 | 1408 | 25.22 | 25.14 | 5.83 | 5.90 | 1.07 | |
| 第22団46 | 寛永通寶 | 新寛永 | | 17~18C | 24.55 | 24.32 | 6.52 | 6.34 | 0.93 | |
| 第22団47 | 嘉定通寶 | 南宋 | 真書 | 1208 | 22.55 | 22.83 | 7.00 | 6.90 | 1.05 | |
| 第22団48 | 皇宋通寶 | 北宋 | 真書 | 1038 | 24.19 | 24.38 | 7.16 | 6.80 | 0.96 | |
| 第22団49 | 元口口寶 | | 篆書 | | 22.68 | 22.62 | 6.57 | 6.45 | 0.90 | |
| 第22団50 | 元符通寶 | 北宋 | 行書 | 1098 | 23.39 | 24.59 | 7.20 | 7.10 | 1.09 | |
| 第22団51 | 口口元寶 | | | | 22.53 | 23.15 | 6.96 | 6.97 | 0.93 | |
| 第22団52 | 不明 | | | | 25.24 | 25.22 | 7.25 | 7.34 | 0.96 | |
| 第22団53 | 開元通寶 | 唐 | 真書 | 621 | 0.24 | 24.03 | 6.91 | 7.05 | 0.98 | |
| 第23団54 | 皇宋通寶 | 北宋 | 篆書 | 1038 | 24.17 | 23.92 | 6.62 | 6.59 | 1.67 | |
| 第23団55 | 景祐元寶 | 北宋 | 真書 | 1034 | 23.19 | 23.22 | 6.05 | 6.22 | 1.01 | |
| 第23団56 | 慶元通寶 | 南宋 | 真書 | 1195 | 24.13 | 23.84 | 6.40 | 6.16 | 1.49 | 六 |
| 第23団57 | 紹聖元寶 | 北宋 | 篆書 | 1094 | 24.40 | 24.06 | 6.44 | 6.51 | 1.42 | 上墨 |
| 第23団58 | 元豐通寶 | 北宋 | 篆書 | 1078 | 22.88 | 22.62 | 6.25 | 6.15 | 1.11 | |
| 第23団59 | 不明 | | | | 23.83 | 23.34 | 6.30 | 6.50 | 1.22 | |
| 第25団64 | 寛永通寶 | 新寛永 | | 17~18C | 24.46 | 24.45 | 5.93 | 5.94 | 1.37 | |
| 第29団69 | 寛永通寶 | 新寛永 | | 17~18C | 22.92 | 22.88 | 5.93 | 5.94 | 1.20 | |
| 第34団72 | 文久元寶 | 四文銭 | 草書 | 19C | 26.75 | 26.93 | 6.53 | 6.45 | 0.98 | 波 |

第5表 根木田入口山脇砦跡 地區別・種類別・時期別遺物出土数

*各標片（同一個体さへ）を1点として計算。但し縦1.0m以下の小片は除外。

第6表 根木田入日山脇砦遣構一覧ほか

| | |
|---------|---|
| 北物見台 | SK004 |
| 平場 6 | SD012、SD013、SD014、SD015、SA004、SA006、SA007、SA010、SA012、SA016、SB002、SB003、SO004 |
| 平場 8 | SD011、SD019 |
| 平場 5 | SA019～SA026、SD016、SD017、SO005 |
| 門跡 | SB001、SD004 |
| 平場 1・2 | SD001、SK001～SK003、SX001 |
| 平場A・B・C | SD101、SD102 |
| 南物見台 | SD006、SD007、SA001、SA003、SA027、SA028、SX002 |
| 平場 9 | SD002、SE001、SC001～SC003 |
| 北側尾根平場 | SA002 |

報告に当たり新規に設けた造構

SA019~SA028, SB003, SB004

名称を変更した遺稿

機台1→北側屋根、機台2→南側屋根、北側曲輪（の先端）→門跡、機台2周辺（の北側屋根）→北側屋根平場

不規則の遺構（報告に当たり検討結果により削除）

| | |
|------|---|
| 北腰曲輪 | SD003 |
| 南尾根道 | SD005 |
| 櫓台 1 | SH001、SD005 |
| 櫓台 2 | SD008、SH003、SH004 |
| 平塹 6 | SH006、SZ001、SA005、SA008、SA009、SA011、SA013～SA015 |
| 平塹 5 | SD009、SD018、SB002、SH005 |
| 平塹 8 | SH002 |

第3節 まとめ

1 根木田入口山脇砦の構造

まず本題に入るまえにその名称についてふれたい。根木田入口山脇砦とは随分と長い名称であるが、その由来は大字花香谷字山脇と根木田入口に及ぶ範囲（山脇が大部分）に所在することにある。花香谷¹⁷⁾には他に城が確認されないことや、砦を含め一括りの概念としてむしろ花香谷城とすべきかもしれない。まずその点を指摘したうえでまとめに入る。

城跡は從来標高82mの峰（その一部は当報告の南物見台）から染川の段丘面に至る約300mの丘陵上と捉えられていた。具体的に言えば、南側の二重目の堀切から北側の丘陵中腹（平場A・B・C）までである。しかし、今回の調査成果に加え広く周辺を踏査した結果（第36図参照）から新たな城郭像が浮かび上がってきた。

その範囲については、南物見台から西側に派生する丘陵を寸断する堀切が無い（SD002は南物見台を画する堀）反面、この丘陵の西側つまり外側の支尾根は適宜小堀切を入れている。西側丘陵を城郭の一部として取り込んでいたことは確かであろう。一方、内側は東側の丘陵を含め自然地形のままである。このような方方は上総の戦国城郭にしばしばみられる谷を囲い込む（丘陵の土壘化）という思想の産物であり、要するに広い曲輪は谷の中に確保したのである。そうすると、当城は250m×300mほどの比較的規模の大城といふことになる。

しかしその割には、瘦せ尾根ということもあるが、明瞭な曲輪といえるものはなく（平場とした理由もそこにある）、伴う遺物も希少であった。また、要害性という点でもとりたてて優れた点があるわけではない。ただこのなかにあって、東側丘陵先端部は南側を大堀切で画し、取り付きやすい東側から西側にかけては切岸整形や石積みを伴う段差また堀（SD001）を設けるなど、それだけで独立した構造ともいえる内容である。あえていえば主郭ないし詰の曲輪に当たる場所としてよいだろう。しかし、そこにおいても、調査結果からして短期間の使用を物語る状況であった。

そうすると、それは当地域の領主層の根城というより、ある目的のために臨時に取り立てられた城郭とみたほうが適切で、その性格が構造に反映された結果かと推測するが、それはまとめの最後で述べたい。

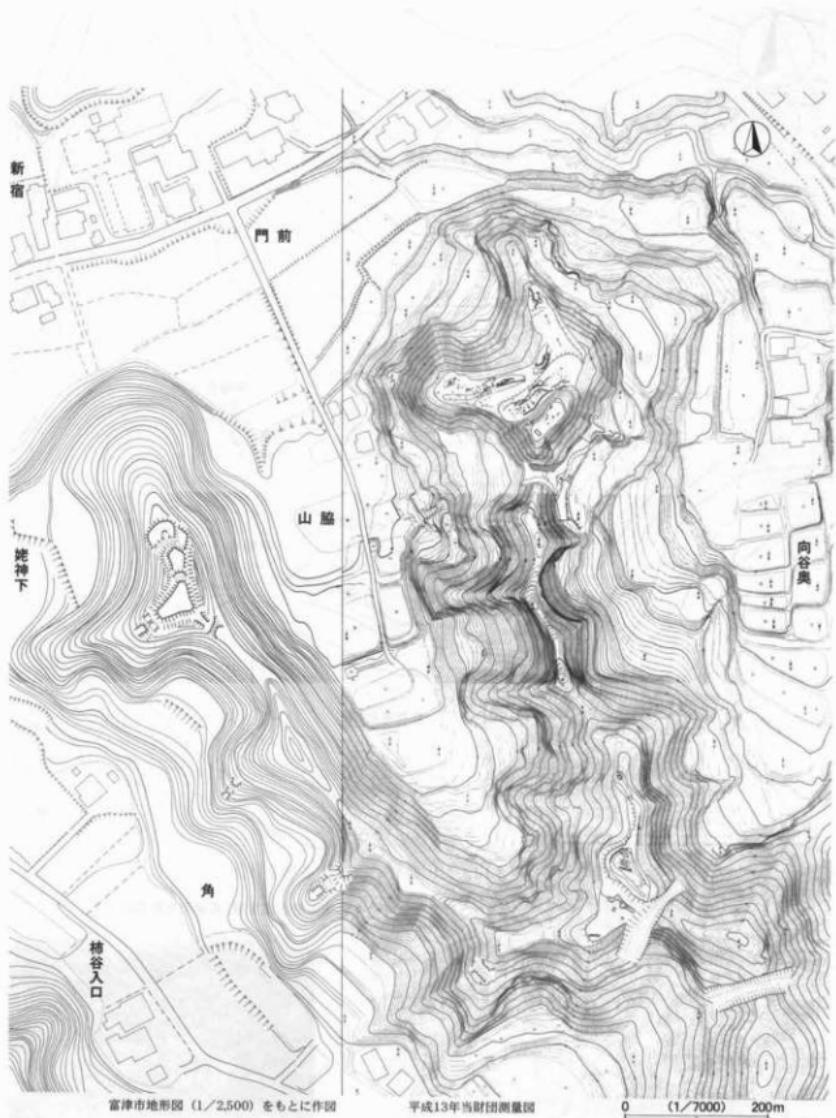
2 検出された特色ある遺構群

検出された遺構ないし遺物のあり方には特色あるものが少なからずみられた。それらを箇条書きにすると大きく次のようになろう。

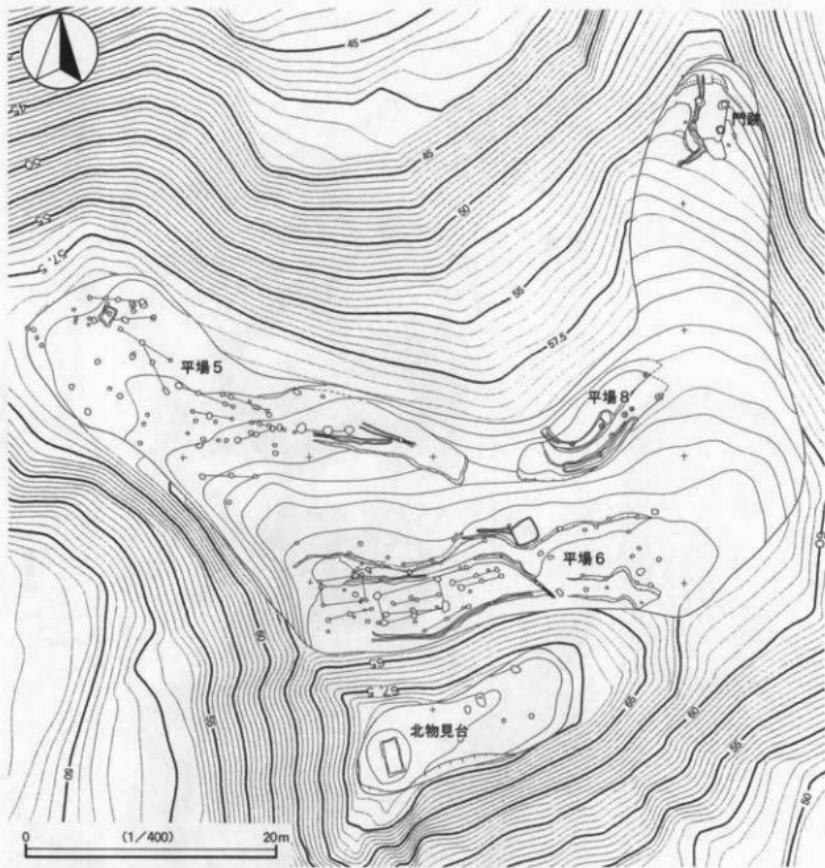
- ①3本～6本単位のピット列の群在
- ②切岸と対応する石積み手法
- ③尾根道に設けられた門
- ④物見台で出土した茶道具類
- ⑤階層性を物語る近世墓所

①は当城の遺構の中心を占めるものであるが、同時に掘立柱建物がほとんどないという点とも対をなす。未確認のピットに起因するエラーも含め、それが絶てではないであろうことを述べたうえでまず平場毎の一覧を示す。

平場6 3本ないし6本柱・柱間6尺1列、3本柱・柱間5尺2列、3本柱・柱間8尺1列、不定形2列



第36図 根木田入口山脇砦張図



第37図 根木田入口山脇砦北側山稜遺構全体図



▲平場6から見た佐貫城

平場5 3本柱・柱間6尺2列、3本柱・柱間8尺1列、不定形6列

平場8 3本柱・柱間6尺1列

南物見台 3本柱・柱間8尺1列、3本柱・柱間6尺と8尺各1列、不定形3列

一覧から言えることは、3本1組のピットが多く、しかも柱間は6尺ないし8尺のものが多いということである。一つは片屋根構造の掘立柱建物が考えられるが、それにしてはSA029やSA030など構造的に不都合な場合がある。一体なんの目的で掘られたのであろうか。

手掛かりとしては、まず平場6と5に集中しているということ、なかでもSB001のように何んらかの構造物がある周辺にとりわけしっかりしたものが多いということである。ここは主郭の中心部に相当するが、既述したように、当城が臨時的な所産だとした場合、その位置からして佐賀城に関わるものとするのが至当で、その出城ないし向城と考えられる。ただ出城とした場合、ここは川向こうにあり、しかも前面つまり南面は丘陵地が続き、佐賀城本体にとって利が薄い。後に述べるような歴史また当城の年代や内容からして佐賀城に対する向城（陣城）とみるのが至当であろう。

北物見台から平場6・5はまさしく佐賀城本体に染川を隔てて相対する位置（その間約400m）にある。佐賀城の標高は丁度60m、一方の根本田北物見台は約70m、その下の平場6から5は60数mほどで、両者を遮るものはない。このような環境を考えると、佐賀城に対した軍が設けた陣所それも本陣における幟・指物²⁾の柱の痕跡を示すものと想定する。3本1組なのは、中心を本柱、両脇に袖柱をとるからで、その向きはいずれも佐賀城を向いているのである。

②は大堀切東側にみられる石積みである。その構造は北物見台の裾を数段の切岸とするも、岩盤となる下部と異なり上部は土砂が露呈するため、その縁を岩石で養生するというものである。手法としては地山の砂質泥岩（佐賀層）または礫岩（東の長浜層由来か）を野面に積み上げただけのもので、面に対して石の短辺を据えたり、背後に栗を詰めるということはない（その結果、崩壊している部分が多いのだが）。それは陣城という性格や石積みそのものの高さという点も多少はあろうが、そもそも房総の戦国城郭の実態を反映したものといったほうが適切であって、今回の調査はその例証の一つとも言えようか。

③はこの種丘陵城郭の進入路と防御の実態を考えるうえで貴重な資料といえる。というのは、瘦せ尾根よりなる丘陵城郭は多くの場合、狭い平場と堀切のみ、しかも登城路や虎口となるとまったく推測の段階というほかなく、その点、過去の調査例も同様である。

しかし、当城では、長く延びた尾根の途中の段差を利用し、前方を見下ろす位置に門を作り、しかもそこが通路として使われた痕跡とそこに詰めていた番衆の存在が窺われるなど、狭い尾根が実際に通路として機能していた事実と、要所に防御施設を設けていた実態が把握出来た。惜しまるくはその北側先端から山麓へどのように結ばれていたのかという点であるが、これは今回の調査で果たし得なかった。

④は城郭の性格及び構造というより、その一面で何が行われたかを知る資料といえよう。物見台の南西、SD006の周囲においてはまとまって茶壺片が、また、破片ながら物見台南平場から茶入がそれぞれ出土し、茶壺が出土したその西側斜面下SD002からは茶臼片も數点みつかっている。また、茶壺や茶臼はその遺存の状況からして故意に破砕し投棄した状況が垣間見える³⁾。ほかに出土した遺物といえば、青磁と瀬戸・美濃産の皿の小破片各1点のみで、遺構の状況とも併せてそこに居住性は窺えない。茶釜の出土こそないものの、野外で茶を点てたとすれば、既に述べた向城としての性格や城内の最高所という環境など、山頂平場に諸将たちが集まった折、茶が振る舞われた可能性を指摘したい。

平場1・2についてはそこが近世17世紀代に墓地として使われていたことを既に述べた。⑤はそこに葬られた人々に階層性が窺われるという点である。平場西側下の勝隆寺は近世初頭に佐貫に入った内藤氏が建てた善昌寺がその前身と言われ、内藤氏が磐城に転封したのちは桜井松平氏、次いで能見松平氏が入り、その菩提寺とした。貞享元年（1684）、二代重治の時に改易となり、以後、宝永7年（1710）に阿部氏が入るまでは無城主であった。内藤氏、能見松平氏の石塔はいずれも寺境内にあり、国元の一族・家臣たちの墓もその一角に営まれたことは想像にかたくない。

事実、平場1・2から出土した遺物には、陶磁器、銭貨、石塔が主であるが、かわらけや装身具なども僅かながらみられる。後者には手づくねかわらけ、ガラス製の笄など房総の地ではきわめて稀な遺物が含まれている。遺物の年代といい、そこが、近世17世紀に武士階級の墓所であった可能性を指摘したい。

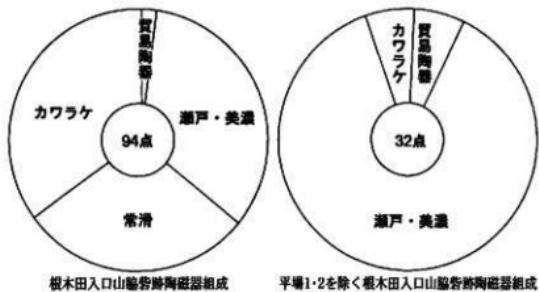
3 築城の背景

既にまとめ1に於いて、遺構のあり方から当城の性格を規定した。とすると、その築城の背景及びその後の経緯はいかなるものであったろうか。

佐貫城がいつ築かれたかは明らかでないが、既に指摘されているように佐貫そのものが西上総に於ける「経済・政治の中心地」の一つであり⁵⁾、それゆえに戦国期にはここを押さえることが領域支配上志向されたことは間違いない。ただかつて提起されたように、佐貫城の所在する現在の佐貫・花谷地区が城館そして宿の統いくわば政治ゾーンとして登場するのは、やはりそこに城郭が築かれた結果で、それも武田氏以降のことと考えてよいのではなかろうか⁶⁾。というのは、永正6年の佐貫鶴峰八幡神社棟札に大權那武田信嗣⁷⁾とあり、即ちそれはそれ以前に武田氏の佐貫入部を示すものとみてよい。この信嗣は真里谷武田氏の祖ともいるべき清嗣の子と思われ⁸⁾、15世紀後半における真里谷武田氏の上総領国化の過程で要地の經營に当たった結果ではなかろうか。しかし、佐貫安国寺不動明王胎内墨書館には永正16年（1519）に佐貫郷の「大乱」とある⁹⁾。永正10年代といえば相模北条氏が房総のいわば政局に介入した頃で、この大乱とは国人層を巻き込んだ武田一族間の争いに北条氏が関与した結果かと推測される¹⁰⁾。

大乱の結果がどうなったかはわからないが、いずれにせよ信嗣の後継者と思われる信秋（式部大夫全芳）の軌跡は佐貫のみならずより南の湊川流域においても確認される¹¹⁾ので、まもなく、佐貫・峰上両城を抱えるほどに至ったと思われる。しかし、天文期に至り真里谷一族の内訌に周辺勢力が介入した結果、その勢力は急速に弱体化し、西上総は北条氏と里見氏の草刈場となった。峰上・佐貫が里見氏の手に落ちたのは天文13年（1544）から14年頃と思われ¹²⁾、以後、西上総の木更津から佐貫間を舞台に干戈を交えることとなり、天文15年（1546）秋には北条軍が大軍を以て里見当主義堯の居る佐貫を包囲した¹³⁾。この包囲は約1ヶ月内外に及んだと考えられるが、「義堯在城佐貫之地」¹⁴⁾とあることから、佐貫城を指すことは明らかである。その後、天文末から永禄初期にかけて西上総は北条氏のてこ入れもあって、里見氏の勢力は後退し、佐貫城周辺も同氏の勢力下に入っている¹⁵⁾。

さてこのような佐貫城をめぐるそれも前半の歴史は、当城の年代や遺構とどう対応するのであろうか。当城跡から出土した遺物は面積比からして微量と言わざるを得ないが、それでも編年研究の進んでいる瀬戸・美濃産陶磁器が僅かながら出土した。最新の成果によればそれらは古瀬戸後期様式IV期～大窯1期に比定され、実年代は15世紀代～1530年辺りと考えられている¹⁶⁾。そして、重要な事実はこれを下る16世紀代の瀬戸・美濃製品がないということである。もちろん、これをもって直ちにそれが城の年代を示すという



第38図 根木田入口山脇跡 陶磁器組成

の谷を大きく囲い込む構造、つまり一定の兵力を常駐させ、攻囲戦を意図したものと受け止められるゆえである（もちろん、天文13・14年頃に信秋が佐貫を追われる際の可能性もあろうが、対峙するような戦闘は想定しにくい）。そうだとすれば、この城には北条配下の諸将率いる上総遠征軍が1月以上にわたって駐屯したことになろう。具体的には房総との関わりからして、北条一門の綱成を主将とした玉縄衆や、後に当地と関わる小田原衆の布施氏、加藤氏等であったろうか。

山上には峰の平場に本陣を置き、曲輪取りはしないものの、それに続く要所は門や堀切を設け、陣小屋は谷に建ててる。「備前老人物語」¹⁾には、陣屋での心持ちとして、東西南北の確認、小屋掛けの要領、具足着用の便、盜人の用心、鍵の置き場所・置き方、草鞋の管理、朝夕の食事、馬屋の位置、鎧鉄の持参について記し、また、城をかこむ場合は火の番を始め各自の役割を早く決め、更には仕寄をめぐり緊張状態にある兵士たちの気の持ち方などについても説いている。山上、谷間で繰り返されたであろう、日々の様子を調査結果から導き出すことは容易でないが、鎧・指物が敵方に向かい乱舞する一方、陣中では物主つまり主将クラスがお茶を嗜む（それは今でいう会議に伴うものであったかもしれないが）、そんな戦陣の有様が一端ながら垣間見えたというべきかもしれない。

註

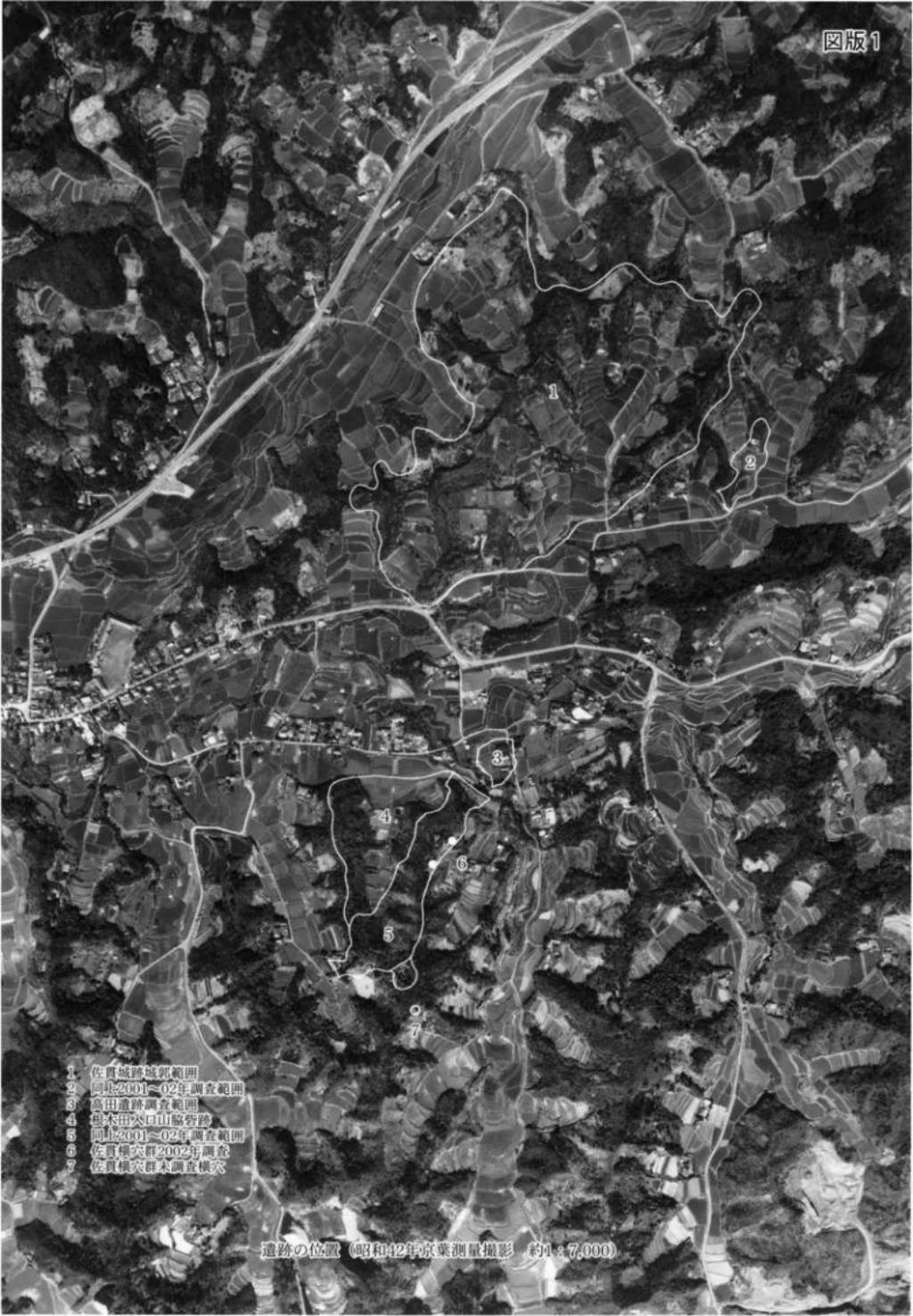
- そもそもこの名称自体、花香谷とは本来は鼻ヶ谷つまり塙ヶ谷に由来するものと思われる。塙がしばしば城郭に伴う字名であることは言うまでもない。
- 鎧・指物と総称したが、この種の旗は小旗、馬印を含め多様である。規格的なもの、径の大きなものが幡旗でそれ以外がその他とは一概に言い得ない。なお、天正期と推測されている「北条氏着到定書」には総人数30人の軍役に対して「武本 大旗 長サー丈五尺 持手 かぶり物 具足」の記載がみられる。騎馬や歩者の指物とは明らかに異なるものである（「富岡文書」17『千葉県史料 中世篇 諸家文書補遺』）。
- 上総・安房では石の産地である富津以南の西上総や安房において主に曲輪の縁辺や虎口で石積みがみられるが、明らかに石塙といえるものは未だ見出していない。
- 北条軍は10月初めに武藏における戦局の変化から急遽撤退を解いた（註13史料）が、突然の慌ただしい撤退に伴う処置とみてよいであろうか。
- 福島金治 1987「金沢称名寺領上総国佐貫郷について」『三浦古文化』No.42・滝川恒昭 2005「北条氏の房総侵

のは短絡的で、それ以前に流通・使用されたものが遺跡に残されたにすぎない。とすれば、それは編年自体の誤差も含め、16世紀代の永正～天文期という幅が設定できるであろう。これを上記の歴史と照合すると、天文15年秋の北条氏による佐貫攻めがまず上げられねばならない。

なぜなら、それは向城を構えるような長期戦であり、加えて一つ

- 攻と三船山合戦』千葉城郭研究会編『城郭と中世の東国』
- 6 佐貫における城郭分布やその内容を検討すると、16世紀代における佐貫城とは現在認識されている佐貫城以外あり得ないと考える。
 - 7 『千葉県史料』金石文篇一 君津郡85
 - 8 『千葉県史料』金石文篇一 君津郡84
 - 9 上総武田氏で諱に嗣を有するのは鈴子円福寺旧蔵享徳11年（1462）鐘銘（旧主は現袖ヶ浦市飯富社、その銘文等については篠崎四郎「木更津から鈴子へ来た鐘」「房総展望」6また「房総金石文の研究」参照の事）にあらわれる泰嗣及びその子と思われる清嗣の他には見当たらない。また、信嗣の子、信秋父子の活躍年代などを考慮すると、信嗣は清嗣の子とみるべきか。なお、佐貫武田氏が一貫して真里谷ではなく、武田氏を称していたことはその成立が古かったことを窺わせる。
 - 10 里見氏の開与はこの当時の同氏の置かれた状況からして、想定し得ないとみる。
 - 11 金石資料では永正4年～天文11年（1542）の間であるが、信秋父子がその後当地を追われたことは、この間の経緯にふれた某書状（「妙本寺文書」）や西門院に宛てた武田義信書状（重永卓也「房総里見・正木文書の研究史料編1」）によても窺える。この系統が北条氏旧臣にして後の旗本間宮氏に繋がるのであろう（「寛政重修諸家譜」巻第438 間宮・「断家譜」二 間宮）。また、両者の接点は縁者の関係によるが、それも間宮氏の本領が対岸の久良岐郡内（横浜市）にあったことと無関係ではないであろう。なお某書状については、近年、黒田基樹氏が詳細な分析を加えている（「天文後期における北条氏の房総侵攻」「市史研究 横須賀」第3号）。
 - 12 「ささこおちのさうし」・「なかおおちのさうし」には天文12年の笠子落城後の某年4月（文脈からすると翌年4月か）、里見・信秋父子連合軍による中尾攻めを記し、「みねがみ（峯上）さぬき（佐貫）のつわ物ども」ともある。この後、北条氏の調略により、同14年9月までには（註8 黒田論文参照）峯上が北条氏の手に落ちている。なお、両草子については從来歴史資料として低く評価されてきたきらいがあるが（恐らく時宗僧による仮名文）、随所にみられる中世的用例などから更に活用されて然るべきと考える（「小弓御所様御討ち死に物語」などもしかり）。
 - 13 「太田道善（資正）書状写」（藩中古文書十二） なお、この文書の理解については、「勝浦市史」資料編中世257解説及び註8 黒田論文参照の事。
 - 14 註8「妙本寺文書」（『千葉県の歴史』資料編中世3 妙本寺文書398）
 - 15 註1 滝川論文、註8 黒田論文
 - 16 藤沢良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」「瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要」第10輯
 - 17 「備前老人語」「改訂史籍集覽」第十冊 なお、本書は内容からして「武功雜記」と対をなすもので、主に信長～家康時代におこった出来事を後に伝聞も含め書き留めたもので、原本の成立は大歎院様つまり將軍家光代のことであろうか。

写 真 図 版



- 1 佐貫城跡城郭範囲
- 2 同上2001～02年調査範囲
- 3 佐貫遺跡調査範囲
- 4 墓木田大口山塚古跡
- 5 同上2001～02年調査範囲
- 6 佐貫櫛穴群2002年調査
- 7 佐貫櫛穴群本調査横穴

遺跡の位置 (昭和42年京葉測量撮影 約1:7,000)

図版2



調査前状況：4 S周辺（東から）



調査前状況：5 Q、5 R周辺（西から）

高田遺跡 調査前



2 トレンチ砂層
検出状況
(東から)



2 トレンチ
泥炭層検出状況
(東から)



3 トレンチ
旧流路断面
(南西から)
この流路内から土師器が多量に出土した

図版 4



▲下層断面 (SPA-A')

左側の礫層及びその上の砂層が遺物包含層



下層遺物出土状況▶

縄文中期～後期初めの
土器片が散発的に出土



◀下層断面 (6S-52付近)

右側の礫層内が遺物包含層、
礫に覆われた河原に縄文人の遺物が
遺されたことがわかる

高田遺跡 下層遺物出土状況ほか



▲SD006 遺物出土状況



SD004▶
(北から)

図版6

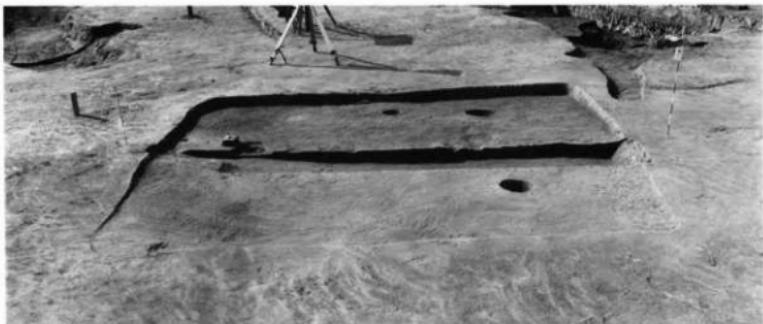


◀SD001
(東から)



◀SD002
(南東から)

SI001▶



◀SI002



ピット群



高田遺跡 SI001・SI002・ピット群

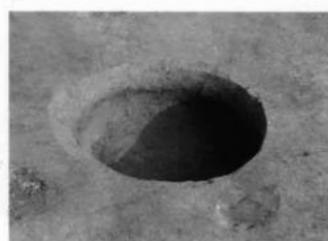
図版 8



◀SK001



◀SK003



▲SK004



◀SK006
SK014



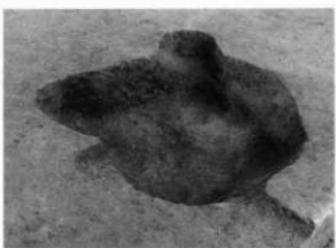
▲SK005



▲SK023



▲SK007

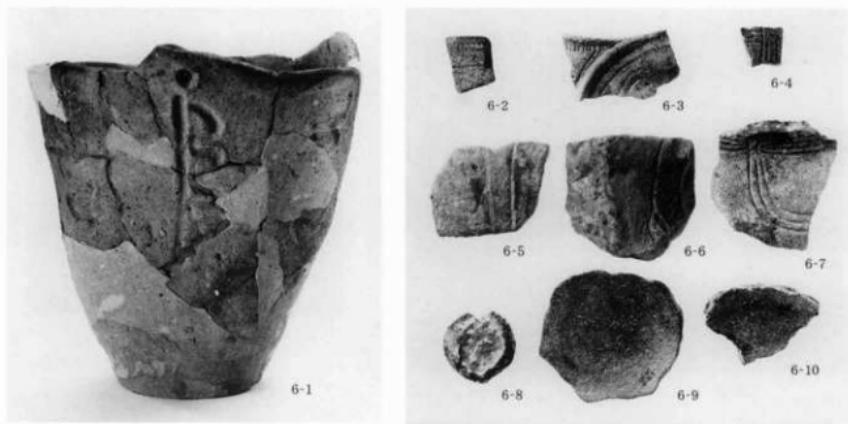


▲SK030

作業風景▶



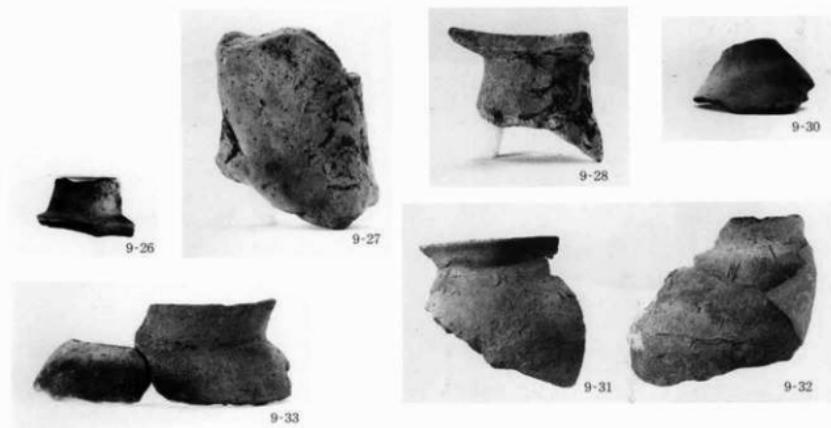
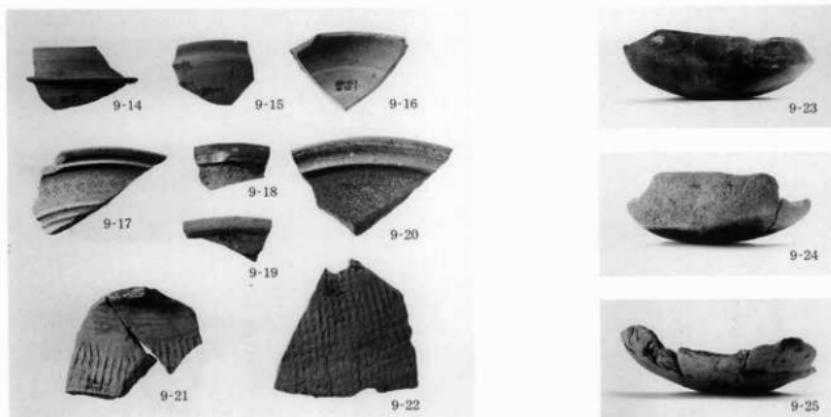
図版10



◆縄文時代包含層調査風景



高田遺跡 出土遺物（1）



3 トレンチ旧流路▶
遺物出土状況
(東から)

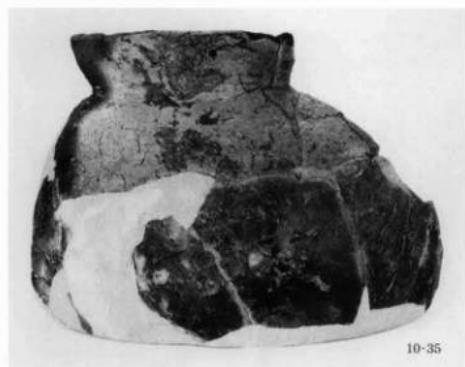
図版12



10-34



10-37



10-35



10-38



10-39



10-40



10-36



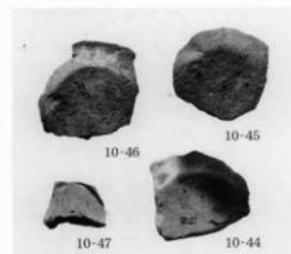
10-41



10-43



10-42



10-46

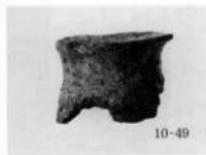
10-45

10-47

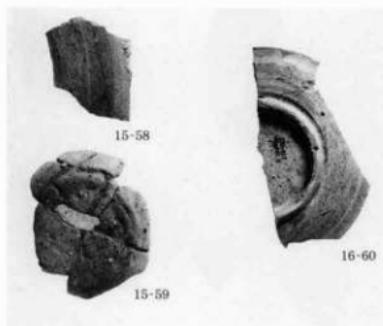
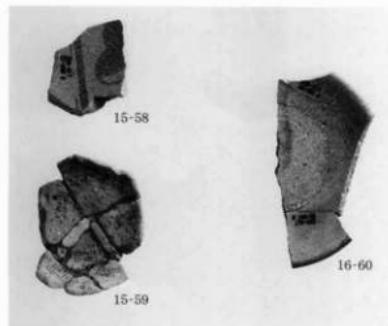
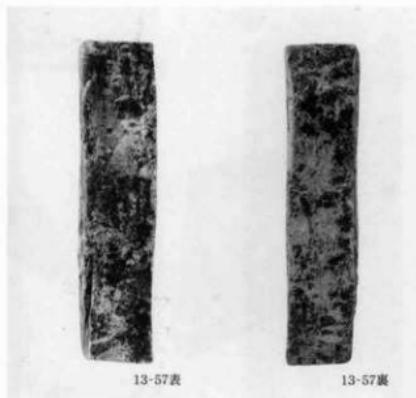
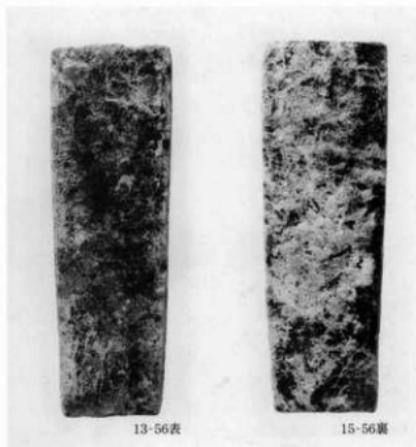
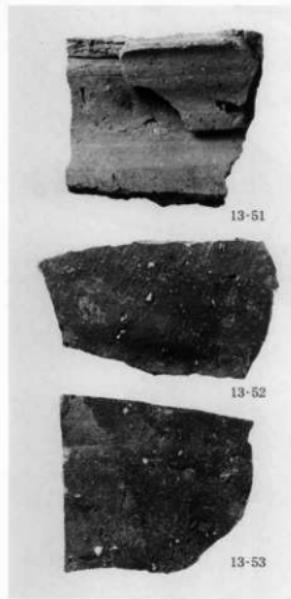
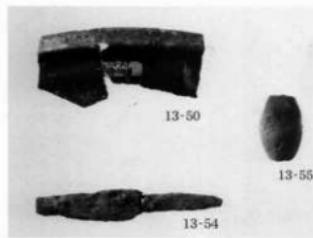
10-44

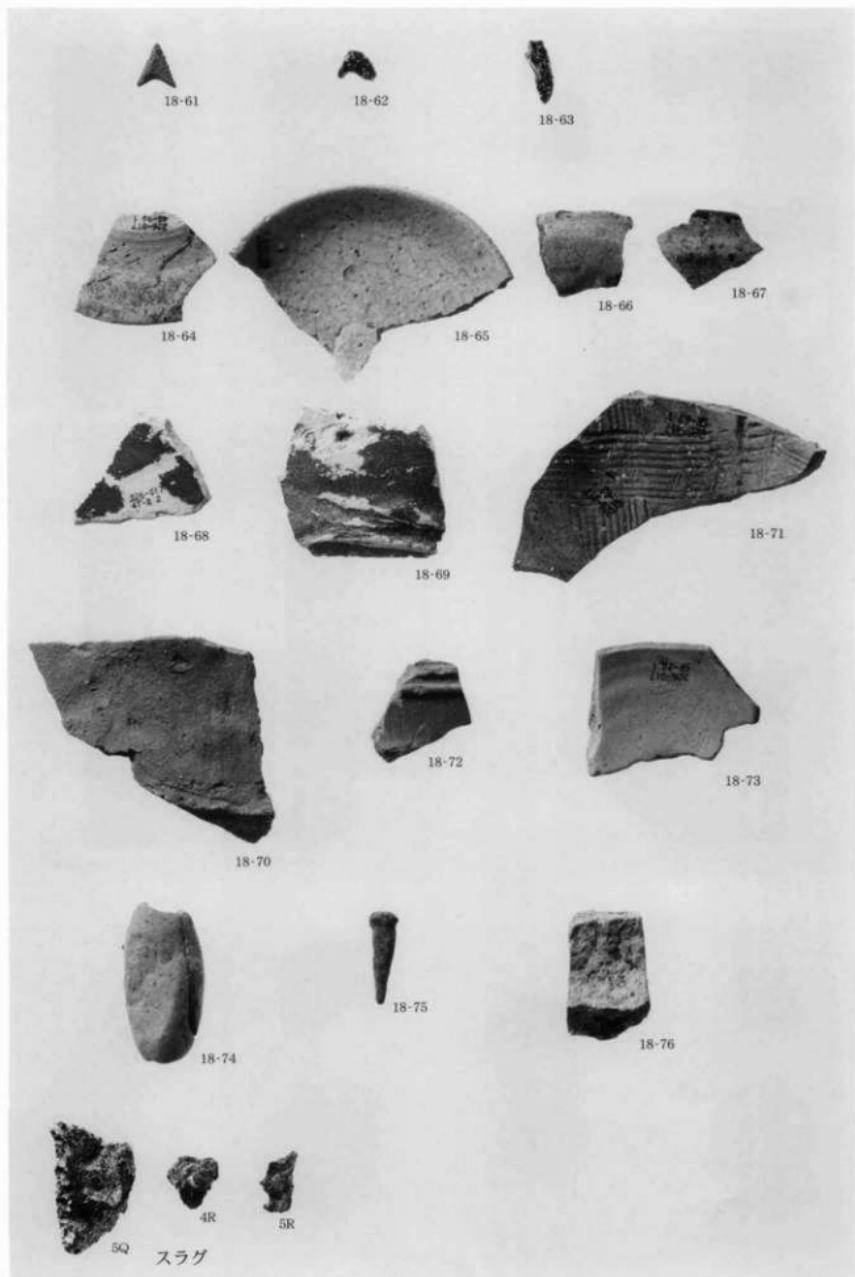


10-48



10-49





高田遺跡 出土遺物（5）

調査前全景▶
(南から)



調査前全景▶
(東南から)



調査区南西から▶
佐貫城主要部を
望む



図版16



調査区全景（南から）



調査区全景（西から）

佐貫城跡 調査区全景



平場3（西から）



平場3 ▶
空撮



◀3SD001
北部



▲3SD001 (北部セクション)

◀3SD001 (南西部)



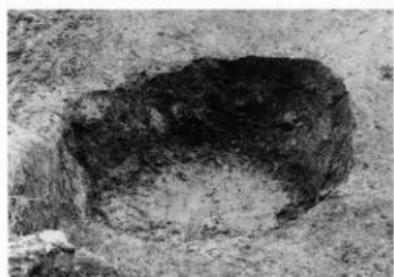
▲平場7全景（空撮）



平場7►
(西から)



◀7SB001ほか
(北東から)



7SK001



石積み遺構



7SK002



溜め池



▲平場5
(北西から)



▲平場5 ビット



▲平場6



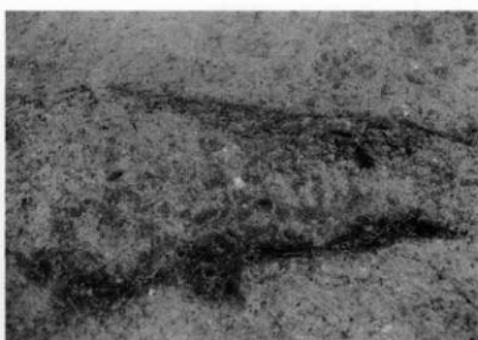
▲平場6内 土坑



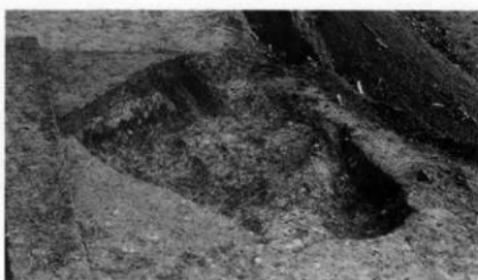
◀平場4
(北から)



▲4SD001



▲4SK001



4SK002▶



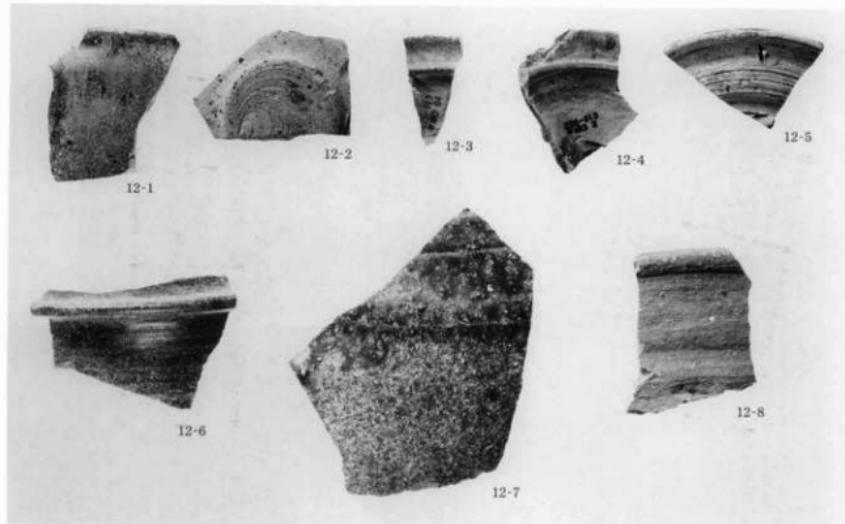
▲平場8
(北から)



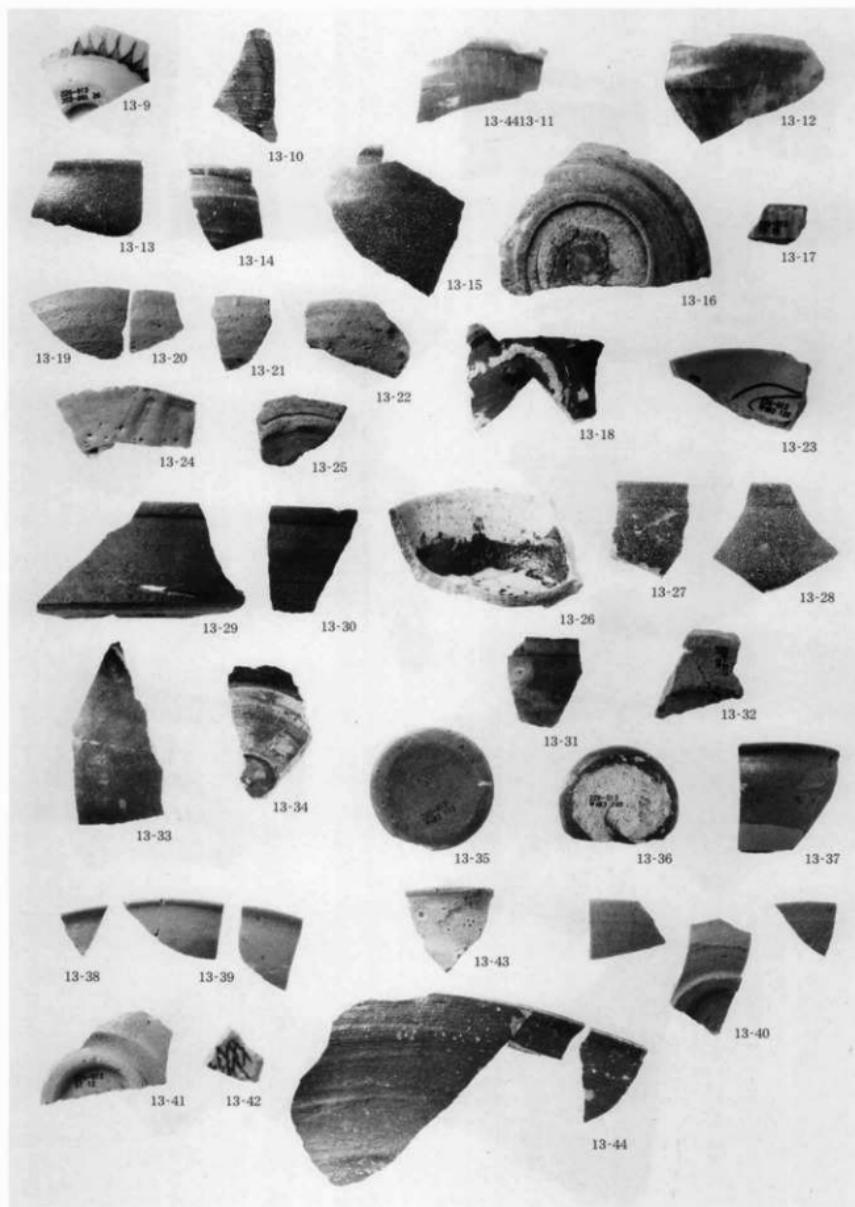
▲3SX001

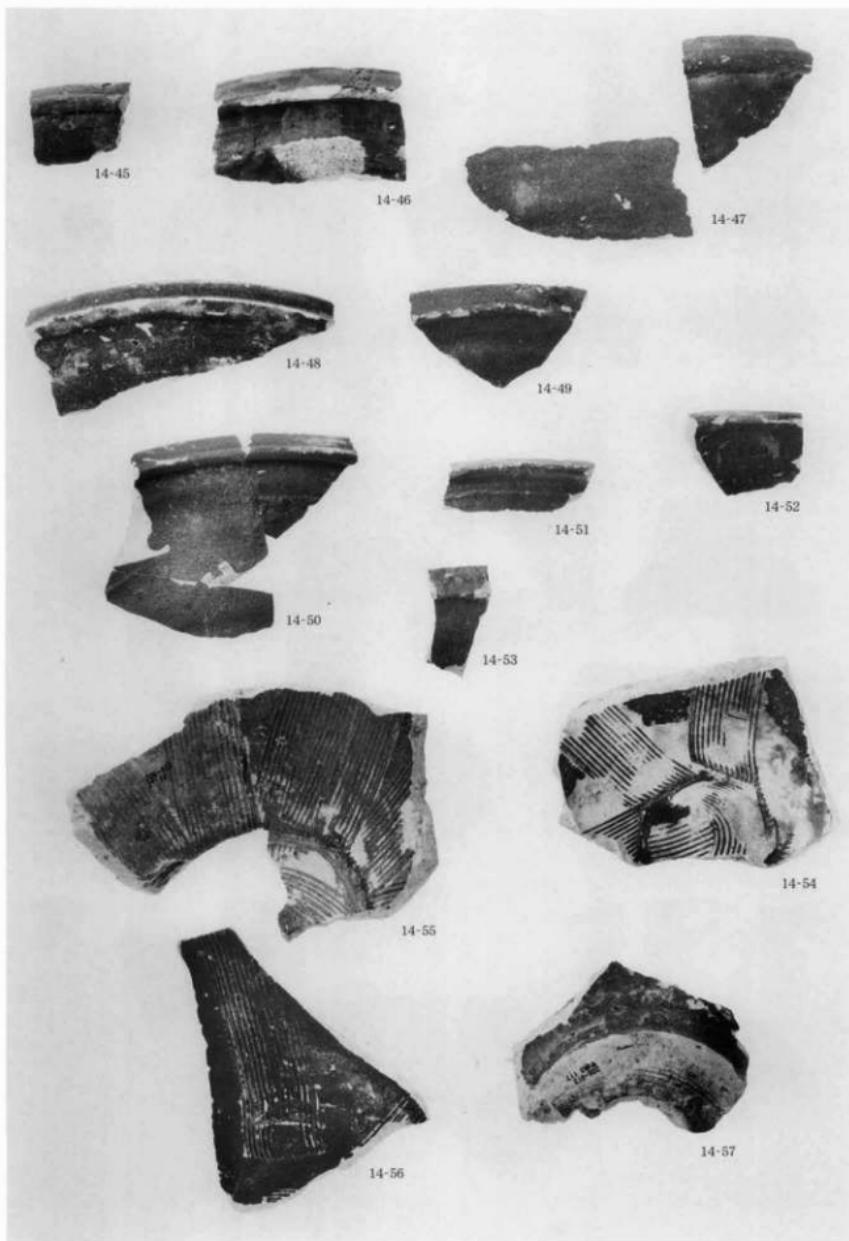


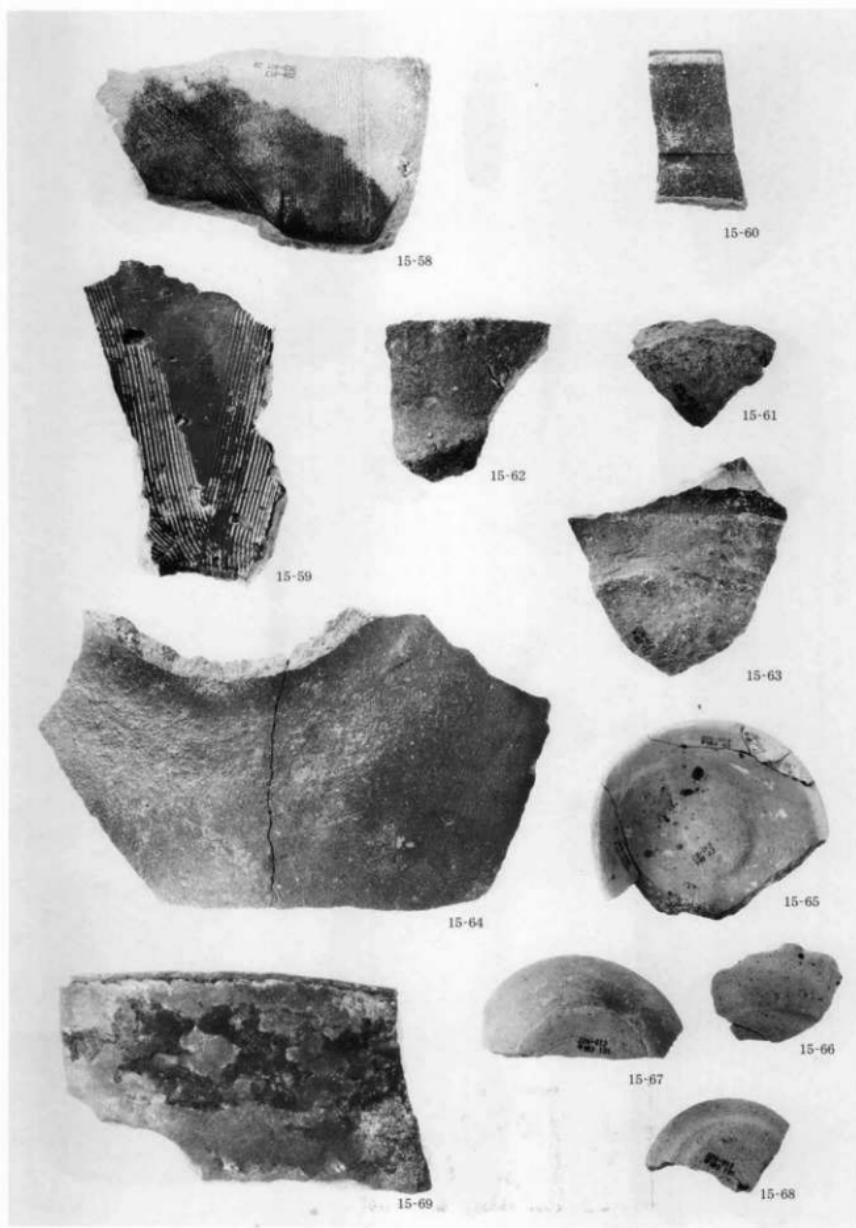
▲平場7 北東丘陵 (矢印 土師器 出土地点)



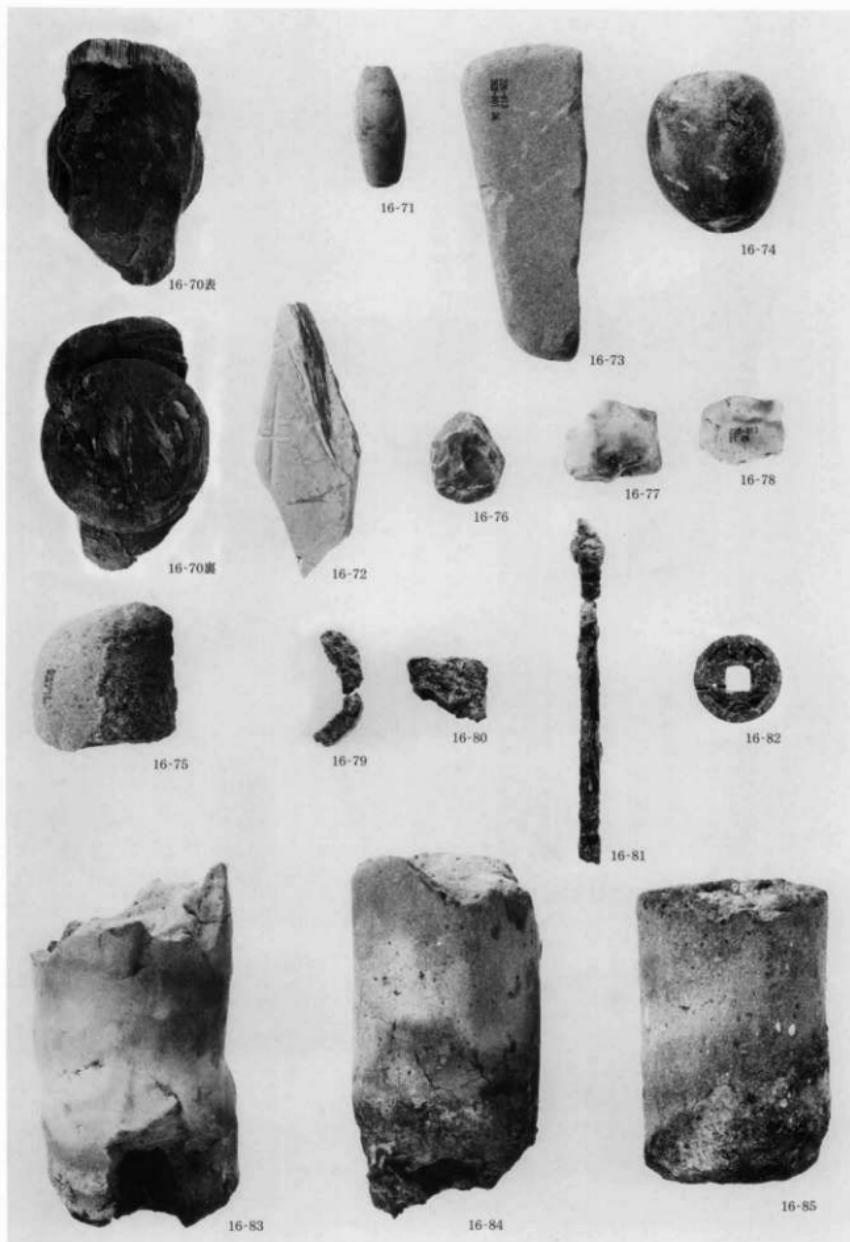
3SD002 調査風景（北から）

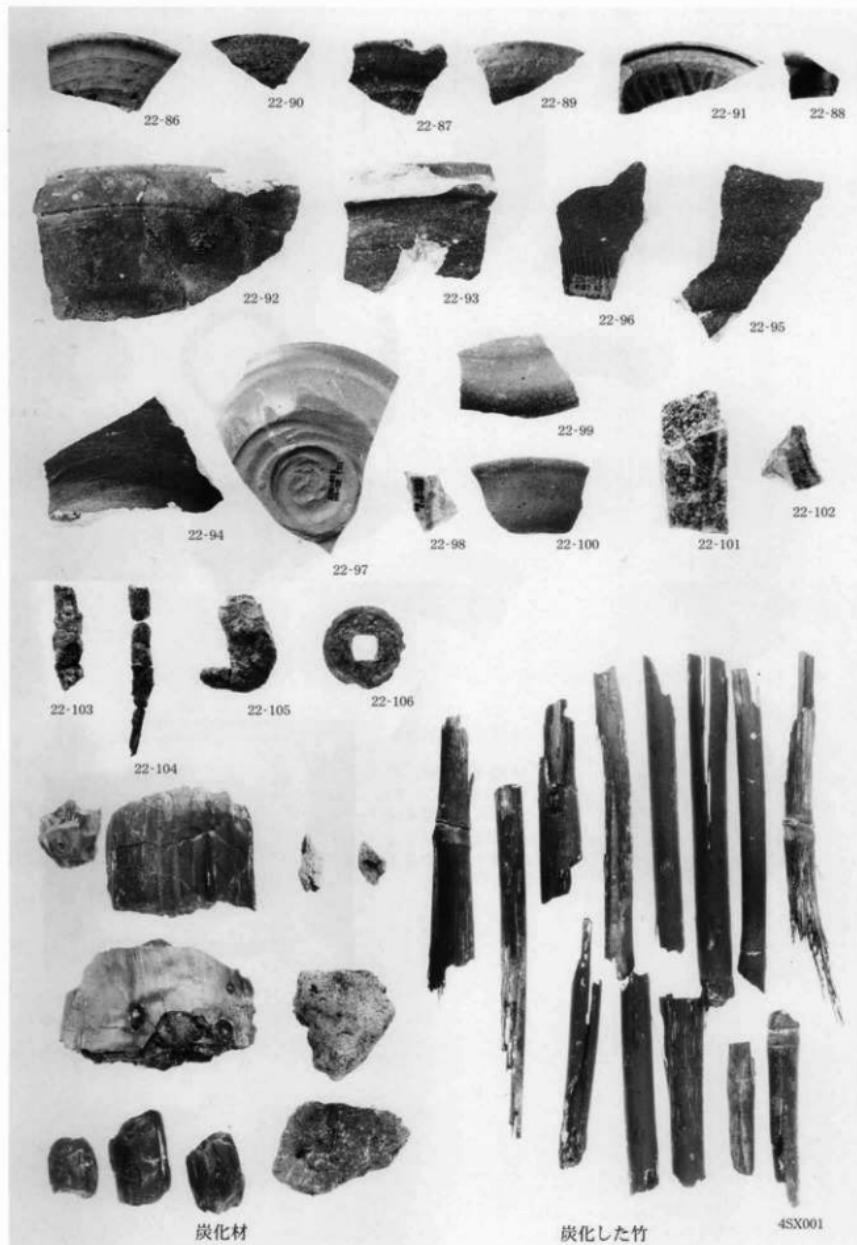






佐賀城跡 出土遺物 (4)





佐貫城跡 出土遺物（6）



25-107



25-108



25-109



25-110



25-111



25-112



25-113



27-117



27-114



27-115



27-118



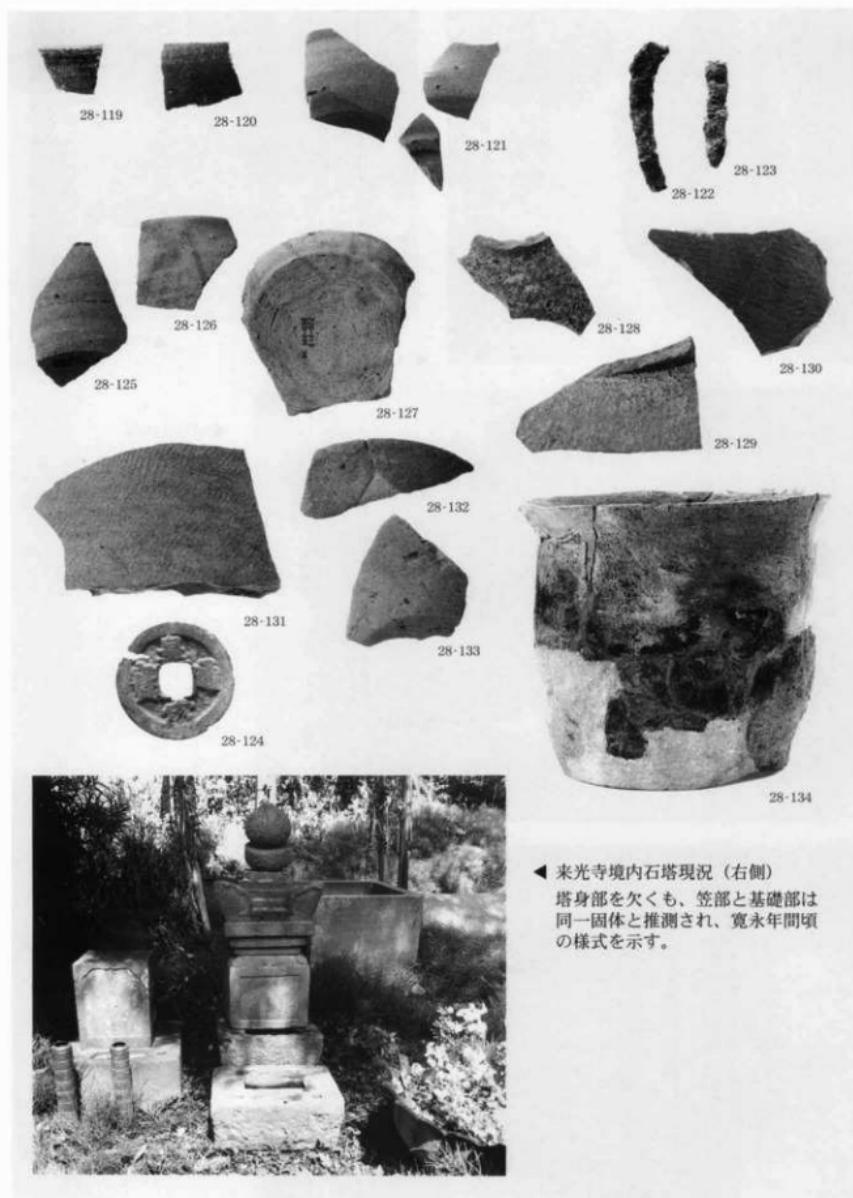
27-116

来光寺境内石塔▶

来光寺は調査区の
南東180mにあり、
この石塔（宝鏡印
塔基礎部）はもと
平場4にあったと
伝えられる。



干時寛永七年
九月十日
圓清周蜜居士
為菩提也



◀ 来光寺境内石塔現況（右側）
塔身部を欠くも、笠部と基礎部は
同一固体と推測され、寛永年間頃
の様式を示す。





▲ST001玄室前面

◀ST001正面



◀ST001内部



◀ST001左側壁

壁面に柱や貫を陰刻した
ような痕跡がみられるが
横穴との関係は不明



▲ST002 調査前



ST002正面▶



▲ST002 奥壁工具痕



▲ST002 工具痕



◀横穴前面の谷



調査前全景（北から）



北側山陵調査前近景（西から）

根木田入口山脇砦跡 調査前 全景・近景

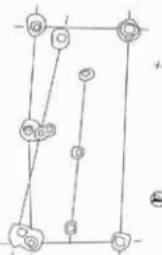


北側山陵調査前全景（北から）

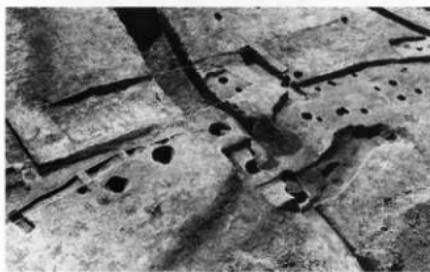


北物見台・平場6・平場5・平場8近景（北東から）

根木田入口山脇砦跡 北側山陵（1）

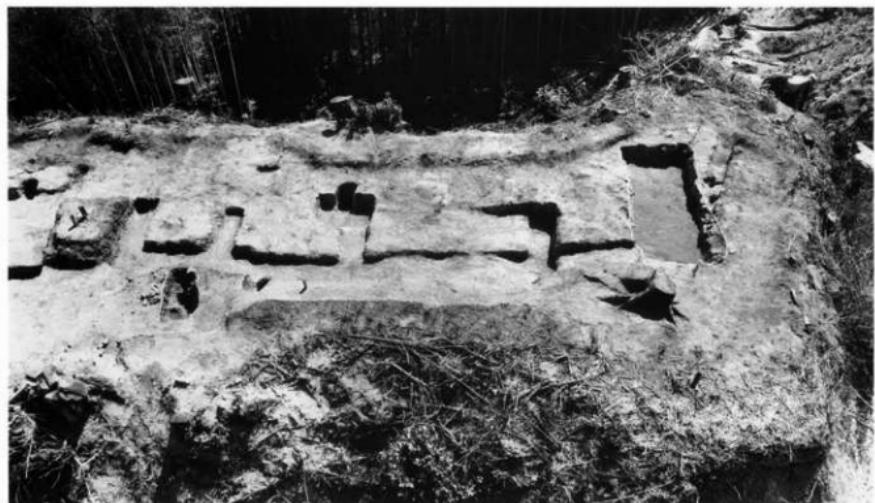


▼平場8 近景 (北東から)



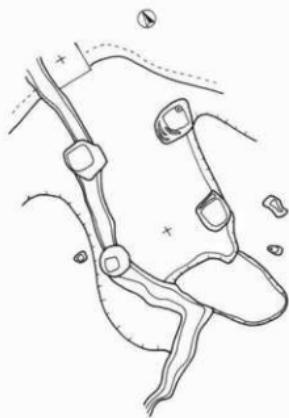
▲平場5 SA018ほか (北から)





▲北物見台全景（北から）

▼SB001・門跡（空撮）



(1 : 100)



根木田入口山脇砦跡 北物見台・SB001・門跡（空撮）



根木田入口山脇砦跡 大堀切と大堀切東石積み（1）

大堀切東►
石積み
(北東から)



大堀切東►
石積み
1段目右側
(南から)





▲大堀切東石積み（2段目中頃）



▲大堀切東石積み断面
(1段目右側)



◀大堀切東石積み
(2段目左端)



◀平場1・2
調査前近景
(南から)



▲南物見台全景（西から）



南物見台▶
山頂部

▼南物見台SD007



南物見台SD006▶
(手前溝付近で茶壺出土)





▲南物見台と平場9西側（西から）



▲SE001：井戸跡（調査途上）

◀SD002：折を有する堀



◀南物見台遠景（北側尾根平場から）



▲北側尾根平場（南物見台方面から）



▼北側尾根平場脇石積み



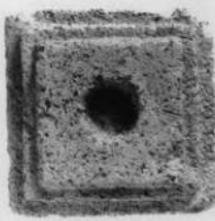
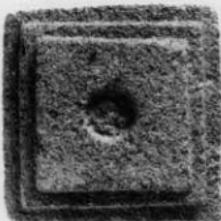
◀平場A・B・C



口径8cm



北物見台出土 近・現代磁器（挿図未掲載）



9-5

16-17

16-18



23-61



23-62



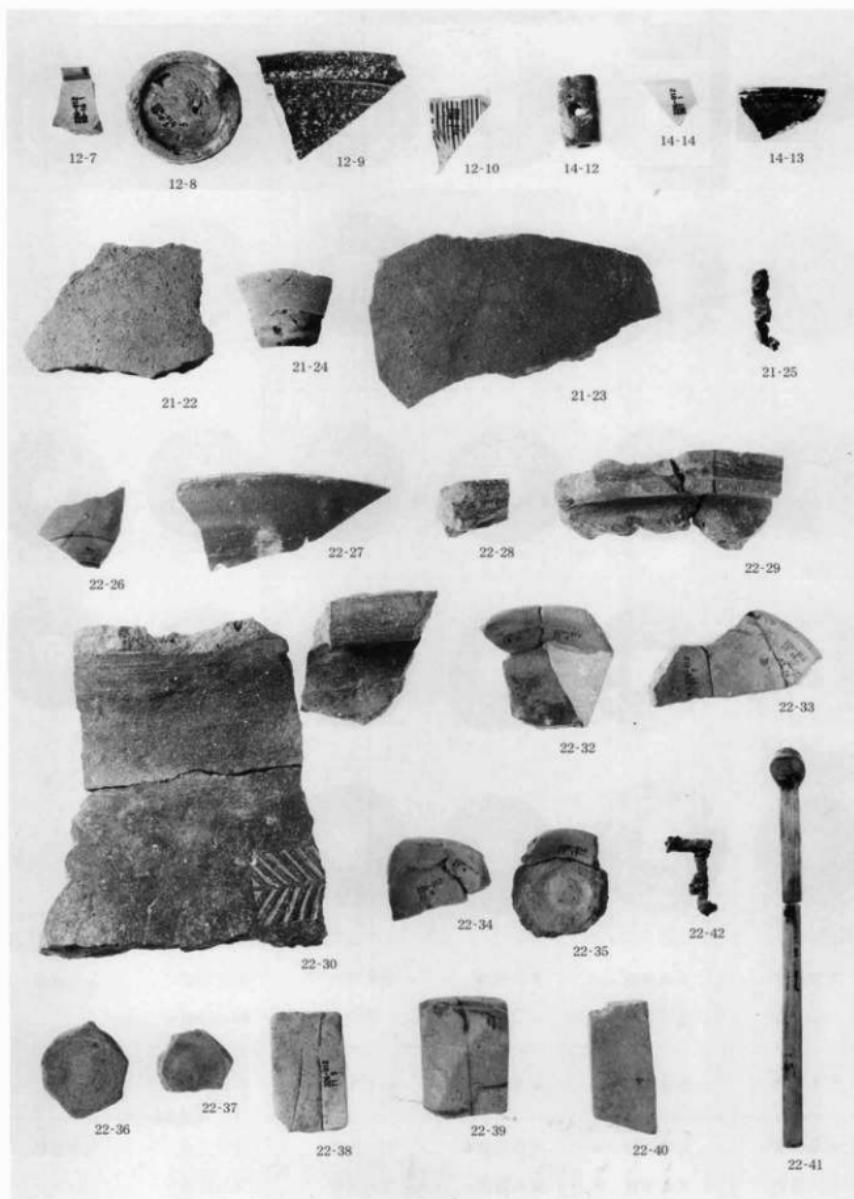
16-15



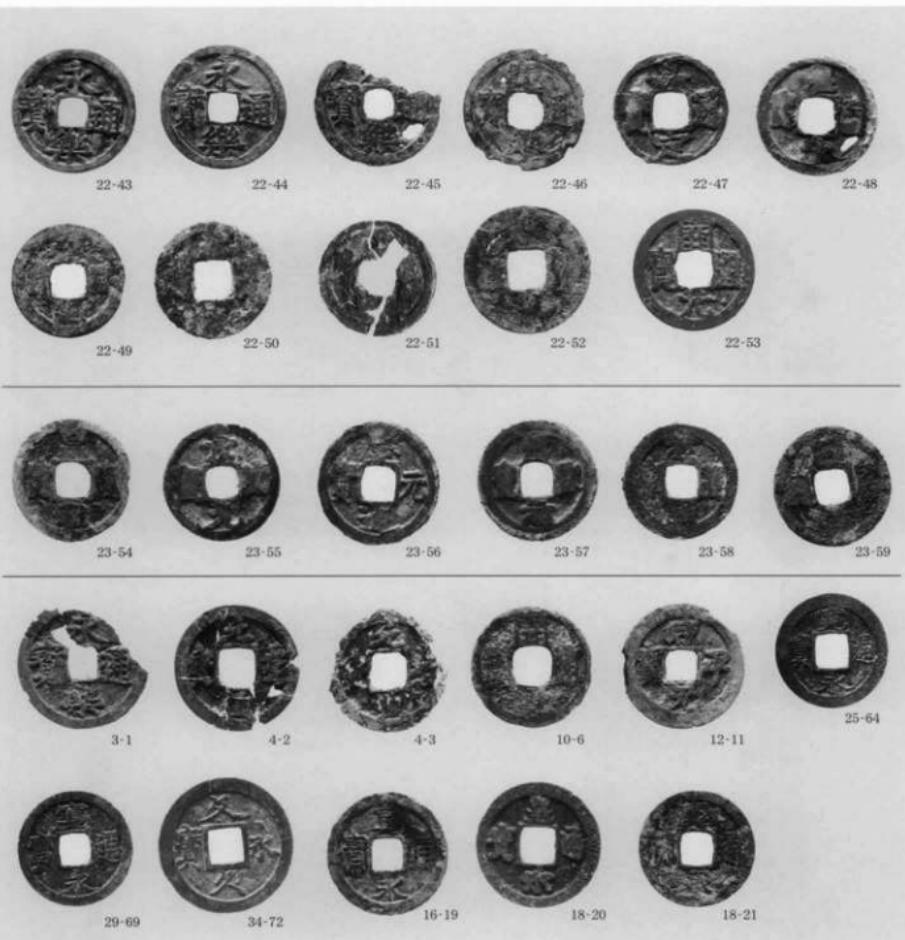
23-60



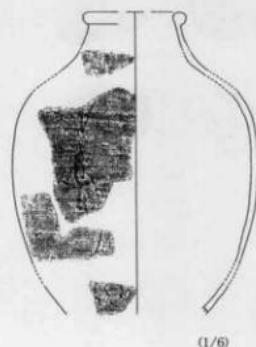
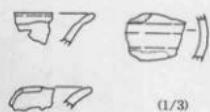
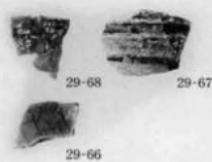
16-16



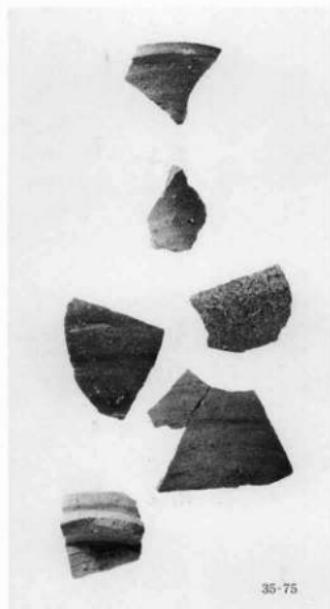
根木田入口山脇砦跡 出土遺物（2）



| | | | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|------|
| 永樂通寶 元□□寶 | 永樂通寶 元符通寶 | 永樂通寶 □□元寶 | 寛永通寶 不明 | 嘉定通寶 開元通寶 | 皇宋通寶 |
| 皇宋通寶 | 景祐元寶 | 慶元通寶 | 紹聖元寶 | 元豐通寶 | 不明 |
| 永樂通寶 寛永通寶 | 元豐通寶 文久永寶 | 元豐通寶 寛永通寶 | 開元通寶 皇宋通寶 | 咸平元寶 寛永通寶 | 寛永通寶 |



根木田入口山脇砦跡 出土遺物（4）



報告書抄録

| | |
|--------|--|
| ふりがな | ひがしかんとうじどうしゃどう(きさらづ・ふつせん)まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書 |
| 副書名 | 富津市高田遺跡・佐貫城跡・佐貫横穴群・根木田入口山脇砦跡 |
| 卷次 | 11 |
| シリーズ名 | 千葉県教育振興財団調査報告 |
| シリーズ番号 | 第595集 |
| 編著者名 | 小高春雄 |
| 編集機関 | 財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター |
| 所在地 | 〒284-0003 千葉県四街道市庭渡809番地 2 TEL 043-424-4848 |
| 発行年月日 | 西暦 2008年3月28日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|---------------|---------------------------|-------|------|-------------------|--------------------|--|--|------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 高田遺跡 | 千葉県富津市佐貫 字高田741-2ほか | 12226 | 017 | 35° 16' 50" | 139° 55' 48" | 20040204～ 20040227 20041025～ 20041217 | 1,497m ² 1,714m ² | 道路建設 |
| 佐貫城跡 | 千葉県富津市亀沢 字北新宿884ほか | 12226 | 013 | 35° 17' 11" | 139° 55' 42" | 20010915～ 20020329 20030106～ 20030131 | 3,120m ² 630m ² | 同上 |
| 佐貫横穴群 | 千葉県富津市花 番谷字山脇445 ほか | 12226 | 014 | 35° 17' 26" | 139° 55' 48" | 20020201～ 20020329 | 横穴墓2 | 同上 |
| 根木田入口山 脇砦跡 | 千葉県富津市花 香谷字山脇445 ほか | 12226 | 012 | 35° 17' 26" | 139° 55' 48" | 20010601～ 20020131 20030203～ 20030221 | 24,600m ² 460m ² | 同上 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---------------|-----|--------------|--|--|--|
| 高田遺跡 | 包蔵地 | 古墳時代 中・近世 | 縄文時代中期～後 期包含層、古墳時 代中期流跡・溝 跡1、中世～近世 区画構造1・竪穴 構造2・溝2、中 世～近世ピット 列・ピット群 | 縄文土器、土師器、 須恵器、古墳・近世 漆戸・美濃、同常 滑、肥前陶器、磁 石、土鐘、鉄釘 | 佐貫城南側岸の地で中 世末～近世初めの区画遺 構が検出された。 |
| 佐貫城跡 | 城跡 | 中・近世 | 近世初期頭瀬戸1 (掘立柱建物跡3 棟、区画溝1、溝 1)・平場5か所、 堀1・火葬跡 1・土坑1・ピッ ト列・ピット群 | 近世初期頭瀬戸・美 濃、同常滑、同肥前 陶器、かわらけ、火 打石、羽口・磁石、 刀子、鐵釘、錢貨、 石塔、土師器、須恵 器出土物なし | 佐貫城外縁部において近 世初めの内藤氏時代の墨 跡が検出された。 |
| 佐貫横穴群 | 横穴墓 | 古墳時代 | 横穴2 | | |
| 根木田入口山 脇砦跡 | 城跡 | 中・近世 | 中世物見台跡2・ 平場9・堀切1・ 堀2・掘立柱建物 跡2・門跡1・溝 14、井戸跡1・石 積み3箇所、土坑 4・ピット群 | 貿易陶器、中世瀬 戸・美濃、同常滑、 かわらけ、磁石、ガ ラス製筈、茶臼、石 塔、錢貨、須恵器 | 西上総における古相を示 す横穴墓が確認された。 戦国期16世紀中頃の佐 貫城に対する向城と思わ れ、その陣跡の様相が明 らかになった。 |

| | |
|----|---|
| 要約 | 富津市北部の丘陵地域を流れる染川中流域に立地する4遺跡の調査報告。高田遺跡では縄文時代中・後期と古墳時代にそれぞれ当時の河原また河川跡に遺物が散在するかたちで出土した。佐貫横穴群は調査対象となった2基共に当地における出現期の横穴と推測される。佐貫城跡ではその南東の谷戸部において縄敷地を検出し、近世初期頭内藤氏時代の宿の外縁部に相当する事が確認された。また、高田遺跡でも該期の溝などが検出された。根木田入口山脇砦跡は佐貫城の真向かいに位置し、僅かに整形した平場と堀切によって構成され、出土遺物の時期や内容から16世紀中頃に里見義発が居城とした佐貫城に対して北条軍が構えた陣跡と思われる。 |
|----|---|

千葉県教育振興財団調査報告第595集

**東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書11
—富津市高田遺跡・佐貫城跡・佐貫横穴群・根木田入口山臨岩跡—**

平成20年3月20日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 東日本高速道路株式会社
東京都千代田区霞ヶ関三丁目3番2号
財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 三陽工業株式会社
市原市五井5510-1
